財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 449 集

大泉町間之原遺跡Ⅲ・Ⅳ

東毛幹線（大泉工区）街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００８

群　馬　県　館　林　土　木　事　務　所
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

東毛幹線の建設は、群馬県東部地域の主要な街路整備事業として計画され、これに関わる埋蔵文化財の調査が急がれるところとなりました。当事業団では群馬県からの委託を受け、平成14年度・15年度に太田市八反田遺跡を、平成15年度には同市高林三入遺跡の発掘調査をおこなってまいりました。

平成18年度と19年度には、大泉工区の工事に先立ち大泉町間之原遺跡の発掘調査を実施しましたが、この調査により、旧石器時代をはじめ縄文時代・古墳時代の人々の、暮らしや信仰の様子を物語る、たくさんの遺構や遺物の発見がありました。

この調査報告書は、この大泉町間之原遺跡の調査成果を記録し、資料と情報の保存と活用をはかるために刊行するものであります。本書が群馬県の歴史を究める一助となりますよう、広くご活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、この調査事業の実施・推進にお力添えをいただいた関係機関や住民の皆様に、衷心より感謝申し上げ序文といたします。

平成20年11月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　高　橋　勇　夫

例　　言

1　本書は、東毛幹線（大泉工区）街路事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　間之原遺跡は、太田市竜舞と邑楽郡大泉町北小泉にまたがり、それぞれの所在市町名を冠して区分されている。また、昭和55年度と昭和56年度に太田市教育委員会が調査を実施しており、これらの調査地点をⅠ及びⅡに充て、平成18年度調査地点をⅢ、平成19年度調査地点をⅣと称している。

3　本書に掲載の大泉町間之原遺跡Ⅲ及びⅣの所在地は、次のとおりである。

大泉町間之原遺跡Ⅲ　群馬県邑楽郡大泉町北小泉四丁目1639、1640、1641-1、1641-2番地

大泉町間之原遺跡Ⅳ　群馬県邑楽郡大泉町北小泉四丁目1660-1、1660-2、1660-3、1661-1、1661-2、1662、1663-1、1663-2番地

4　発掘調査は、群馬県東部県民局館林土木事務所の委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査期間は次のとおりである。

大泉町間之原遺跡Ⅲ　平成18年４月１日～５月31日

大泉町間之原遺跡Ⅳ　平成19年４月２日～５月31日・同年10月１日～10月31日

5　発掘調査組織は、次のとおりである。

管理　理事長　高橋勇夫　常務理事　木村裕紀

事業局長　津金澤吉茂　総務部長　萩原　勉

総務グループ　笠原秀樹（GL）・須田朋子・今泉大作（18）・栗原幸代（18）・矢島一美（19）・齋藤陽子（19）・今井もと子・若田　誠・佐藤美佐子・狩野真子・武藤秀典

経理グループ　石井　清（GL）・斉藤恵利子・柳岡良宏・佐藤聖行・本間久美子・北原かおり

調整　調査研究部長　西田健彦

調査　調査研究グループ　石塚久則（18）・谷藤保彦（18）・唐澤至朗（19）・坂口　一（19）

6　整理作業は、群馬県東部県民局館林土木事務所の委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理期間及び整理組織は、次のとおりである。

期間　平成20年４月１日～同年８月31日

管理　理事長　高橋勇夫　常務理事　津金澤吉茂・木村裕紀

総務グループ　笠原秀樹（GL）・須田朋子・矢島一美・齋藤陽子・今井もと子・若田　誠・佐藤美佐子・狩野真子・武藤秀典

経理グループ　佐嶋芳明（GL）・斉藤恵利子・柳岡良宏・本間久美子・北原かおり

調整　資料整理部長　相京建史・資料整理第２グループ　大木紳一郎（GL）

整理　資料整理第２グループ　唐澤至朗（担当）

（整理業務）鹿沼敏子・大塚とし子・矢野純子・小金澤たみ子、（機械実測業務）田所順子・岸　弘子・小池益美・田中精子・山口洋子、（デジタル業務）牧野裕美・酒井史恵・安藤美奈子・矢端真観・荒木絵美・市田武子・廣津真希子・高梨由美子・横塚由香・下川陽子、（写真撮影）佐藤元彦

7　本書に掲載した遺構写真は調査担当者が撮影したもののほか、一部を有限会社毛野考古学研究所から提供を受けた。また、遺構の航空写真は技研測量設計株式会社に、遺構測量図は株式会社シン技術コンサル並びに技研測量設計株式会社に、石器実測図の一部を有限会社歴史考房まほらに、地質調査・火山灰分析は、(株)火山灰考古学研究所にそれぞれ委託した。

8　石器の石材分類は、飯島静雄氏の指導を受けた。

9　本書の編集は、唐澤至朗が行った。なお、旧石器の観察に麻生敏隆・桜井美枝の、縄文土器の観察に石坂　茂・橋本　淳の、埴輪・須恵器・土師器の観察に坂口　一の協力を得た。

執筆者は次のとおりである。

第１章・第２章・第３章（本文・他）・第５章	唐澤至朗
第３章（古墳時代遺物観察表）	坂口　一
第４章第１節・第２節	早田　勉
第４章第３節	楢崎修一郎

10　調査の実施から本書の刊行に至る間、次の機関並びに各位のほか多くの方々の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表す。

群馬県県土整備部・群馬県東部県民局館林土木事務所・群馬県教育委員会・大泉町教育委員会・太田市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所、飯島静雄・澤口　宏・関本寿男・土生田純之・増田眞次・松井章。

11　本遺跡の調査及び整理に関わる出土遺物・実測図・写真等の資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡　　例

1　本書で使用した国家座標は、日本測地系によるものである。発掘調査においては、その数値をそのままグリッドとして用いた。

2　本書で使用した地形図は、国土地理院　1:25,000「足利南部」及び「妻沼」を用い、周辺遺跡分布図は1:30,000へ調整した。

3　遺構平面図及び断面図に示した標高値の単位は、mである。

4　遺構平面図・断面図の縮尺は、1/120・1/60・1/30を基本とし、各図に示した。単位はmである。

5　遺物実測図の縮尺は、1/6・1/4・1/3・1/2・1/1を基本とし、各図に示した。単位はcmである。

6　遺構の土層・土器等の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』1993年版に準拠した。

7　遺構番号は、保存記録との混乱を避けるため発掘調査時に付された番号を踏襲しており、時代時期別の連番とはなっていない。

8　遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・写真図版とも、すべて共通している。

目　次

序　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（理事長　高橋勇夫）
例　言
凡　例

目　次
挿図目次
表目次
写真図版目次

第１章　調査の方法と経過……1
　第１節　発掘調査に至る経緯……1
　第２節　発掘調査の方法と経過……1
　第３節　整理の方法と経過……1

第２章　遺跡の環境……2
　第１節　地　理……2
　第２節　地形と地質……3
　第３節　歴　史……4
　第４節　基本土層……7

第３章　検出された遺構と遺物……9
　第１節　旧石器時代の遺構と遺物……9
　第２節　縄文時代の遺構と遺物……11
　第３節　古墳時代の遺構と遺物……56
　第４節　その他の遺構と遺物……69

第４章　自然科学分析……73
　第１節　大泉町間之原遺跡Ⅳにおける土層とテフラ（早田　　勉）……73
　第２節　大泉町間之原遺跡Ⅳにおける
　　　　　放射性炭素（^{14}C）年代測定　　　　（早田　　勉）……77
　第３節　大泉町間之原遺跡Ⅳ出土牛歯　　　　（楢崎修一郎）……79

第５章　まとめ　検出遺構からみた大泉町間之原遺跡……81

抄　録……82

写真図版

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺地形変遷図
第２図　大泉町地形区分図
第３図　周辺遺跡分布図
第４図　基本土層概念図
第５図　調査区域図
第６図　Ⅲ区旧石器出土分布図・土層投影垂直分布図
第７図　４号住居　平・断面図
第８図　４号住居炉1・炉2・埋甕1・埋甕2　平・断面図
第９図　５号住居炉　平・断面図
第10図　５号住居　平・断面図
第11図　６号住居　平・断面図
第12図　６号住居炉　平・断面図
第13図　８号住居　平・断面図
第14図　９号住居・炉・埋甕1・埋甕2　平・断面図
第15図　10号住居・炉　平・断面図
第16図　11号住居　平・断面図、ピット断面図①
第17図　11号住居炉・埋甕1・埋甕2　平・断面図
第18図　11号住居　ピット断面図②
第19図　13号住居・炉・埋甕1・埋甕2　平・断面図
第20図　14号住居・炉　平・断面図
第21図　１号・２号土坑　平・断面図
第22図　３号～７号土坑　平・断面図
第23図　８号・10号～13号土坑　平・断面図
第24図　14号～16号土坑　平・断面図
第25図　17号・19号・20号・22号～26号土坑　平・断面図
第26図　１号・２号ピット　平・断面図
第27図　３号～９号埋甕　平・断面図
第28図　４号住居出土遺物
第29図　５号住居出土遺物
第30図　６号住居出土遺物
第31図　８号住居出土遺物①
第32図　８号住居出土遺物②
第33図　９号住居出土遺物①
第34図　９号住居出土遺物②
第35図　10号住居出土遺物①
第36図　10号住居出土遺物②
第37図　11号住居出土遺物①
第38図　11号住居出土遺物②
第39図　11号住居出土遺物③
第40図　13号住居出土遺物
第41図　14号住居出土遺物①
第42図　14号住居出土遺物②
第43図　１号～６号土坑出土遺物
第44図　７号・10号～16号土坑出土遺物
第45図　16号・22号・23号・25号土坑出土遺物
第46図　３号～９号埋甕出土遺物
第47図　遺構外出土遺物①
第48図　遺構外出土遺物②
第49図　遺構外出土遺物③
第50図　遺構外出土遺物④
第51図　遺構外出土遺物⑤
第52図　遺構外出土遺物⑥
第53図　遺構外出土遺物⑦
第54図　遺構外出土遺物⑧
第55図　遺構外出土遺物⑨
第56図　遺構外出土遺物⑩
第57図　１号住居炉　平・断面図
第58図　１号住居断面図①
第59図　１号住居　平・断面図②
第60図　２号住居　平・断面図
第61図　３号住居・炉　平・断面図
第62図　７号住居・炉　平・断面図
第63図　12号住居　平・断面図
第64図　１号古墳　平・断面図
第65図　１号掘立柱建物　平・断面図
第66図　１号古墳出土牛骨埋没想像図
第67図　１号住居出土遺物
第68図　２号住居出土遺物
第69図　７号住居出土遺物
第70図　１号古墳出土遺物①
第71図　１号古墳出土遺物②
第72図　遺構外出土遺物⑪
第73図　遺構外出土遺物⑫
第74図　遺構外出土遺物⑬
第75図　遺構外出土遺物⑭
第76図　１号溝　平・断面図

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表
第２表　Ⅲ区出土旧石器観察表
第３表　Ⅳ区出土旧石器観察表
第４表　縄文時代遺物観察表
第５表　古墳時代遺物観察表
第６表　中世遺物観察表

写真図版目次

PL-１　間之原遺跡・基本土層
PL-２　Ⅲ区旧石器試掘坑
PL-３　Ⅳ区旧石器試掘坑
PL-４　縄文時代①　４号住居
PL-５　縄文時代②　５号住居
PL-６　縄文時代③　６号住居
PL-７　縄文時代④　８号住居
PL-８　縄文時代⑤　９号住居
PL-９　縄文時代⑥　10号住居
PL-10　縄文時代⑦　11号住居
PL-11　縄文時代⑧　11号住居
PL-12　縄文時代⑨　13号住居
PL-13　縄文時代⑩　14号住居
PL-14　縄文時代⑪　１号～４号土坑
PL-15　縄文時代⑫　５号～８号土坑
PL-16　縄文時代⑬　10号～13号土坑
PL-17　縄文時代⑭　14号～16号土坑
PL-18　縄文時代⑮　17号～20号・22号土坑
PL-19　縄文時代⑯　23号～26号土坑
PL-20　縄文時代⑰　３号～７号埋甕
PL-21　縄文時代⑱　７号～９号埋甕
PL-22　古墳時代①　１号住居①
PL-23　古墳時代②　１号住居②
PL-24　古墳時代③　２号住居
PL-25　古墳時代④　３号・12号住居
PL-26　古墳時代⑤　７号住居
PL-27　古墳時代⑥　１号掘立柱建物
PL-28　古墳時代⑦　１号古墳①
PL-29　古墳時代⑧　１号古墳②
PL-30　古墳時代⑨・中世　１号古墳③・１号溝他
PL-31　旧石器時代遺物・縄文時代遺物①　Ⅲ・Ⅳ区・４号・５号住居
PL-32　縄文時代遺物②　６号・８号住居
PL-33　縄文時代遺物③　９号・10号住居①
PL-34　縄文時代遺物④　10号②・11号住居①
PL-35　縄文時代遺物⑤　11号住居②
PL-36　縄文時代遺物⑥　13号・14号住居①
PL-37　縄文時代遺物⑦　14号②・１号～３号土坑①
PL-38　縄文時代遺物⑧　３号②～７号・10号～16号土坑①
PL-39　縄文時代遺物⑨　16号②・22号・23号・25号土坑・３～９号埋甕
PL-40　縄文時代遺物⑩　遺構外①
PL-41　縄文時代遺物⑪　遺構外②
PL-42　縄文時代遺物⑫　遺構外③
PL-43　縄文時代遺物⑬　遺構外④
PL-44　縄文時代遺物⑭　遺構外⑤
PL-45　縄文時代遺物⑮・古墳時代遺物①　遺構外⑥・１号・２号・７号住居①
PL-46　古墳時代遺物②　７号住居②・１号古墳・遺構外⑦
PL-47　古墳時代遺物③・中世遺物　遺構外⑧

第１章　調査の方法と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

間之原遺跡の発掘調査は、東毛幹線（大泉工区）街路事業に伴い実施されたものである。この調査は、2005（平成17）年度の群馬県東部県民局館林土木事務所と群馬県教育委員会との協議を踏まえ、文化課による試掘調査と調整を経て実施が決定され、館林土木事務所の委託を受けて財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団がこれに当たることとなった。

調査は、工事計画に合わせ、2006（平成18）年度に間之原遺跡Ⅲ（1,109㎡）を、翌2007（平成19）年度に間之原遺跡Ⅳ（1,442㎡）を対象として実施した。

第２節　発掘調査の方法と経過

間之原遺跡Ⅲを対象とした2006（平成18）年度の調査は、４月１日から５月31日まで実施した。先行して掘削機による表土除去を行い、関東ローム層上に縄文時代の遺物包含層を確認した。この層からは、縄文時代早期・前期・中期の土器及び石器が出土した。これらの遺物を収納しつつ関東ローム層上面まで削土し、この面を調査第１面とした。日本測地基準に基づき10ｍ方眼で基準杭を設け、調査第１面の遺構の確認作業を行い、土坑１基を検出した。

第１面調査の終了後、ローム層内の旧石器調査を、第２面調査として実施した。調査区内に２ｍ四方のトレンチ16カ所を設け、遺物を検出した１カ所を７ｍ×５ｍ区画で拡張し精査を行った結果、黒曜石製の剥片を主体とする石器製作跡を１カ所確認した。

発掘終了後、実測図面・調査写真の確認を行い、掘削機等を用いて調査区を埋め戻した。

間之原遺跡Ⅳを対象とした2007（平成19）年度の調査は、４月２日から５月31日までと、10月１日から10月31日までの２期に分けて実施した。両期ともに先ず掘削機により表土の除去を行った。前年度調査で確認されていた縄文時代の遺物包含層は、本調査区では確認されなかった。表土層直下の関東ローム層上面を調査第１面とし、日本測地基準に基づき10ｍ方眼で基準杭を打設した。調査面を精査して遺構の埋没状態を確認しつつ、発掘調査を実施した。その結果、縄文時代中期の竪穴住居９・土坑22・埋甕9、古墳時代前期の竪穴住居５・掘立柱建物１、古墳時代中期の古墳１、その他を検出した。

第１面調査の終了後、旧石器文化の確認のため、２ｍ四方のトレンチを11カ所設定し、これを調査第２面として掘削精査を行った。このうち２カ所から黒曜石製、チャート製の剥片を検出している。

発掘終了後、実測図面・調査写真の確認、基本土層図の調整を行い、掘削機等を用いて調査区を埋め戻し、完了検査を経て現地における調査を終了した。

第３節　整理の方法と経過

整理作業は、2008（平成20）年度事業として４月１日から８月31日までの間、当事業団分室において、担当者１名・補助員４名の編成で行った。なお、写真図版の調整は、本部に設置されたデジタル専業班補助員１名がこれに当たった。

まず、土器や石器・埴輪などの出土品については、外部発注による洗浄及び注記などの基礎作業を既に行っていたため、洗浄等の状況確認を行いつつ、帰属時代ごとの分別から開始した。次いで、調査記録をもとに簡易復元を行いつつ、図版掲載個体の選定を行った。この後、復元・実測・写真撮影作業を行い、併せて住居跡・古墳などの遺構図の調整と図版作成・全体のレイアウト調整を行った。

遺物の写真整理作業は、デジタル撮影及び撮影情報処理を対象に実施した。

報告文原稿の作成は、発掘調査記録の他、周辺遺跡及び関連資料を合わせて検討を行い、担当者を中心に、旧石器・縄文・古代・自然科学の専門職員の協力を得て行った。なお、調査記録・遺物については、当事業団における情報登録を行い収蔵した。

第２章　遺跡の環境

第１節　地　理

本遺跡は、「鶴舞う形の群馬県」と称される県域の南東部、邑楽郡大泉町上小泉字間之原（現、北小泉四丁目）に所在する。遺跡の広がりは北端を隣接する太田市竜舞字高原から、南は大泉町上小泉字城之内まで及んでおり、間之原遺跡は一連の遺跡として両行政区にそれぞれ登録されている。遺跡は、利根川左岸に延びる邑楽台地上にあり、台地南端は中世に至って小泉城跡が築かれるなどこの地の中心をなしてきた。

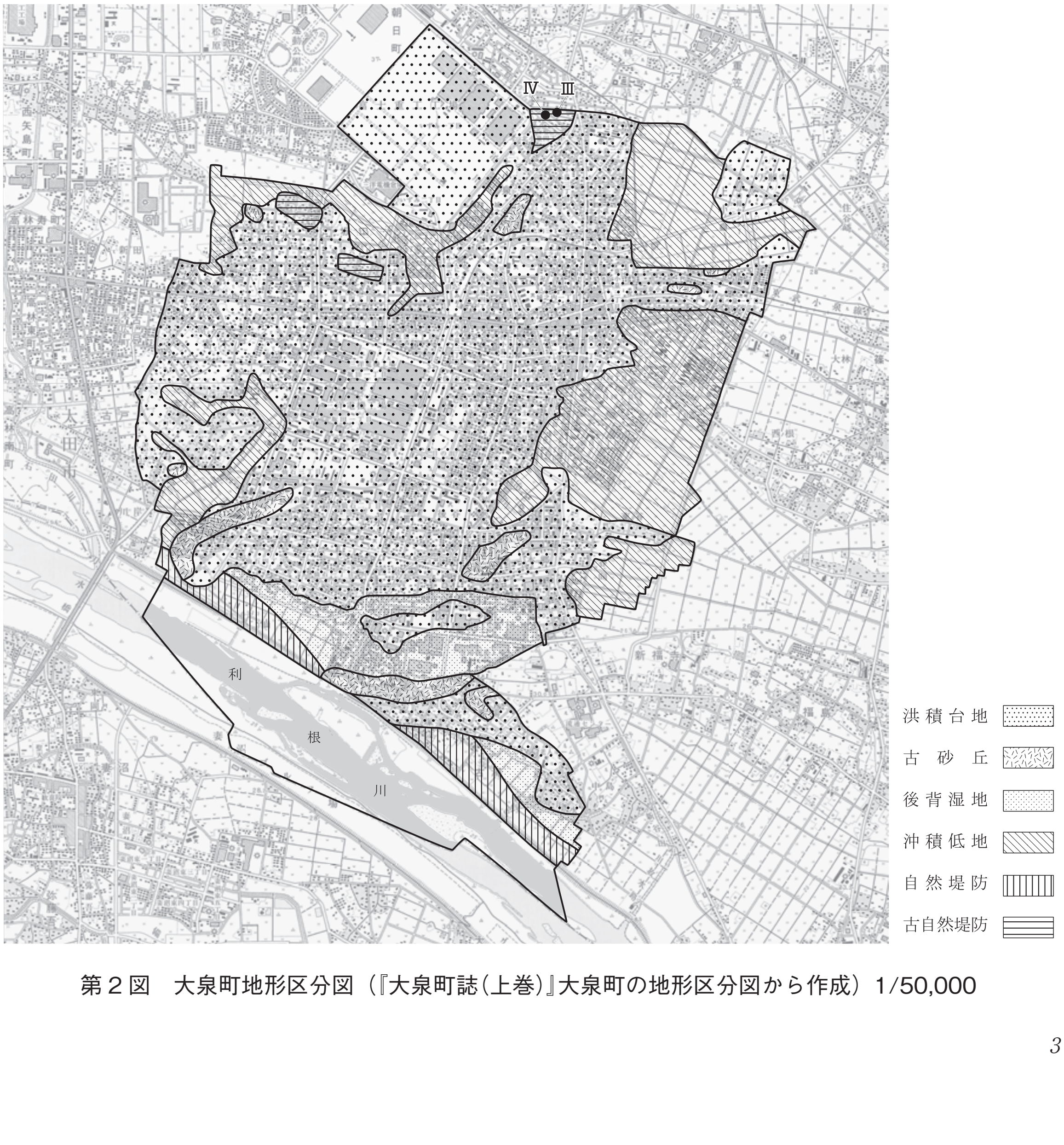
第１図は、遺跡周辺の明治 17（1884）年と平成７（1995）年の測図であるが、以前は、台地上は畑作・沖積地は水田耕地が広がり集落が点在していたが、近年の道路整備や宅地化により、100 余年の間に景観が大きく変貌を遂げたことが看取される。

第１図　遺跡周辺地形変遷図　（左・陸軍明治17年測図　右・国土地理院平成7年測図）　1/25,000 に調整

第２節　地形と地質

本遺跡が立地する邑楽台地（洪積台地）は、旧利根川を供給源とする砂層上に、５ｍ以上にわたって堆積した関東ロームによって形成されている。この砂層は、日本最古の内陸砂丘（埋没河畔砂丘）ともされているが、内陸砂丘と自然堤防砂層の定義付けについてはなお検討が求められている。第２図に拠れば、遺跡はこの邑楽台地の北端に位置し、特に今回の調査地点（Ⅲ及びⅣ）は台地に続く古自然堤防上に占地している。遺跡の北側から東方向には渡良瀬川の、西側には韮川の旧河道と考えられる沖積地が広がっている。台地上は平坦ではなく緩やかな起伏が各所に認められる。本遺跡は起伏をくりかえしつつ南北約1,700m、東西約500mを範囲としている。標高は北に高く南に低い利根川左岸の地形傾向と一致し、今般の調査地点は標高約40mを示した台地最北の高原地区に次ぐ高い位置にあたる。標高は約37ｍである。

【参考文献】大泉町 1978『大泉町誌（上巻）』、太田市教育委員会 1981『大塚・間之原遺跡確認調査の概要－第二次調査－』、群馬県林務部 1990『群馬県の貴重な自然－地形・地質編－』。



第２図　大泉町地形区分図（『大泉町誌（上巻）』大泉町の地形区分図から作成）1/50,000

第３節　歴　史

旧石器時代　邑楽台地からは、これまでにも多くの後期旧石器時代の遺物が発見されてきた。本遺跡の以前の調査においてもチャート製の有舌尖頭器が採集されており、同じ大泉町内の御正作遺跡からは、槍先形・ナイフ形尖器、掻器、削器、彫器などを出土したほか、専光寺付近・寄木戸・吉田の各遺跡から、また太田市内においても、金井口・細田・焼山・東別所遺跡から、ナイフ形や柳葉形・槍先形尖頭器の出土が知られている。

縄文時代　縄文時代の遺跡は各期にわたる。太田市下宿遺跡からは早期の爪形文土器が出土し、本遺跡や、古戸遺跡においても撚糸文土器片が出土している。また、本遺跡の太田市分からは前期の関山Ⅱ式、中期の加曽利ＥⅡ・Ⅲ式、後期の加曽利Ｂ式の遺構や遺物が検出されている。今回の調査においても前期の花積下層式並行・有尾式、中期の加曽利ＥⅡ式さらに後期の堀之内Ⅰ式や称名寺式土器などが出土している。

弥生時代　弥生時代の遺跡分布は希薄であり、大泉町では古戸遺跡や太田市焼山遺跡などの数例にとどまっている。

古墳時代　太田市周辺では、石田川遺跡や銚子塚古墳など古墳時代前期４世紀代の集落遺跡や古墳が存在する。この他、矢場薬師山古墳や藤本観音山古墳などは、この地域の代表的な前期古墳である。本遺跡等においても確認されている前期集落に支えられ開発が進んでいったものとみられる。

中期５世紀になると、墳丘長 210 ｍという東日本最大の前方後円墳である太田天神山古墳や帆立貝形古墳の女体山古墳など巨大古墳が築かれ、開発が最盛期に至ったと考えられる。中期から後期にかけて築造されたとみられる大泉町古海原前１号古墳からは、熊本県江田船山古墳出土のものと同笵とされる画文帯神獣鏡を出土するなど、東毛地域の繁栄を示す遺跡が多く所在している。

後期６世紀には、塚周り古墳群や矢場川古墳群・松本古墳群、利根川左岸の松塚古墳群などが出現し、これらは地域内分化と中小首長層の存在とを裏付けるものとみられる。また、終末期の典型的な方墳の一例となる巌穴山古墳など古墳の小型化が認められ、古墳時代を通じた文化の継続と、統一国家成立の影響とをみとめることができる。

奈良・平安時代　本遺跡の北方では、幹線道路である東山道駅路のほか、太田市では新田郡家と考えられる天良七堂遺跡や寺井廃寺が、また薮塚西野原遺跡などの製鉄遺跡が発見されている。これらは国家権力の東国支配を示すものといえる。

鎌倉～江戸時代　平安時代後期以降は全国的に立荘が相次いだが、当地には佐貫荘と伊勢神宮御料地として邑楽御厨が置かれていた。『吾妻鏡』に源頼朝御家人として佐貫左衛門尉四郎廣綱が登場する※。

※『吾妻鏡』初出・養和元(1181)年七月二〇日条「‥重仰云 畠山次郎 次佐貫四郎等候之上者‥」、終出・健保七(1219)年正月二七日条「‥今日将軍家右大臣為拝賀‥行列‥佐貫左衛門尉廣綱‥」

この佐貫廣綱の同時期に活躍する小山七郎朝光が結城氏の祖であり、戦国期の小泉城を築きこの地を支配した富岡氏は、朝光の後裔直光から始まるとされる。富岡氏は西邑楽一帯に勢力を持ったが、天正18(1590)年の小田原の役に際して北条方となって没落した。その後当地は仙石村を除き館林藩領に、天和２(1682)年以降、すべてが旗本領となり幕末を迎えた。

明治時代以降　近代の大泉周辺は、館林県・栃木県を経て群馬県域となり、東武鉄道の敷設・中島飛行機小泉工場の設置など工業化がすすみ、現代の自動車産業を中心とする工業地域の形成に至っている。

【参考文献】大泉町教育委員会 1984『御正作遺跡』、同 1986『古海原前古墳群発掘調査概報』、同 2007『仙石道祖遺跡Ⅱ』。太田市教育委員会 1980『大塚・閒之原遺跡確認調査の概要－第一次調査－』、同 1981『同－第二次調査－』、同 2008 天良七堂遺跡』。群馬県教育委員会 1980『塚廻り古墳群』、同 1995『群馬県の史跡(古墳編)』。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985『太田東部遺跡群』、同 2007『東今泉鹿島遺跡』。黒板勝美 1974『新訂増補 国史大系（吾妻鏡)』。

第３図　周辺遺跡分布図　（群馬県文化財情報・国土地理院平成７年測図 1/25,000 から作成）　1/30,000

第１表　周辺遺跡一覧表　（第３図　周辺遺跡分布図に対応）

番号	遺　跡　名	時　　代	概　　　要	調査報告書
1	間之原遺跡	旧石器～平安	縄文時代を中心とする広大な複合遺跡。今回調査地点●印。	群埋文2008等
2	間之原東遺跡	縄文・古墳～平安	集落跡。縄文中～後期、平安時代の遺物が散布。	
3	小泉城跡	中世	東毛地域の代表的な中世城館跡。	
4	横町遺跡	奈良～平安	集落跡。住居跡・掘立柱建物を検出。	
5	御正作遺跡	旧石器･縄文･古墳～平安	旧石器製作跡・古墳時代前期集落跡。	
6	横根宿遺跡	縄文・古墳	集落跡・古墳。	
7	寿崎遺跡	奈良～平安	集落跡。	
8	鶉岡南遺跡	古墳	遺物散布地。	
9	鶉岡遺跡	古墳	遺物散布地。	
10	細谷遺跡	古墳	『上毛古墳綜覧』小泉町第１～３号墳。現在削平消滅。	
11	万願寺遺跡	古墳～平安	遺物散布地。	
12	山の神遺跡	古墳	遺物散布地。	
13	石神遺跡	縄文・古墳	集落跡。	
14	龍舞深町遺跡	古墳～平安	集落跡。	太田教1989
15	三反田遺跡	縄文	遺物散布地。	
16	渋沼東遺跡	古墳	遺物散布地。	
17	樋ノ上遺跡	古墳	遺物散布地。	
18	塚廻り古墳群	古墳	６世紀前半～中頃の埋没古墳群。４号墳は国指定史蹟。	群県教1980
19	小町田遺跡	縄文～平安	集落跡。	群埋文1985他
20	龍舞落打遺跡	古墳～平安	集落跡。	太田教2003
21	神明遺跡	古墳～平安	集落跡。	太田教1997他
22	御霊遺跡	縄文・古墳	集落跡。	
23	大塚遺跡	古墳～平安	遺物散布地。	
24	加茂遺跡	縄文～中世	集落跡。	
25	加茂神社西遺跡	古墳・平安	集落跡。	
26	龍舞館跡	中世	城館跡。	
27	川向・中西田遺跡	古墳～平安	集落跡・他。	太田教1991他
28	内ヶ島屋敷跡	古墳・中世	古墳時代前期住居。中世溝・土塁等。	群埋文1996報
29	房塚遺跡	古墳	遺物散布地。	
30	条里制水田想定地	奈良～平安	条里制水田埋没想定地。	
31	飯塚古墳群	古墳	集落跡・古墳。	
32	内ヶ島南田	古墳	集落跡。	
33	東別所遺跡	旧石器	遺物包蔵地。	
34	運動公園内遺跡	古墳	集落跡。	
35	北原遺跡	古墳	集落跡。	
36	東別所新田遺跡	古墳	遺物散布地。	
37	東別所本郷遺跡	古墳～平安	集落跡。	
38	川入遺跡	古墳～平安	遺物散布地。	
39	坂田遺跡	縄文・古墳～平安	奈良～平安時代を中心とする集落跡。	
40	松下遺跡	弥生	遺物散布地。稀少な弥生遺跡。	
41	柳町遺跡	縄文	遺物散布地。	
42	毘沙門遺跡	縄文・古墳～平安	集落跡。	
43	西原遺跡	古墳～平安	集落跡。	
44	宮下遺跡	縄文・古墳～平安	遺物包蔵地。	
45	和田遺跡	縄文・古墳～平安	集落跡・古墳。	
46	篠際遺跡	古墳～平安	集落跡・古墳・生産遺跡。	
47	仙石道祖遺跡	旧石器～平安	散布地・集落跡・古墳・城館。	大泉教2007
48	仙石専光寺付近遺跡	縄文～中世	古墳～奈良・平安時代集落跡。	大泉教1990他
49	松原西遺跡	旧石器・古墳	遺物包蔵地。古墳。	
50	松塚古墳群Ａ	古墳	６世紀後半の群集墳。	大泉教2003
51	松塚古墳群Ｂ	古墳	６世紀後半の群集墳。	大泉教2003
52	長良Ｂ遺跡	奈良～平安	集落跡。	
53	長良Ｃ遺跡	奈良～平安	遺物散布地。	
54	長良Ａ遺跡	縄文・奈良～平安	集落跡。	
55	古海原前１号古墳	古墳	５世紀末～６世紀初頭の帆立貝式古墳。群馬県指定史蹟。	
56	富士原古墳群・浅間山古墳・他	古墳	『上毛古墳綜覧』掲載古墳。	
57	吉田遺跡	旧石器～平安	奈良～平安時代集落跡。	
58	谷向遺跡	古墳～奈良	遺物散布地。	
59	東谷Ａ遺跡	古墳～奈良	遺物散布地。	
60	東谷Ｂ遺跡	古墳～奈良	遺物散布地。	
61	猿街道４遺跡・他	縄文・奈良～近世	遺物散布地。	

第４節　基本土層

本遺跡の基本土層は、Ⅰ層からⅩ層までについてはⅣ調査区域の東南壁を、ＸⅠ層からＸⅣ層については同区域の16号土坑断ち割り調査壁を基準にして設定している。

Ⅰ層　表土。事業用地化の工事に伴う盛土。調査区の北西側では、本層がⅥ層の上位にまで及んでいた。

Ⅱ層　暗褐色土。浅間Ｂ軽石（As-B･1108（天仁元）年）を含む。現代の耕作土で、縄文土器・土師器・現代陶器等の細片を含む。

Ⅲ層　褐色土。浅間Ｃ軽石（As-C・4世紀初頭),榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA・6世紀初頭）を含む。縄文土器・土師器・埴輪の破片を含む。

Ⅳ層　黒褐色土。古墳時代前期の1号住居の土層断面上における掘削確認面は、本層上面にあたる。

Ⅴ層　明褐色土。最下位から旧石器を検出。

Ⅵ層　黄褐色ローム。浅間板鼻黄色軽石（As-YP・約1.3～1.4万年前）を含む。旧石器を検出。縄文時代中期・古墳時代前期の住居床は、本層まで掘削されている。

Ⅶ層　黄色ローム。硬質。浅間大窪沢白色軽石（As-OK・約1.6～1.7万年前）と推定される白色粒を含む。最上位に集中して旧石器を検出。

Ⅷ層　暗黄色ローム。 浅間板鼻褐色軽石群（As-BPG・約2.0～2.5万年前）を含む。

Ⅸ層　暗褐色ローム。暗色帯。

Ⅹ層　暗黄色ローム。

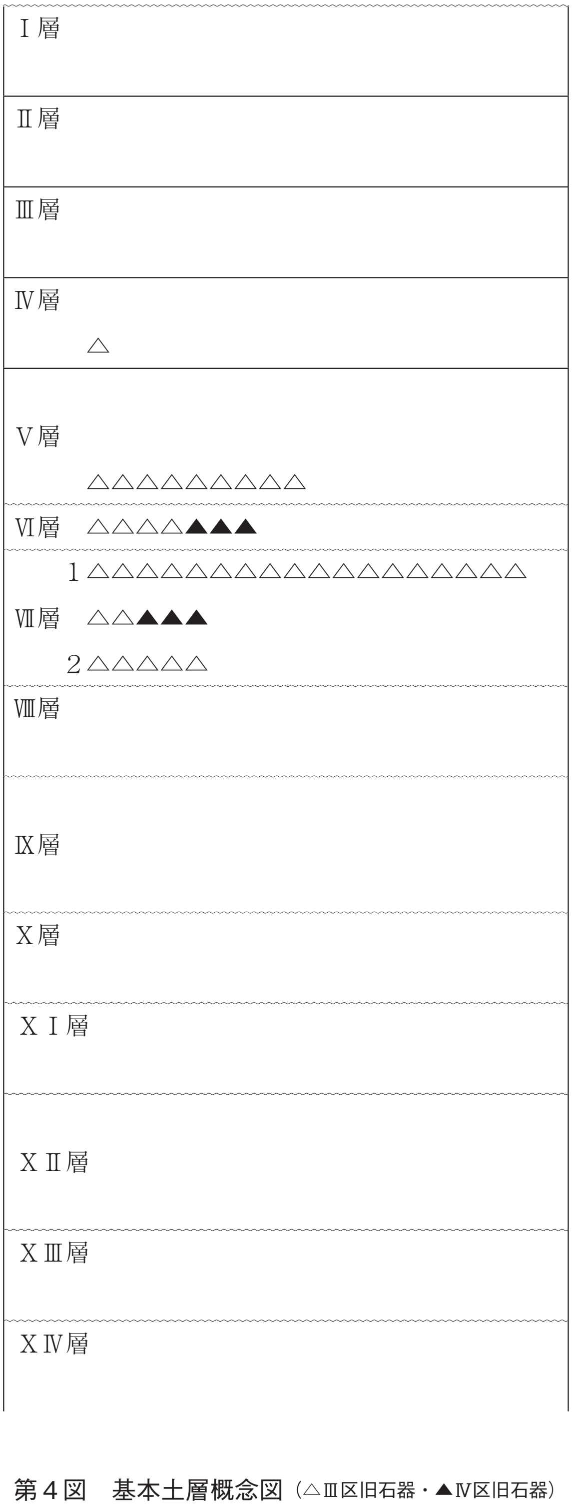
ＸⅠ層　黄褐色ローム。硬質。上位に赤城鹿沼軽石（Ag-Kp・約3.2万年前）を含む。

ＸⅡ層　暗黄褐色ローム。やや軟質。上位に榛名八崎軽石（Hr-HP・約4.2万年前）を含む。

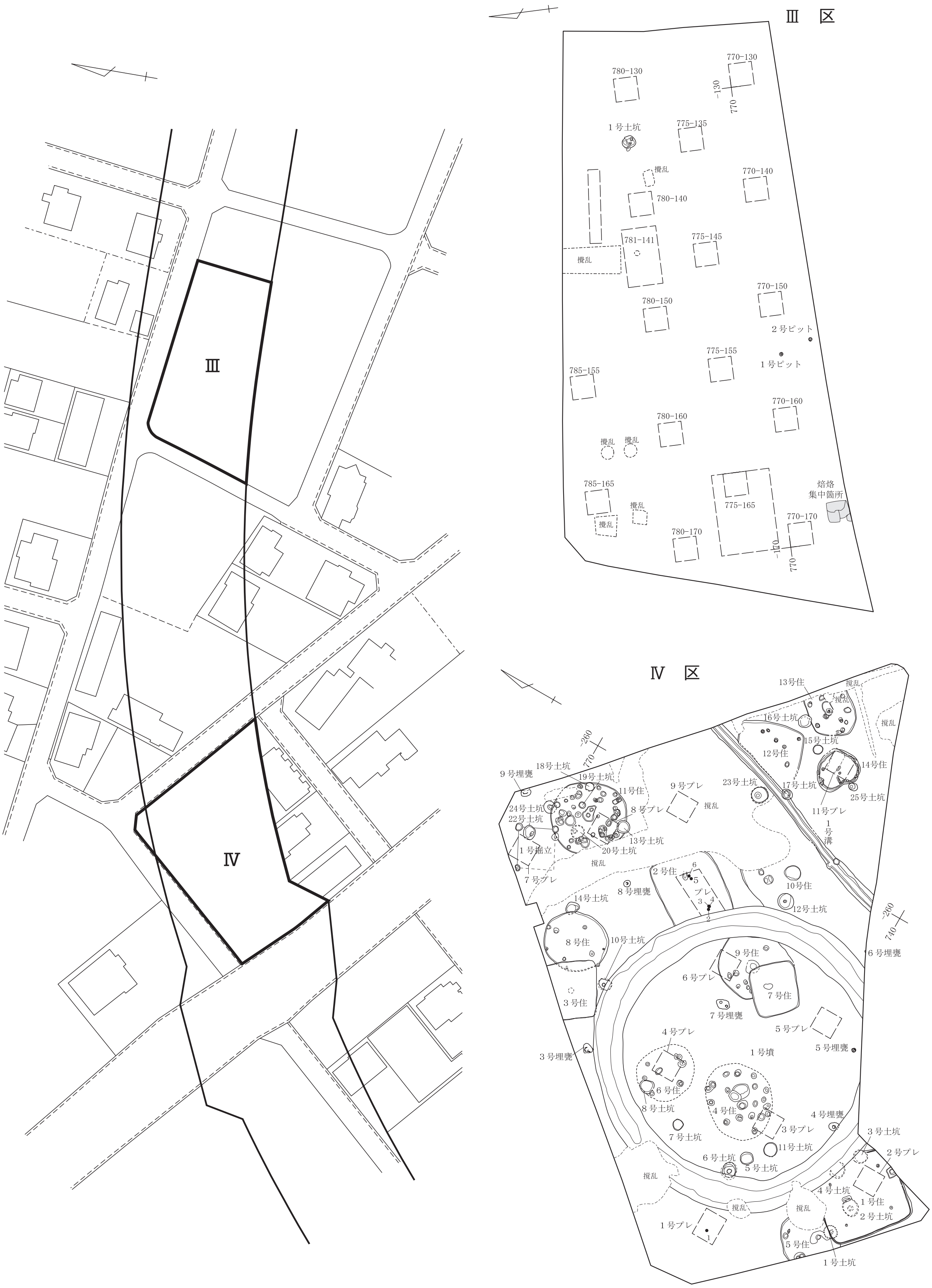
ＸⅢ層　黄褐色ローム。硬質。16号土坑底面は本層中位に及ぶ。

ＸⅣ層　灰褐色砂。洪水起源による堆積砂。

【参考文献】新井房夫編1993『火山灰考古学』古今書院。



第４図　基本土層概念図（△Ⅲ区旧石器・▲Ⅳ区旧石器）



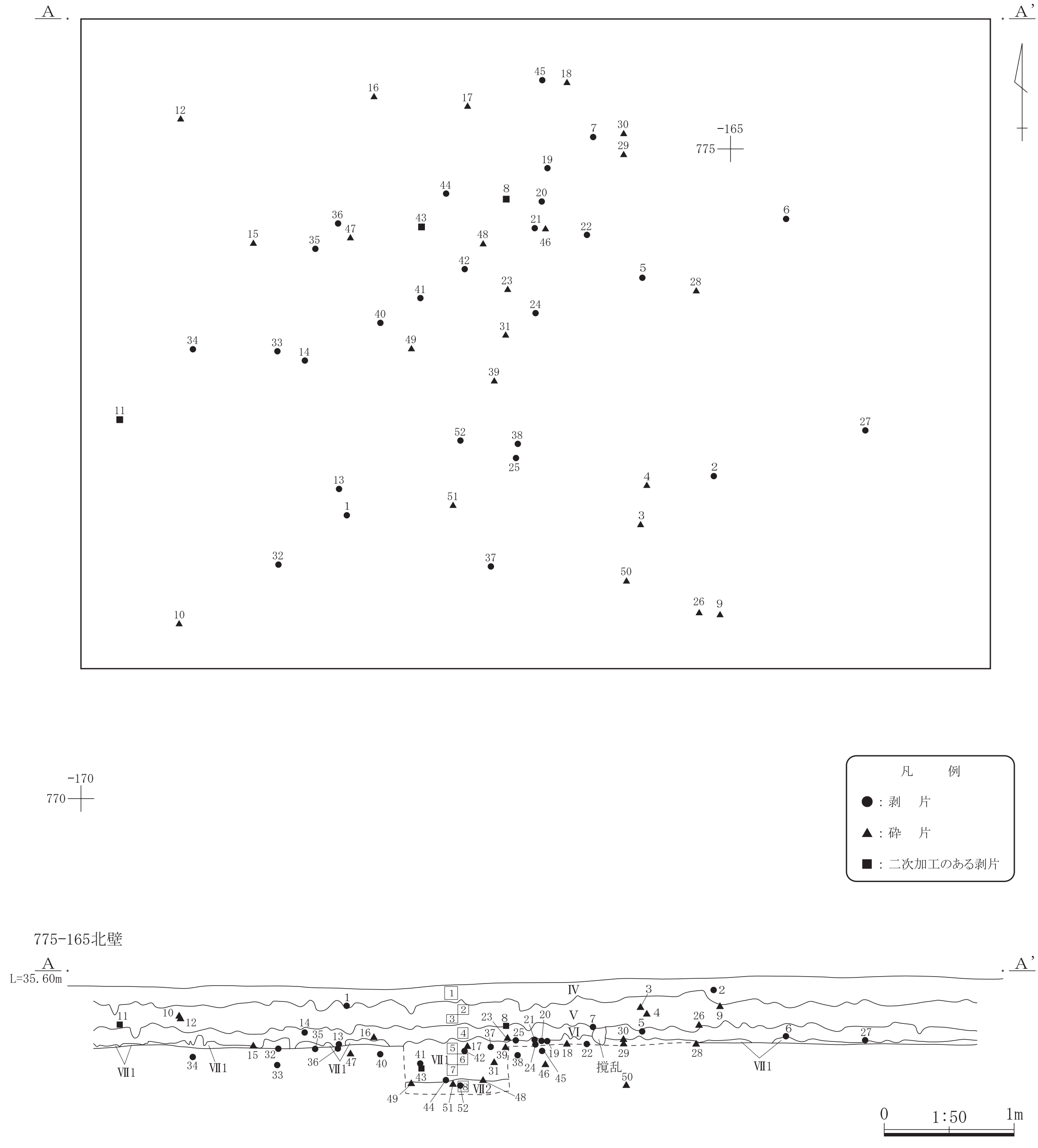
第５図　調査区域図（左・全体図 1/1,500　右上・Ⅲ区 1/500　右下・Ⅳ区 1/500）

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　旧石器時代の遺構と遺物

Ⅲ区　X29771～29776・Y37163～37170 に位置。東西 7.0 m・南北 5.0 mの範囲に集中して剥片 54 点を検出した（第６図・第２表）。

Ⅳ区　試掘トレンチ X29740～29742・Y37290～37293 で１点、２号住居床下拡張区 X29753～29758・Y37263～37268 で５点を検出した（第３表）。



第６図　Ⅲ区旧石器出土分布図・土層投影垂直分布図

第２表　Ⅲ区出土旧石器観察表

	名　称	出土地点	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)	石　質	層　位	摘　要	写真図版
1	剥片	製作跡　1	23.5×16.5×　9.5	2.4	砂　岩	攪乱		
2	〃	〃　2	17.7×　9.9×　1.5	0.3	黒曜石	Ⅳ層		
3	〃	〃　3	11.5×　8.3×　2.7	0.2	ホルンヘルス	Ⅴ層		
4	微小剥片	〃　4	4.0×　2.5×　1.4	0.0ー	黒曜石	〃		
5	剥片	〃　5	14.0×　5.5×　1.2	0.1	〃	Ⅵ層		
6	〃	〃　6	19.2×14.9×　4.5	0.9	〃	Ⅶ１層		
7	〃	〃　7	12.7×　8.9×　1.1	0.2	〃	Ⅵ層		
8	〃	〃　8	27.8×13.3×　3.5	1.2	〃	〃		
9	微小剥片	〃　9	7.4×　2.7×　1.2	0.0ー	〃	Ⅴ層		
10	〃	〃　10	8.4×　4.4×　2.9	0.0ー	〃	〃		
11	剥片	〃　11	14.4×10.6×　3.2	0.6	〃	〃		
12	〃	〃　12	6.3×　6.2×　4.8	0.3	〃	〃	2点	
13	〃	〃　13	25.1×16.2×　8.4	2.5	〃	Ⅶ１層		
14	〃	〃　14	25.4×13.9×　5.1	1.5	〃	Ⅵ層		PL31-1
15	微小剥片	〃　15	7.0×　3.6×　0.8	0.0ー	〃	Ⅶ１層		
16	〃	〃　16	8.4×　4.2×　2.1	0.0ー	〃	Ⅵ層		
17	剥片	〃　17	8.8×　4.7×　1.7	0.1	〃	Ⅶ１層		
18	微小剥片	〃　18	6.7×　5.4×　1.4	0.0ー	〃	〃		
19	剥片	〃　19	9.4×　8.6×　1.9	0.2	〃	〃		
20	〃	〃　20	11.7×　7.5×　1.3	0.2	〃	〃		
21	〃	〃　21	16.1×　5.8×　2.2	0.2	〃	〃		
22	〃	〃　22	12.4×　9.4×　2.4	0.2	〃	〃		
23	微小剥片	〃　23	5.0×　3.1×　0.4	0.0ー	〃	〃	3点	
24	剥片	〃　24	11.8×　8.3×　3.3	0.3	〃	〃		
25	〃	〃　25	25.2×18.6×　4.2	1.8	〃	〃	２点	PL31-2
26	微小剥片	〃　26	8.6×　4.8×　1.3	0.0ー	〃	Ⅴ層		
27	剥片	〃　27	11.5×10.8×　1.4	0.2	〃	Ⅶ１層		
28	微小剥片	〃　28	6.9×　4.8×　2.2	0.0ー	〃	〃		
29	〃	〃　29	5.7×　2.8×　0.7	0.0ー	〃	〃		
30	剥片	〃　30	8.5×　6.2×　1.7	0.1	〃	〃		
31	微小剥片	〃　31	4.2×　3.2×　0.5	0.0ー	〃	〃		
32	剥片	〃　32	11.2×　8.5×　1.9	0.2	〃	〃		
33	〃	〃　33	29.8×14.9×　5.9	2.2	〃	〃		
34	〃	〃　34	37.4×25.7×　6.2	5.1	〃	〃		PL31-5
35	〃	〃　35	14.5×14.1×　4.2	0.7	〃	〃		
36	〃	〃　36	38.6×19.4×　6.8	4.6	〃	〃		PL31-6
37	〃	〃　37	16.7×13.7×　3.9	0.9	〃	〃		
38	〃	〃　38	40.2×　8.4×　8.4	2.0	〃	〃		
39	微小剥片	〃　39	6.3×　4.6×　2.1	0.0ー	〃	〃		
40	剥片	〃　40	11.3×　9.2×　2.0	0.2	〃	〃		
41	〃	〃　41	24.8×14.1×11.9	2.8	〃	〃		
42	〃	〃　42	14.2×　6.4×　2.4	0.2	〃	〃		
43	〃	〃　43	21.3×14.4×　6.0	1.3	〃	〃	2点	
44	〃	〃　44	28.2×12.4×　3.5	0.7	〃	〃		
45	〃	〃　45	8.9×　8.5×　1.5	0.1	〃	〃		
46	〃	〃　46	7.6×　7.4×　2.2	0.1	〃	〃		
47	微小剥片	〃　47	9.8×　3.4×　1.8	0.0ー	〃	〃		
48	剥片	〃　48	10.9×　6.0×　3.2	0.2	〃	Ⅶ２層		
49	微小剥片	〃　49	4.1×　1.5×　1.3	0.0ー	〃	〃		
50	〃	〃　50	7.3×　4.2×　0.7	0.0ー	〃	〃		
51	〃	〃　51	9.1×　2.4×　2.2	0.0ー	〃	〃		
52	剥片	〃　52	27.5×27.3×12.9	5.6	〃	〃		PL31-3
53	〃	製作跡一括	13.6×　6.3×　2.9	0.2	〃	不明		
54	〃	〃	9.5×　4.9×　2.1	0.1	〃	〃		

第３表　Ⅳ区出土旧石器観察表

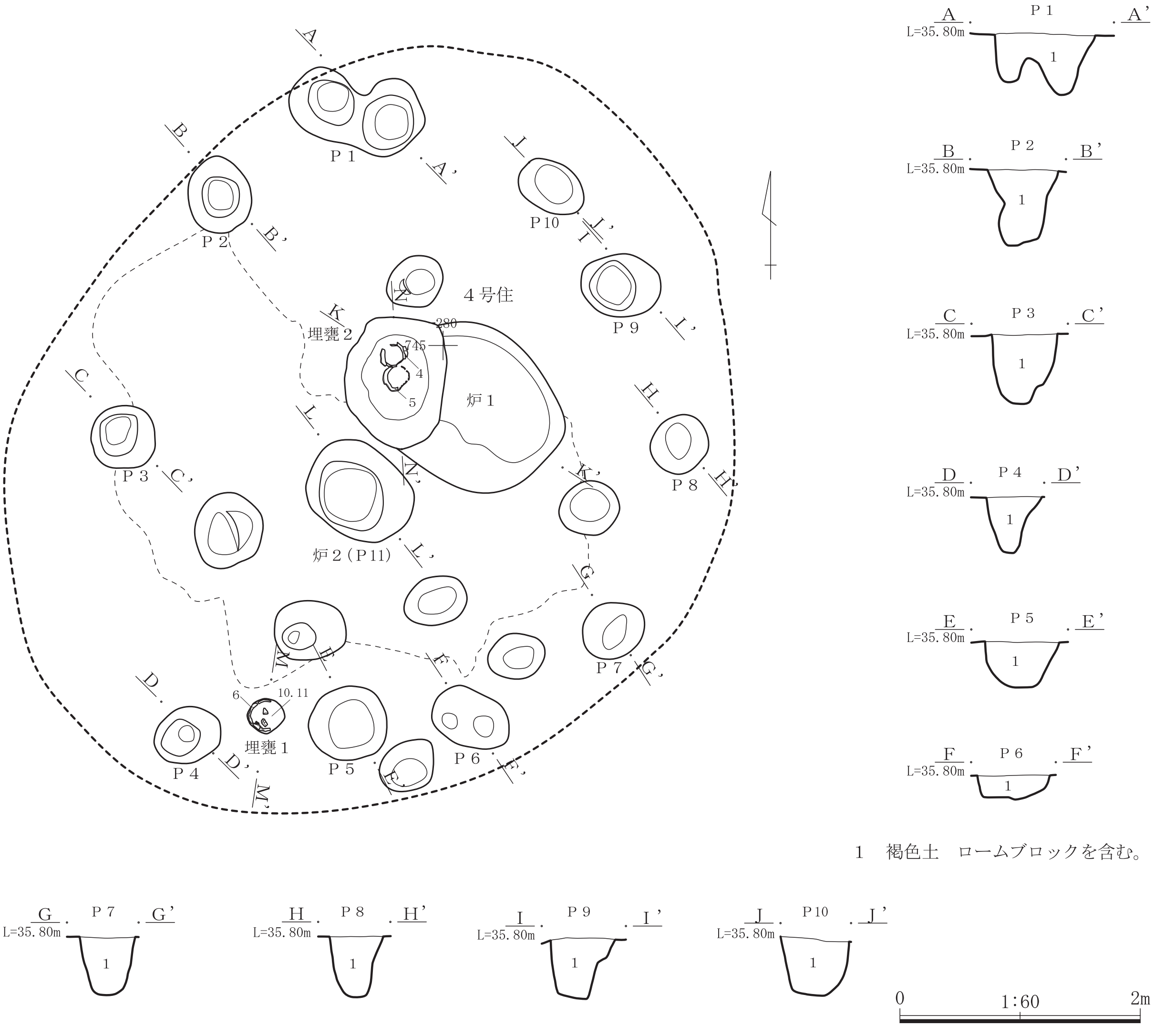
	名　称	出土地点	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)	石　質	層　位	摘　要	写真図版
1	剥片	1トレンチ1	17.9×10.7×　6.9	1.4	黒曜石	Ⅵ層		
2	〃	拡張区　2	25.4×23.5×　6.5	5.2	チャート	Ⅶ層		PL31-4
3	〃	〃　3	23.5×15.5×　7.1	1.5	黒色安山岩	Ⅵ層		
4	〃	〃　4	9.0×　6.8×　1.2	0.1	チャート	〃		
5	〃	〃　5	19.1×18.2×　2.1	0.8	〃	Ⅶ層		
6	〃	〃　6	5.4×　3.8×　0.6	0.1	〃	〃		

第２節　縄文時代の遺構と遺物

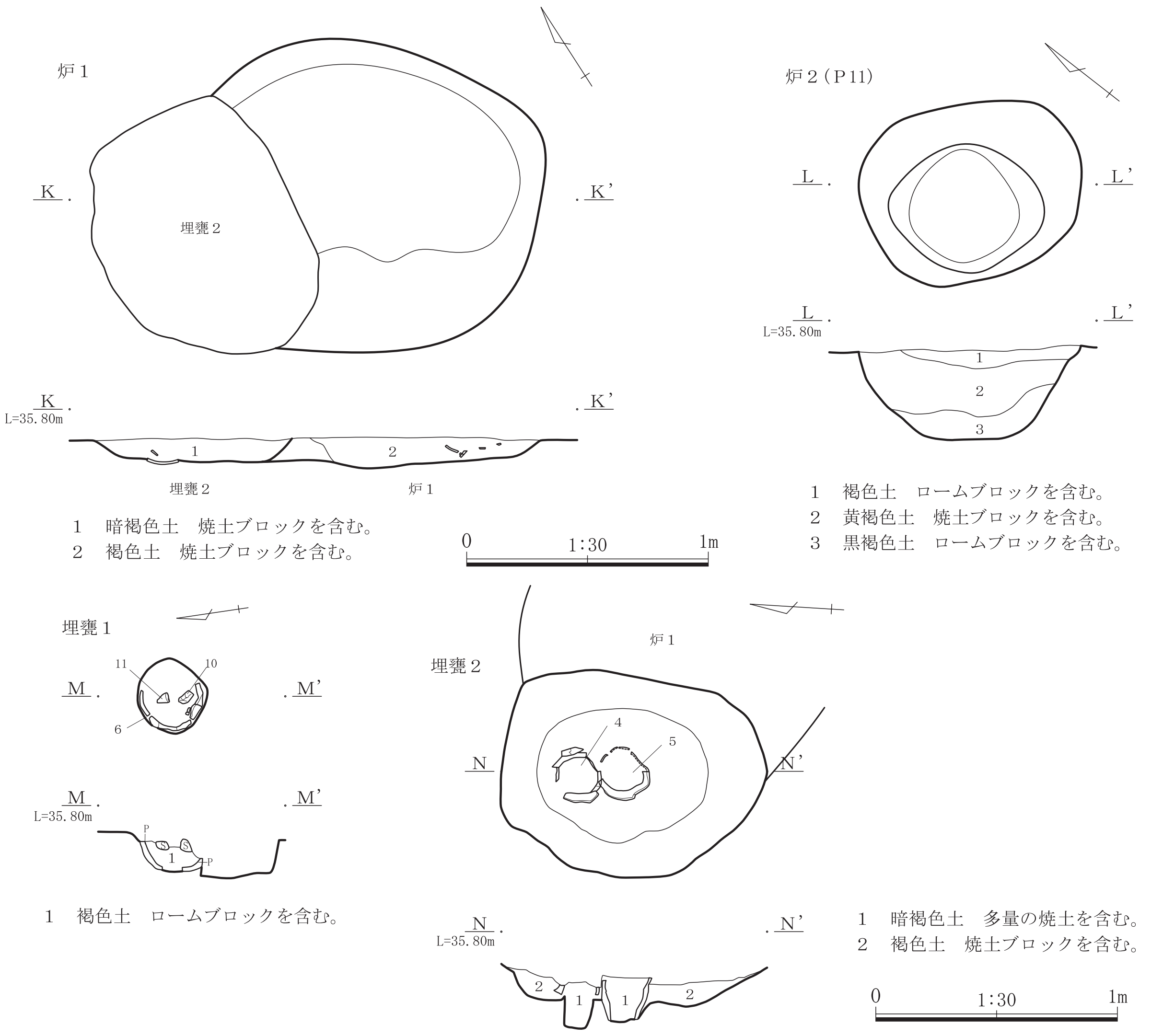
竪穴住居跡９、土坑 24、埋甕７を検出した。26 号土坑を除き、遺跡Ⅳ調査区域内での検出である。何れも、中期後半加曽利ＥⅡ～Ⅲ期に相当する。この他、遺構の確認には至らなかったが、早期・前期・後期の土器片を採集している。

竪穴住居

⑴４号住居　X29741 ～ 29748・Y37277 ～ 37284 に位置。南西－北東方向を長軸とし楕円形を呈する。長軸長 6.7m、短軸長 5.5m を測る。壁は遺存せず、遺構確認面がそのまま床に当たっていた。壁溝は検出されなかった。床は硬く踏みしめられており平坦であった。床中央北寄りに埋甕炉があった。埋甕炉は南東－北西 1.1m、南西－北東 0.8m を測り、長軸方向西寄りに２個の埋甕を埋設していた（調査時名称２号埋甕）。また、床面の南西端に、単独の埋甕を検出（調査時名称１号埋甕）、この中の上位から石核２個が出土している。この位置が本住居の出入り口付近とも考えられることから、本住居に伴うものとしたい。ピットが 18 カ所確認されたが、このうち９カ所が本住居の柱穴と考えられるが判然としない。床中央付近のピットからは少量の焼土が確認されており、本住居を遡る住居が存在した可能性をうかがわせる。

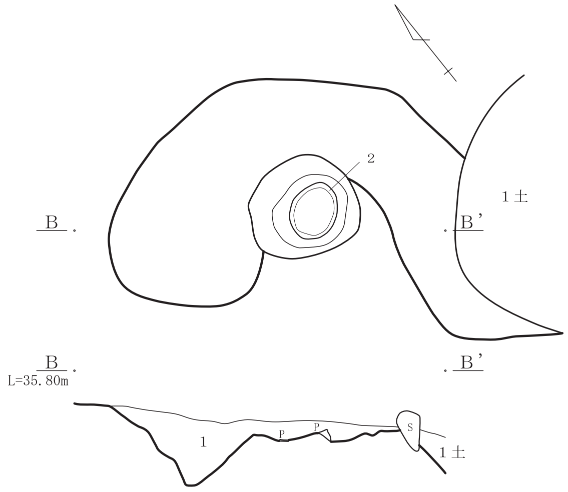


第７図　４号住居　平・断面図

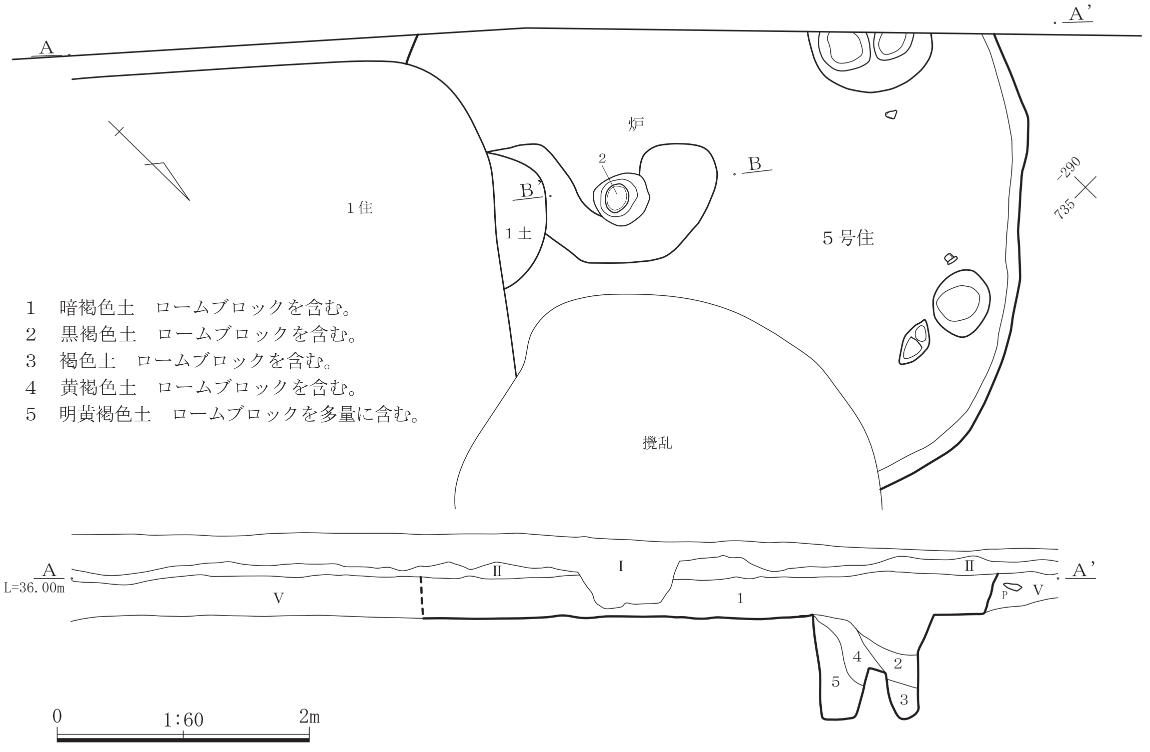


第８図　４号住居炉１・炉２・埋甕１・埋甕２　平・断面図

⑵５号住居　X29730～29736・Y37285～37291に位置。本住居の南西は区域外、東及び南は後生の攪乱により遺存せず、わずかに北壁により楕円形住居であったことがうかがえる。東西約4.0m、南北5.3mを現長とする。床面はやや硬く、南寄りに炉が確認され、これに接して埋甕１個がある。

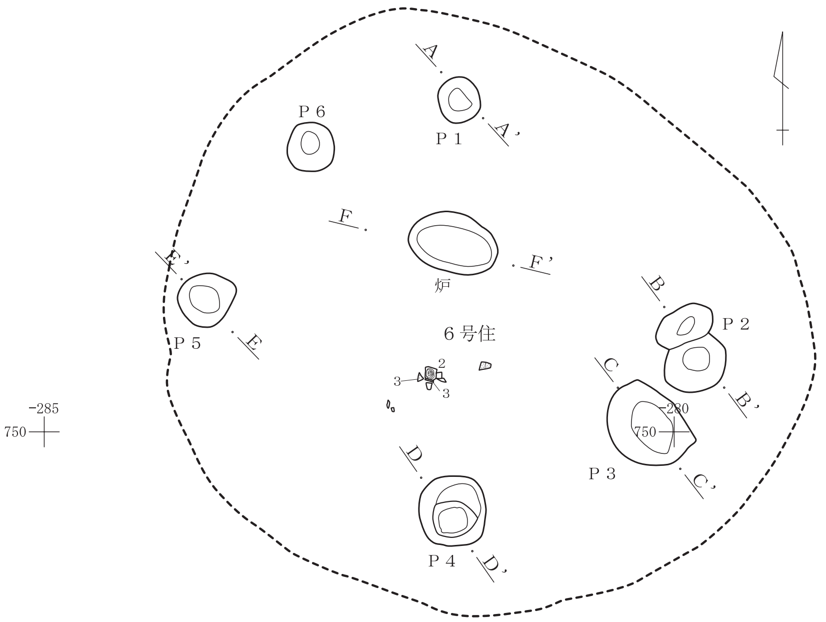


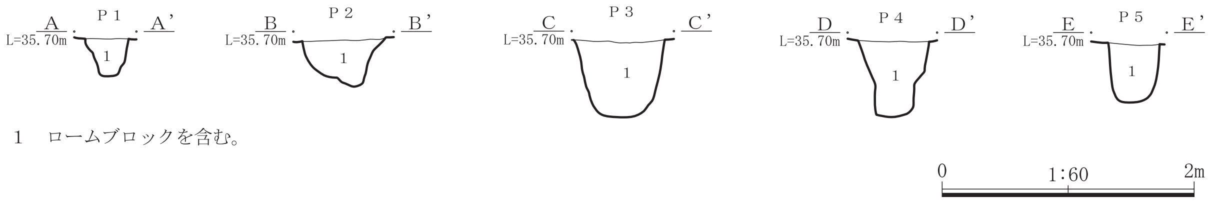
第９図　５号住居炉　平・断面図



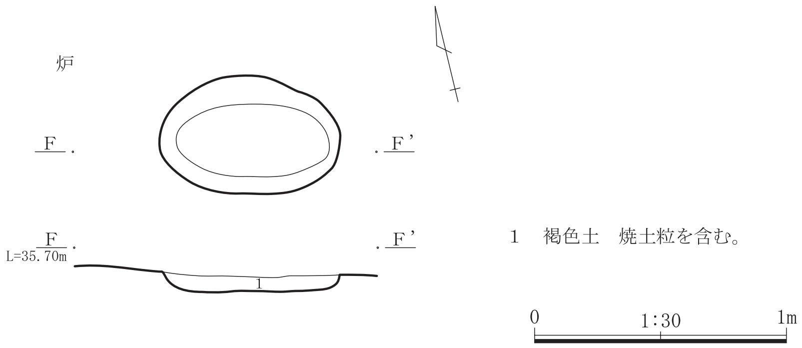
第10図　５号住居　平・断面図

⑶６号住居　X29748～29754・Y37279～37284 に位置。南東－北西方向を長軸とし楕円形を呈する。長軸長 5.2m、短軸長 4.5m を測る。壁は遺存せず、壁溝も検出されていないため、硬化面を遺構範囲とした。床面中央付近に、少量の焼土を覆土とする長軸長 0.7m、短軸長0.45m、深さ0.07 mの浅い炉を検出している。



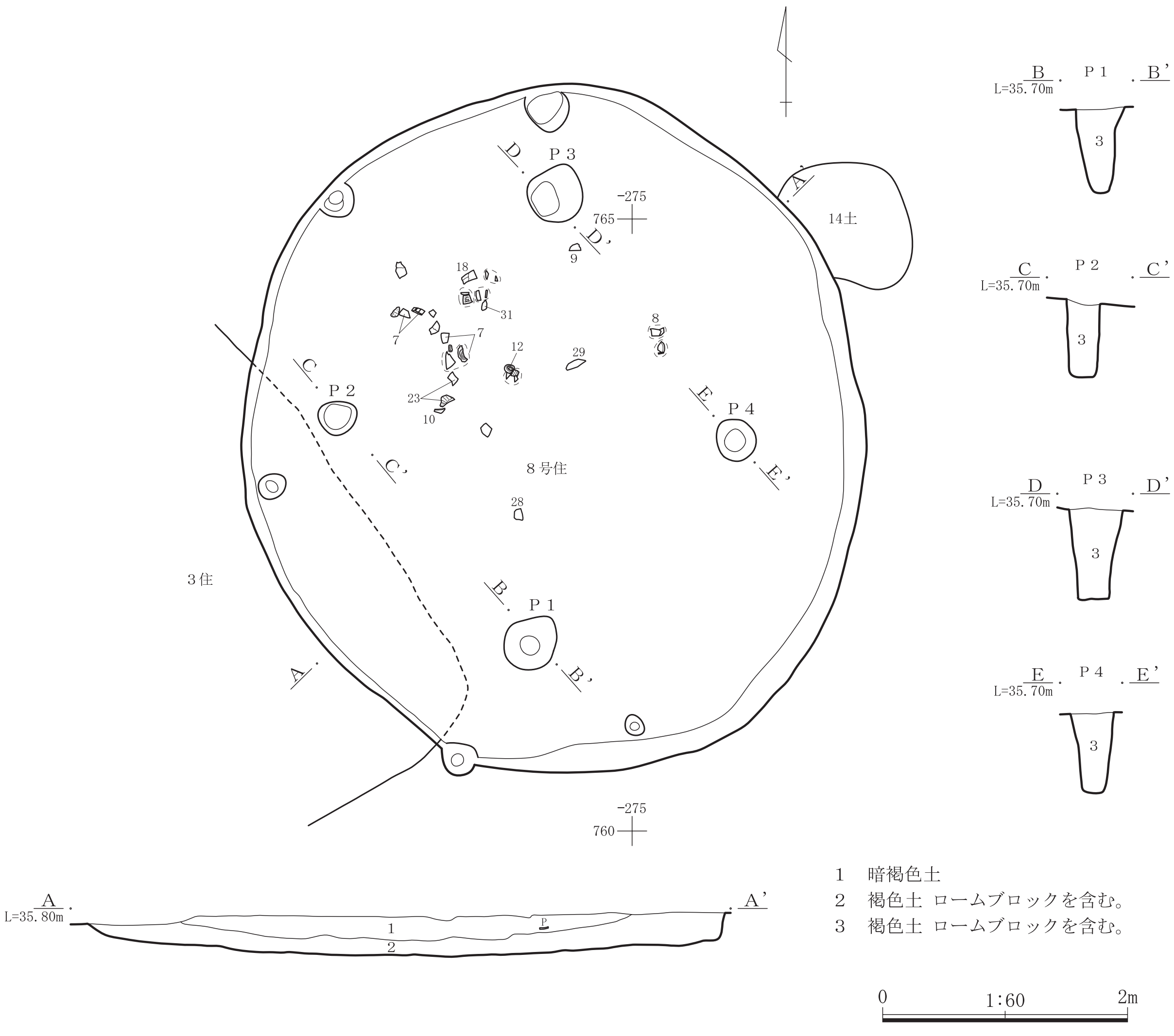


第11図　６号住居　平・断面図



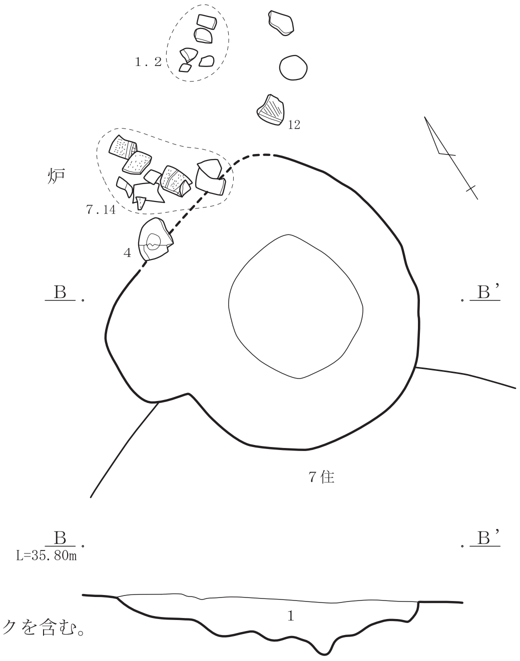
第12図　６号住居炉　平・断面図

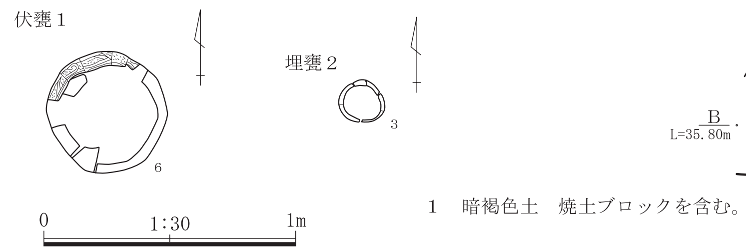
⑷８号住居　X29760 ～ 29766・Y37273 ～ 37279 に位置。南－北方向を長軸とする楕円形を呈す。長軸長 5.6m、短軸長 5.1m を測る。壁は 0.1 ～ 0.2 m を残すのみであった。壁溝は検出されなかった。床はやや硬く平坦であった。炉は確認されず、焼土も検出されなかった。床面の長軸・短軸方向にピットが４カ所あり、主柱穴とみられる。

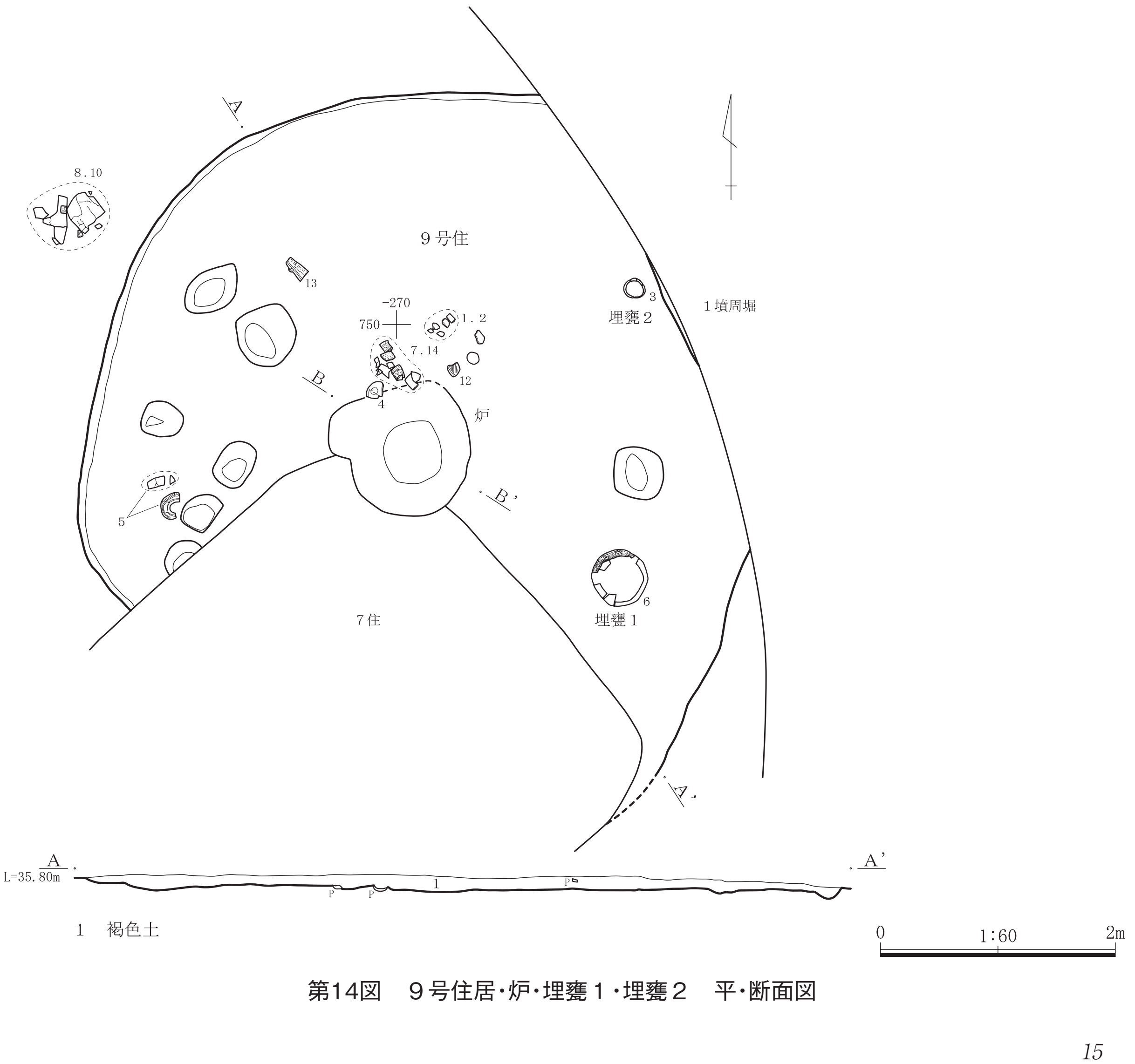


第13図　８号住居　平・断面図

⑸９号住居　X29746 ～ 29752・Y37267 ～ 37273 に位置。東壁を１号古墳周溝に、南壁及び床の南半のほとんどを７号住居によって損なわれているが、ほぼ円形を呈すると考えられる。東西の現長 5.8m、南北の現長 5.6m を測る。壁溝は無く、ピットも不定である。床中央に東西 1.2m、南北 1.1m、深さ 0.2m のほぼ円形の炉穴がある。この他、北東床面に埋甕が、南東床面に逆位の深鉢口縁部が検出されている。

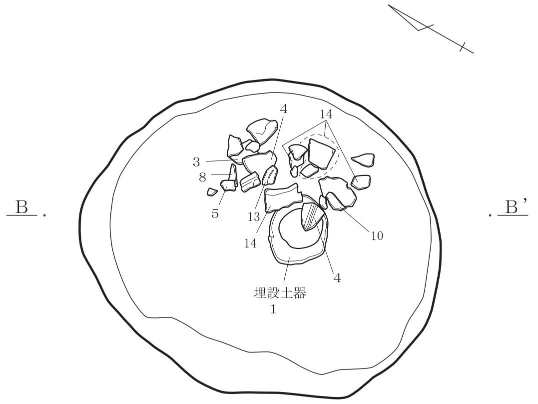


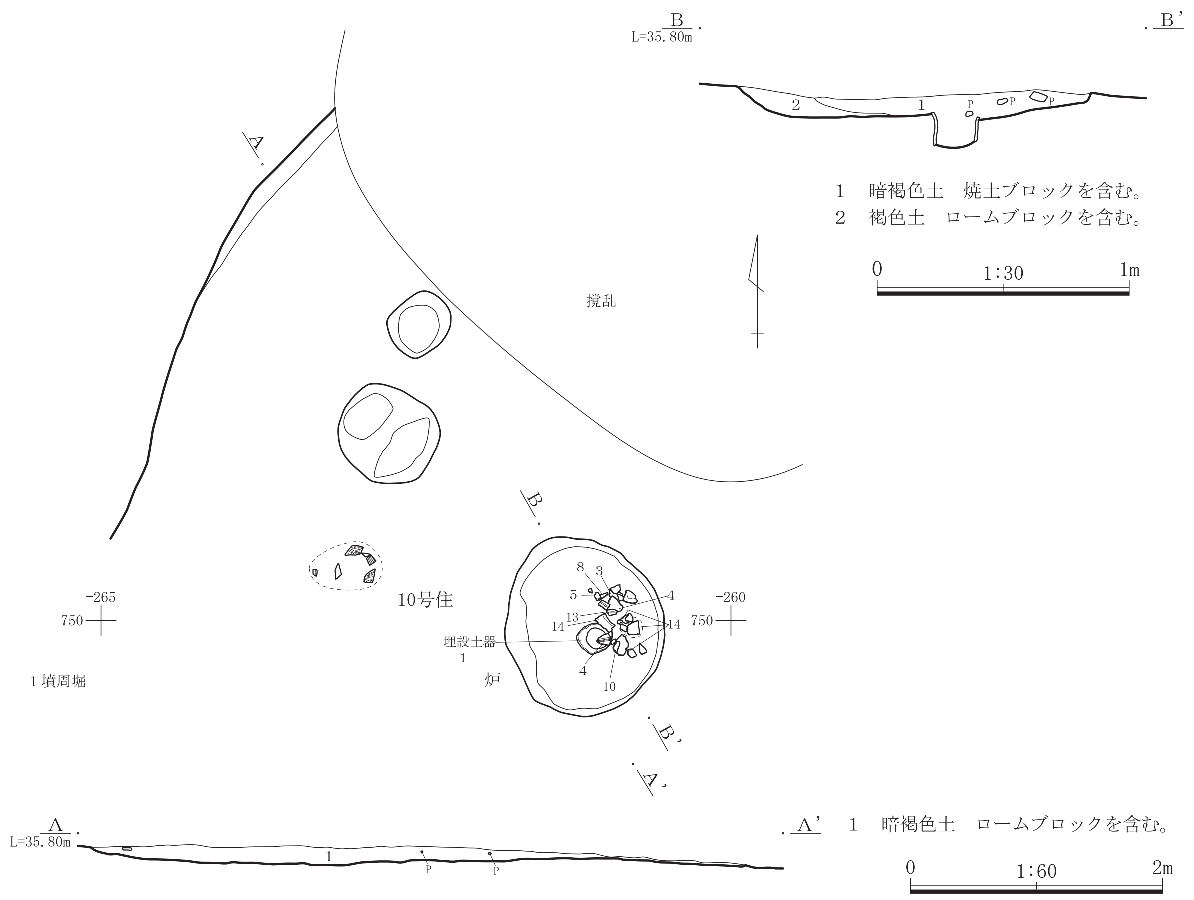




第14図　９号住居・炉・埋甕１・埋甕２　平・断面図

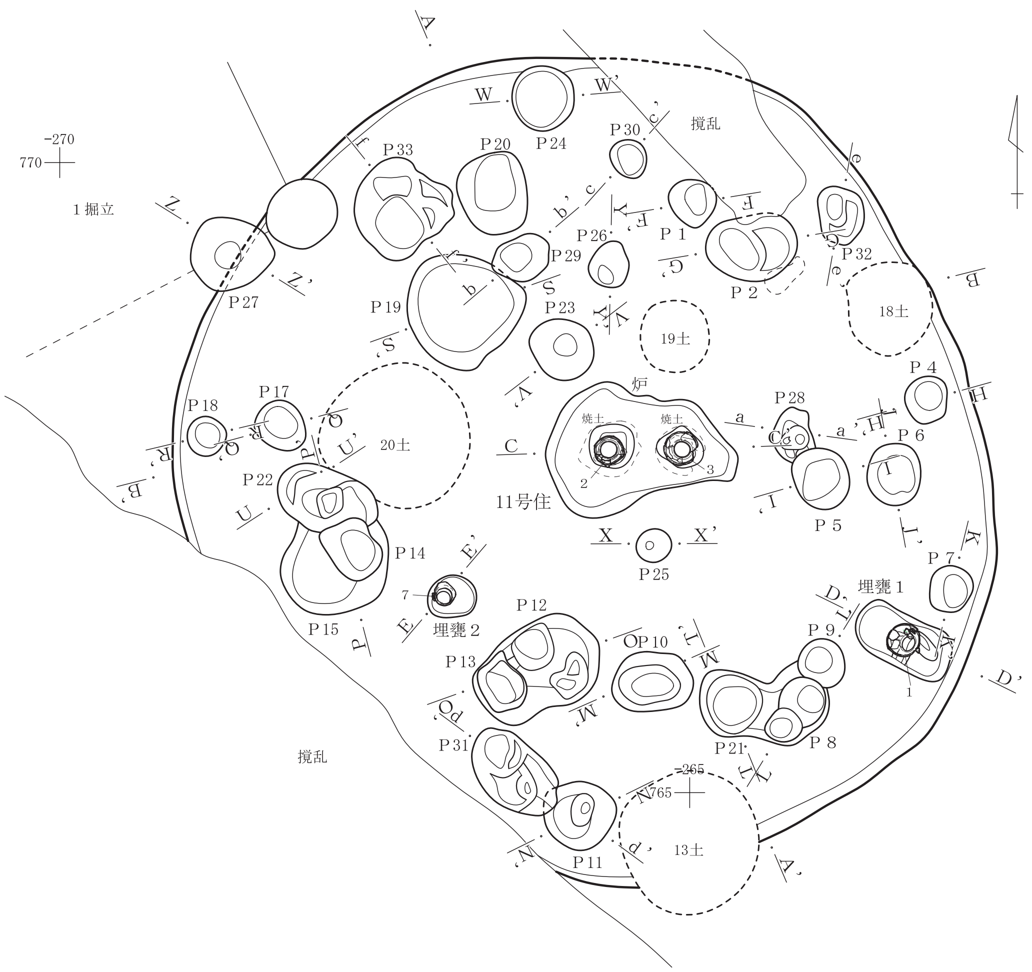
⑹10号住居　X29747 ～ 29753・Y37258 ～ 37265 に位置。西部が１号古墳の周溝に、北東部が攪乱により、また南部は削平により損なわれており、北半部の一部が残されているに過ぎなかった。北壁も一部が 0.07m を残すのみで、壁溝も確認されていない。遺存していた床は硬く、穿たれた炉穴には埋甕を伴っていった。炉穴は東西1.25m、南北 1.4m、深さ 0.2m を測り、良く焼けていた。炉の位置から、径 8 ～ 9m 規模の楕円形の住居であったと考えられる。

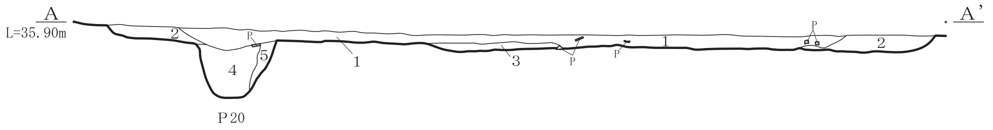


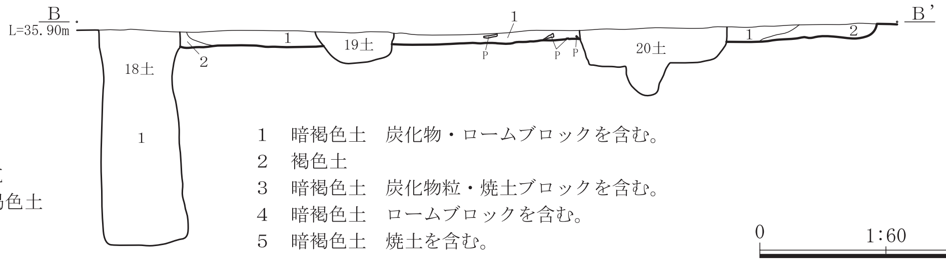


第15図　10号住居・炉　平・断面図

⑺11号住居　X29764 ～ 29771・Y37262 ～ 37269 に位置。南西壁を攪乱により失っていた。北西－南東方向を長軸とし楕円形を呈する。長軸長 6.6m、短軸長 6.0m、壁現高平均 0.15m を測る。壁溝は検出されていない。床面は、一部に硬化が認められたが、比較的軟質であった。床の中央に、土器を２個埋設した埋甕炉がある。その規模は東西 1.5m、南北 1.2m で、東西に並設され、この他南東床面と南西床面の２カ所に個別の埋甕が検出された。何れも加曽利ＥⅡ・ＥⅢと差異があり、調査時は不詳であったが重複住居の可能性が高い。床面上には環状にピットが多く検出されており、これを裏付けよう。13・18・19・20・24 号の各土坑、１号掘立柱建物との重複が認められるが、何れも本住居より後出する。

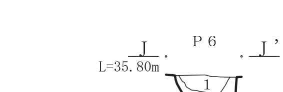


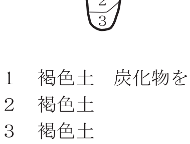




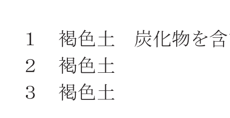
18号土坑
1　暗褐色土

1　暗褐色土　炭化物・ロームブロックを含む。
2　褐色土
3　暗褐色土　炭化物粒・焼土ブロックを含む。
4　暗褐色土　ロームブロックを含む。
5　暗褐色土　焼土を含む。

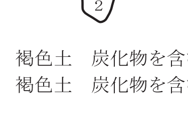




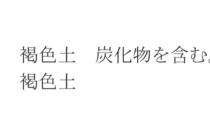
1　褐色土　炭化物を含む。
2　褐色土
3　褐色土



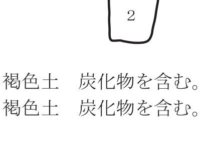
1　褐色土　炭化物を含む。
2　褐色土
3　褐色土



1　褐色土　炭化物を含む。
2　褐色土　炭化物を含む。

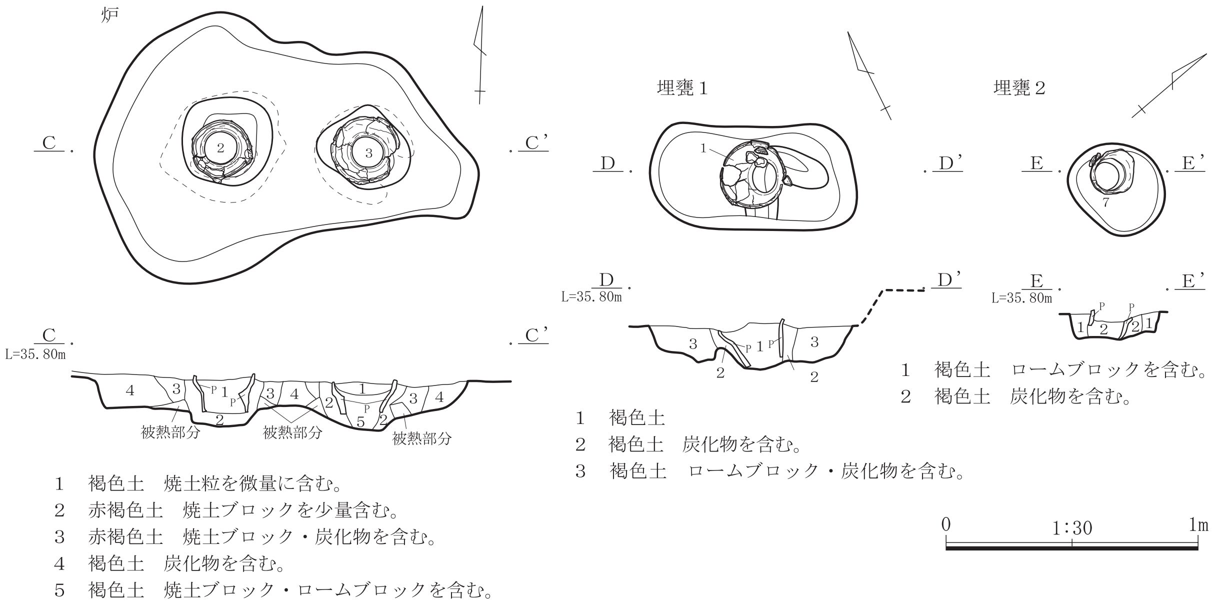


1　褐色土　炭化物を含む。
2　褐色土

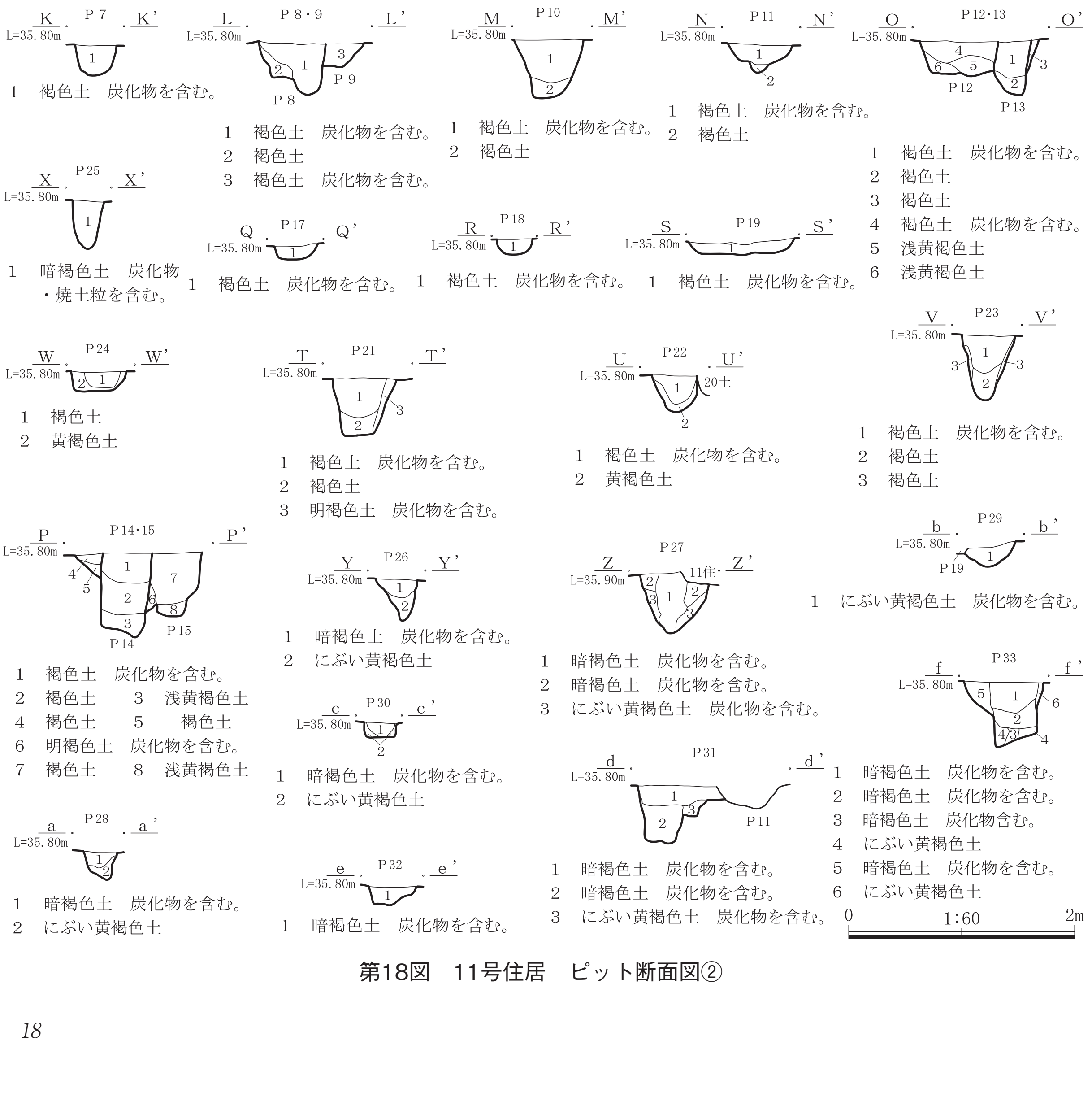


1　褐色土　炭化物を含む。
2　褐色土　炭化物を含む。

第16図　11号住居　平・断面図、18号土坑、ピット断面図①

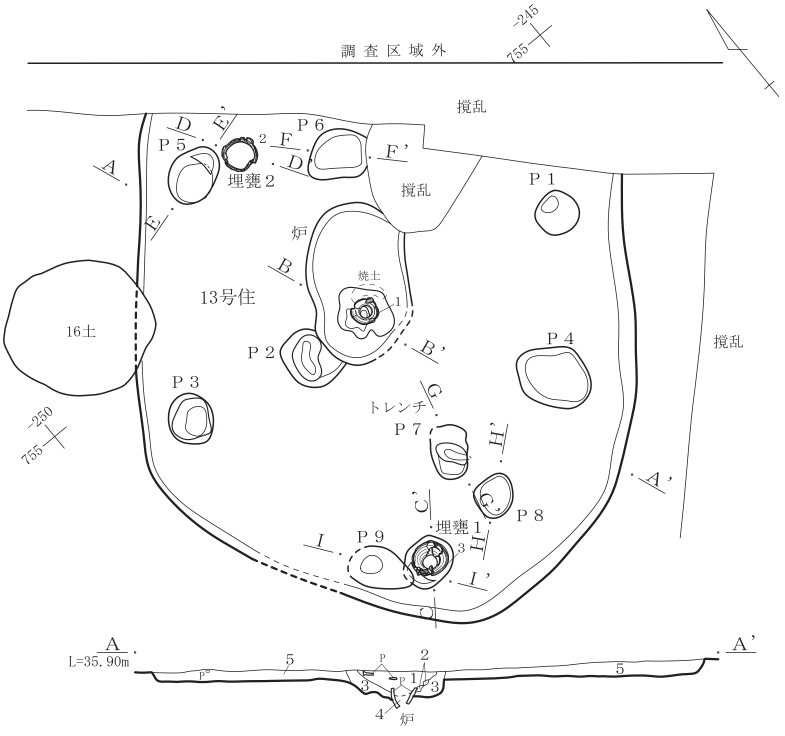


第17図　11号住居炉・埋甕１・埋甕２　平・断面図

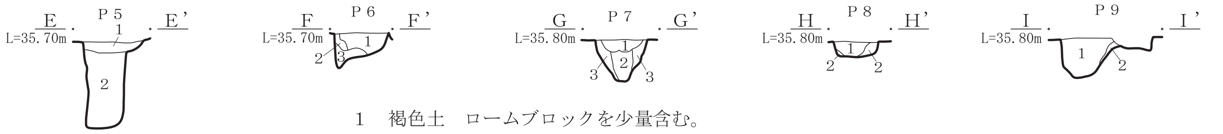


第18図　11号住居　ピット断面図②

⑻13号住居　X29751 ～ 29757・Y37245 ～ 37250 に位置。北東部は調査区域外に延びるが、北東－南西方向を長軸とする楕円形を呈するものと考えられる。長軸長 4.0 m、短軸長 3.9m、残存壁高は約 0.1 mであった。壁溝は無い。床面は硬化しており、そのほぼ中央に埋甕を伴う炉が設けられている。炉穴は住居の長軸方向と軸を同じくし、長軸長 1.3m、短軸長 0.8m、深さは約 0.3m である。この他、床面の南部と北部にそれぞれ埋甕が設けられていたが、何れも本住居に伴うものと考えられる。ピットは９カ所穿たれており、柱穴もこれに含まれる。16号土坑は本住居より後出するものである。

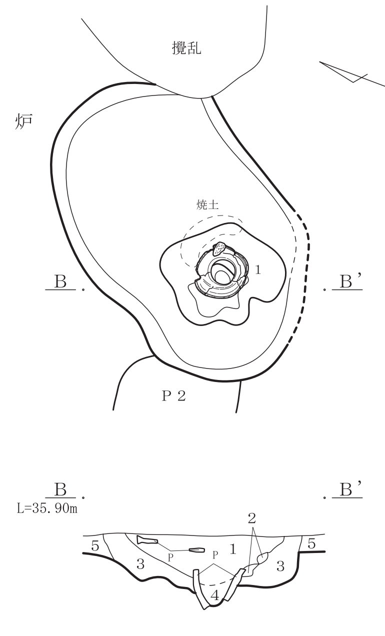


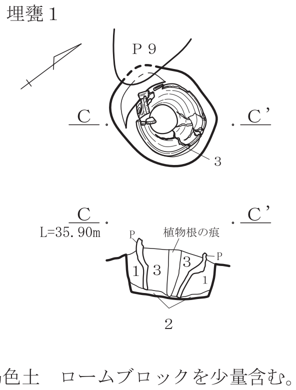
1　黒褐色土　炭化物・焼土粒を含む。
2　赤褐色土　焼土ブロックを含む。
3　褐色土
4　褐色土　焼土粒を含む。
5　褐色土　炭化物・ロームブロックを含む。床構築土

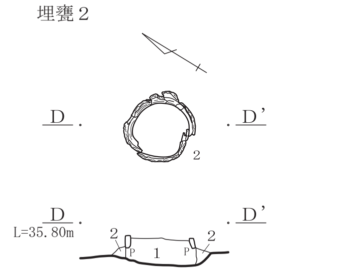


1　褐色土　ロームブロックを少量含む。
2　褐色土　炭化物を含む。
3　暗褐色土　ロームブロック・炭化物・焼土を含む。

0　1:60　2m







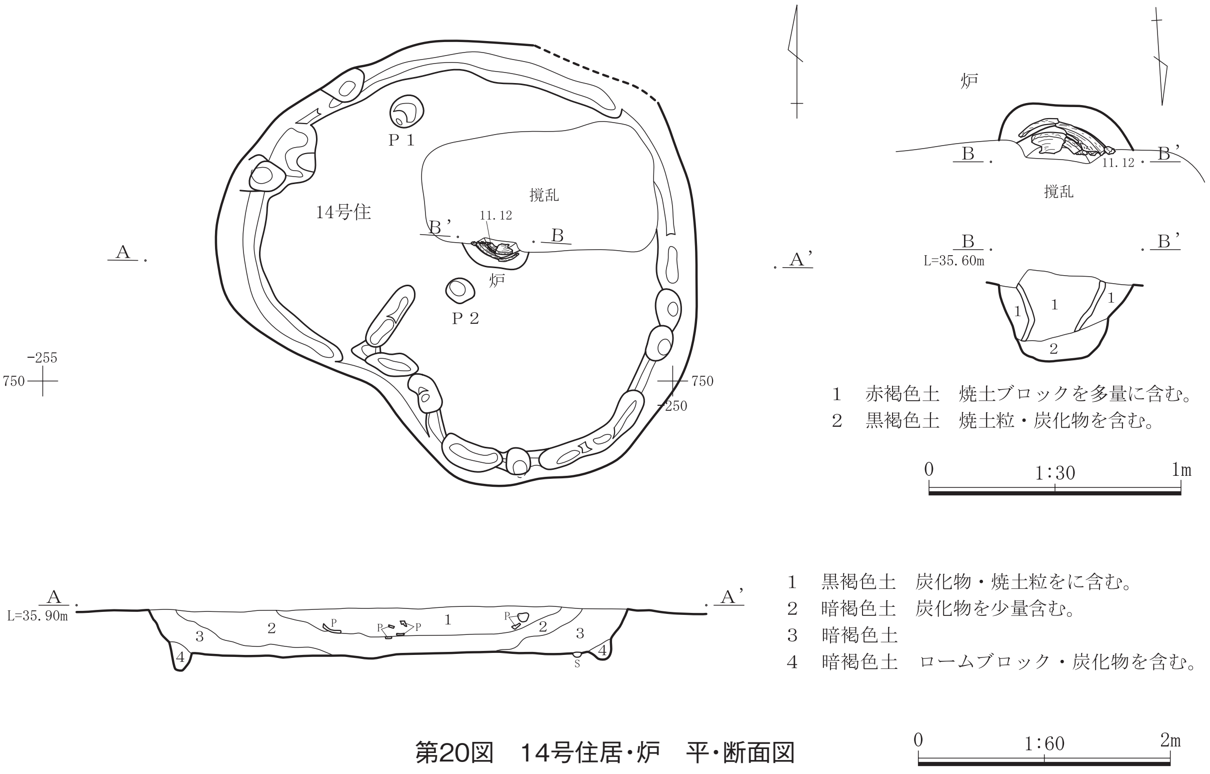
1　褐色土　ロームブロック・炭化物を含む。
2　褐色土　炭化物を含む。

1　褐色土　ロームブロックを少量含む。
2　褐色土　炭化物を含む。
3　暗褐色土　ロームブロック・炭化物・焼土を含む。

0　1:30　1m

第19図　13号住居・炉・埋甕１・埋甕２　平・断面図

⑼14号住居　X29749 ～ 29753・Y37249 ～ 37254 に位置。東西 3.8m、南北 3.5m を測り、南西部が内湾する不整楕円状の平面形を呈する。壁は 0.3 ～ 0.45m でほぼ直立し、壁溝を廻らしていた。床は硬く踏みしめられており、光沢があった。攪乱により大きく損なわれてはいたが、床中央にはよく焼けた埋甕炉が設けられていた。精査したが床面上からは柱穴となるべきピットが２カ所しか確認されず、平面形と併せ特異な上屋形態を推定させる。内湾部床面上に認められた床中央方向に向かう溝は、出入り口設備痕と考えられ、この方向が主軸であろう。



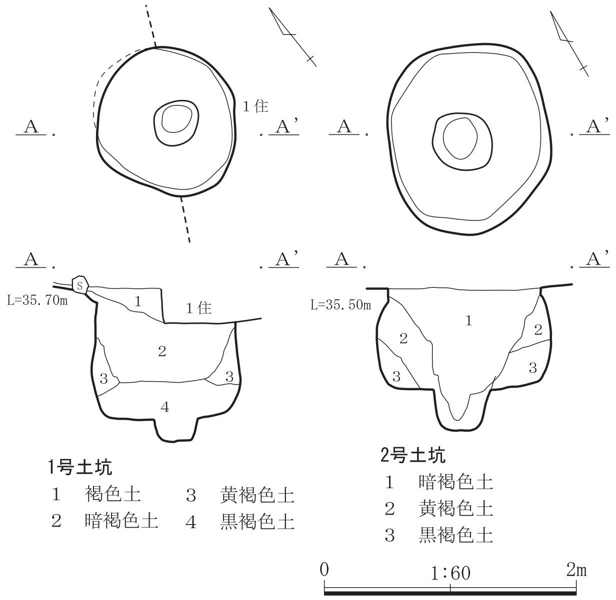
第20図　14号住居・炉　平・断面図

土　　坑

調査途上において、住居の覆土がほとんど無く床面が直に遺構確認面となった場合があり、土坑と当該住居及びその炉との関係が当初は判然としなかった。調査結果を踏まえ、９号土坑は４号住居の炉、21 号土坑は 13 号住居の埋甕炉として別掲した。

⑴１号土坑　X29732・Y37286 に位置。１号住居掘方下で検出。径 1.2m・深さ 1.05m の円形袋状土坑。底面は平坦で中央に小穴を伴う。貯蔵穴であろう。

⑵２号土坑　X29731・Y37285 に位置。１号住居掘方下で検出。径約 1.3m・深さ 0.8m の円形袋状土坑。底面は平坦で中央に小穴を伴う。１号土坑に近似している。貯蔵穴であろう。



第21図　1号・2号土坑　平・断面図

⑶３号土坑　X29733・Y37279に位置。1号住居掘方下で検出。径1.2m・深さ0.65mの円形土坑。底面は平坦である。単層の埋没土は人為的な埋め戻しを想起させる。

⑷４号土坑　X29733・Y37282に位置。1号住居掘方下で検出。径1.4m・深さ0.5mの円形土坑で、底面は平坦である。

⑸５号土坑　X29741・Y37285に位置。径1.1m・深さ0.15mの円形皿状土坑である。

⑹６号土坑　X29742・Y37286に位置。口径1.15m・底面径1.5m・深さ1.65mの、袋状土坑である。平坦な底面中央に小穴を伴う。貯蔵穴であろう。

⑺７号土坑　X29748・Y37285に位置。径0.9m・深さ1.5mの円形筒状土坑である。埋没土は6号他の袋状土坑に近似し､同様に貯蔵穴と考えられよう。

⑻８号土坑　X29752・Y37283に位置。径1.1m・深さ0.6mの円形土坑である。底面は平坦である。

⑼10号土坑　X29759・Y37277に位置。1号古墳周溝により南半の一部を欠く。口径0.9m･底面径1.1m･深さ1.2mの円形袋状土坑である。平坦な底面の中央に小穴を伴う。貯蔵穴とみられる。

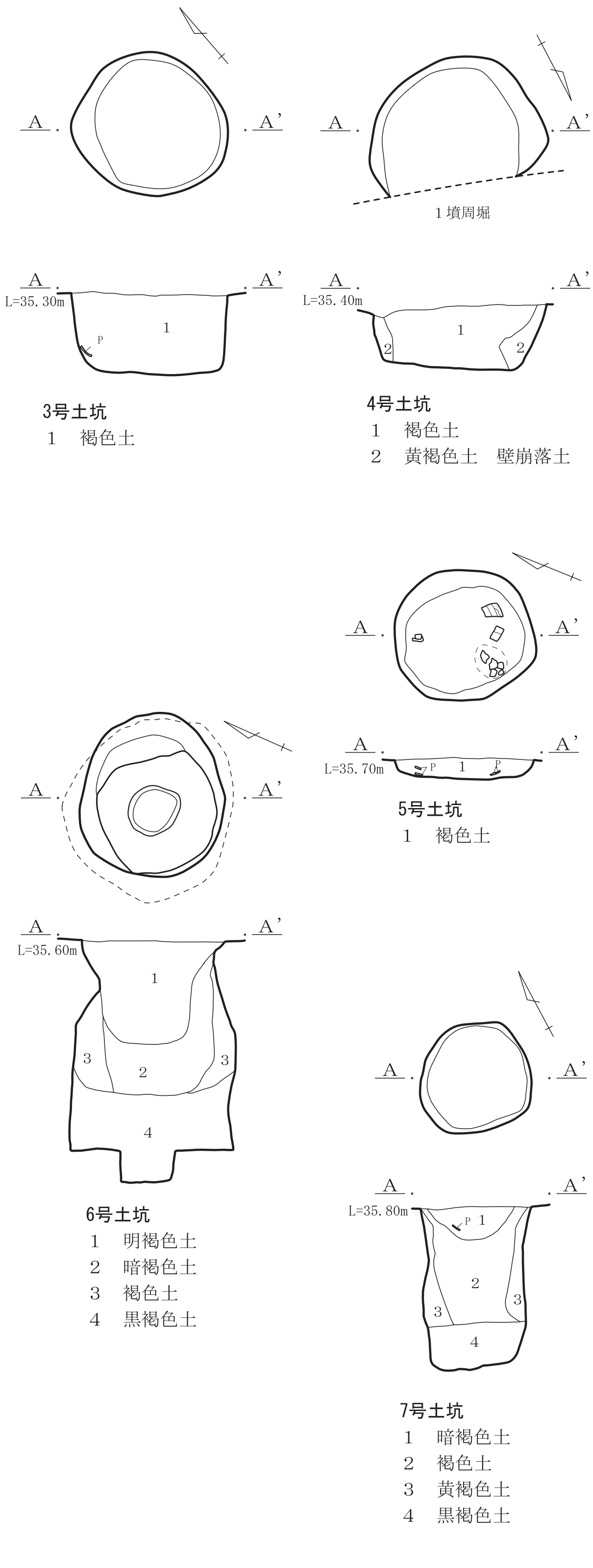
⑽11号土坑　X29740・Y37283に位置。径5.5m・深さ0.7mの円形土坑である。底面は平坦で硬化している｡埋没土下層は埋め戻しによるものであろう。中層中央に正位の土器下半部を出土している。

⑾12号土坑　X29749･Y37263に位置。口径1.35m･底面径1.1m・深さ1.75mの円形筒状土坑である。底面中央に小穴を設ける。貯蔵穴であろう。

⑿13号土坑　X29764・Y37265に位置。径1.05m深さ0.15mの円形皿状土坑である。11号住居より後出する遺構である。

⒀14号土坑　X29765・Y37273に位置。径1.0m・深さ0.35mの円形土坑である。底面は平坦である。焼土があり、亡失遺構の炉床ともみられる。

⒁15号土坑　X29754・Y37251に位置。径0.8m・深さ0.25mの円形皿状土坑。埋没土に少量の焼土を含むが、壁が焼けておらず炉ではない。土器片等の遺物を伴う。



第22図　3号〜7号土坑　平・断面図

⒂16号土坑　X29756・Y37249に位置。口径1.2m・底面径1.0m・深さ2.45mの円形袋状土坑。今回で確認できた最深の土坑である。底面は平坦で硬化しており､埋没土最下層に炭化物の堆積が認められた。貯蔵穴とみられる。埋没は少なくとも､①16〜14層、②13〜12層、③11〜10層、④9〜5層、⑤4〜3層、⑥2〜1層の６期に及んでいる。

⒃17号土坑　X29754・Y37251に位置。口径1.0m・深さ1.0mの円形土坑である。1号溝により西側上半部を欠く。

⒄18号土坑　X29769・Y37263に位置。径0.7m・深さ1.7mの円形筒状土坑である。底面は平坦で、埋没土は単層であった。11号住居の東壁際に位置し、11号住居より後出する。

⒅19号土坑　X29768・Y37265に位置。径0.55m深さ0.25mの円形土坑である。11号住居の埋甕炉の北に接しているが、住居に後出する遺構である。

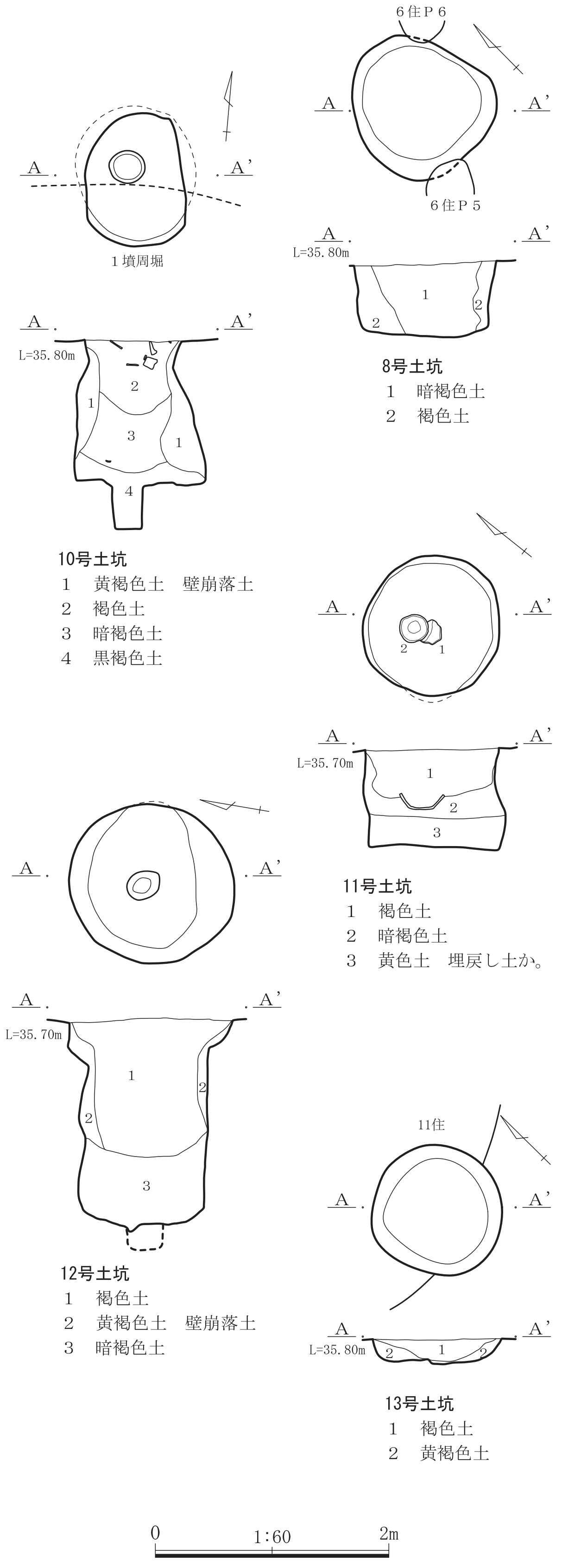
⒆20号土坑　X29768・Y37267に位置。径1.0m・底面径0.9m・深さ0.2mの円形土坑で底面北よりに小穴を伴う。埋没土上に11号住居の床面があり、11号住居より先行する遺構である。

⒇22号土坑　X29766・Y37269に位置。径1.1m程・深さ0.3mの円形土坑である。底面は不定形であるが底面近くに土器片が一括して出土している。焼土塊も認められ、亡失住居の埋甕炉残骸の可能性も考えられるが判然としない。

㉑23号土坑　X29756・Y37257に位置。口径1.4m・底面径1.5m・深さ1.3mの円形袋状土坑である。底面は平坦で硬化しており、中央に小穴が設けられている。底面付近及び小穴内埋没土には炭化物が看取できる。貯蔵穴であろう。埋没過程は少なくとも、①9〜8層、②7層、③6〜5層、④4〜2層、⑤1層の５期認められる。

㉒24号土坑　X29771・Y37267に位置。径1.1m・深さ0.4mの円形皿形土坑。11号住居に先行する。

㉓25号土坑　X29749・Y37252、14号住居の南側に接して位置。径0.8m・深さ1.5mの土坑である。平面及び断面形態から、柱穴である可能性がある。



第23図　8号・10号〜13号土坑　平・断面図

⑷26号土坑　X29779・Y37134に位置。Ⅲ調査区で確認された。南北1.15m・東西1.0m・深さ0.25mの円形土坑である。底面は不定形で凹凸がある。

埋　　甕

住居に伴わずまた、伴うか否か判然としない単独の埋設土器を埋甕として扱った。ただし後に帰属遺構が確認された１号埋甕と２号埋甕は、名称を残したまま４号住居の埋甕・埋甕炉として付説した。

⑴３号埋甕　X29758・Y37283に位置。東西0.8m・南北0.9m・深さ0.15mの不定形な埋設穴の西寄りに、深鉢型土器の口縁部を埋設したものと考えられるが、口縁部の東半は脱落し欠失している。

⑵４号埋甕　X29736・Y37278に位置。東西0.7m・南北0.9m・深さ0.2mの楕円形の埋設穴の中央に、深鉢型土器の底部以外を設置したもの。埋設当初は口縁部があったものと考えられるが､欠失している。

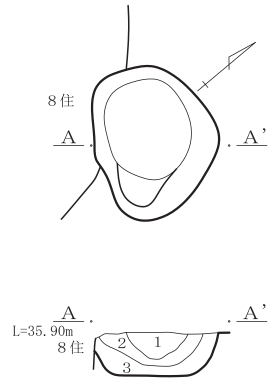
⑶５号埋甕　X29737・Y37272に位置。径0.35m・深さ0.15mの円形埋設穴に、底部を除く浅鉢型土器を埋設したものである。

⑷６号埋甕　X29741・Y37264に位置。径0.3m・深さ0.15mの円形埋設穴の中央に、深鉢形土器の体部のみを埋設したもの。口縁部が当初あった可能性はあるが､早い時期に欠失したものと考えられる。

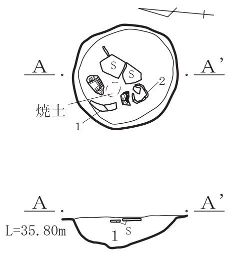
⑸７号埋甕　X29749・Y37274に位置。東西1.2m・南北0.8m・深さ0.2mの埋設穴に、東西２個の深鉢型土器の口縁から体部を配置したもの。埋設穴覆土に多量の焼土塊を含み、全体の形態からも埋甕炉であるが、帰属住居が確認されていない。

⑹８号埋甕　X29762・Y37269に位置。径約0.5m・深さ0.2mの円形埋設穴の中央に、底部を除く深鉢型土器下半が検出された。

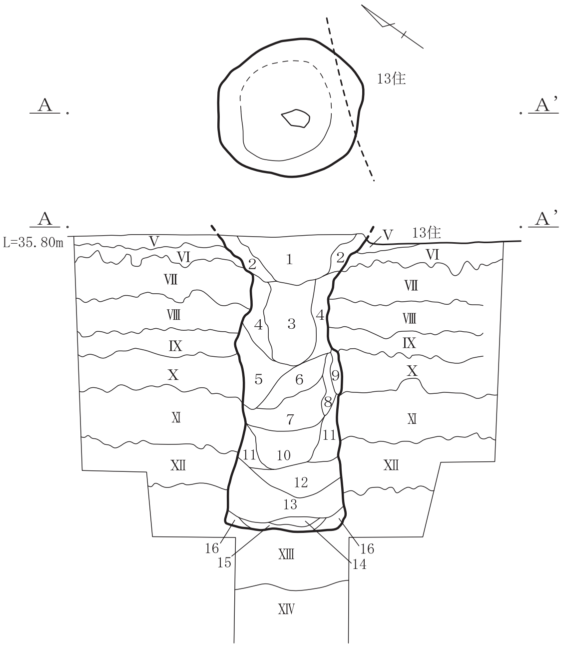
⑺９号埋甕　X29773・Y37267に位置。北西－南東方向を長軸とした、長軸長0.85m・短軸長0.5m・深さ0.5mの埋設穴中央に、深鉢型土器の口縁部から上半を埋設したものである。



14号土坑
1　橙褐色土　焼土ブロックを含む。
2　褐色土　少量の焼土ブロックを含む。
3　黄褐色土



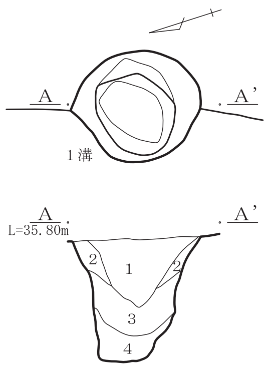
15号土坑
1　褐色土　焼土粒を含む。



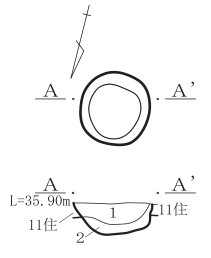
16号土坑
1　暗褐色土　炭化物を含む。加曽利E式土器片多量に混入。
2　にぶい黄褐色土　壁崩落土
3　暗褐色土　炭化物・加曽利E式土器片を混入。
4　暗褐色土　壁崩落土
5　にぶい黄褐色土　壁崩落土
6　暗褐色土　炭化物・焼土を含む。
7　黒褐色土　炭化物大粒・焼土を含む。
8　暗褐色土　壁崩落土
9　褐色土　壁崩落土
10　暗褐色土　炭化物大粒を含む。
11　にぶい黄褐色土　壁崩落土
12　にぶい黄褐色土　炭化物を含む。
13　灰黄褐色土　多量の炭化物を含む。灰色化粘質土
14　黒褐色土　炭化物を含む。
15　灰黄褐色土　炭化物を含む。青灰色化粘質土
16　灰黄褐色土　炭化物を含む。青灰色化粘質土

0　1:60　2m

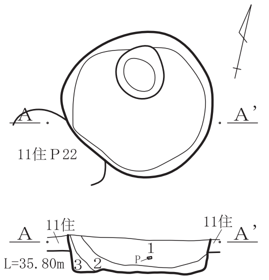
第24図　14号～16号土坑　平・断面図



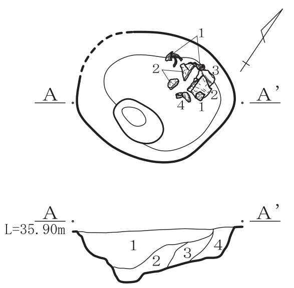
17号土坑
1　黒色土
2　黄褐色土　壁崩落土
3　暗褐色土
4　黄褐色土



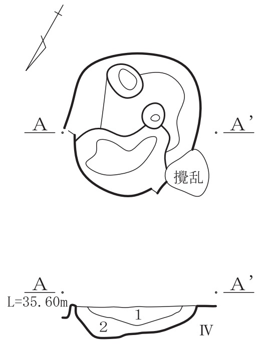
19号土坑
1　暗褐色土　焼土を含む。
2　黄褐色土



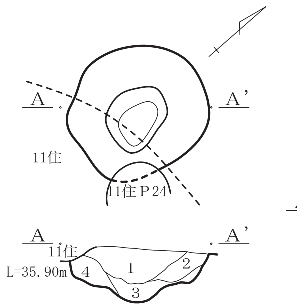
20号土坑
1　暗褐色土　炭化物を含む
2　褐色土　炭化物を含む。
3　褐色土



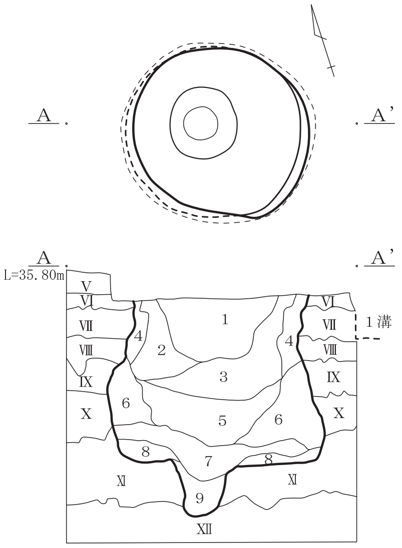
22号土坑
1　赤褐色土　焼土・炭化物を含む。
2　赤褐色土　焼土・炭化物を含む。
3　赤褐色土　焼土ブロックを含む。
4　暗褐色土　焼土・炭化物を含む。



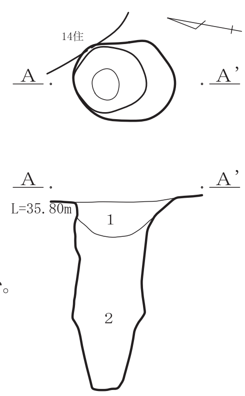
26号土坑
1　褐灰色土
2　にぶい黄褐色土



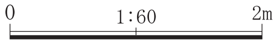
24号土坑
1　暗褐色土　炭化物を含む。
2　暗褐色土　炭化物を少量含む。
3　にぶい黄褐色土　炭化物を含む。
4　にぶい黄褐色土



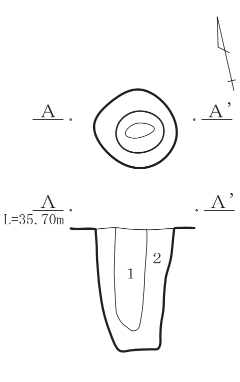
23号土坑
1　にぶい黄褐色土　焼土・炭化物を含む。
2　暗褐色土　焼土・炭化物を含む。
3　暗褐色土　焼土・炭化物を含む。
4　にぶい黄褐色土　壁崩落土
5　暗褐色土　炭化物を含む。
6　にぶい黄褐色土　壁崩落土
7　灰黄褐色土　灰色粘質土。
8　黒褐色土　炭化物を含む。
9　黒褐色土　炭化物多量に含む。軟質土

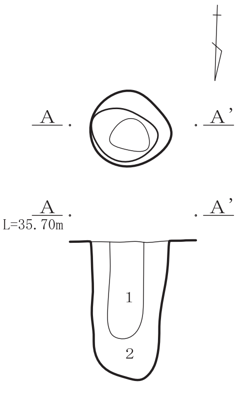


25号土坑
1　暗褐色土　炭化物を含む。
2　黒褐色土　炭化物、土器片を含む。

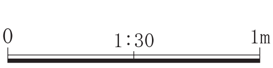


第25図　17号・19号・20号・22号～26号土坑　平・断面図

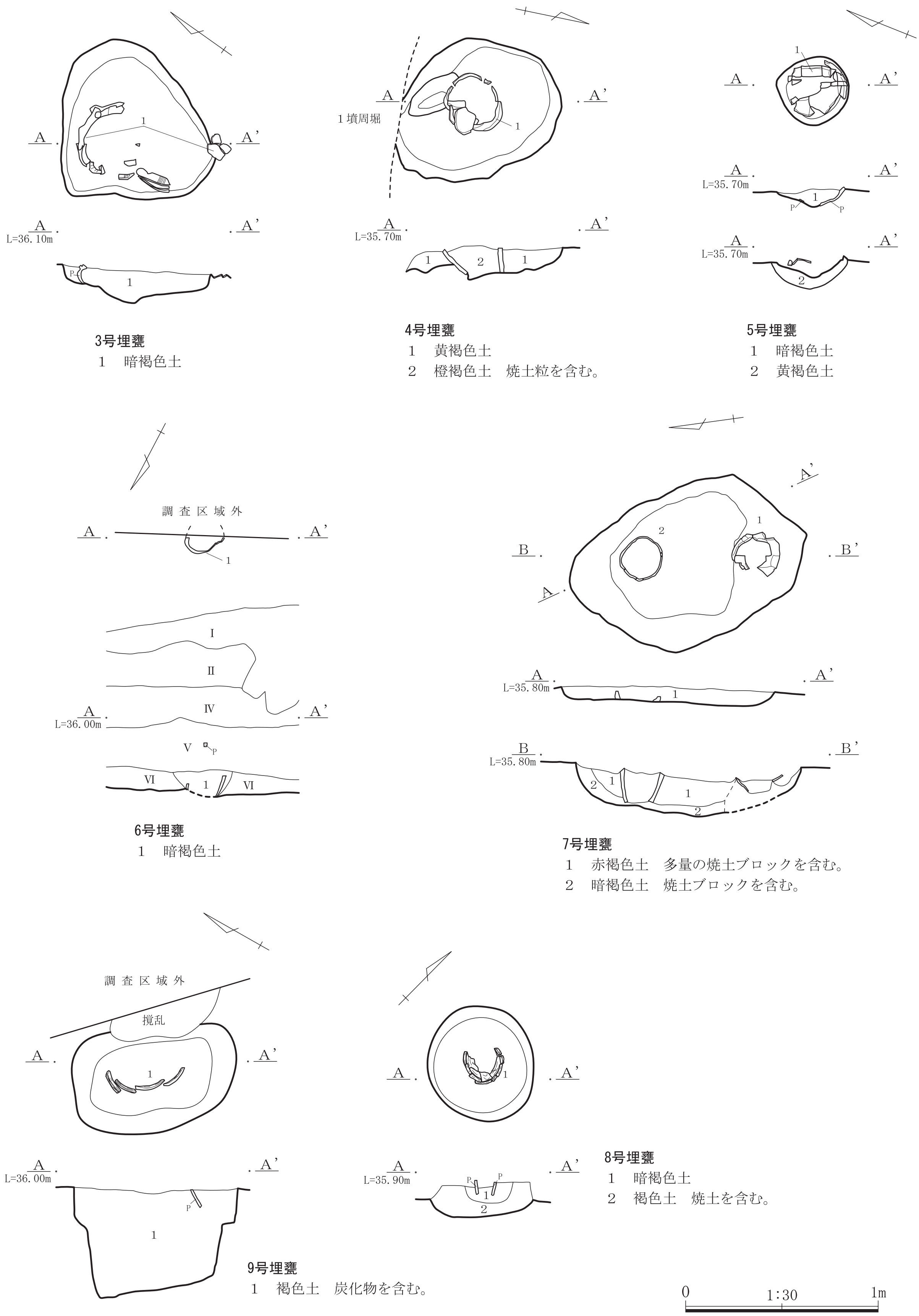




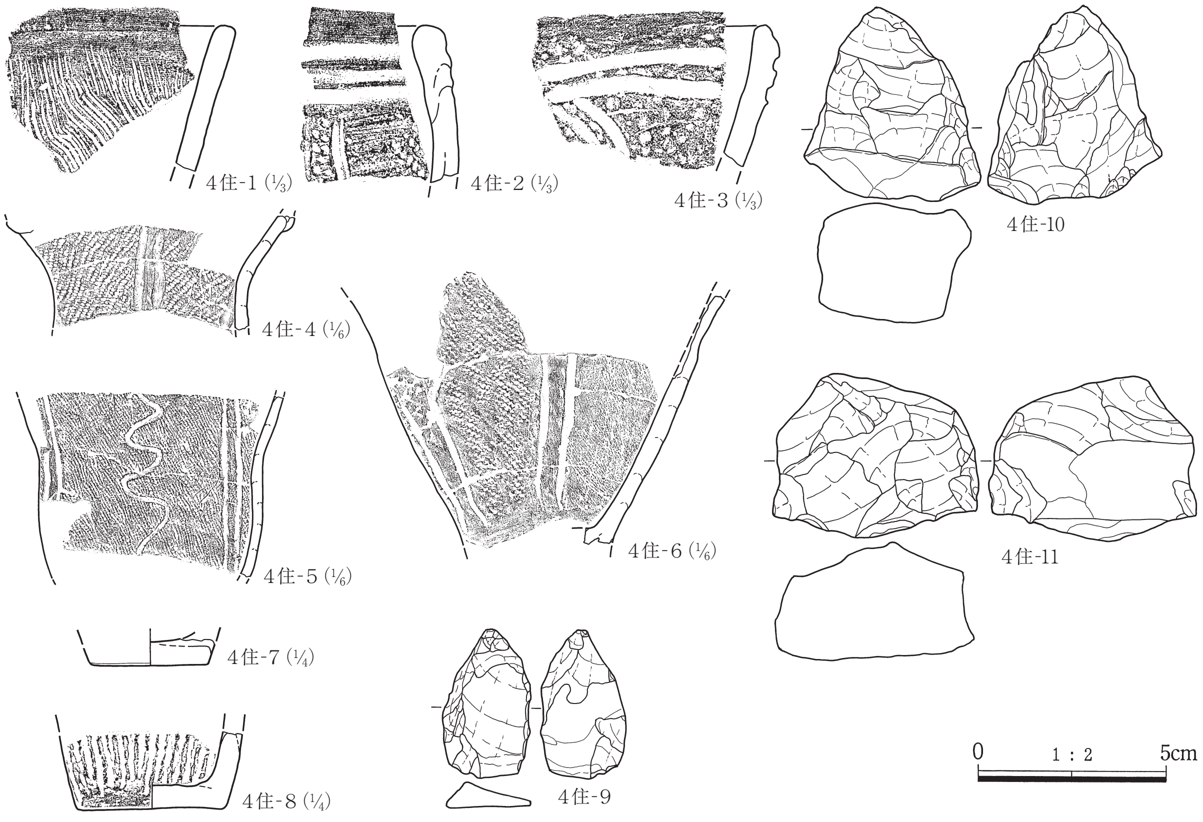
1号・2号ピット
1　黒褐色土
2　にぶい黄褐色土　ロームを含む。



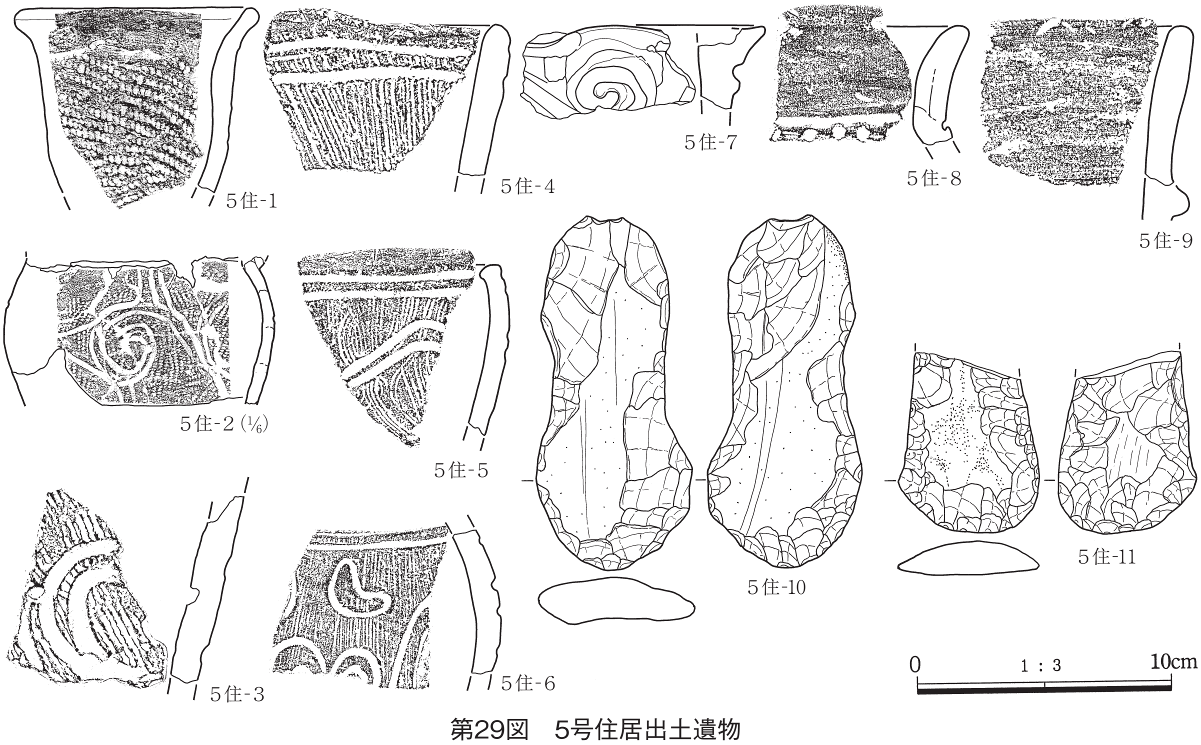
第26図　1号・2号ピット　平・断面図



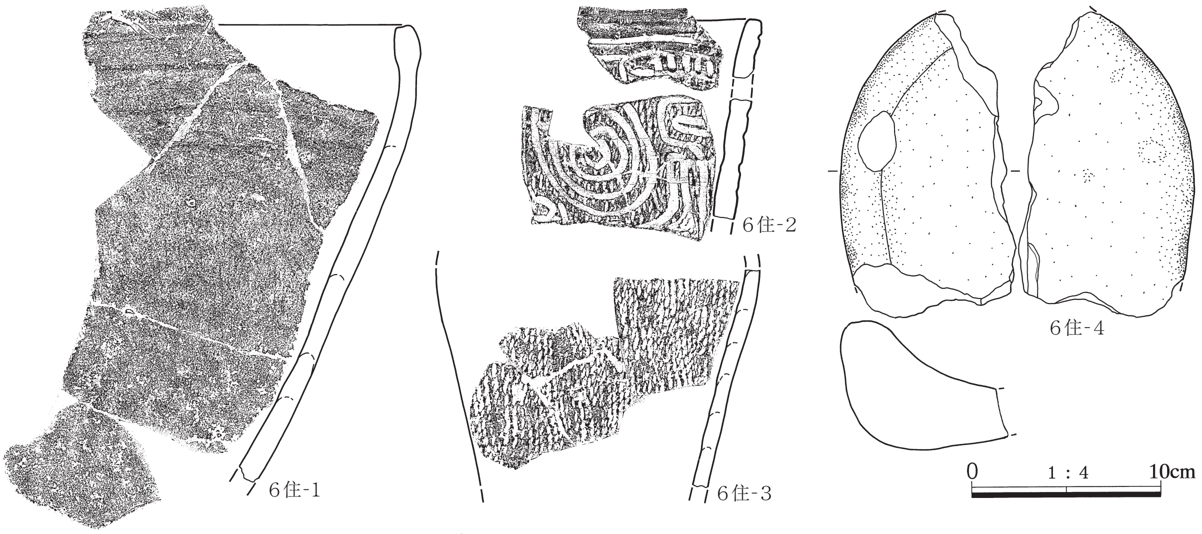
第27図　3号～9号埋甕　平・断面図



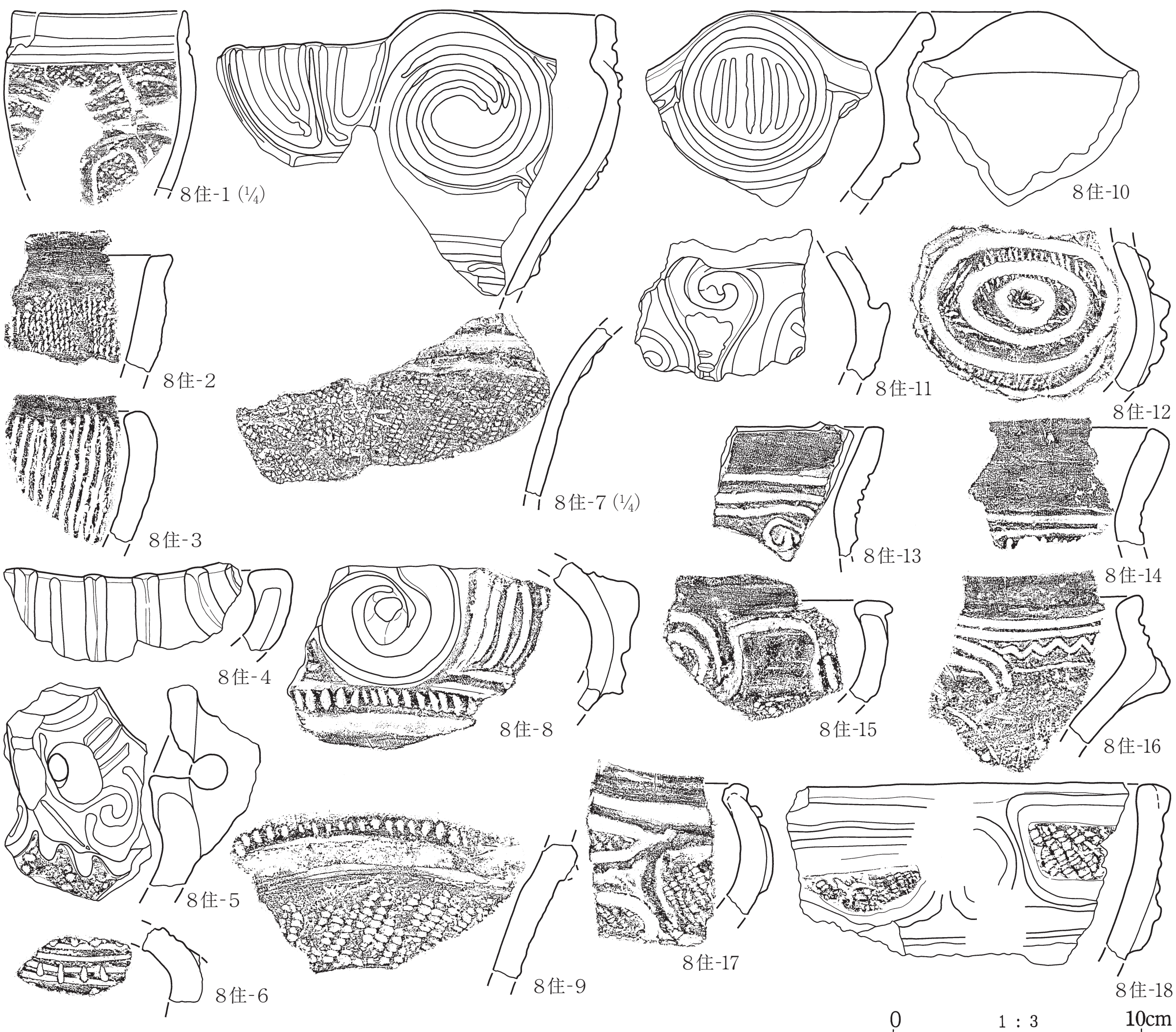
第28図　4号住居出土遺物



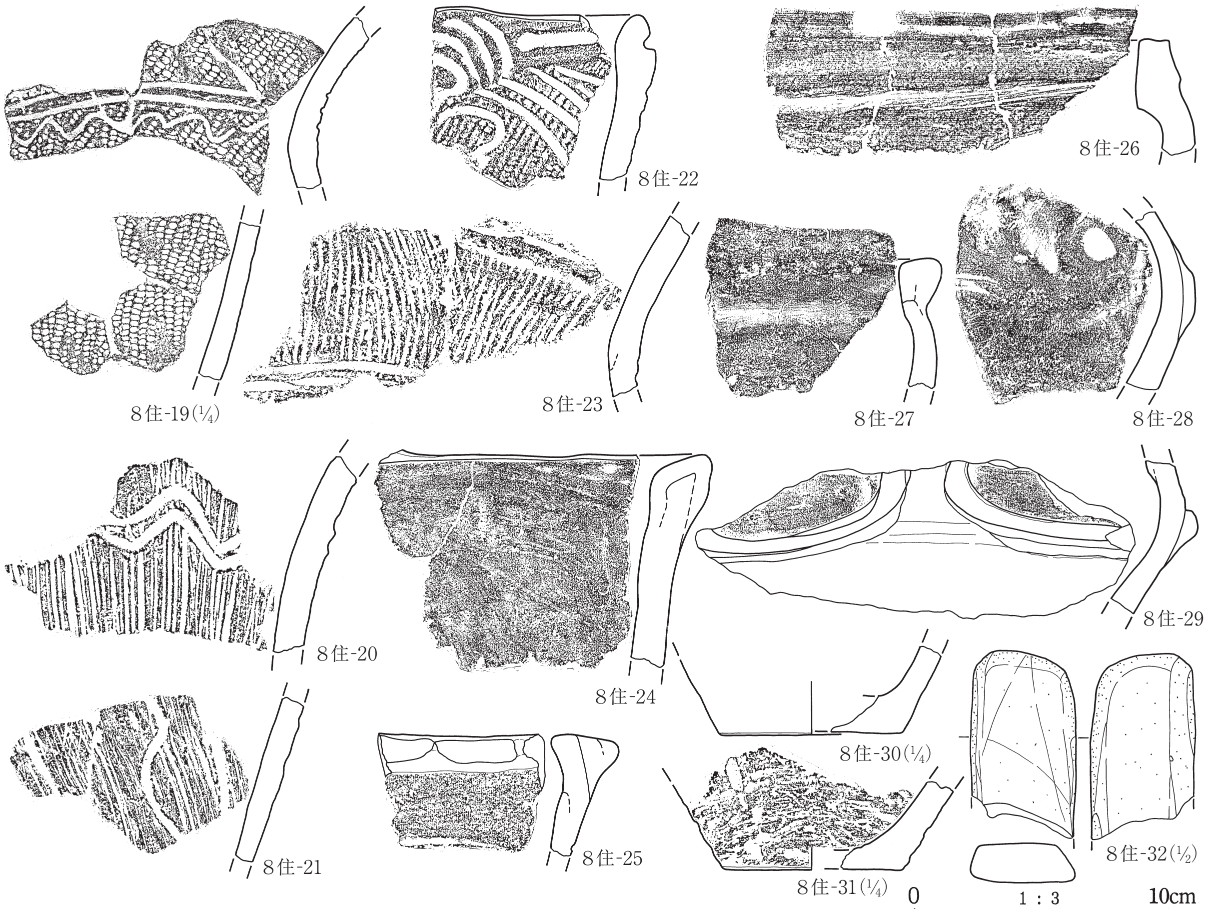
第29図　5号住居出土遺物



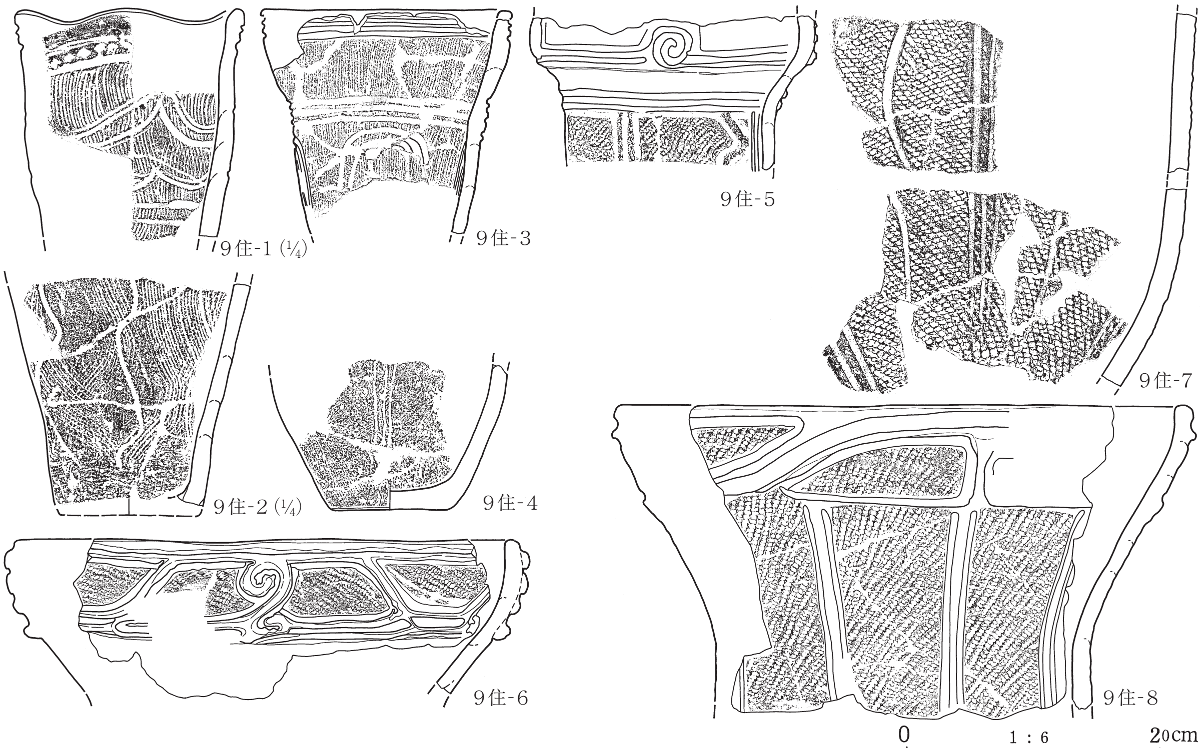
第30図　6号住居出土遺物



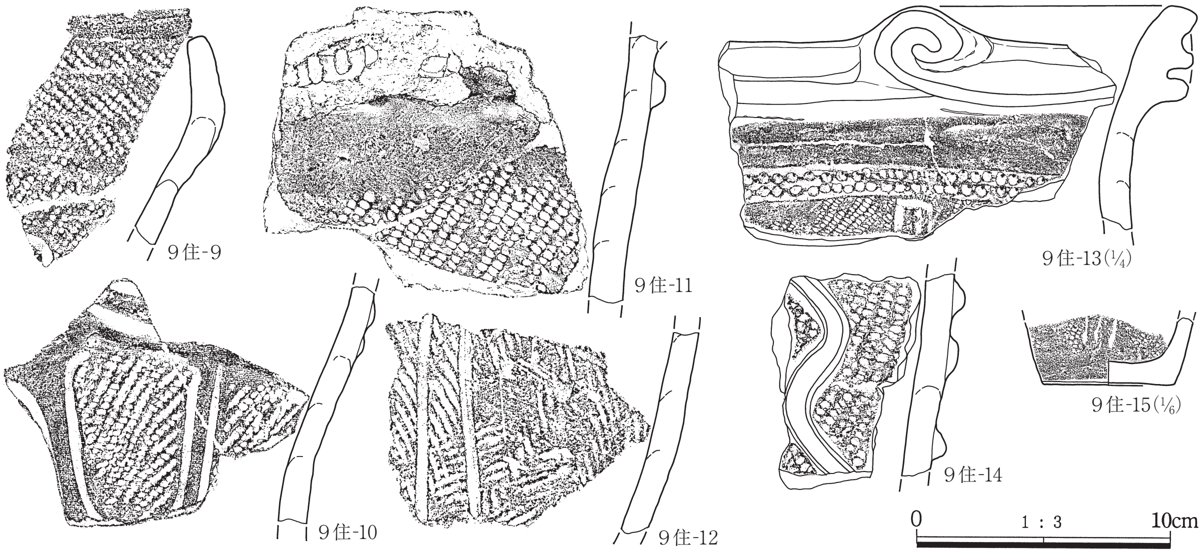
第31図　8号住居出土遺物①



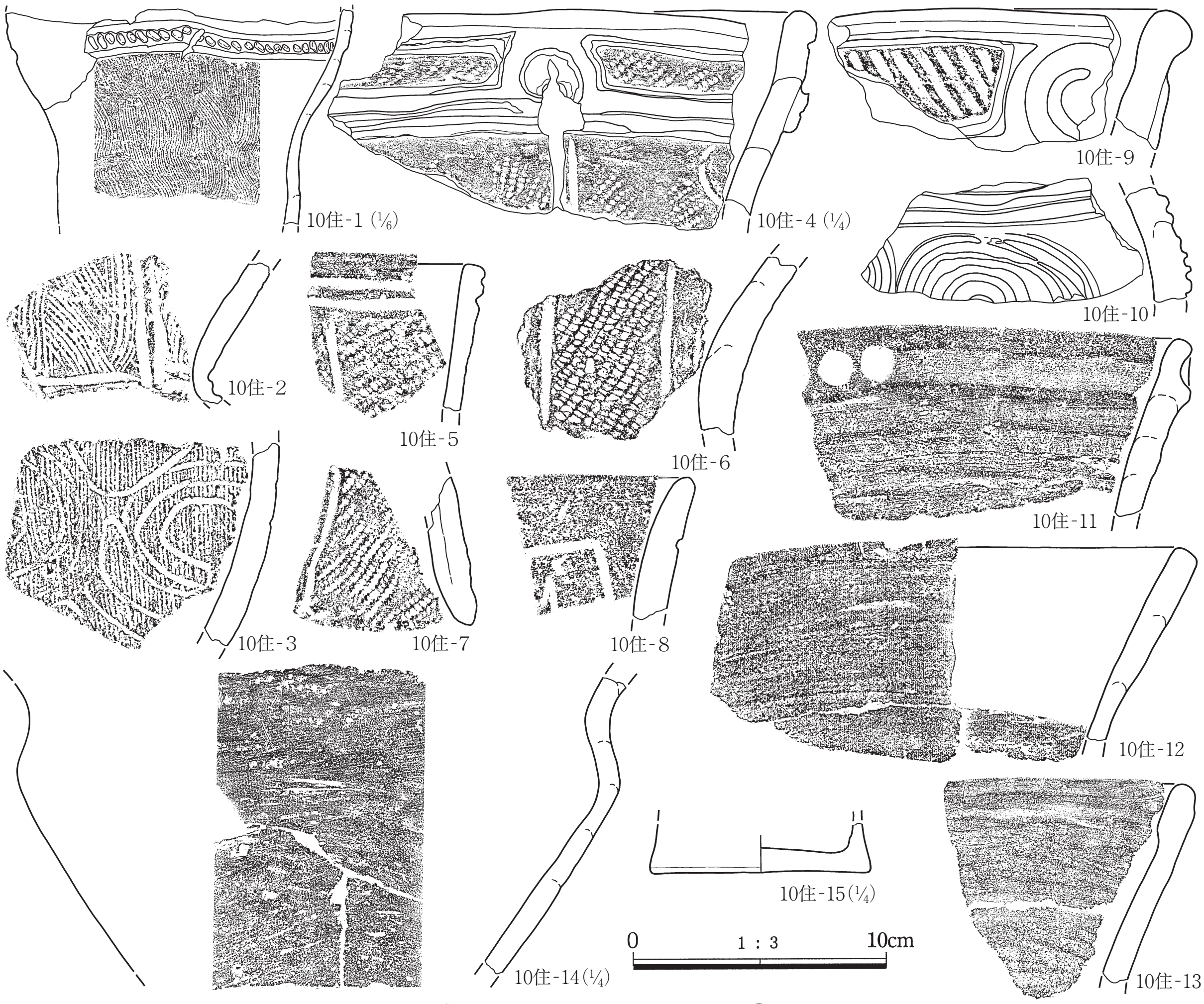
第32図　8号住居出土遺物②



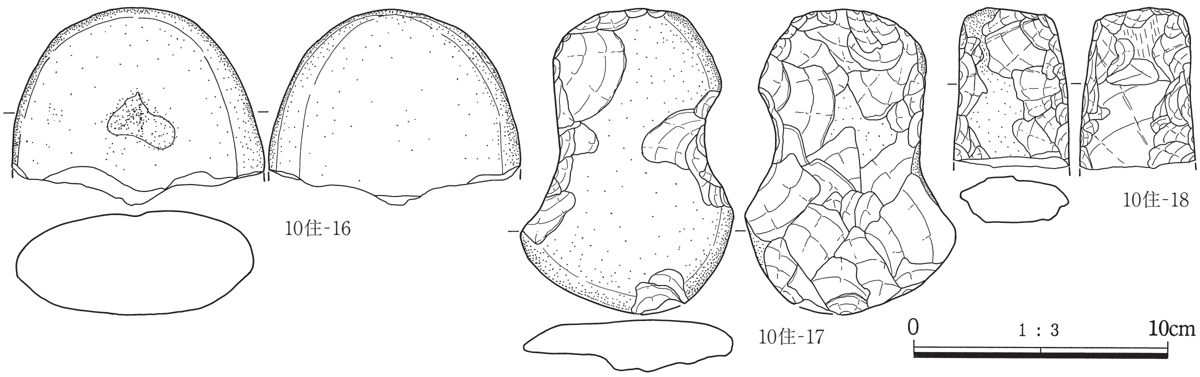
第33図　9号住居出土遺物①



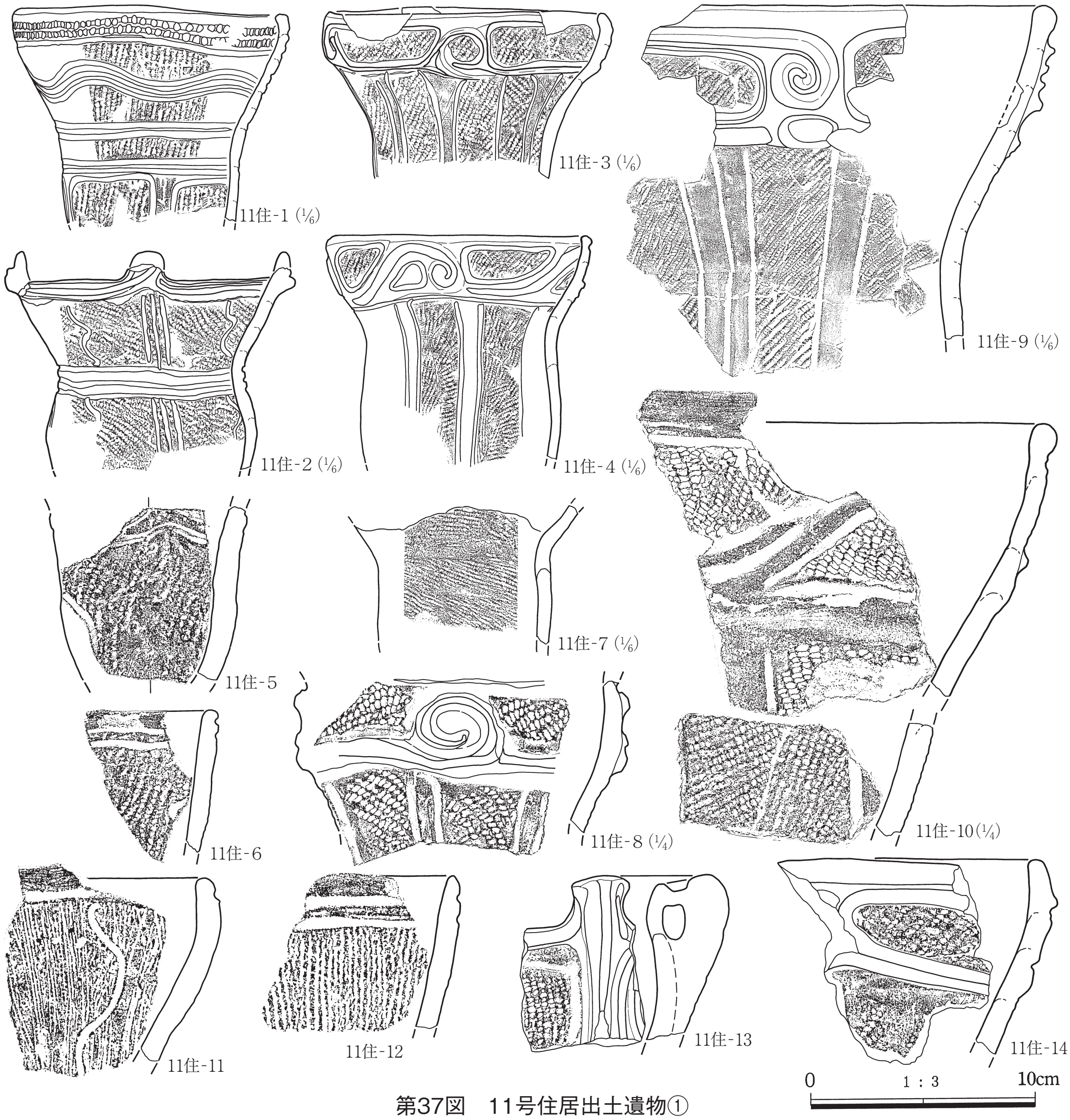
第34図　9号住居出土遺物②



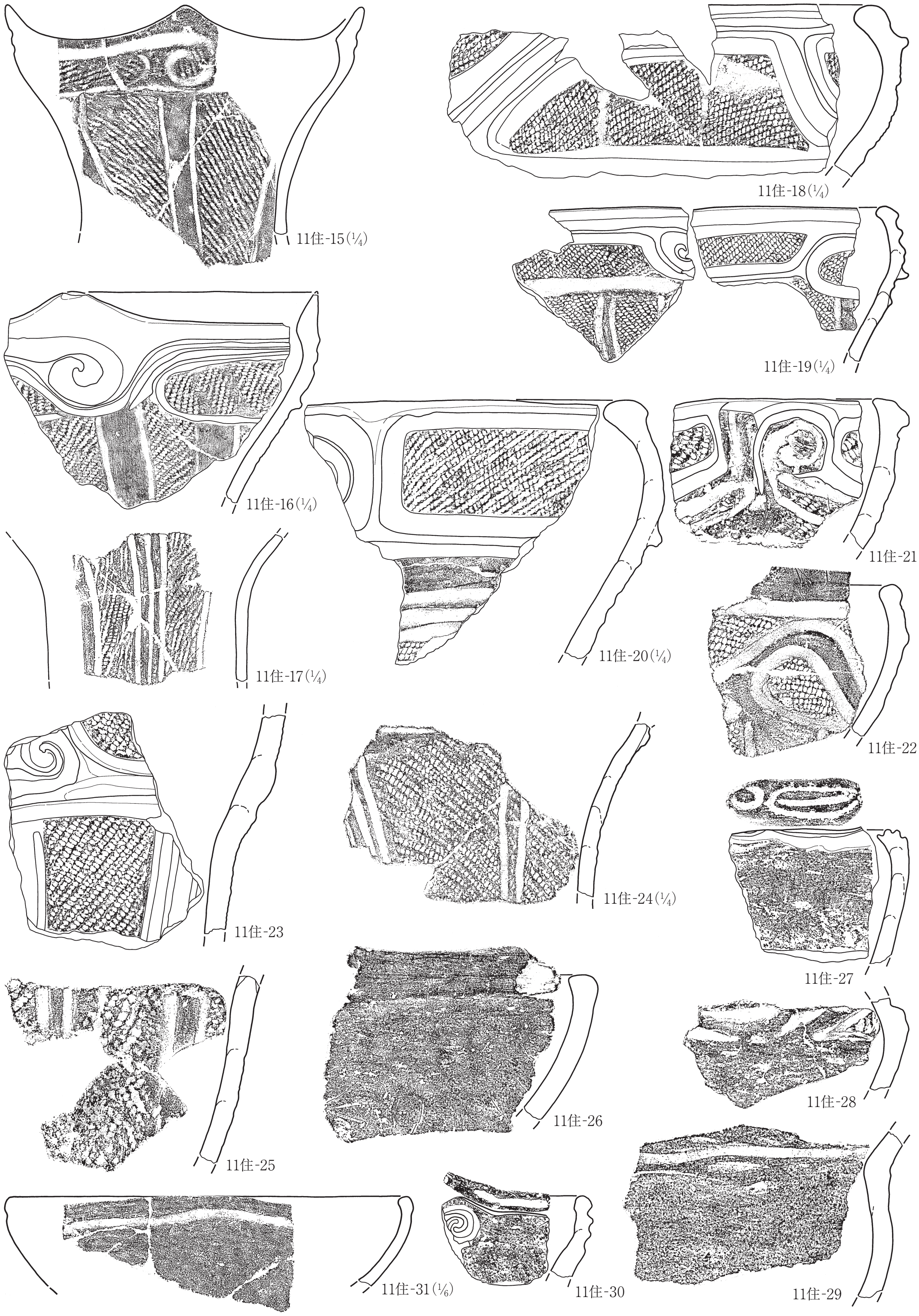
第35図　10号住居出土遺物①



第36図　10号住居出土遺物②

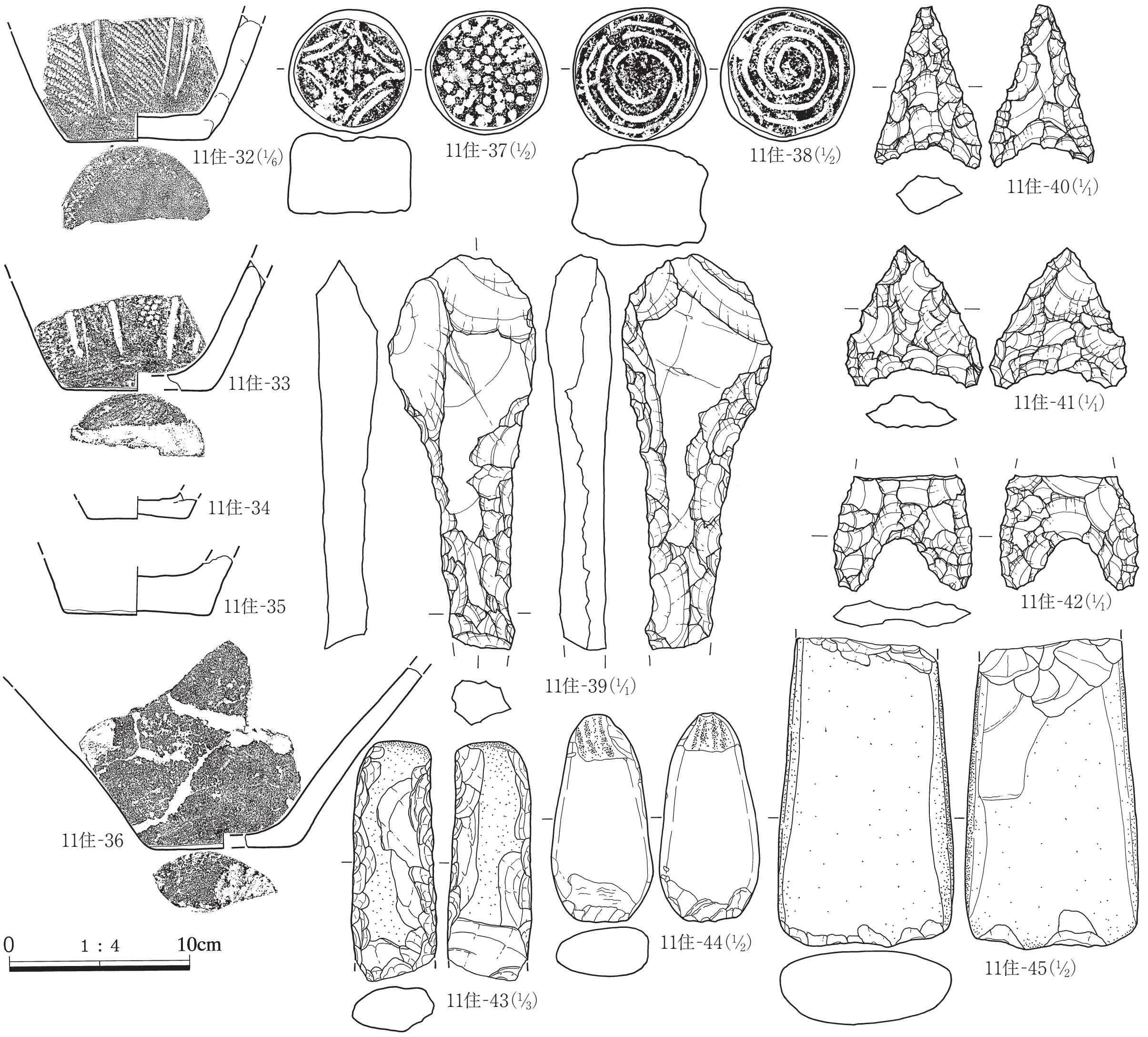


第37図　11号住居出土遺物①

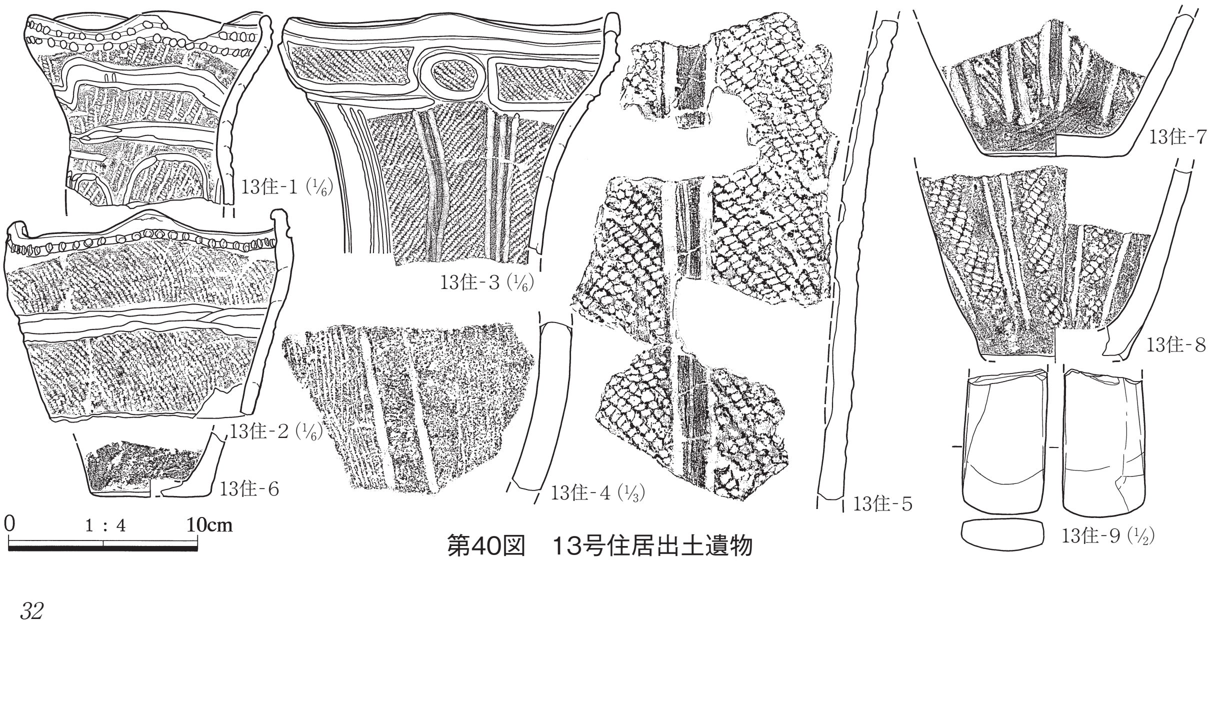


0　1：3　10cm

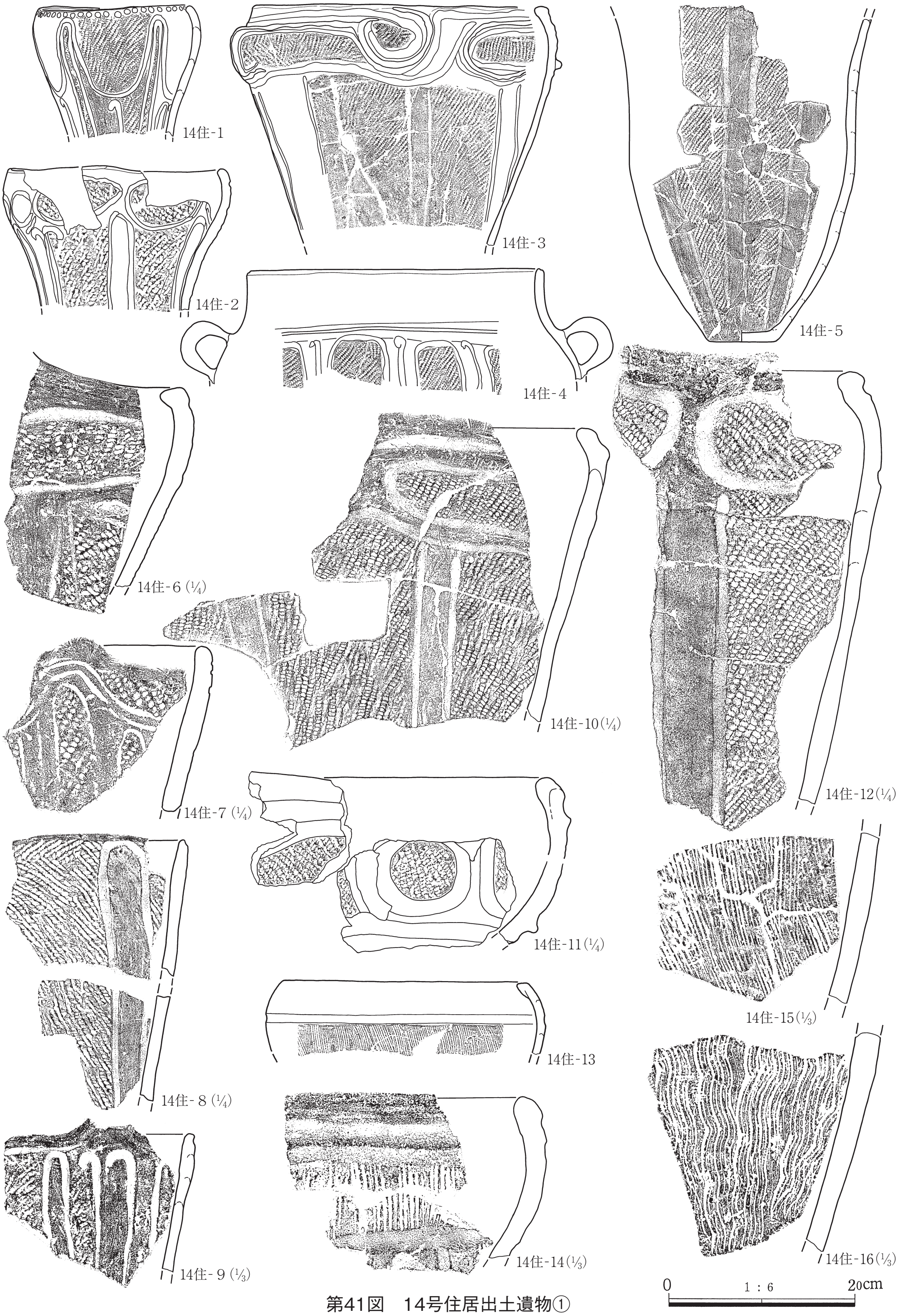
第38図　11号住居出土遺物②



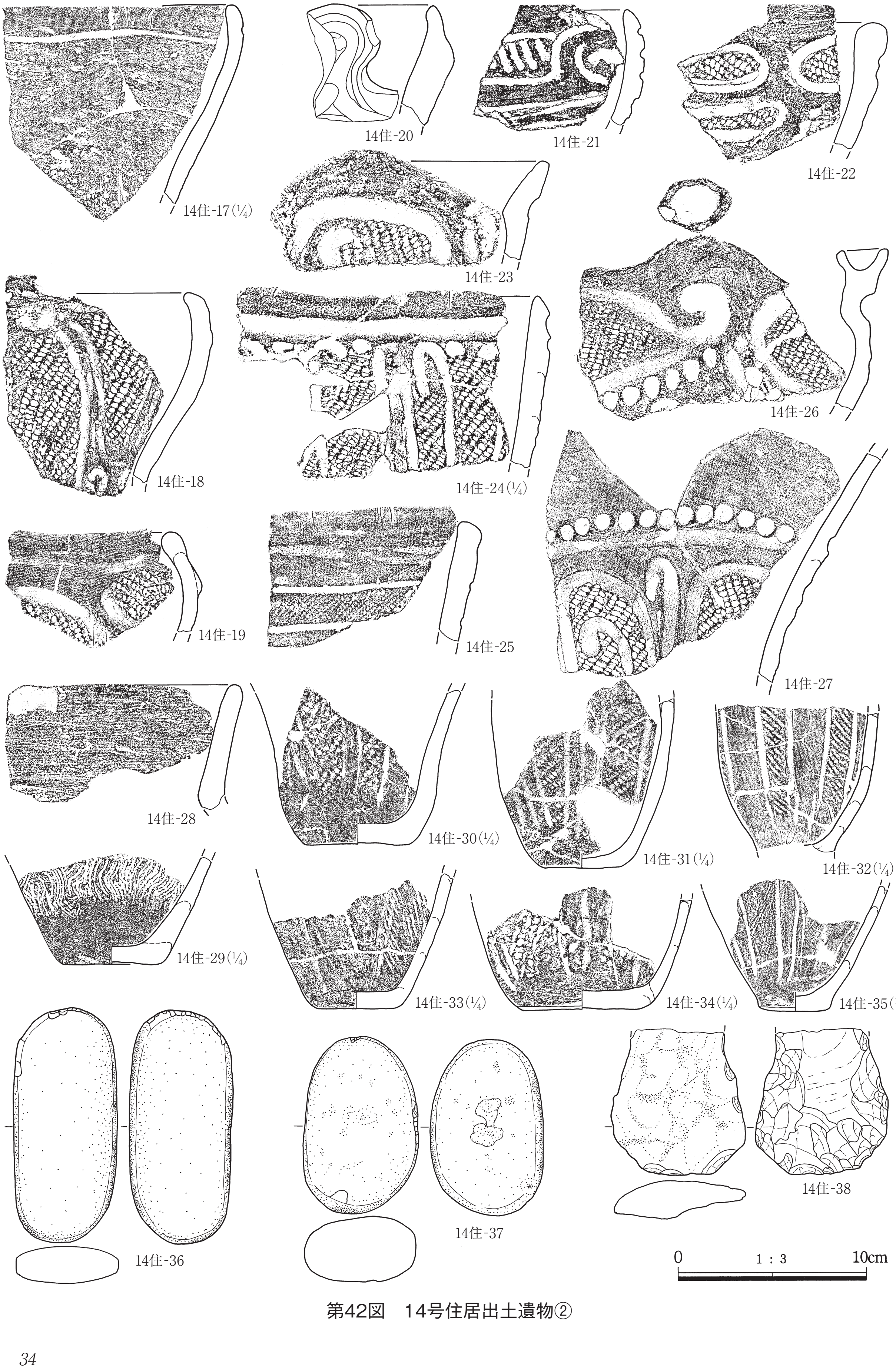
第39図　11号住居出土遺物③



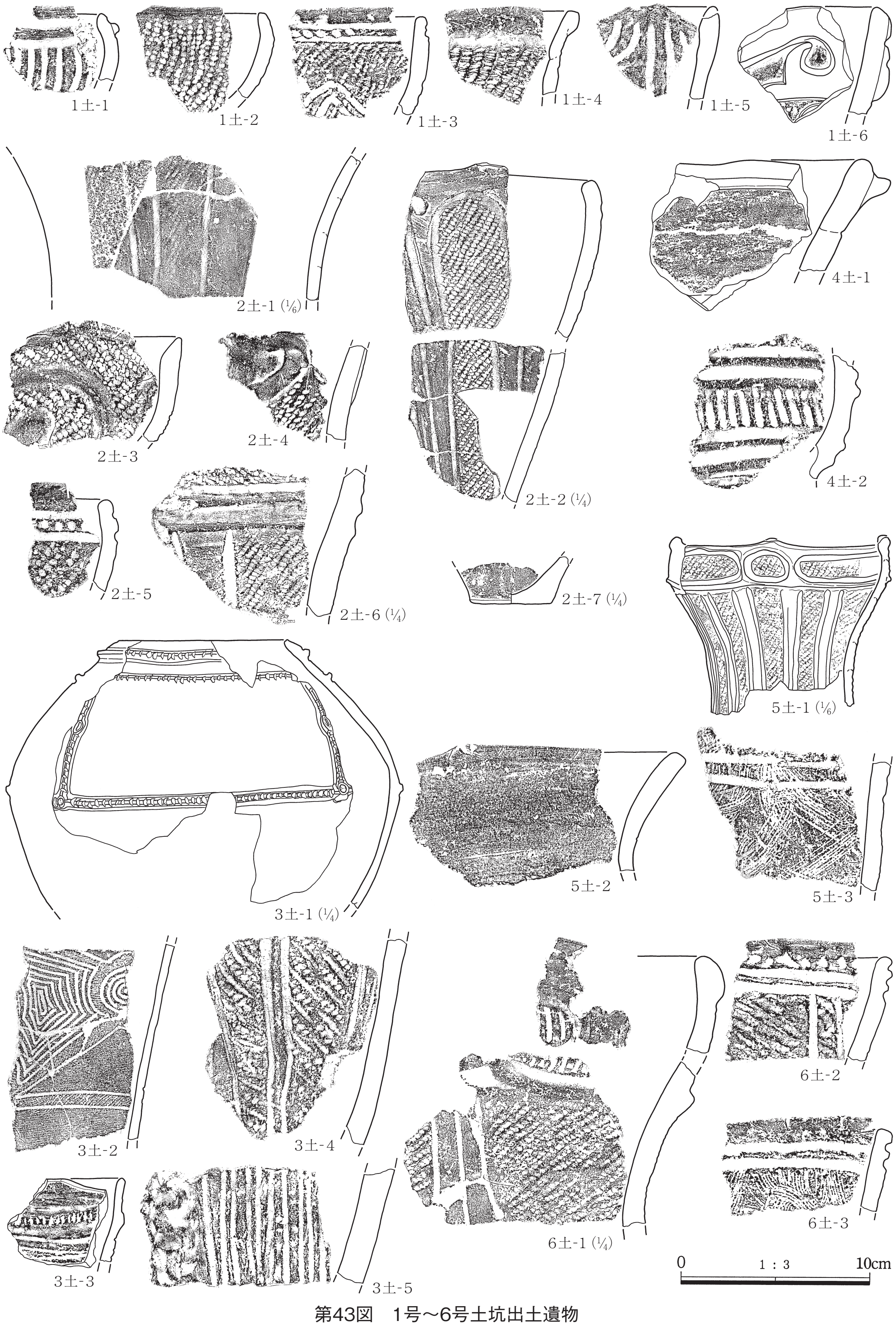
第40図　13号住居出土遺物



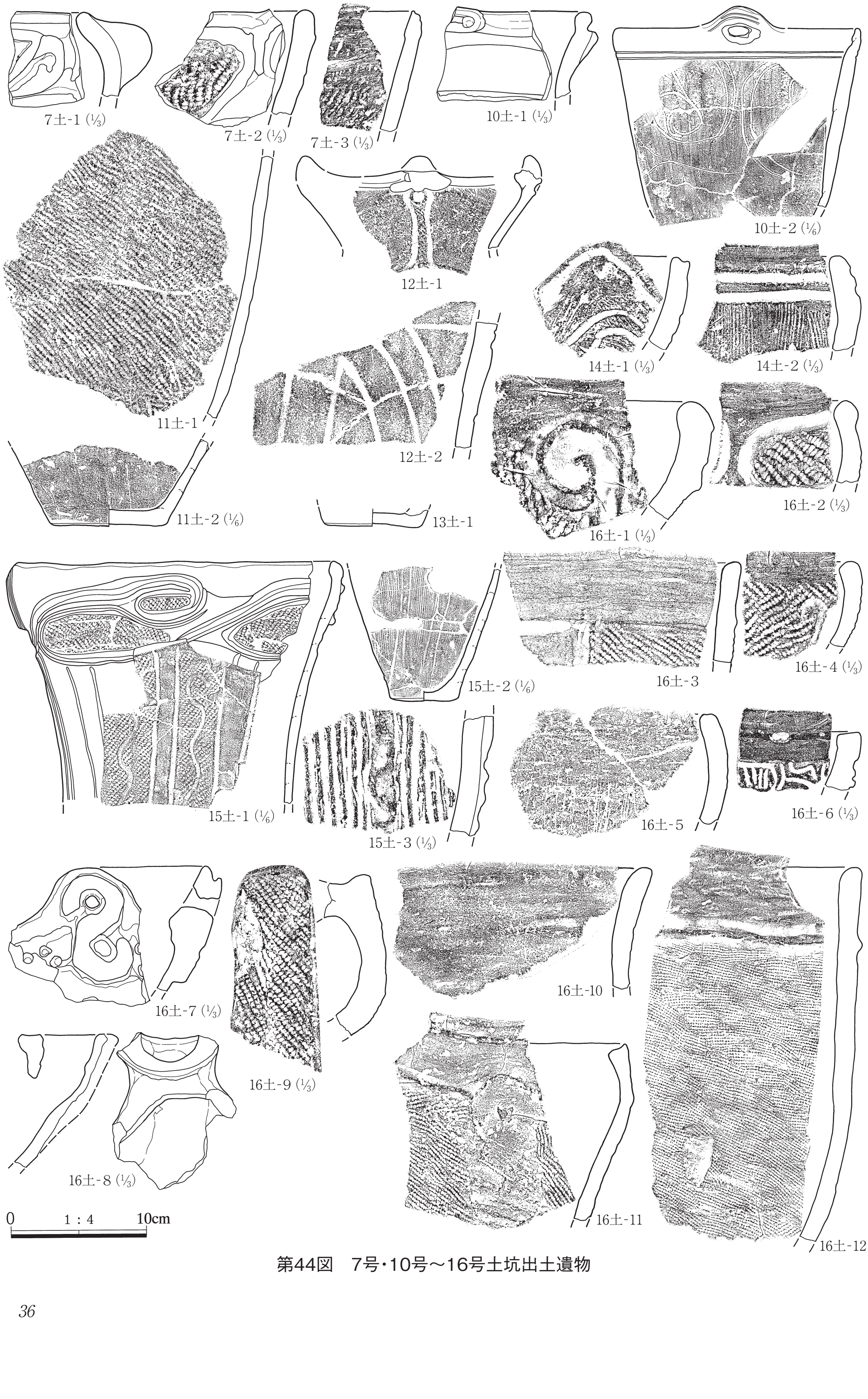
第41図　14号住居出土遺物①



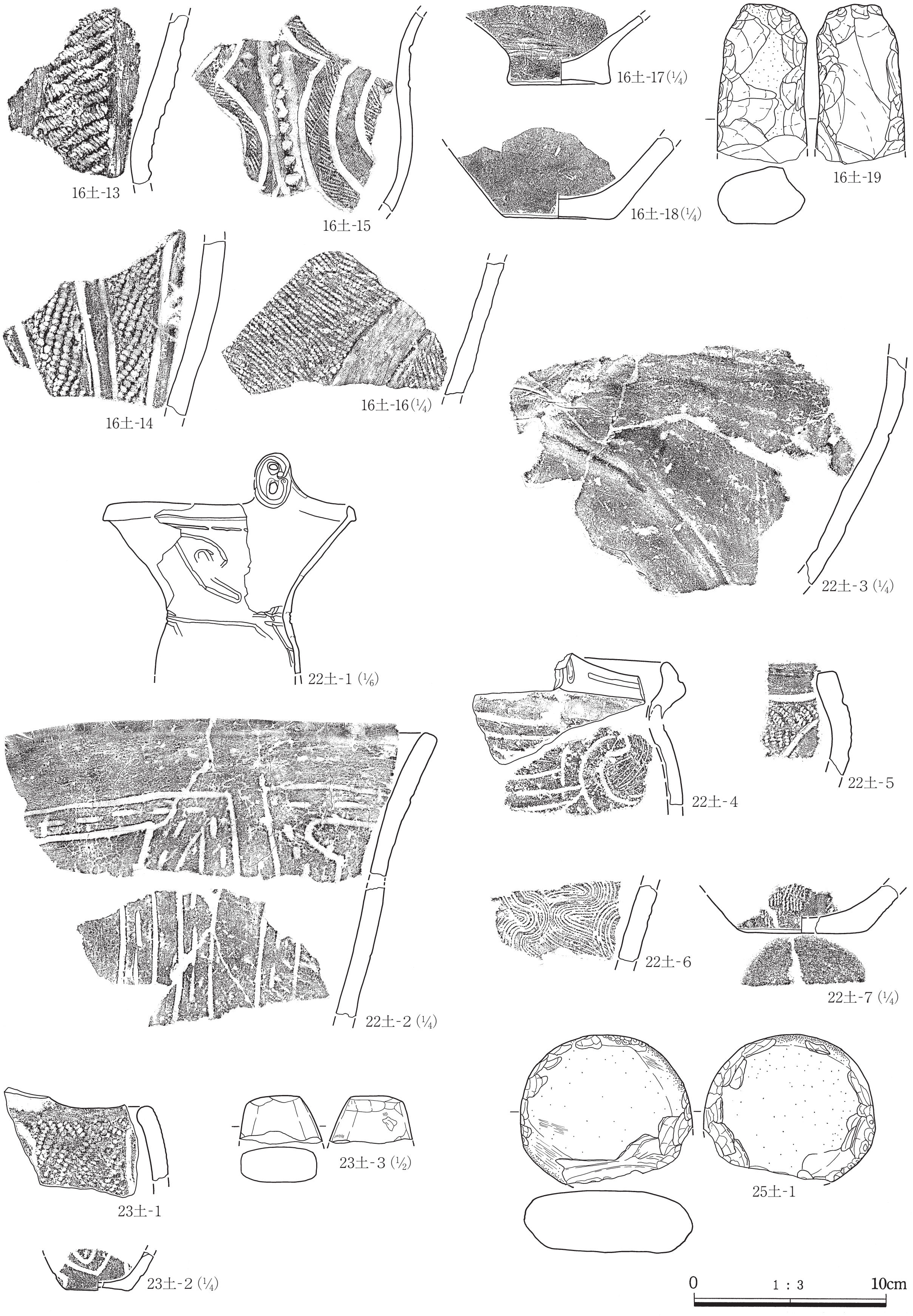
第42図　14号住居出土遺物②



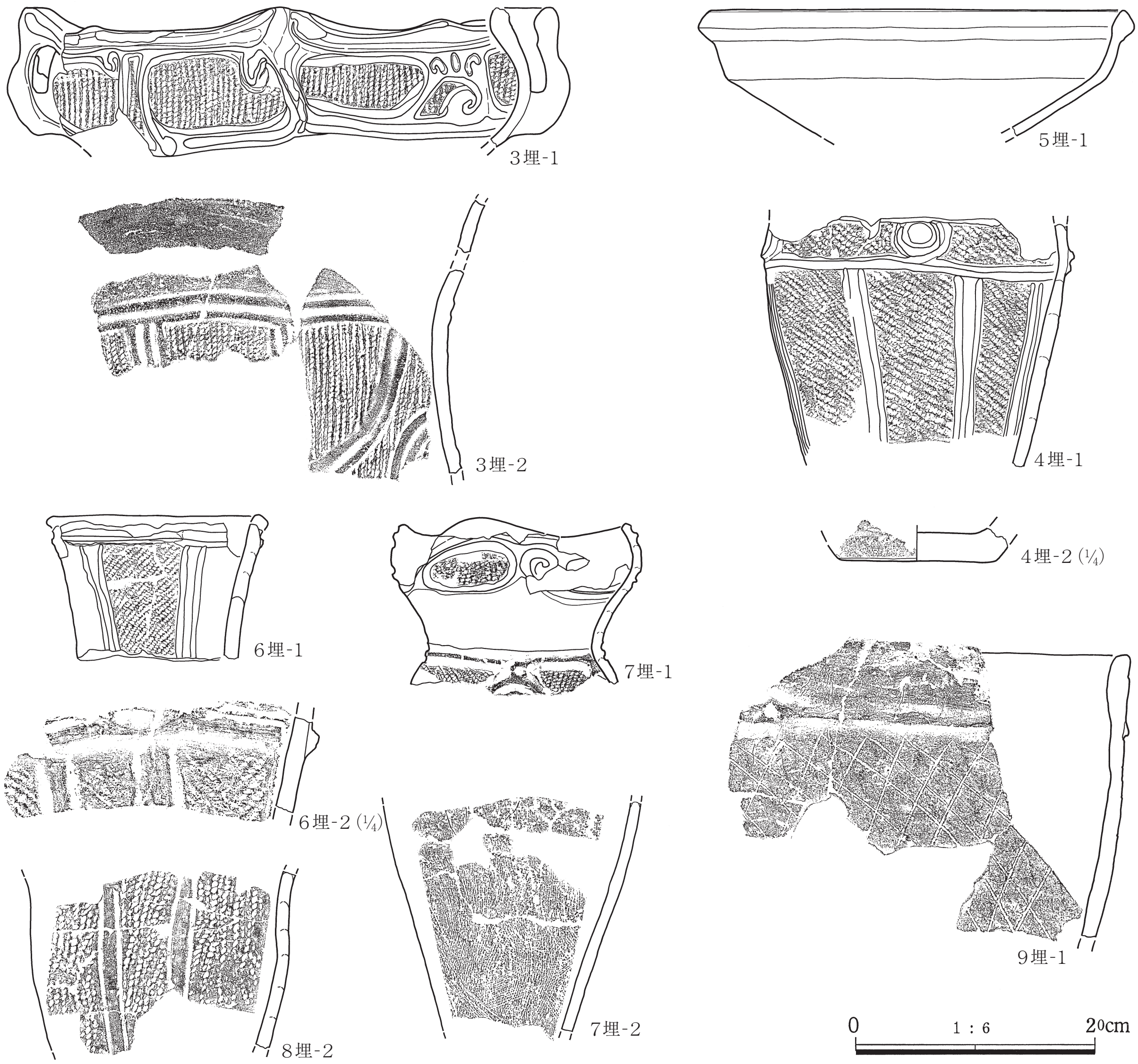
第43図　1号～6号土坑出土遺物



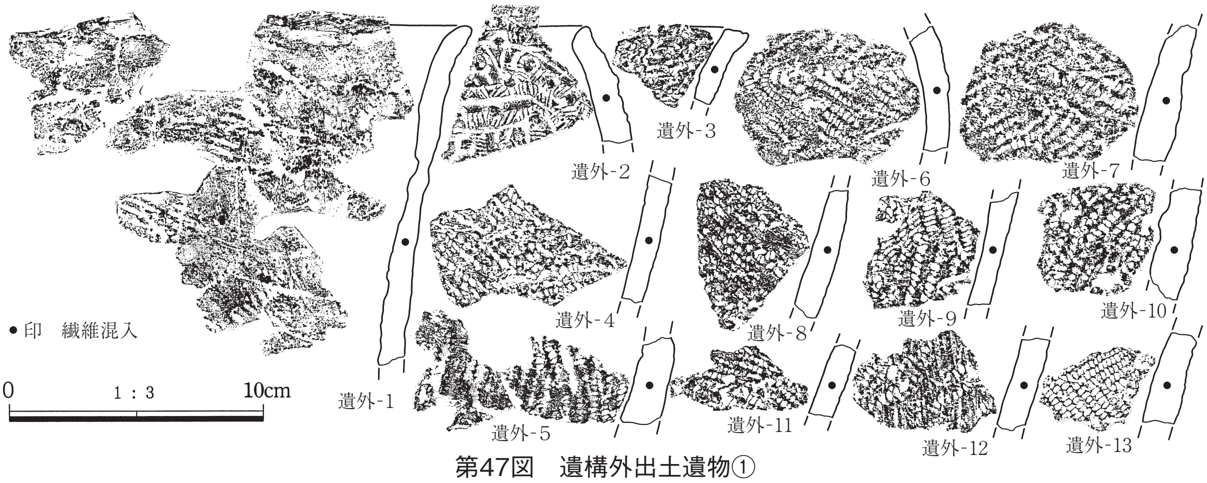
第44図　7号・10号～16号土坑出土遺物



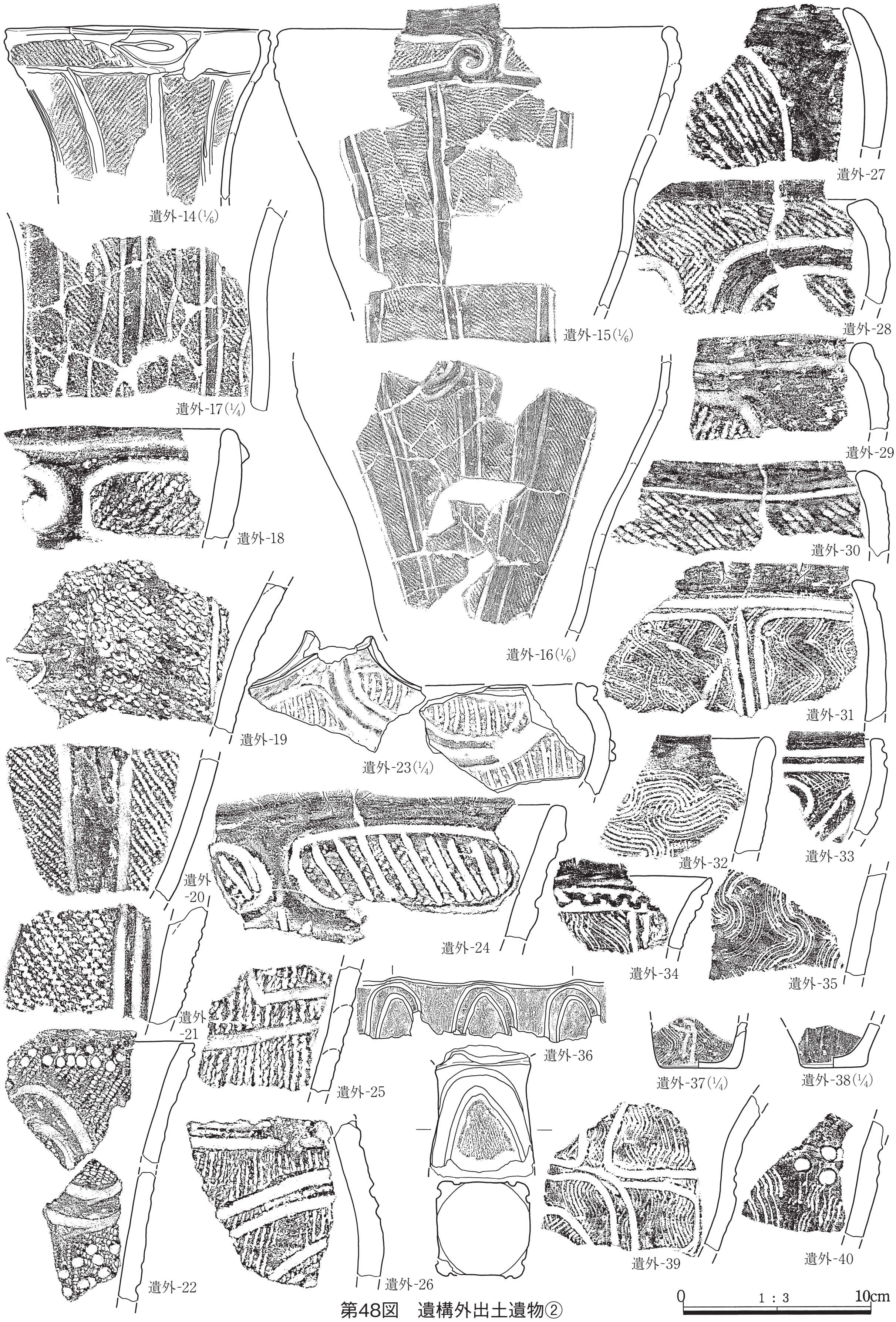
第45図　16号・22号・23号・25号土坑出土遺物



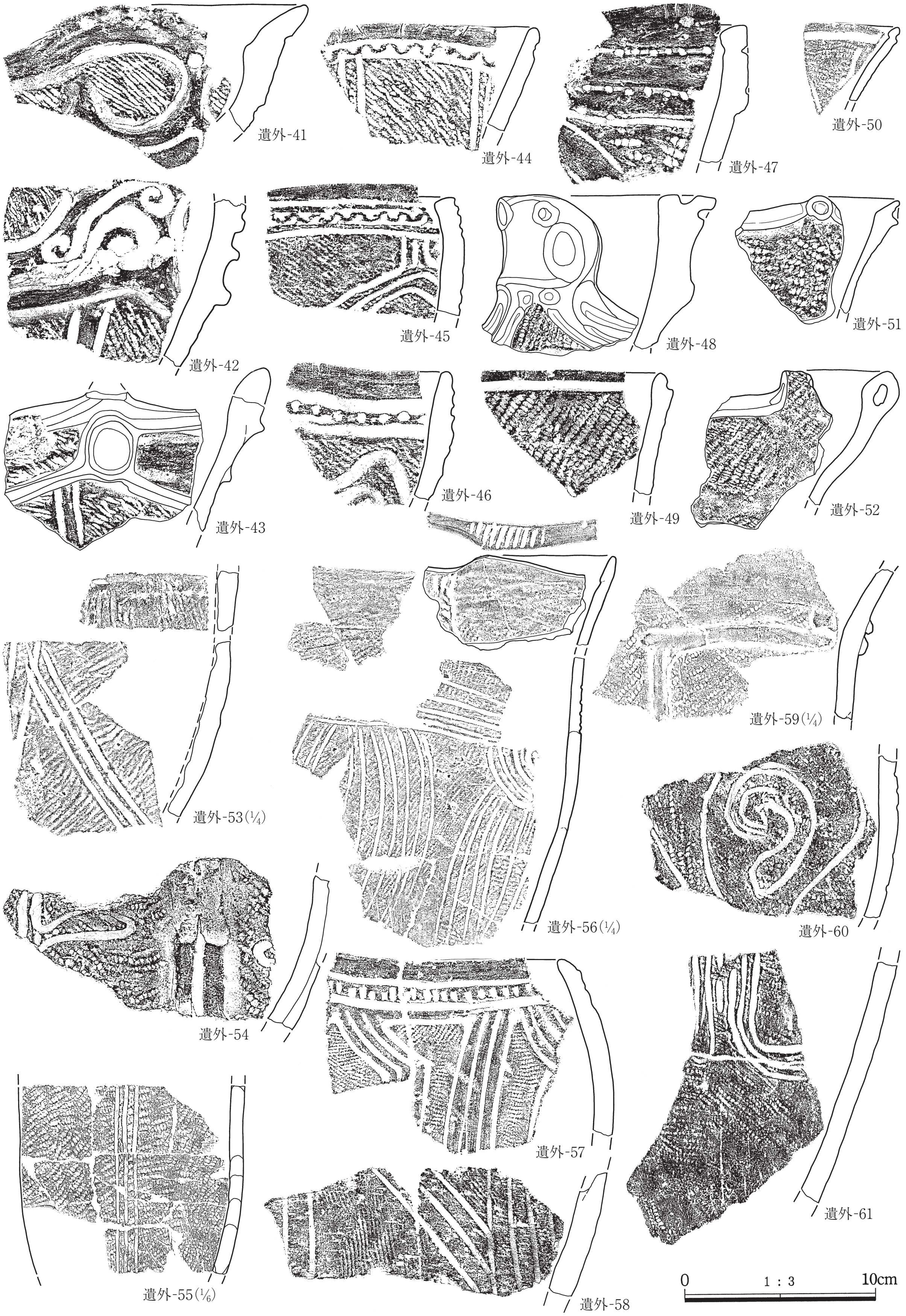
第46図　3号～9号埋甕出土遺物



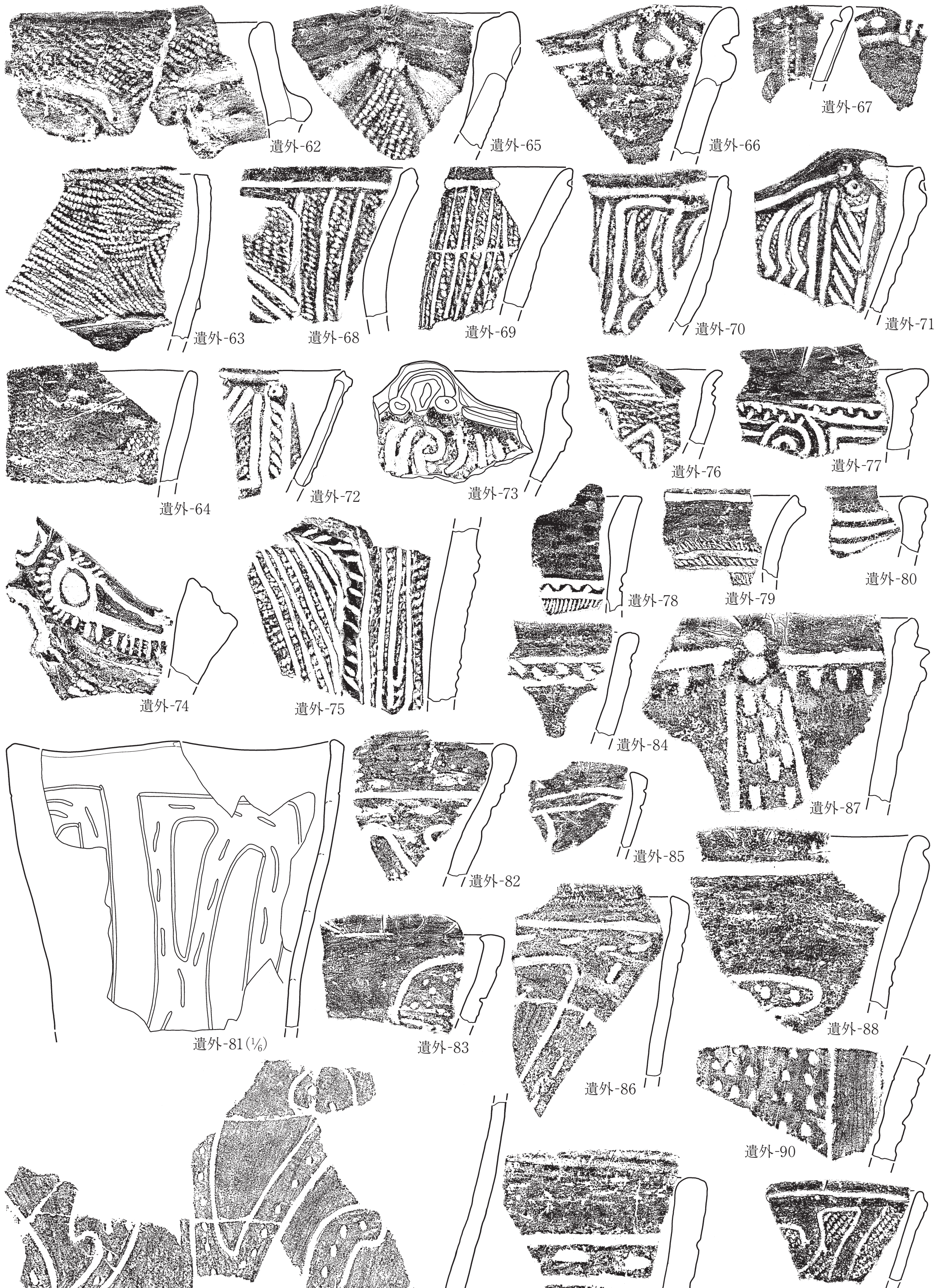
第47図　遺構外出土遺物①



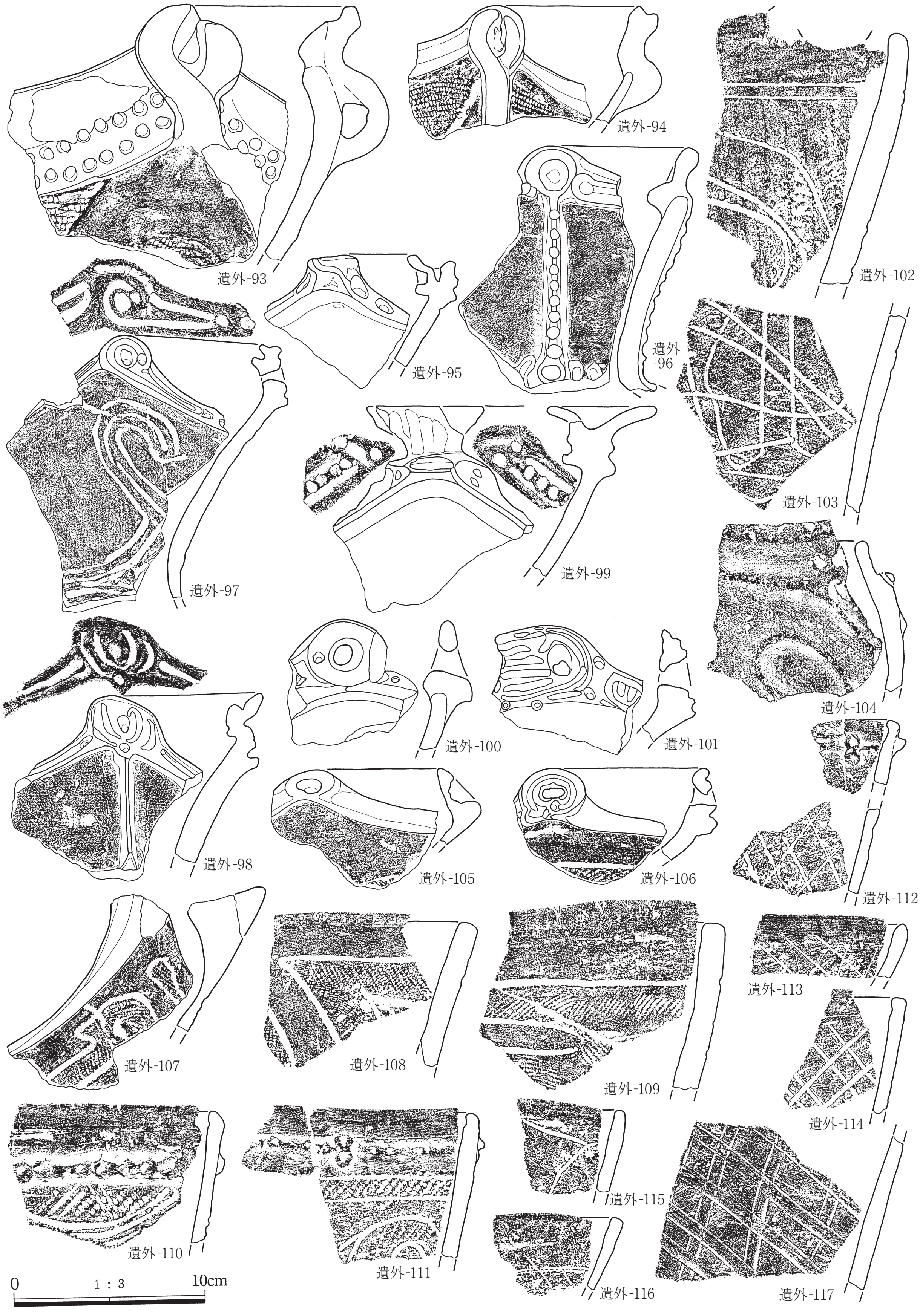
第48図　遺構外出土遺物②



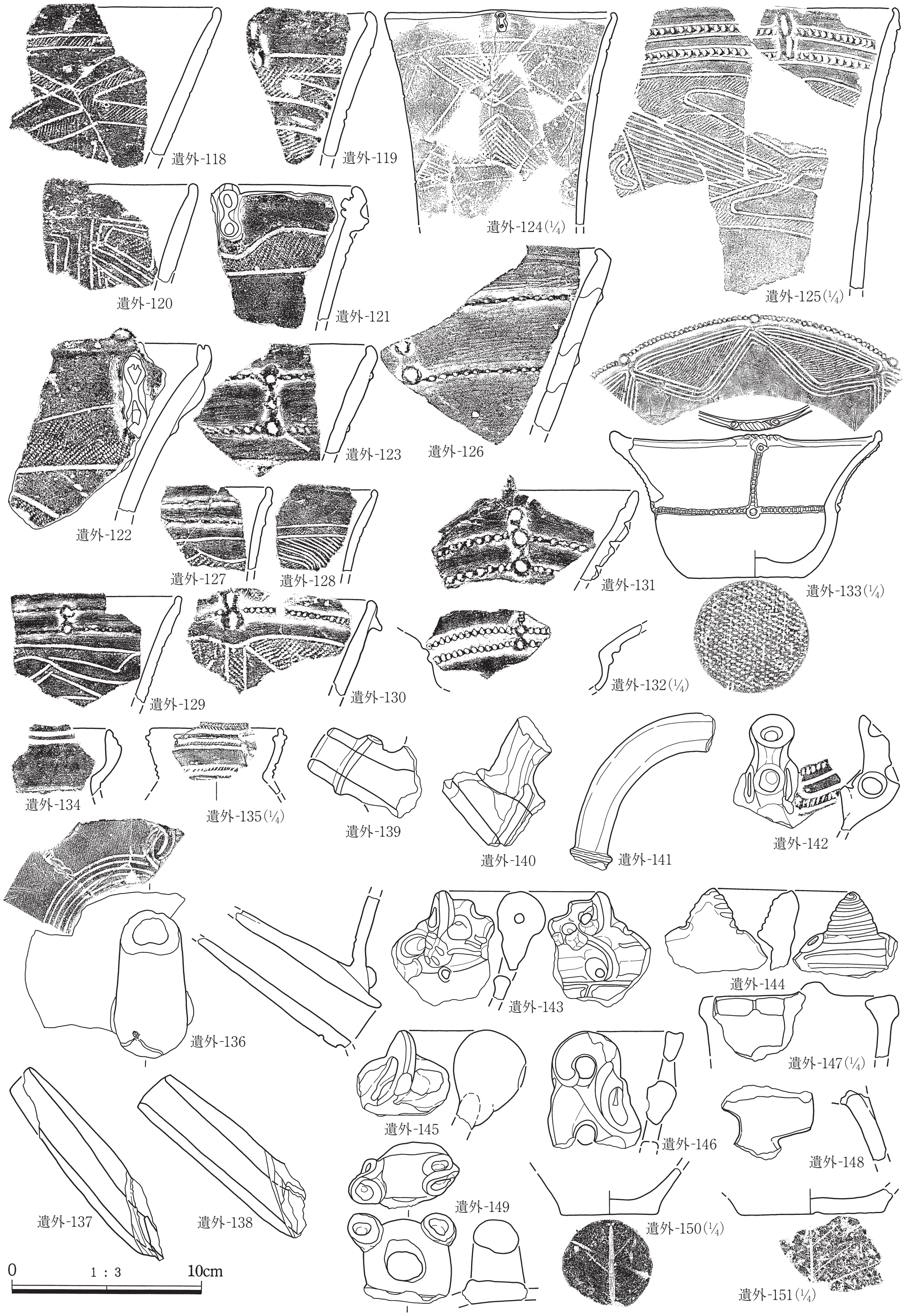
第49図　遺構外出土遺物③



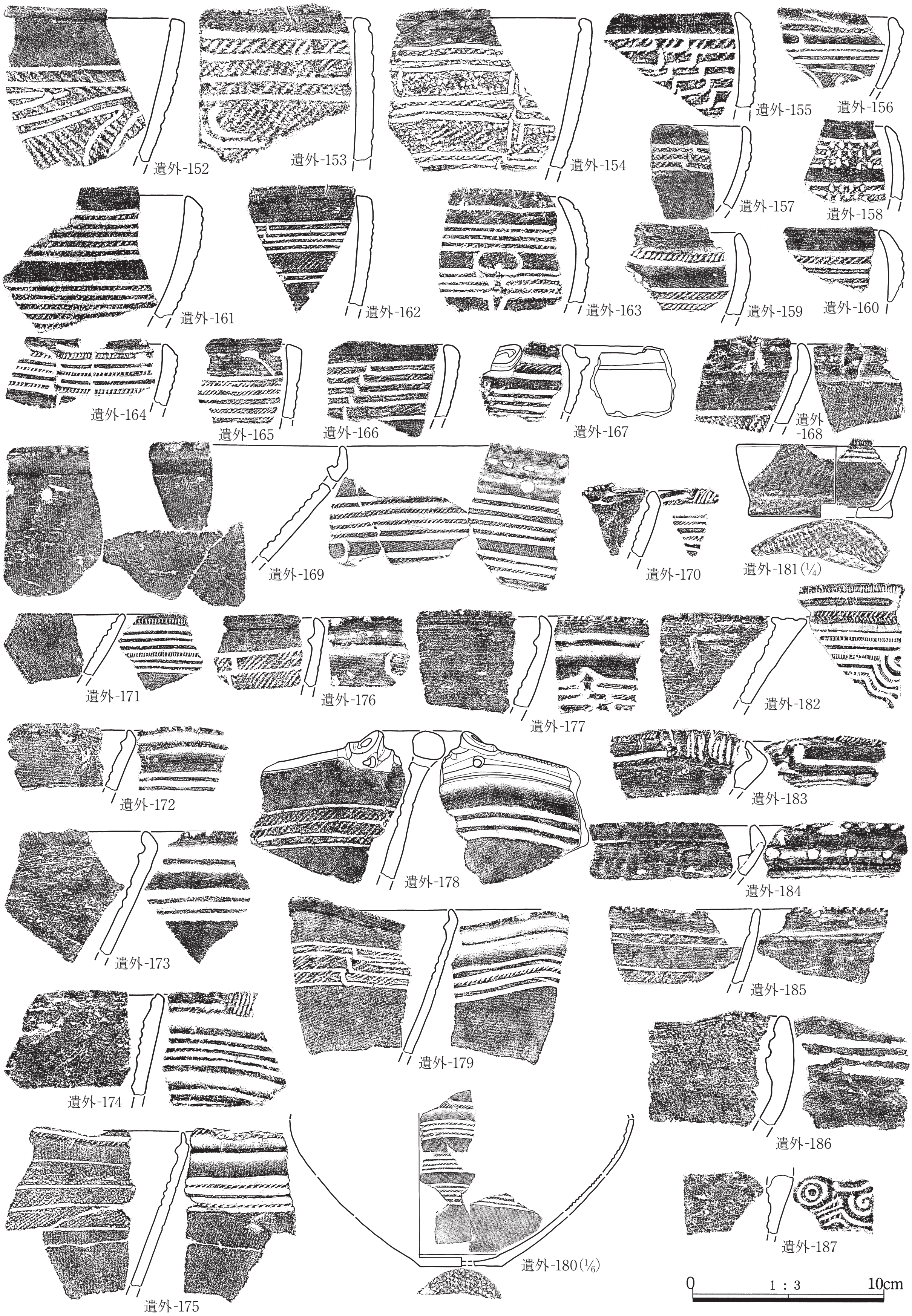
第50図　遺構外出土遺物④



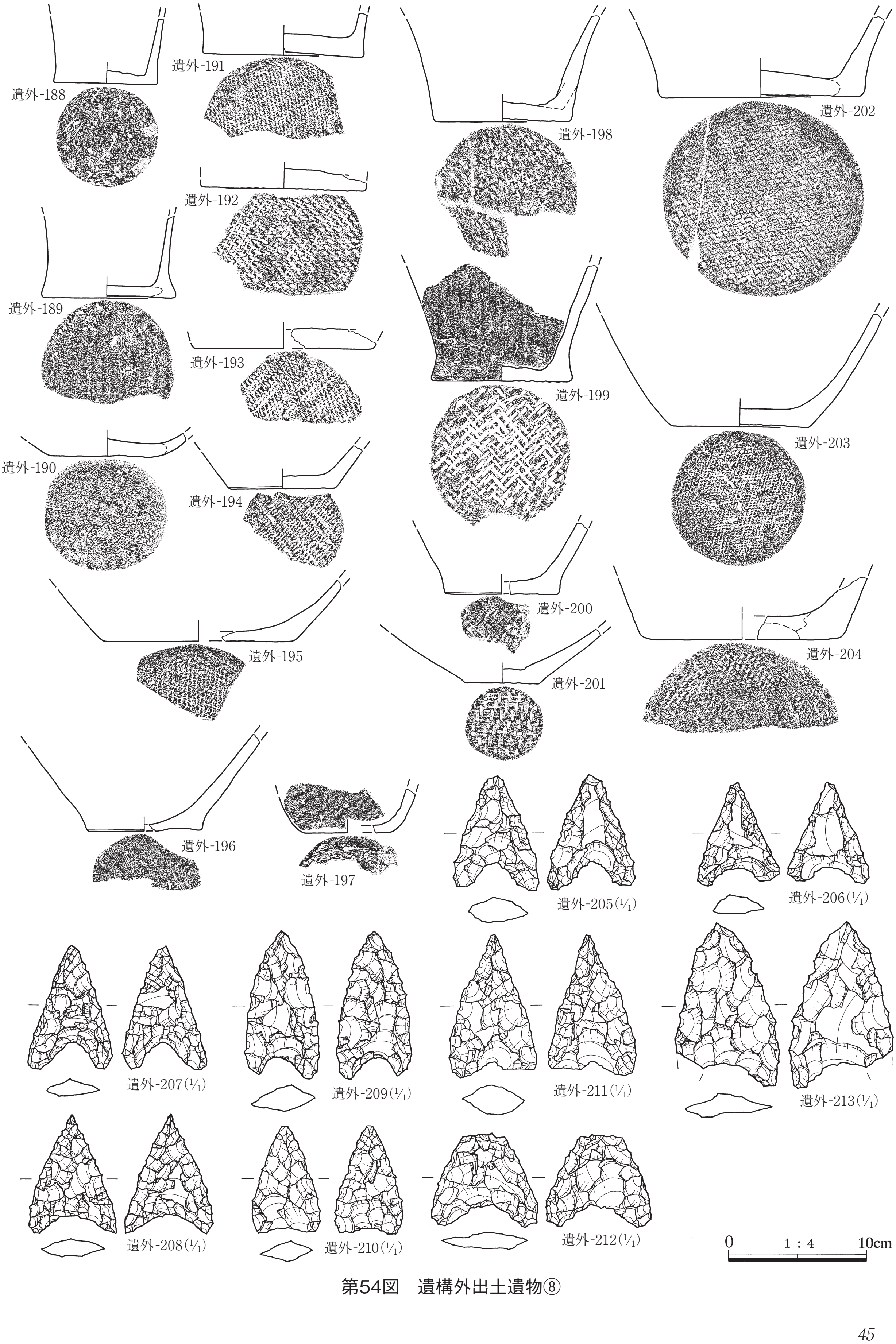
第51図　遺構外出土遺物⑤



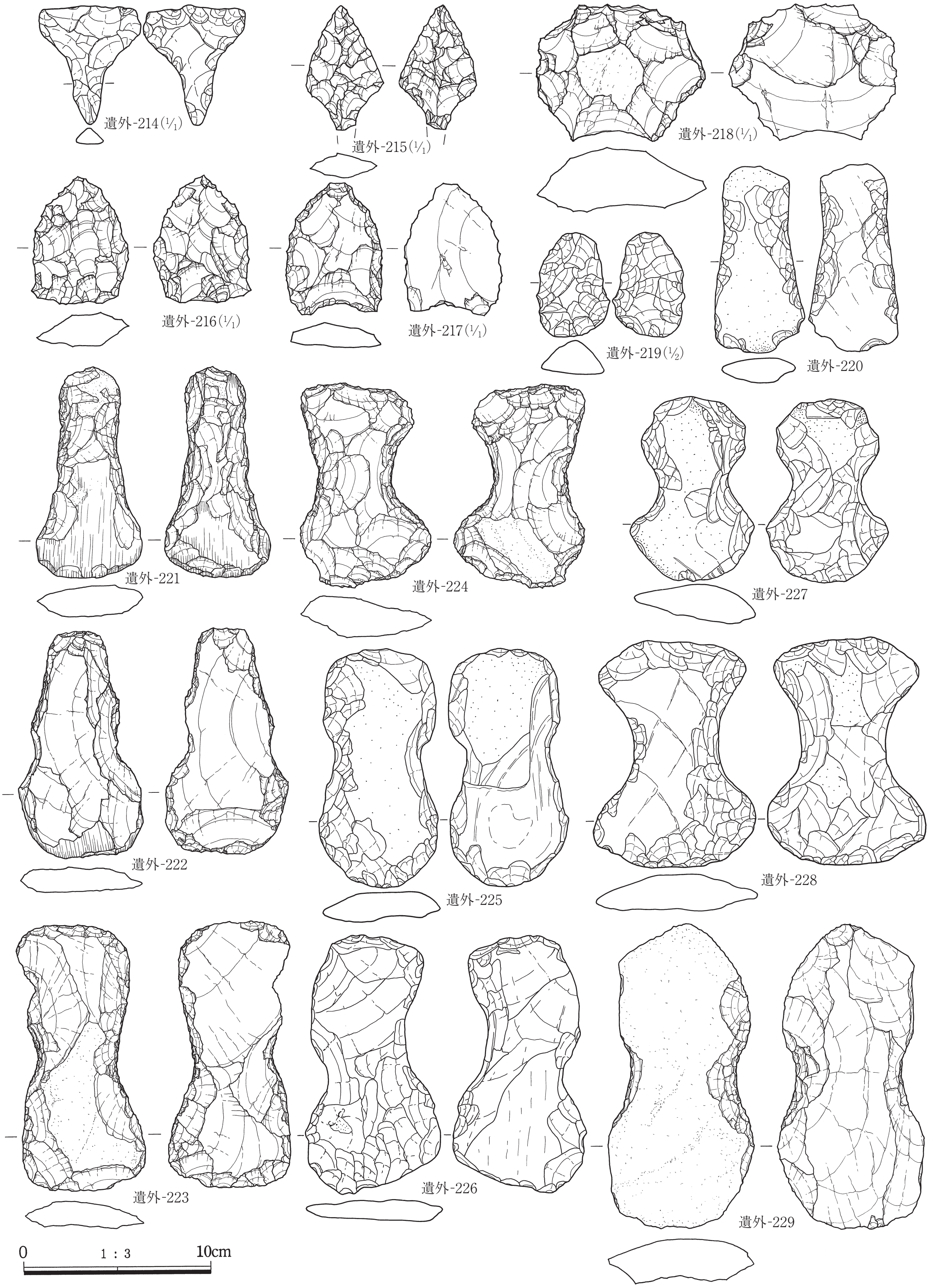
第52図　遺構外出土遺物⑥



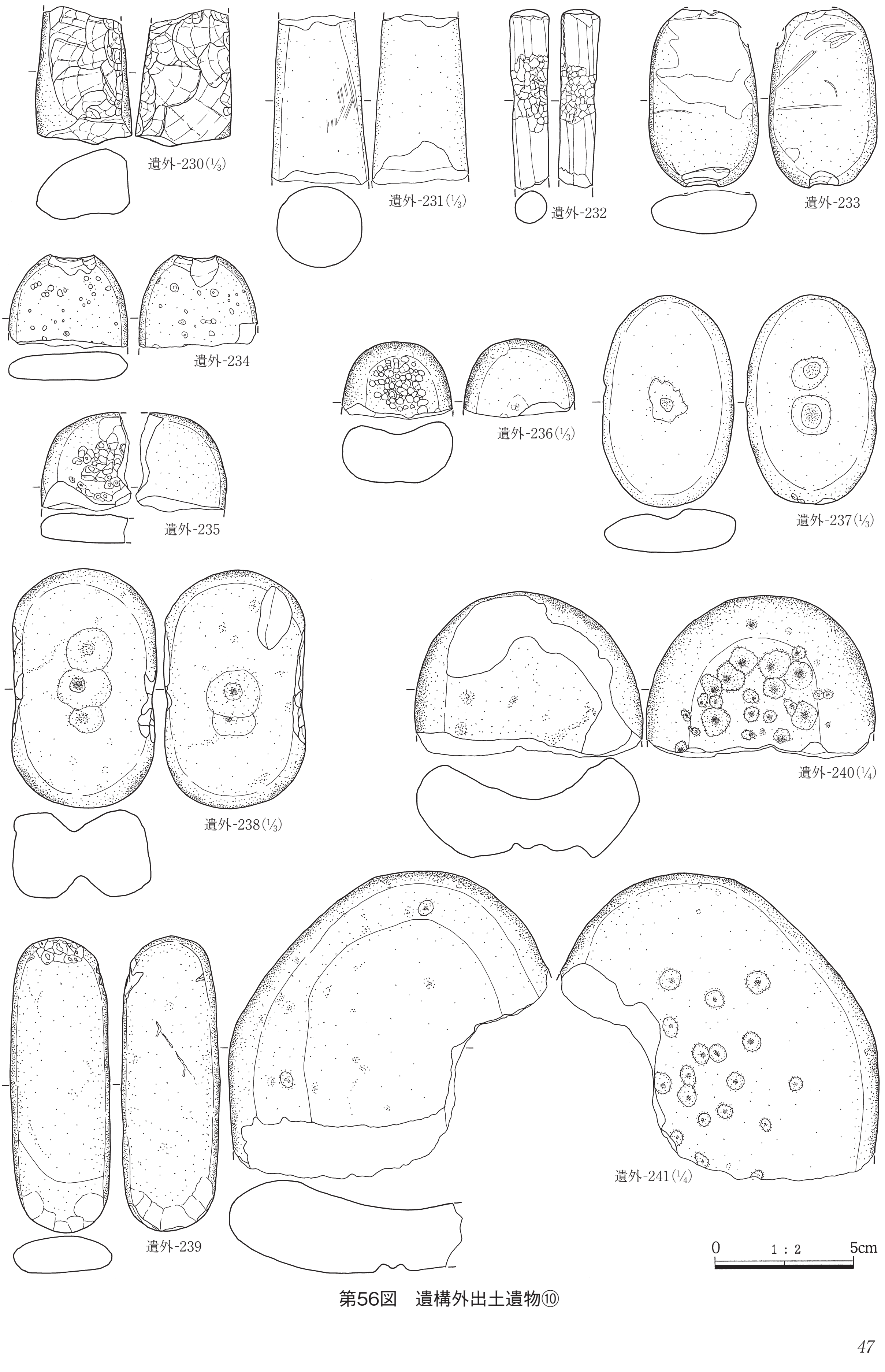
第53図　遺構外出土遺物⑦



第54図　遺構外出土遺物⑧



第55図　遺構外出土遺物⑨



第56図　遺構外出土遺物⑩

第４表　縄文時代遺物観察表

４号住居　第 28 図　PL31

番号	器種	残存部位・法量（cm）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁部片	良・橙	口唇平坦、外面に斜方向に櫛描き文。	加曽利EⅢ式
2	〃	〃	良・にぶい黄橙	口縁内湾、沈線・充填縄文の横帯文。	〃
3	〃	〃	白色粒・〃	口縁直立、沈線の横帯文。	〃
4	〃	胴部片	良・〃	胴部上位くびれ部。縄文、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
5	〃	〃	〃・橙	胴部中位くびれ部。縄文、沈線２条単位間に蛇行沈線の懸垂文。	〃
6	〃	〃	白色粒・にぶい黄橙	胴部下半・底部欠失。縄文、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
7	〃	底部・底径 6.0	良・橙	箆削り後、磨き。	〃
8	〃	底部・底径 7.8	良・にぶい黄橙	胴部下半～底部。内面黒変。胴部無節縄文、底面撫で。	〃
9	石鏃	長 4.0・幅 2.3・厚 0.7	チャート	未製品	7.6g
10	石核	〃 5.2・〃 4.6・〃 3.2	〃	角礫状。埋甕１内上位から検出。	82.5g
11	〃	〃 4.2・〃 5.4・〃 3.2	〃	〃	102.4g

５号住居　第 29 図　PL31

番号	器種	残存部位・法量（cm）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴部・口 9.0	良・にぶい赤褐	小型土器。口縁部外反、外面縄文。	加曽利EⅡ式
2	〃	胴部片・最大径 21.7	白色粒・橙	頚部以上に貼付痕。縄文施文後に沈線文。炉内被熱顕著。	〃
3	〃	〃	〃・にぶい黄橙	外面、縄文施文後に沈線文。	〃
4	〃	口縁部片	〃・〃	緩い山形口縁。外面、縦位櫛描き後に横位沈線２条。	〃
5	〃	〃	〃・〃	口縁・口唇部内湾。櫛描き後に沈線２条。	〃
6	〃	胴部片	〃・〃	外面、縦位櫛描き後に異形沈線文。	〃
7	〃	口縁部片	〃・にぶい褐	渦状に貼付文。	〃
8	〃	〃	〃・〃	口縁外反、横撫で。頚部、横位沈線施文後に隆帯上刺突。	〃
9	〃	〃	〃・にぶい橙	口縁外反、横撫で。頚部に細い隆帯。	〃
10	打製石斧	完・長 13.4・幅 6.2・厚 1.9	ホルンフェルス	遺存状態良好。基部・刃部間に製作時から捻れあり。	227.5g
11	〃	1/2 長 7.1・幅 5.6・厚 1.4	〃	短冊形。基部欠失。剥離調整良好。	84.2g

６号住居　第 30 図　PL32

番号	器種	残存部位・法量（cm）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴部片	白色粒・にぶい黄橙	口縁やや厚みをもち、直立。外面、無文。	加曽利EⅡ式
2	〃	口縁～胴部上位片	〃・褐	口縁撫で。外面、縄文施文後に沈線文。	〃
3	〃	胴部下半片	〃・橙	外面、縄文のみ。	〃
4	石皿	1/5	粗粒輝石安山岩	扁平円礫を用いた小型石皿。磨り面長軸方向に使用痕。	1049.5g

８号住居　第 31・32 図　PL32

番号	器種	残存部位・法量（cm）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴部片・口 9.4	白色粒・にぶい赤褐	小型。縄文施文後、口縁部撫で、頚部沈線、胴部波状等沈線。	加曽利EⅡ式
2	〃	口縁部片	良・黒褐	口縁外反、上端平滑。外面は縄文施文後、頚部横撫で。	〃
3	〃	〃	良・褐	口縁内湾。外面上端まで無節縄文施文。	〃
4	〃	〃	〃・にぶい橙	口唇部から縦位貼付突帯。	〃
5	〃	〃	〃・〃	縄文施文後に、貼付取手・突帯。	〃
6	〃	肩部片	白色粒・にぶい黄橙	沈線文施文後に箆先による刺突。	〃
7	〃	口縁～胴部中位	良・赤褐	口唇内湾。上位は貼付突帯と渦状沈線、中位は縄文を施文。	〃
8	〃	肩部片	白色粒・橙	貼付突帯、沈線・刺突文。	〃
9	〃	胴部上位片	〃・にぶい赤褐	縄文施文後、横撫で。口唇部箆先刺突。	〃
10	〃	口縁部片	〃・暗赤褐	貼付取手・突帯上に沈線文。内外丁寧な磨き。	〃
11	〃	肩部片	良・にぶい橙	貼付突帯・沈線文。内外丁寧な磨き。	〃
12	〃	〃	白色粒・赤褐	隆帯上に縄文施文後に沈線施文。	〃
13	〃	口縁部片	良・褐	横撫で後、沈線文施文。	〃
14	〃	〃	〃・明赤褐	口縁外反。頚部に沈線文。	〃
15	〃	〃	白色粒・にぶい褐	口縁内湾、外端突出。縄文施文後に沈線文施文。	〃
16	〃	〃	〃・にぶい橙	横方向及び渦状の沈線文。瘤状貼付突起あり。	〃
17	〃	〃	〃・〃	縄文施文後、隆帯貼付。	〃
18	〃	〃	〃・にぶい褐	口縁直立。隆帯貼付、充填縄文の横帯文。	〃
19	〃	胴部中位片	〃・明赤褐	縄文施文後にくびれ部に横位沈線・波状沈線文。	〃
20	〃	〃	〃・橙	縦位条痕文上に横位波状沈線２条。	〃
21	〃	〃	良・橙	斜位条痕文上に縦位曲沈線文。	〃
22	〃	口縁部片	白色粒・にぶい黄橙	縄文施文後に、沈線文。口唇部に小突起。	〃
23	〃	胴部中位片	〃・にぶい赤褐	くびれ部。無節縄文上に、上方に貼付突帯・下方に横位沈線。	〃
24	〃	口縁部片	〃・赤褐	外面箆撫で後、内外丁寧な磨き。	〃
25	〃	〃	〃・赤褐	口唇波状に突出。内外丁寧な磨き。	〃
26	〃	〃	〃・にぶい褐	口縁内湾、内面口唇部直立。内外無文、丁寧な磨き。	〃
27	〃	〃	〃・橙	無文。内外丁寧な磨き。	〃
28	〃	肩部片	〃・明赤褐	幅広な貼付隆帯。摩滅顕著。	〃
29	〃	〃	良・橙	地無文、丁寧な磨き。充填縄文の隆帯文。	〃
30	〃	胴下位～底部片・底 9.7	白色粒・赤褐	無文、丁寧な磨き。	〃
31	〃	〃　・底 9.6	〃・にぶい黄橙	無文、胴部下位粗い箆削り。	〃
32	石楔	2/3	珪質頁岩	扁平な小礫を使用。表裏に研磨面。	25.3g

９号住居　第 33・34 図　PL33

番号	器種	残存部位・法量（cm）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴部片・口 12.0	白色粒・にぶい橙	小型深鉢。波状口縁、外側に刺突文。胴部縦位櫛描きに沈線。	加曽利EⅡ式
2	〃	胴中位～下位・底 7.3	〃・橙	小型深鉢。外面、縦位変則な櫛描きに縦位波状沈線文。	〃
3	〃	口縁～胴中位・口 20.2	〃・にぶい黄橙	全面縦位条痕上に口縁部・頚部横位沈線文。胴部曲線の沈線文。	〃
4	〃	胴下位～底部・底 9.8	〃・にぶい橙	胴部縦位条痕上に縦位３条沈線文６単位。底部磨き。	〃

番号	器種	残存部位・法量（cm）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
5	深鉢	胴上位・口23.0	白色粒・にぶい橙	縄文施文後、貼付突帯。	加曽利ＥⅡ式
6	〃	口縁片・口42.0	〃・橙	充填縄文の横帯文。	〃
7	〃	胴中位～下位片	〃・明褐	縄文施文後、沈線の懸垂文。	〃
8	〃	口縁～胴中位・口46.5	〃・灰黄褐	縄文施文後、沈線及び沈線間磨り消し懸垂文。覆土出土。	加曽利ＥⅢ式
9	〃	口縁部片	良・にぶい黄橙	口縁部内湾。縄文施文後、沈線文。	加曽利ＥⅡ式
10	〃	胴部中位片	白色粒・〃	縄文施文後、沈線及び沈線間磨り消し。覆土出土。	加曽利ＥⅢ式
11	〃	胴部片	〃・にぶい黄褐	縄文施文後撫で、貼付隆帯。	加曽利ＥⅡ式
12	〃	〃	〃・橙	縄文施文後、沈線の懸垂文。	〃
13	〃	口縁部片	〃・にぶい橙	縄文施文後、沈線。口縁横位沈線上に連続刺突。	〃
14	〃	胴部片	〃・にぶい黄橙	縄文施文後、縦位蛇行状隆帯貼付の懸垂文。覆土出土。	加曽利ＥⅢ式
15	〃	胴下位～底部・底9.8	〃・褐	胴、縄文施文後、沈線の懸垂文。底部、撫で。	加曽利ＥⅡ式

10号住居　第35・36図　PL33・34

番号	器種	残存部位・法量（cm）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴中位・口28.0	白色粒・にぶい褐	全面縦位櫛描き。口縁横位沈線間に連続刺突。	加曽利ＥⅡ式
2	〃	頚部片	良・明褐	縦位櫛描き後に沈線。	〃
3	〃	胴部片	白色粒・明赤褐	縦位櫛描き後に曲沈線。	〃
4	〃	口縁部片	〃・にぶい黄橙	縄文施文後、突帯貼付・磨り消し及び沈線の横帯文。	〃
5	〃	〃	良・〃	縄文施文後、口縁横位・胴縦位沈線。	〃
6	〃	胴部片	白色粒・〃	縄文施文後、胴、沈線間磨り消しの懸垂文。覆土出土	加曽利ＥⅢ式
7	〃	把手片	良・〃	縄文施文後、一部沈線。部位不詳。	加曽利ＥⅡ式
8	〃	口縁部片	白色粒・黄褐	撫で後、角形沈線。覆土出土。	
9	〃	〃	良・明黄褐	隆帯貼付後、外面斜行沈線の横帯文。	
10	〃	肩部片	白色粒・橙	隆帯貼付後、渦状沈線。	
11	〃	口縁部片	〃・にぶい黄橙	横撫で、口唇部外面に指先によると思われる円形刺突。	
12	〃	〃	〃・〃	大きく外反。内外、丁寧な横撫で。	
13	〃	〃	〃・黒	外反。丁寧な撫で、口唇部外面に浅い沈線。	
14	浅鉢	胴上位～下位	良・橙	横撫で。無文。	
15	深鉢	底部・底11.4	〃・明赤褐	丁寧な撫で。	
16	凹石	1/2・幅10.0・厚4.1	粗粒輝石安山岩	扁平円礫を使用。ほぼ中央に凹み。	406.1g
17	打製石斧	完・長10.6・幅8.2・厚2.0	〃	分銅形。	331.5g
18	〃	1/2・幅4.4・厚1.9	〃	短冊形基部。	80.7g

11号住居　第37～39図　PL34・35

番号	器種	残存部位・法量（cm）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴中位・口25.2	良・にぶい黄橙	口縁内湾、沈線及び沈線上刺突の横帯文。胴、沈線の懸垂文。	加曽利ＥⅡ式
2	〃	〃　・口26.5	白色粒・浅黄橙	口縁外反、把手４単位。頚部の横位沈線を挟み、沈線の懸垂文。	〃
3	〃	〃　・口26.4	〃・にぶい黄橙	口縁内湾、充填縄文の横帯文。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	加曽利ＥⅢ式
4	〃	〃　・口24.2	〃・〃	口縁直立。　〃	〃
5	〃	胴上位～下位	〃・にぶい黄褐	縄文施文後、細い沈線２条。	加曽利ＥⅡ式
6	〃	口縁部片	〃・〃	縄文施文後、口唇部に横位沈線２条。	〃
7	〃	口縁下～胴中位	〃・にぶい黄橙	縄文施文。劣化顕著。	〃
8	〃	口縁下～胴上位・口18.5	〃・にぶい橙	口縁内湾、充填縄文の横帯文。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	加曽利ＥⅢ式
9	〃	口縁～胴中位片	〃・にぶい黄橙	大型深鉢。充填縄文の横帯文。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
10	〃	口縁～胴上位片	〃・にぶい橙	大型深鉢。充填縄文の横帯文。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
11	〃	口縁部片	〃・褐	縦位櫛描き、口唇部に横位沈線、胴、蛇行沈線による懸垂文。	加曽利ＥⅡ式
12	〃	〃	〃・にぶい黄橙	口縁直立。口唇部横位沈線２条。胴、無節縄文。	〃
13	〃	口縁把手片	〃・橙	把手・隆帯貼付、充填縄文。	〃
14	〃	口縁部片	〃・黒	口縁やや内湾、隆帯貼付、充填縄文による横帯文。	〃
15	〃	口縁～胴中位片・口24.8	〃・にぶい黄橙	山形口縁。沈線間磨り消しによる懸垂文。	加曽利ＥⅢ式
16	〃	口縁～胴上位片	〃・〃	口縁、充填縄文の横帯文。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
17	〃	胴中位片	〃・橙	沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
18	〃	口縁部片	〃・〃	大型深鉢。充填縄文の横帯文。	〃
19	〃	〃	〃・浅黄橙	口縁、充填縄文の横帯文。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
20	〃	口縁～胴上位片	〃・にぶい橙	大型深鉢。口縁、充填縄文の横帯文。胴上位、磨り消し。	〃
21	〃	口縁片	〃・にぶい褐	充填縄文の横帯文。	〃
22	〃	〃	〃・にぶい黄橙	〃	〃
23	〃	胴上位片	〃・〃	口縁、充填縄文の横帯文。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
24	〃	〃	〃・にぶい褐	沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
25	〃	胴下位片	〃・にぶい橙	〃	〃
26	〃	口縁片	〃・にぶい黄橙	口唇部内湾。無文、丁寧な磨き。	〃
27	〃	〃	〃・にぶい橙	〃。口唇部上面異形沈線文。外面無文、丁寧な磨き。	〃
28	〃	口縁下位片	〃・橙	隆帯貼付後、撫で。	〃
29	〃	胴上位片	〃・〃	無文部分。丁寧な磨き後、上方に横位沈線。	〃
30	〃	口縁片	〃・にぶい黄橙	小型。山形口縁外側に渦状沈線。口唇上端に沈線。他無文。	〃
31	浅鉢	口縁片・口42.0	〃・明赤褐	粗い。口唇部内湾。無文。磨き後、口縁に浅い沈線。	〃
32	深鉢	胴下位～底部・底12.0	〃・にぶい黄橙	胴、沈線間磨り消しの懸垂文。底、外縁に編物痕を残す。	〃
33	〃	〃　・底8.0	〃・〃	胴、沈線間磨り消しの懸垂文。底、磨き。	〃
34	鉢	底部　・底5.4	〃・〃	小型土器底部。丁寧な磨き。	
35	深鉢	〃　・底8.0	〃・明赤褐	粗い。無文。底部は磨き。	
36	浅鉢	胴下位～底部片・底8.0	〃・にぶい黄橙	無文。底部は磨き。	
37	土製耳飾	完　・径3.4　厚2.2	〃・〃	臼型。片面、曲方形二重沈線内に細刺突。片面、細刺突。	29.4g
38	〃	〃・径3.7　厚2.8	〃・〃	臼型。両面、渦状沈線。	38.0g
39	石錐	2/3・長5.5・幅2.1・厚0.9	黒色頁岩	尖端部欠損。	8.2g
40	石鏃	完・長2.2・幅1.5・厚0.5	チャート	長身・両脚系。	1.2g
41	〃	〃・長2.0・幅1.9・厚0.4	〃	短脚系。	1.4g

番号	器種	残存部位・法量(㎝)	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
42	石鏃	1/2･長1.6･幅1.9･厚0.3	チャート	大型長脚系。	1.2g
43	打製石斧	4/5･長9.8･幅3.5･厚1.9	ホルンフェルス	短冊形。刃部剥離折損。	104.9g
44	磨製石斧	4/5･長5.8･幅2.9･厚1.4	変質安山岩	基部剥離損傷。刃部打撃損傷。	38.8g
45	〃	4/5･長8.6･幅4.8･厚2.1	変はんれい岩	蛤刃形。基部折損。刃部に使用痕。	172.0g

13号住居　第40図　PL36

番号	器種	残存部位・法量(㎝)	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴中位・口20.0	良・明赤褐	縄文施文後、沈線文・磨り消し。口縁、沈線上に２条連状刺突。	加曽利EⅢ式
2	〃	〃・口22.7	白色粒・にぶい橙	縄文施文後、沈線間磨り消し。口縁、沈線上に連状刺突。	〃
3	〃	〃・口27.0	〃・橙	口縁、充填縄文の横帯文。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
4	〃	胴中位片	〃・にぶい黄橙	沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
5	〃	〃	〃・明赤褐	〃	〃
6	〃	底部片・底6.2	良・にぶい黄橙	小型土器。無文、丁寧な磨き。	〃
7	〃	胴中位～底位・底7.0	〃・にぶい橙	沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
8	〃	胴中位～底部・底7.6	〃・明褐	胴、沈線間磨り消しの懸垂文。底、丁寧な磨き。	〃
9	磨製石斧	2/3･長3.7･幅2.1･厚0.9	変玄武岩	楔か。やや斜刃。基部折損。	17.6g

14号住居　第41・42図　PL36・37

番号	器種	残存部位・法量(㎝)	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴中位・口18.3	白色粒･にぶい橙	縄文施文後、横位波状・縦位蕨手状沈線文。口縁に連状刺突文。	加曽利EⅢ式
2	〃	〃・口24.2	〃・にぶい黄橙	縄文施文後、曲線沈線文。沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
3	〃	〃・口32.4	〃・〃	口縁、隆線文間を縄文充填。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
4	〃	口縁～胴上位・口32.2	〃・〃	把手付き。口縁、横撫で。胴、蕨手状沈線・磨り消しの懸垂文。	〃
5	〃	胴上位～底部・底7.4	〃・橙	沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
6	〃	口縁片	〃・明褐	口唇内湾。縄文施文後、区画・縦位沈線及び磨り消し。	〃
7	〃	〃	〃・にぶい橙	口縁直立。横位は波状・縦位は沈線及び磨り消しの懸垂文。	〃
8	〃	口縁～胴中位片	良・淡黄	口縁上端まで縄文施文。区画沈線外、磨り消し。	〃
9	〃	口縁片	白色粒･にぶい橙	縄文施文後、沈線。胴に縦位連続区画沈線及び磨り消し。	〃
10	〃	口縁～胴上位	〃・暗灰黄	口縁内湾。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
11	〃	口縁片	〃・にぶい黄橙	口縁内湾。貼付隆帯間充填縄文の横帯文。	〃
12	〃	口縁～胴中位片	〃・にぶい橙	口縁内湾。区画・縦位沈線間を磨り消し。懸垂文。	〃
13	鉢	口縁～胴上位・口26.4	良・橙	口縁内湾顕著。口縁丁寧な磨き。胴、縦位櫛描きと横位沈線。	〃
14	深鉢	口縁片	白色粒・にぶい橙	口縁内湾。縦位櫛描き後、浅い沈線。	〃
15	〃	胴中位片	良・にぶい黄橙	縦・斜位櫛描き。	〃
16	〃	〃	白色粒・浅黄橙	縦位波状櫛描き。	〃
17	〃	口縁～胴上位片	〃・明褐	口縁やや内湾、撫で。胴、粗い磨き後、口縁に横位沈線。	〃
18	〃	〃	〃・褐灰	口唇内湾。縄文施文後、区画・蕨手状沈線文間を磨り消し。	〃
19	〃	口縁片	良・橙	口縁内湾。貼付隆帯間、縄文充填。他は磨り消し。	〃
20	〃	〃	白色粒･にぶい橙	口縁上装飾把手。	〃
21	〃	〃	良・暗褐	丁寧な磨き後、斜行・区画・弧状各沈線文。	〃
22	〃	〃	白色粒・黒褐	丁寧な磨き後、区画内を縄文充填・その外周に沈線。	〃
23	〃	〃	〃・にぶい橙	山形口縁やや外反。幅広の区画沈線内、縄文充填。	〃
24	〃	口縁～胴上位片	〃・〃	口縁、横位連状刺突。胴、縄文施文後に縦位蕨手・区画沈線。	〃
25	〃	口縁片	〃・浅黄橙	横位沈線２条間に、細かな無節縄文充填。	〃
26	〃	口縁片	良・にぶい黄橙	口唇部に孔状の装飾。磨り消し縄文、連状刺突文。	〃
27	〃	口縁下位～胴上位片	〃・〃	口縁、横位連状刺突。胴、縄文施文後に縦位蕨手・区画沈線。	〃
28	〃	口縁片	白色粒・黒褐	無文。横位の粗い磨き。	〃
29	〃	胴下位～底部・底7.1	〃・明褐	胴、縦位波状櫛描き。底部は磨き。	〃
30	〃	〃・底7.6	良・にぶい黄橙	胴、沈線間磨り消しの懸垂文。底部撫で。	〃
31	〃	〃・底5.4	〃・〃	胴、３条沈線及び沈線間磨り消しの懸垂文。底部撫で。	〃
32	〃	胴下位片	〃・〃	胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
33	〃	胴下位～底部・底6.3	白色粒・明黄褐	〃。底部撫で。	〃
34	〃	〃・底8.2	〃・にぶい橙	〃。	〃
35	〃	〃・底7.7	〃・〃	胴、沈線間磨り消しの懸垂文。底部球面状、不安定。	〃
36	磨石	完･長12.5･幅5.6･厚2.0	砂岩	扁平な長円礫。	237.0g
37	凹石	〃･長9.3･幅6.0･厚3.6	粗粒輝石安山岩	やや扁平な円礫。両面中央に数カ所の凹みあり。	339.9g
38	打製石斧	1/2･長7.8･幅7.2･厚2.0	ホルンフェルス	基部側1/2折損。刃部に使用打撃痕。	151.1g

１号土坑　第43図　PL37

番号	器種	残存部位・法量(㎝)	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁片	良・黄橙	口唇内湾。縄文のみ。	加曽利EⅡ式
2	〃	〃	〃・にぶい黄橙	口唇内湾。横位２条隆線。区画及び縦位沈線文。	〃
3	〃	〃	〃・浅黄橙	口縁直立。縄文施文後、横位２条沈線間に刺突･２条曲沈線文。	〃
4	〃	〃	白色粒･にぶい橙	口縁外反。縄文施文。	〃
5	〃	〃	〃・にぶい黄橙	〃。縦位・斜位沈線文。	〃
6	〃	〃	良・橙	貼付隆帯、丁寧な磨き。沈線内充填縄文。	〃

２号土坑　第43図　PL37

番号	器種	残存部位・法量(㎝)	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	胴中位片	良・にぶい黄橙	沈線間磨り消しの懸垂文。	加曽利EⅢ式
2	〃	口縁～胴中位	〃・橙	縦位蕨手・区画沈線外磨り消しの懸垂文。	〃
3	〃	口縁片	白色粒・〃	縄文施文後、浅い曲沈線文。	〃
4	〃	胴上位片	良・にぶい黄橙	縄文施文後、隆帯貼付の痕跡。	〃
5	〃	口縁片	〃・灰白	口縁内湾。縄文施文後。横位２条沈線間に刺突。	〃
6	〃	胴上位片	〃・にぶい橙	大型深鉢。沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
7	〃	胴下位～底部片・底5.7	〃・〃	胴、縦位磨き。底部は摩滅。	〃

３号土坑　第43図　PL37・38

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	注口土器	口縁～胴片・口 12.0	白色粒・にぶい黄橙	口縁大きく内湾、球状形。上半に刺突を伴う鎖状隆線。	堀之内１式
2	深鉢	胴上位片	良・　〃	磨消縄文に、同心円・放射角状の沈線文。	〃　２式
3	〃	口縁片	〃・橙	横位沈線文・横位刺突文。	
4	〃	胴下位片	〃・〃	沈線間磨り消しの懸垂文。	加曽利EⅢ式
5	〃	胴中位片	良・にぶい黄橙	縦位複数沈線による懸垂文。	〃

４号土坑　第43図　PL38

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁片	白色粒・橙	外端に隆線貼付。無文、横位箆削り。	
2	〃	胴上位片	良・にぶい褐	横位沈線。空隙に縦位の短い沈線充填の横帯文。	加曽利EⅢ式

５号土坑　第43図　PL38

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴中位・口 23.0	良・浅黄橙	口縁、充填縄文による横帯文。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	加曽利EⅢ式
2	〃	口縁片	〃・にぶい黄橙	口縁部外反。丁寧な撫で。	〃
3	〃	胴上位片	〃・　〃	不定斜行櫛描き後、上方に沈線２条。	〃

６号土坑　第43図　PL38

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴上位片	良・にぶい黄橙	口縁、隆帯間沈線充填の横帯文。胴、沈線間磨り消し懸垂文。	加曽利EⅢ式
2	〃	口縁片	〃・　〃	上端、横位刺突及び２条沈線。胴、縦位沈線２条。	〃
3	〃	〃	〃・　〃	不定斜行櫛描き後、上方に横位沈線２条。	〃

７号土坑　第44図　PL38

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁片	白色粒・浅黄橙	口縁内湾。貼付隆帯・突起状装飾。	加曽利EⅡ式
2	〃	〃	良・黄橙	口縁外反。区画隆帯内、充填縄文。	〃
3	〃	〃	白色粒・にぶい橙	〃　。縄文施文後、口縁横位撫で。	〃

10号土坑　第44図　PL38

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁片	白色粒・にぶい橙	口縁、丁寧な撫で、口唇に装飾貼付。	
2	〃	口縁～胴中位片・口27.8	〃・にぶい黄橙	口縁装飾突起は２または４。胴、縦位箆削り後、不定渦状沈線。	堀之内１式

11号土坑　第44図　PL38

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	胴中位片	良・浅黄橙	縄文施文。	加曽利EⅡ式
2	〃	胴下位～底部・底 13.0	白色粒・にぶい黄橙	胴下位無文、縦位箆削り。底部、箆削り。	〃

12号土坑　第44図　PL38

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁片・口 18.1	白色粒・にぶい橙	小型深鉢。口唇、装飾突起は４か。口縁丁寧な磨き、磨消縄文。	堀之内１式
2	〃	胴上位片	〃・にぶい黄橙	丁寧な磨き後、斜行交差沈線。	〃

13号土坑　第44図　PL38

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	底部片・底 6.7	白色粒・にぶい橙	胴、無文。底、丁寧な削り。	

14号土坑　第44図　PL38

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁片	良・にぶい黄橙	山形口縁。曲沈線。	加曽利EⅢ式
2	〃	〃	〃・浅黄橙	口縁、横位沈線２条。口縁下方、縦位櫛描き。	〃

15号土坑　第44図　PL38

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴中位・口 35.0	良・浅黄橙	口縁、隆帯内充填縄文の横帯文。胴、沈線間磨り消し懸垂文。	加曽利EⅢ式
2	〃	胴中位～底・底 7.6	〃・　〃	胴、縦位櫛描き後、沈線間磨り消しの懸垂文。底、削り。	〃
3	〃	胴中位片	白色粒・灰白	縦位粗い櫛描き後、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃

16号土坑　第44・45図　PL38・39

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁片	良・浅黄橙	大型深鉢。口縁内湾。縄文施文後、渦巻文。	加曽利EⅢ式
2	〃	〃	〃・橙	口縁内湾。沈線区画内充填縄文。	〃
3	〃	〃	〃・〃	口縁直立。口縁横撫で。胴、沈線及び磨り消しの懸垂文。	〃
4	〃	〃	〃・浅黄橙	口縁やや内湾。縄文施文。	
5	鉢	〃	白色粒・にぶい黄橙	浅鉢か。口縁内湾。無文、縦位箆削り。	
6	深鉢	〃	良・　〃	口唇平滑。沈線文。	
7	〃	〃	〃・　〃	Ｓ字形有孔装飾。	
8	〃	〃	〃・淡黄	装飾突起片。	
9	〃	把手片	〃・黄橙	外面に縄文施文。	
10	〃	口縁片	〃・にぶい黄橙	口縁外反。無文、横撫で。	
11	〃	口縁～胴上位片	〃・黄橙	縄文施文。Ｓ字形装飾剥落痕。	
12	〃	口縁～胴中位片	白色粒・にぶい黄橙	口縁直立、横撫で。胴、精緻に縄文施文。	加曽利EⅢ式
13	〃	胴中位片	良・にぶい橙	沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
14	〃	〃	〃・浅黄橙	〃　。	
15	〃	〃	〃・橙	磨消縄文。	堀之内１式

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
16	深鉢	胴中位片	良・橙	大型深鉢片。沈線間、縄文磨り消し。	加曽利EⅢ式
17	鉢	胴下位～底・底 6.4	〃・黄橙	無文。底、削り。	
18	深鉢	〃　・底 8.0	〃・にぶい黄橙	〃　。	
19	打製石斧	2/3・長 8.4・幅 3.7・厚 2.9	黒色頁岩か	刃部折損。	150.7g

22号土坑　第 45 図　PL39

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴中位・口 27.0	良・にぶい黄橙	口縁に突起 1。外面剥離顕著、沈線見ゆ。	称名寺式
2	〃	〃	〃・淡黄	口縁外反、横撫で。区画沈線文。	〃
3	〃	胴中位片	白色粒・淡黄	無文。篦撫で。	
4	〃	口縁～胴上位	〃　・橙	頚外反・口縁内傾。沈線文。	称名寺式
5	〃	口縁片	〃　・淡黄	磨り消し縄文。	
6	〃	胴上位片	良・灰白	櫛歯波状文。	堀之内１式
7	〃	胴下位～底片・底 9.0	白色粒・暗黄褐	胴、縦位沈線及び磨り消し。底、削り。	

23号土坑　第 45 図　PL39

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁片	良・灰白	縄文施文、口縁撫で。	
2	〃	胴下位～底片・底 4.6	白黒色粒・浅黄橙	小型土器。区画沈線文。	
3	磨製石斧	1/5・長 1.7・幅 2.9・厚 1.3	蛇紋岩	基部のみ残存。	12.3g

25号土坑　第 45 図　PL39

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	叩石	4/9・長 7.9・幅 8.9・厚 3.4	ホルンフェルス	扁平円礫使用。両面磨。外周剥離顕著。	353.8g

３号埋甕　第 46 図　PL39

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁片・口 47.6	良・にぶい橙	区画隆帯文内、充填縄文。橋状把手。	加曽利EⅡ式
2	〃	胴上位片	白色粒・にぶい黄橙	上方、横位沈線・以下、縦位沈線文。	〃

４号埋甕　第 46 図　PL39

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁下半～胴上位片	白色粒・橙	充填縄文。縦位沈線間、磨り消し。	加曽利EⅢ式
2	〃	底部片・底 8.8	黒色粒・にぶい黄橙	底、篦削り。	〃

５号埋甕　第 46 図　PL39

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	浅鉢	口縁～胴・口 35.0	良・橙	口縁外反。無文。全体に丁寧な削り。	加曽利EⅢ式

６号埋甕　第 46 図　PL39

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴上位・口 18.8	白色粒・浅黄橙	筒形土器。口縁、横位沈線。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	加曽利EⅢ式
2	〃	胴上位片	良・　〃	上方、横位沈線。以下、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃

７号埋甕　第 46 図　PL39

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴上位・口 19.7	良・浅黄橙	口縁・胴、充填縄文。頚、無文・横位磨き。被熱により脆弱。	加曽利EⅡ式
2	〃	胴中位	〃・　〃	不定方向櫛描き痕。	〃

８号埋甕　第 46 図　PL39

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	胴中位	良・橙	沈線間磨り消しの懸垂文。	加曽利EⅢ式

９号埋甕　第 46 図　PL39

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴中位片	白色粒・にぶい黄橙	口縁直立、横撫で。胴、斜行交差沈線。	堀之内１式

遺構外　第 47 ～ 56 図　PL40 ～ 45

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	深鉢	口縁～胴上位片	繊維・にぶい橙	口縁外反。貝殻背圧痕文か。	花積下層式
2	〃	口縁片	〃・橙	口縁やや内湾。平行沈線文・竹管文。ボタン状突起。	有尾式
3	〃	〃	〃・にぶい褐	口縁外反。上端に刺突文。脆弱。	〃
4	〃	胴中位片	〃・にぶい黄橙	羽状縄文。	花積下層式
5	〃	〃	〃・橙	撚糸文。	〃
6	〃	〃	〃・明褐	羽状縄文。	有尾式
7	〃	〃	〃・橙	〃　。	〃
8	〃	〃	〃・にぶい橙	〃　。	〃
9	〃	〃	〃・橙	〃　。	〃
10	〃	〃	〃・〃	羽状縄文か。脆弱。	〃
11	〃	〃	〃・にぶい橙	〃　。〃。	〃
12	〃	〃	〃・橙	条痕文。	〃
13	〃	〃	〃・灰褐	羽状縄文。	〃
14	〃	口縁～胴中位・口 28.5	良・橙	口縁、隆帯内充填縄文。胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	加曽利EⅢ式
15	〃	〃　・口 44.2	白色粒・にぶい黄橙	口縁横位、胴は口縁一体の沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
16	〃	胴中位片	良・にぶい橙	胴、沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
17	〃	〃	白色粒・橙	地文に緩い曲沈線、直沈線間磨り消しの懸垂文。	〃

番号	器種	残存部位・法量（cm）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
18	深鉢	口縁片	白色粒・橙	口縁、隆帯間に充填縄文の横帯文。	加曽利EⅢ式
19	〃	胴片	〃・にぶい黄橙	地文に縦位の曲及び直沈線の懸垂文。	加曽利EⅡ式
20	〃	〃	良・〃	地文に沈線間磨り消しの懸垂文。	加曽利EⅢ式
21	〃	〃	砂粒・橙	地文に２条沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
22	〃	胴中位片	良・橙	口縁外反。２条の刺突文。磨り消し横帯文。	〃
23	〃	口縁片	〃・にぶい黄橙	横帯区画内、縦位沈線充填。	加曽利EⅡ式
24	〃	〃	砂粒・浅黄橙	横帯区画内、縄文上に斜位沈線充填。	〃
25	〃	胴片	良・にぶい橙	地文に横位・鍵の手の沈線。	〃
26	〃	〃	白色粒・橙	２条の沈線文。	〃
27	〃	口縁片	〃・にぶい黄橙	口縁内湾。沈線内充填縄文。	加曽利EⅢ式
28	〃	〃	良・にぶい褐	〃　。地文上に磨り消しによる横帯文。	〃
29	〃	〃	〃・浅黄	〃　。沈線内充填縄文。	〃
30	〃	〃	〃・明黄褐	沈線・縄文による横帯文。	〃
31	〃	〃	白色粒・にぶい黄褐	不定方向櫛描き地文上に、区画沈線。	〃
32	〃	〃	〃　・　〃	口縁外反。横位波状櫛描き文。	〃
33	〃	〃	砂粒・橙	沈線・横Ｓ字の横帯文。	〃
34	〃	〃	良・にぶい黄褐	口縁外反。斜行櫛描き及び沈線。	〃
35	〃	胴片	〃・にぶい黄橙	縦位波状櫛描き文。	〃
36	台付深鉢	台片	白色粒・にぶい橙	４面共に縦位櫛描き後、貼付隆帯。	加曽利EⅡ式
37	深鉢	胴下位～底・底 5.5	〃　・にぶい黄橙	胴、縦位波状櫛描き上に沈線。 底、無文。	加曽利EⅢ式
38	〃	〃　　・底 4.8	〃　・明褐	胴、箆削り後、縦位沈線。底、無文。	〃
39	〃	胴中位片	〃　・にぶい橙	縦位波状櫛描き上に不定方向沈線。	〃
40	〃	胴上位片	良・にぶい黄橙	縦位波状櫛描き後、上方に横位２条刺突文。	〃
41	〃	口縁片	砂粒・橙	口縁外反。横帯内充填縄文。頚、磨り消し。	〃
42	〃	胴上位片	良・　〃	横帯内、Ｓ字沈線文。頚以下、２条沈線間磨り消しの懸垂文。	〃
43	〃	口縁片	白色粒・にぶい黄橙	隆帯内充填縄文・磨り消しの横帯文。沈線間磨り消しの懸垂文。	加曽利EⅡ式
44	〃	〃	〃　・にぶい橙	横位沈線内波状隆線貼付。以下２条沈線懸垂文。	〃
45	〃	〃	〃　・にぶい黄橙	横位３条沈線内波状隆線貼付。以下沈線文。	〃
46	〃	〃	〃　・　〃	横位２条沈線間刺突文。以下沈線による横帯文。	〃
47	〃	〃	〃　・　〃	横位２条沈線内刺突文。以下沈線・磨り消しによる横帯文。	加曽利EⅢ式
48	〃	〃	良・淡橙	突起。沈線・充填縄文。	加曽利EⅡ式
49	〃	〃	〃・にぶい橙	口唇、横位沈線。	〃
50	〃	〃	〃・にぶい黄橙	口縁外反。口唇、横位沈線。以下、縦位沈線。	〃
51	〃	〃	〃・明褐	〃　　。口唇に小突起。	〃
52	〃	〃	〃・浅黄	隆帯内充填縄文の横帯文。	〃
53	〃	胴中位片	〃・にぶい橙	斜行３条沈線。	堀之内１式
54	〃	〃	白色粒・橙	沈線文。	〃
55	〃	〃	〃　・〃	３条沈線による懸垂文。	加曽利EⅡ式
56	〃	口縁～胴中位片	〃　・にぶい橙	口縁外反。	堀之内１式
57	〃	〃	〃　・明黄褐	沈線及び磨り消し縄文。	〃
58	〃	胴中位片	〃　・　〃	〃　。	〃
59	〃	〃	〃　・橙	細い鍵の手状隆線文。	〃
60	〃	〃	〃　・にぶい黄橙	沈線文。	〃
61	〃	〃	〃　・　〃	〃　。	〃
62	〃	口縁片	良・浅黄橙	口縁内湾。隆帯による横帯文。	加曽利EⅢ式
63	〃	〃	白色粒・橙	口縁内湾。精緻な縄文、下方磨り消し。	堀之内１式
64	〃	〃	〃　・にぶい橙	口縁外反。磨り消し。	〃
65	〃	〃	〃　・にぶい黄橙	隆帯による横帯文。	加曽利EⅢ式
66	〃	〃	〃　・にぶい橙	口唇、渦巻き状小突起。	堀之内１式
67	〃	〃	砂粒・にぶい黄橙	口唇、小突起。口縁、縦位細隆線。	〃
68	〃	〃	良・　〃	口縁外反。口唇、横位沈線。頚、沈線文。	〃
69	〃	〃	白色粒・にぶい橙	〃	〃
70	〃	〃	良・橙	口唇、横位沈線。以下、沈線文。	〃
71	〃	〃	〃・にぶい橙	口唇、小突起付き、横位沈線。以下、沈線文。	〃
72	〃	〃	白色粒・灰褐	口唇、横位沈線。以下、縦位捻隆線貼付及び沈線文。	〃
73	〃	〃	砂粒・にぶい橙	口唇、小突起付き、口縁、縦位沈線。	〃
74	〃	〃	〃　・にぶい黄橙	口唇上端、沈線及び刻み状刺突。	〃
75	〃	胴上位片	〃　・　〃	曲位貼付隆線に刻み。他、沈線。	〃
76	〃	口縁片	良・橙	波状横位２条の沈線文。	〃
77	〃	〃	白色粒・橙	口縁やや内湾。渦状沈線を含む横帯文。	加曽利EⅡ式
78	〃	〃	〃　・褐	横位沈線内、波状細隆線。	堀之内１式
79	〃	〃	〃　・赤褐	口縁外反。横位２条沈線文。	〃
80	〃	〃	〃　・黒褐	横位３条沈線文。	〃
81	〃	口縁～胴中位片	砂粒・にぶい褐	沈線によるＪ字文内に破線上列点。	称名寺式
82	〃	口縁片	良・浅黄	口縁２条沈線間列点。	〃
83	〃	〃	白色粒・にぶい黄橙	沈線文、磨り消し。	〃
84	〃	〃	〃　・　〃	口縁２条沈線間列点。	〃
85	〃	〃	良・　〃	沈線文。	〃
86	〃	〃	白色粒・橙	沈線によるＪ字文内に破線上列点。	〃
87	〃	〃	〃　・〃	沈線によるＪ字文内に破線上列点、縦３列。	〃
88	〃	〃	〃　・明黄褐	口縁、横位沈線。沈線によるＪ字文内に列点。	〃
89	〃	胴中位片	砂粒・にぶい黄橙	沈線によるＪ字文内に列点。	〃
90	〃	〃	白色粒・橙	縦位沈線内、複数列点。	〃
91	〃	口縁片	砂粒・にぶい黄橙	横位沈線内、破線上列点。	〃
92	〃	〃	良・橙	口縁外反。磨消縄文。	堀之内１式
93	〃	〃	白色粒・にぶい黄橙	交差条把手貼付。口縁、小突起２列貼付。以下、磨り消し縄文。	称名寺式

番号	器種	残存部位・法量(㎝)	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
94	深鉢	口縁片	良・淡黄	交差条突起貼付。縄文精緻。	称名寺式
95	〃	〃	白色粒・にぶい橙	口唇内傾。装飾突起貼付。	〃
96	〃	〃	良・淡黄	装飾突起から連珠状隆線貼付、横位に展開して横帯形成。	〃
97	〃	〃	〃・〃	装飾突起貼付。磨り消し後、異形沈線文。	〃
98	〃	〃	白色粒・にぶい橙	装飾突起から隆線貼付、横位に展開して横帯形成か。	〃
99	〃	〃	砂粒・にぶい黄橙	装飾突起貼付。	〃
100	〃	〃	良・明黄褐	〃。	〃
101	〃	〃	白色粒・にぶい黄	〃。	〃
102	〃	〃	砂粒・にぶい褐	箆削り後、沈線施文。	〃
103	〃	胴中位片	白色粒·にぶい黄橙	箆削り後、不定方向沈線施文。	〃
104	〃	口縁片	〃・浅黄	横位に隆帯文。	〃
105	〃	〃	良・にぶい黄橙	装飾突起貼付。	〃
106	〃	〃	〃・〃	〃。	〃
107	〃	〃	白色粒・〃	波状口縁。沈線のＪ字文及び磨り消し。	〃
108	〃	〃	〃・橙	沈線のＪ字文及び磨り消し。	〃
109	〃	〃	〃・にぶい黄橙	〃。	〃
110	〃	〃	砂粒・明赤褐	口縁に鎖状隆線。以下、沈線・磨消縄文。	堀之内１式
111	〃	〃	白色粒・〃	〃。	〃
112	〃	〃	〃・橙	口縁に鎖状隆線。以下、斜位格子沈線文。	〃
113	〃	〃	〃・黒褐	箆削り後、斜位格子沈線文。	〃
114	〃	〃	〃・にぶい黄褐	〃。	〃
115	〃	口縁片	良・にぶい橙	〃。	〃
116	〃	〃	白色粒·にぶい黄褐	〃。	〃
117	〃	胴中位片	〃・にぶい橙	〃。	〃
118	〃	口縁片	〃・にぶい黄褐	口縁外反。磨消縄文。	〃
119	〃	〃	〃・にぶい黄橙	磨り消し縄文。	〃
120	〃	〃	良・にぶい橙	〃。	〃
121	〃	〃	白色粒・にぶい黄褐	口唇、突起及び鎖状装飾。磨消縄文。	〃
122	〃	〃	〃・にぶい黄橙	〃。	〃
123	〃	〃	良・〃	口縁、磨き後、鎖状連珠文。	〃
124	〃	口縁～胴中位片·口16.5	〃・にぶい橙	口唇、鎖状装飾。胴、磨消縄文。	〃
125	〃	口縁～胴中位片	〃・〃	口縁、沈線間刺突２条。胴、磨消縄文。	〃
126	〃	口縁片	〃・にぶい黄橙	口縁、磨き後、鎖状連珠文。	〃
127	〃	〃	〃・黒褐	口縁、鎖状連珠文。以下、磨消縄文。	〃
128	〃	〃	白色粒·にぶい黄橙	口縁外反。磨消縄文。	〃
129	〃	〃	良・灰黄褐	口縁、鎖状連珠文。以下、磨消縄文。	〃
130	〃	〃	〃・褐	〃。	〃
131	鉢	〃	〃・褐灰	波状口縁。鎖状連珠文。	〃
132	〃	胴中位片	白色粒・にぶい橙	鎖状連珠文。	〃
133	〃	4/5·口縁一部欠損 口 19.2·底 8.2·高 10.3	良・にぶい橙	波状口縁、突起４。口縁、鎖状連珠文間磨き。胴、逆三角形磨消縄文。底、網代痕。内面、丁寧な磨き。	〃
134	小型土器	口縁～頚片	砂粒・橙	器形不詳。口縁、横位沈線２条。丁寧な磨き。	〃
135	〃	〃・口 9.5	良・にぶい黄橙	注口或いは有孔土器か。横位沈線間、刻み及び磨り消し。	〃
136	注口土器	胴～注口片	〃・黒	注口接続部、環状沈線５条。磨り消し部に鎖状文。磨き良好。	加曽利 B1 式
137	〃	注口片	〃・にぶい赤褐	丁寧な磨き。	〃
138	〃	〃	砂粒・にぶい黄橙	〃。	〃
139	〃	〃	〃・にぶい橙	短い注口部。中位環状突起。磨き良好。	〃
140	〃	〃	〃・にぶい黄橙	注口基部。釣手或いは補強部接着。磨き。	〃
141	〃	釣手片	白色粒·にぶい黄橙	およそ 1/3 残片。一端に環状突起を廻らす。磨き良好。	〃
142	深鉢	突起片	〃・暗赤褐	口縁装飾突起。刻みを伴う沈線文が隣接。	〃
143	〃	〃	〃・にぶい橙	口縁装飾突起。	〃
144	〃	〃	良・にぶい黄橙	口縁装飾突起。巻き毛状。	〃
145	〃	〃	砂粒・にぶい橙	口縁装飾突起。	〃
146	〃	〃	良・にぶい黄橙	〃。	〃
147	〃	口縁片	砂粒・にぶい赤褐	口唇、面を持つ突起を環状に廻らす。無文。	〃
148	異形土器	胴片	白色粒・にぶい橙	香炉形土器片か。透かし部を持つ。	〃
149	〃	釣手片	〃・にぶい黄橙	注口・香炉形土器等の釣手あるいは蓋の装飾か。	〃
150	浅鉢	胴下位～底・底 6.7	良・にぶい黄橙	内外磨き。底部、木葉痕。	〃
151	深鉢	底片	〃・にぶい橙	木葉痕。	〃
152	〃	口縁片	〃・にぶい褐	沈線・縄文充填による横帯文。内外磨き。	〃
153	〃	〃	〃・にぶい黄橙	〃。	〃
154	〃	〃	砂粒・橙	〃。	〃
155	〃	〃	〃・にぶい橙	〃。	〃
156	〃	〃	良・淡黄	〃。	〃
157	鉢	〃	〃・にぶい褐	〃。	〃
158	深鉢	〃	〃・にぶい黄橙	沈線・縄文充填による横帯文。横帯文の一部に列点。内外磨き。	〃
159	〃	〃	〃・灰黄褐	沈線及び沈線間刻みを加えた横帯文。内外磨き。	〃
160	〃	〃	白色粒・明褐	〃。	〃
161	〃	〃	良・橙	沈線・縄文充填による横帯文。内外磨き。	〃
162	〃	〃	〃・にぶい黄橙	沈線・斜行櫛描きによる横帯文。内外磨き。	〃
163	〃	〃	〃・橙	沈線・縄文充填による横帯文。沈線間垂下の装飾文。内外磨き。	〃
164	〃	〃	〃・にぶい赤褐	沈線及び沈線間刻みを加えた横帯文。内外磨き。	〃
165	〃	〃	〃・明褐	〃。	〃
166	〃	〃	白色粒・灰黄褐	沈線・斜行櫛描きによる横帯文。内外磨き。	〃
167	〃	〃	砂粒・にぶい黄橙	口唇に突起。沈線及び沈線間刻みを加えた横帯文。内外磨き。	〃
168	〃	〃	良・橙	沈線・縄文充填による横帯文。内外磨き。	〃

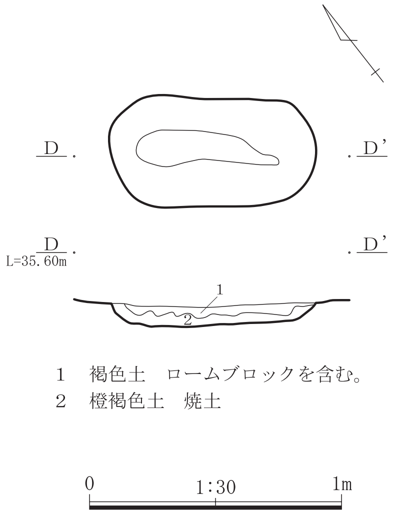
番号	器種	残存部位・法量 (㎝)	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
169	浅鉢	口縁片	良・にぶい黄橙	内外磨き。内面、沈線・縄文充填・列点による横帯文。補修孔。	〃
170	〃	〃	白色粒・褐	沈線及び沈線間刻みを加えた横帯文。内外磨き。口唇に装飾。	加曽利 B1 式
171	〃	〃	良・〃	内外磨き。内面、沈線・沈線間刻みによる横帯文。	〃
172	〃	〃	〃・浅黄	内外磨き。内面、沈線による横帯文。	〃
173	〃	〃	白色粒・黒	外面箆削り。内面磨き、沈線による横帯文。	〃
174	〃	〃	良・にぶい黄橙	外面箆削り。内面磨き、沈線による横帯文。口唇に刻み装飾。	〃
175	深鉢	〃	〃・灰褐	内外磨き。外面沈線・充填縄文、内面は刻みを加えた横帯文。	〃
176	〃	〃	砂粒・橙	内外磨き。外面沈線・充填縄文による横帯文。	〃
177	浅鉢	〃	良・明褐	外面箆削り。内面、沈線による横帯文。	〃
178	深鉢	〃	〃・にぶい橙	内外磨き、口唇に装飾。外面沈線、内面充填縄文の横帯文。	〃
179	〃	〃	〃・にぶい黄橙	内外磨き、波状口縁。外面充填縄文、内面刻みの横帯文。	〃
180	浅鉢	胴中位～底・底 8.8	〃・にぶい赤褐	外面箆削り・磨き。内面、沈線・刻みの横帯文。底、編物痕。	〃
181	〃	口縁～底片・口 11.8・底 10.0・高 5.0	白色粒・にぶい黄橙	外面箆削り後撫で。内面沈線の横帯文。口唇に刻み。底、楕円形か。網代痕。	〃
182	〃	口縁片	〃・橙	外面箆削り。内面沈線に刻みを入れた横帯文。口唇上端も同。	〃
183	〃	〃	良・〃	内外口縁沈線に刻みを入れた横帯文。口唇上端に刻み。	〃
184	〃	〃	〃・明赤褐	外面箆削り。内面磨き、口縁・口唇に列点文。	〃
185	深鉢	〃	砂粒・橙	沈線・縄文充填による横帯文。内外磨き。口唇上端に刻み。	〃
186	〃	〃	白色粒・灰黄褐	外面箆削り。内面磨き、内口縁に沈線の横帯文。	〃
187	浅鉢か	口縁片	良・にぶい黄橙	外面箆削り。内面、同心円・渦巻き形・沈線間に刻みを加える。	〃
188	深鉢	胴下位～底・底 7.4	〃・にぶい橙	胴、箆削り。底、編物痕。	〃
189	〃	〃　・底 9.8	白色粒・浅黄橙	〃　。	〃
190	〃	底・底 8.0	〃・橙	〃　。	〃
191	〃	胴下位～底片・底 11.6	〃・にぶい黄橙	〃　。	〃
192	〃	底片・底 12.0	良・明黄褐	底、編物痕。	〃
193	〃	〃・底 13.0	砂粒・にぶい黄橙	〃　。	〃
194	〃	胴下位～底片・底 7.6	白色粒・にぶい黄褐	胴、磨き。底、編物痕。	〃
195	浅鉢	〃　・底 14.0	良・明黄褐	内外磨き。底、編物痕。	〃
196	深鉢	〃　・底 8.2	白色粒・にぶい黄橙	外面箆削り、内面磨き。底、網代痕。	〃
197	〃	〃　・底 6.4	良・明黄褐	胴、不明瞭な斜行沈線。底、編物痕。	〃
198	〃	〃　・底 9.9	砂粒・明赤褐	胴、箆削り。底、編物痕。	〃
199	〃	〃　・底 10.2	良・黄橙	胴、箆削り。底、網代痕。	〃
200	〃	〃　・底 8.0	〃・にぶい橙	〃　。	〃
201	浅鉢	〃　・底 5.4	〃・にぶい黄橙	内外撫で。底、網代痕。	〃
202	深鉢	〃　・底 14.6	白色粒・黄橙	胴、箆削り。底、網代痕。	〃
203	〃	〃　・底 10.0	良・明黄褐	胴、箆削り。底、編物痕。	〃
204	〃	〃　・底 14.6	白色粒・明赤褐	〃　。	〃
205	石鏃	完・長 2.1・幅 1.6・厚 1.2	チャート	両脚系。	1.2g
206	〃	〃・長 1.9・幅 1.5・厚 0.3	〃	〃　。	0.8g
207	〃	〃・長 2.2・幅 1.6・厚 0.3	黒曜石	〃　。	0.7g
208	〃	〃・長 2.6・幅 1.6・厚 0.3	チャート	〃　。	0.8g
209	〃	〃・長 2.6・幅 1.4・厚 0.5	黒曜石	〃　。	1.3g
210	〃	〃・長 2.0・幅 1.2・厚 0.4	チャート	短脚系。	0.7g
211	〃	〃・長 2.6・幅 1.6・厚 0.5	〃	〃　。	1.9g
212	〃	2/3・長 1.2・幅 1.9・厚 0.3	〃	両脚系。尖頭部欠損。	0.9g
213	〃	4/5・長 3.0・幅 1.9・厚 0.4	〃	〃　。片脚部欠損。	2.0g
214	石錐	完・長 2.2・幅 1.9・厚 0.3	〃	先端磨滅。	1.4g
215	石鏃	4/5・長 2.2・幅 1.4・厚 0.4	〃	無脚有茎系。小型鏃。	1.1g
216	〃	完・長 2.1・幅 1.8・厚 0.6	〃	無脚系。	2.4g
217	〃	〃・長 2.4・幅 1.7・厚 0.5	〃	短脚系。	2.6g
218	石核	全・長 2.0・幅 3.1・厚 1.0	〃	上面中央に自然面を残す。	8.9g
219	未製品	全・長 3.7・幅 2.6・厚 1.2	〃	剥離調整中の未製品か。	11.2g
220	打製石斧	完・長10.0・幅 4.8・厚 1.3	変質玄武岩	扁平長礫を両側加工。両面に礫面を残す。刃部、一部損傷。	71.2g
221	〃	〃・長11.3・幅 5.6・厚 2.2	ホルンフェルス	扁平長礫を両側加工。両面一部に礫面を残す。礫面に研磨痕。	132.9g
222	〃	〃・長12.2・幅 6.1・厚 1.3	〃	扁平長礫を加工。片面先端に礫面を残す。礫面に研磨痕。	124.6g
223	〃	〃・長14.3・幅 6.7・厚 1.2	砂岩	片面一部に礫面を残す。	199.4g
224	〃	〃・長11.0・幅 6.9・厚 2.2	ホルンフェルス	片面一部に礫面を残す。	208.9g
225	〃	〃・長12.2・幅 6.4・厚 1.6	〃	扁平長礫を両側加工。両面に礫面を残す。	261.6g
226	〃	〃・長13.9・幅 7.1・厚 1.1	〃	軸方向が傾斜。装着方向に関連か。	195.6g
227	〃	〃・長9.9・幅 6.6・厚 2.1	〃	分銅型。扁平長礫を両側加工。両面に礫面を残す。	158.7g
228	〃	〃・長12.1・幅 8.6・厚 2.0	〃	〃　。大型剥離片から調整加工。	260.6g
229	〃	〃・長16.4・幅 7.3・厚 2.2	〃	扁平長礫を加工。片面のほとんどが礫面。	434.3g
230	石槌	1/3・長7.4・幅 5.2・厚 3.7	黒色頁岩	スタンプ形石器。両端を欠失。	258.8g
231	石棒	1/4・長9.1・幅 5.2・厚 4.3	変質玄武岩	円柱状に磨き。両端を欠失。	382.2g
232	棒状石製品	？・長7.5・幅 1.5・厚 1.1	緑色片岩	棒状加工後、現形中程に細加工。一端を欠き全容不詳。	23.7g
233	石錘	完・長 6.4・幅 4.0・厚 1.6	ホルンフェルス	扁平円礫の両端を打割加工。	60.4g
234	〃	1/2・長 4.4・幅 4.3・厚 1.1	デイサイト	1/2 を欠失。扁平円礫の先端を打割加工。	23.4g
235	凹石	1/4・長 3.5・幅 3.3・厚 1.1	砂岩	3/4 を欠失。小型品。扁平円礫の片面に多数の小凹み。	21.4g
236	〃	1/2・長 4.2・幅 6.0・厚 3.2	租粒輝石安山岩	1/2 を欠失。扁平円礫の片面凹みに多数の小凹み。	101.4g
237	〃	完・長11.4・幅 7.1・厚 2.3	〃	扁平長円礫の片面に１カ所、片面に２カ所の凹み。	237.9g
238	〃	〃・長12.9・幅 7.9・厚 4.8	〃	円礫の片面に３カ所、片面に２カ所の凹み。	606.9g
239	磨製石斧	〃・長10.6・幅 3.6・厚 1.3	珪質準片岩	扁平長円礫を研磨。刃部を剥離制作。	91.6g
240	石皿	1/2・長 11.7・幅 16.4・厚 7.2	祖粒輝石安山岩	小型品。円礫を加工。下面は打ち割り。欠損後、凹石に転用。	1617.3g
241	〃	1/2・長 22.3・幅 23.0・厚 6.6	〃	円礫を加工。欠失以前に凹石への転用が行われる。	3018.2g

第３節　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡５、掘立柱建物跡１、古墳１を確認し調査した。竪穴住居及び掘立柱建物は4世紀後半、古墳は5世紀中頃の所産である。

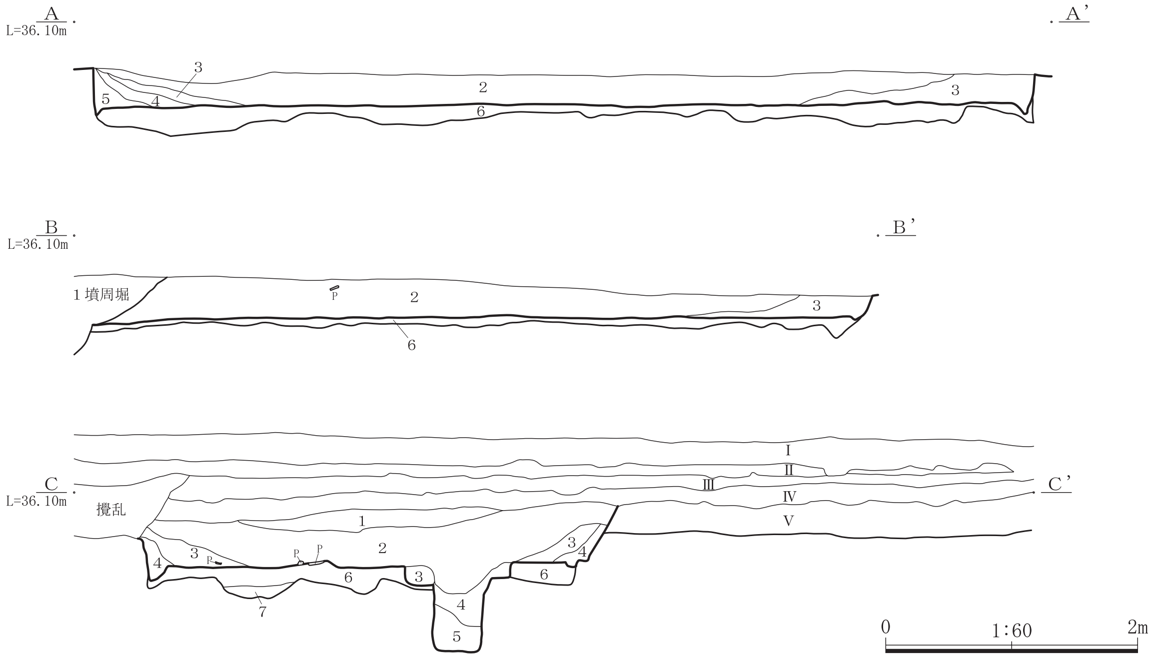
竪穴住居

⑴１号住居　X29776～29735・Y37278～37287、調査区の最南端に位置。東壁の北半が調査区域外に延び、北壁周辺が1号古墳に西壁北半部が攪乱により、それぞれ検出されていないが、北壁の一部が残存しており、全体の規模を知りうる。北西－南東方向を長軸とし、長軸長7.5m、短軸長6.7m の、方形住居である。残存高約0.3m を測る壁はほぼ直立し、一部を除き壁溝を伴う。床面は硬く、特に柱穴周辺から内側の硬化が顕著である。床面中央の北西寄りに住居の長軸に合わせ長円形の炉穴が設けられている。炉は長軸長0.8m、短軸長0.4m、深さ0.1m と小型で浅い。南壁下の東寄りに、方形2段造りのピットが穿たれていたが､典型的な貯蔵穴と認められる。壁溝もこの貯蔵穴には至っていない。柱穴は４カ所あり、何れからも柱痕が確認されている。

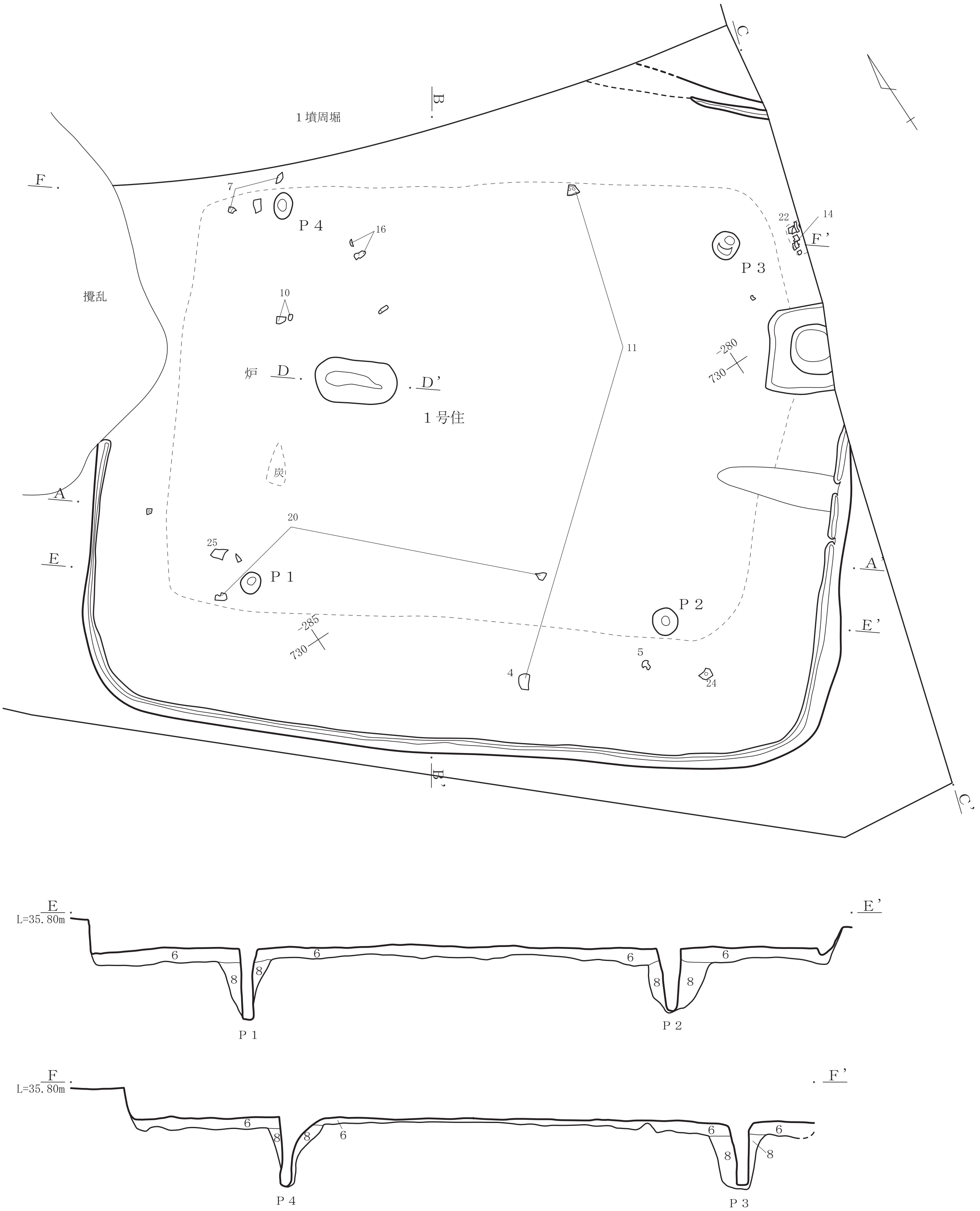


第57図　1号住居炉　平・断面図

1　明褐色土
2　暗黒褐色土　ロームブロックを含む。
3　黒色土　少量のロームブロックを含む。
4　明褐色土　少量のロームブロックを含む。
5　黒褐色土　少量のロームブロックを含む。
6　黒色土とロームブロックの混合土　床構築土
7　ロームブロック　床構築土



第58図　1号住居　断面図①

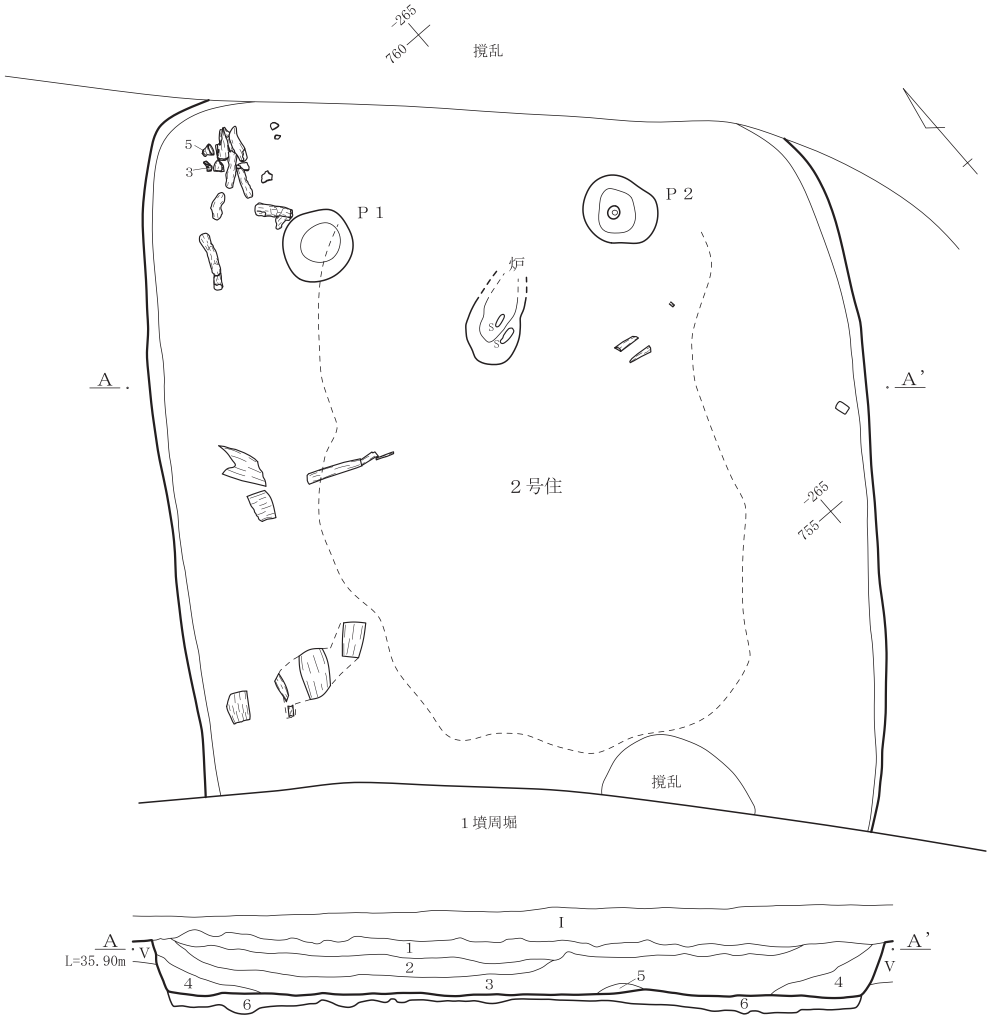


6　黒色土とロームブロックの混合土　床構築土
8　黒褐色土　柱穴埋土

0　1:60　2m

第59図　1号住居　平・断面図②

⑵２号住居　X29753 ～ 29762・Y37263 ～ 37271 に位置。北東壁は攪乱により、南西部は１号古墳の周溝により損なわれていたが、壁や角部の観察から、北東－南西方向を長軸とし角丸長方形を呈する住居と推定できる。長軸現長約 5.3m（推定長 6m 超）、短軸長 5.65m を測る。壁は、土層断面から約 0.3 ～ 0.4m を測り、壁溝はない。床面は中央部分が硬化している。床中央の北東半に焼土を伴う炉が検出された。柱穴は北東側の２カ所のみ確認された。伴出遺物は極めて少ない。床面及び壁付近に炭化材が出土しており、被火災住居と考えられる。

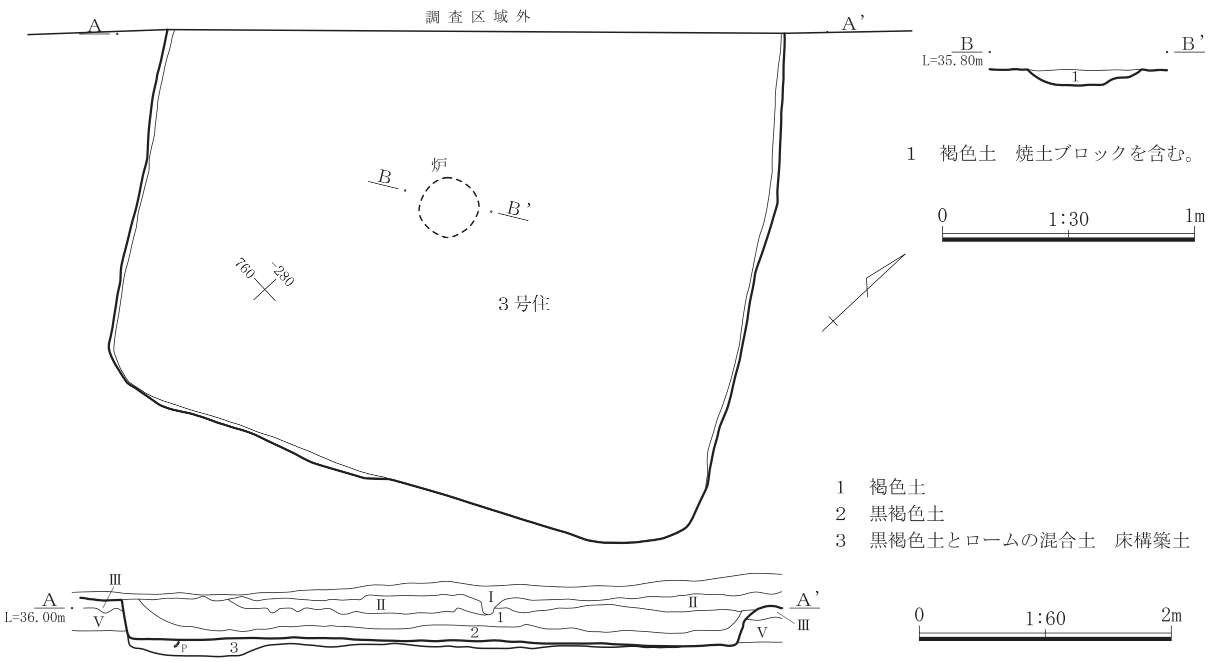


1　黒褐色土
2　暗褐色土
3　褐色土　ロームブロックを含む。
4　黒褐色土　ロームブロックを含む。
5　黒色土　炭化物を含む。
6　黒褐色土とロームブロックの混合土　床構築土

0　1:60　2m

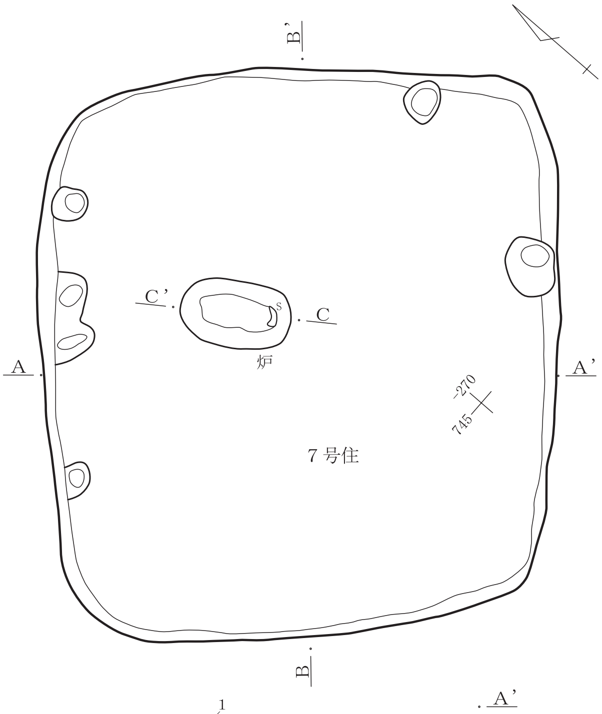
第60図　2号住居　平・断面図

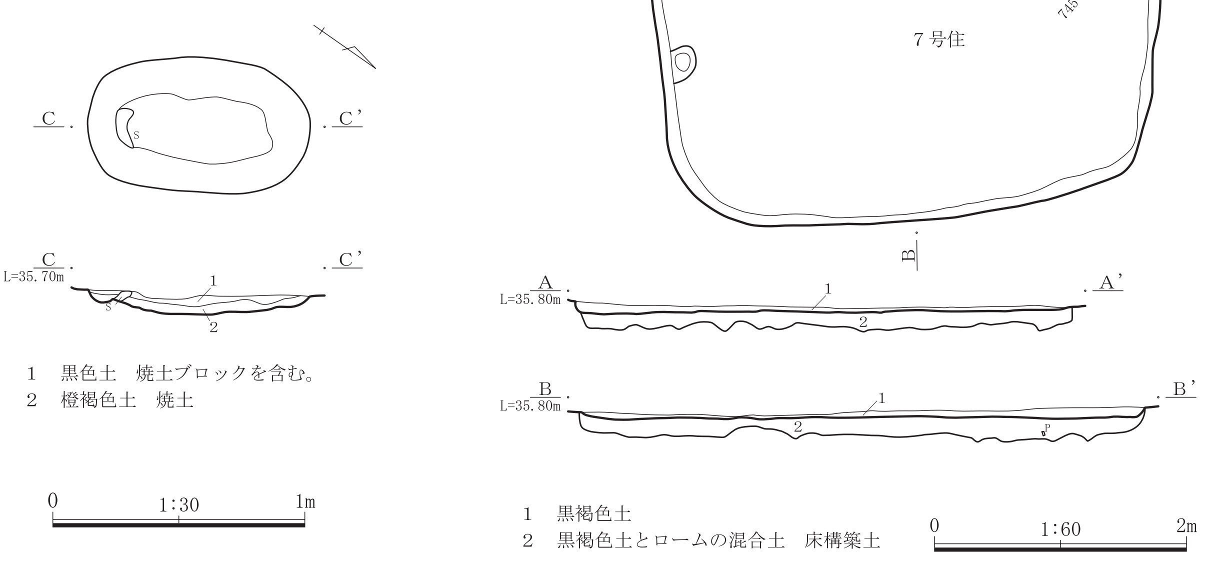
⑶３号住居　X29758 ～ 29765・Y37276 ～ 37282 に位置。北壁側が調査区域外に延びており、全容は知りえないが、北西－南東方向と南西－北東方向を軸とする方形住居とみられる。規模は北西－南東軸の現長 4.2m、南西－北東軸長 5.0m、土層残存壁高 0.3m を測る。壁溝及び柱穴等はなく、床面は壁付近を除いて硬化が認められる。床中央付近に、径 0.45m・深さ 0.05m の円形皿状の炉穴が設けられている。伴出遺物は皆無に近い。



第61図　3号住居・炉　平・断面図

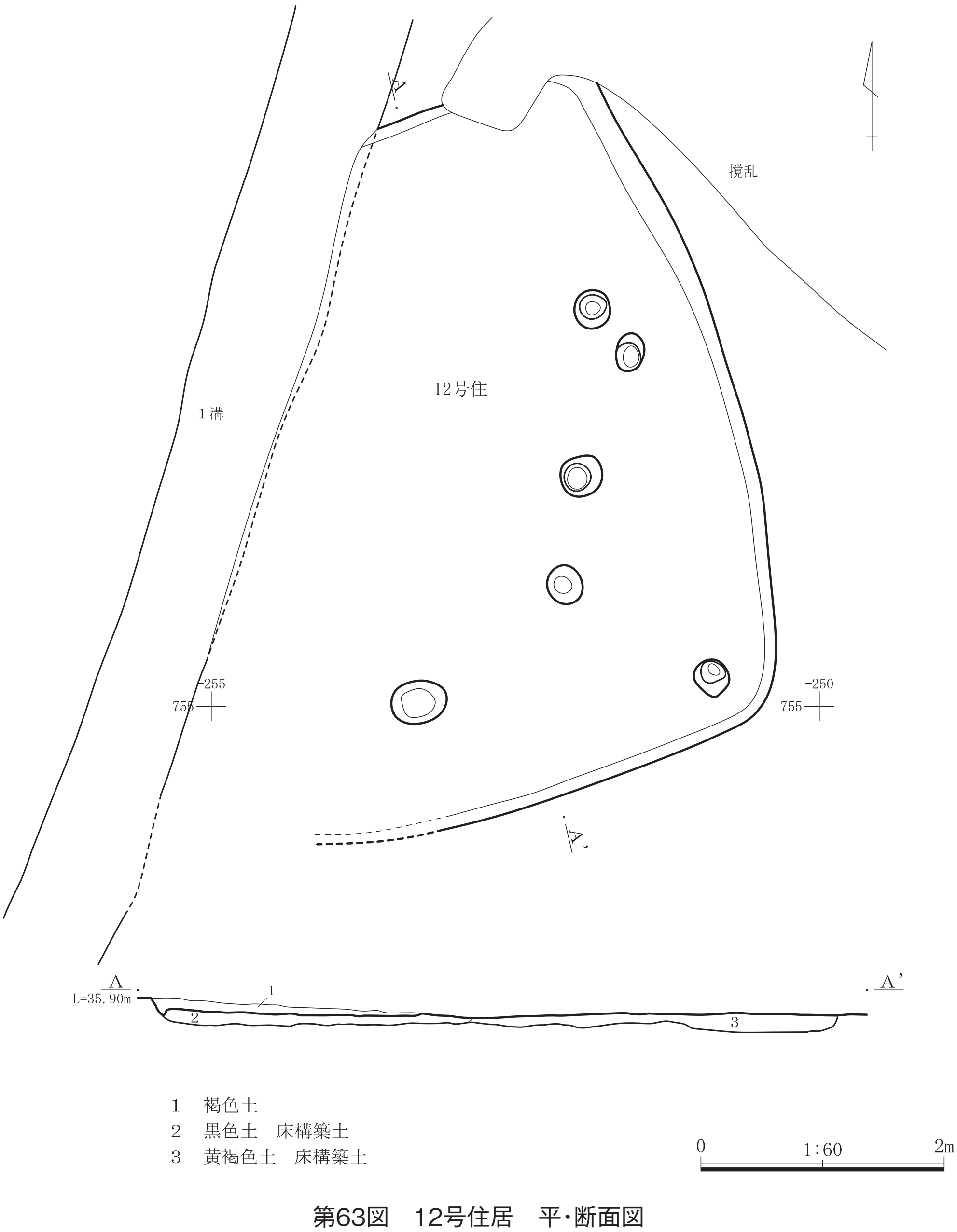
⑷７号住居　X29743 ～ 29749・Y37268 ～ 37274 に位置。南西－北東方向を長軸とする、長方形の住居である。規模は、長軸長 4.5m・短軸長 4.0m・残存壁高0.1mを測る。壁溝はない。床面は硬化している。中央部北寄りに長軸長 0.9m・短軸長 0.5m・深さ 0.1m の楕円形皿状の炉穴が設けられている。定型的な柱穴は掘方においても確認されていない。



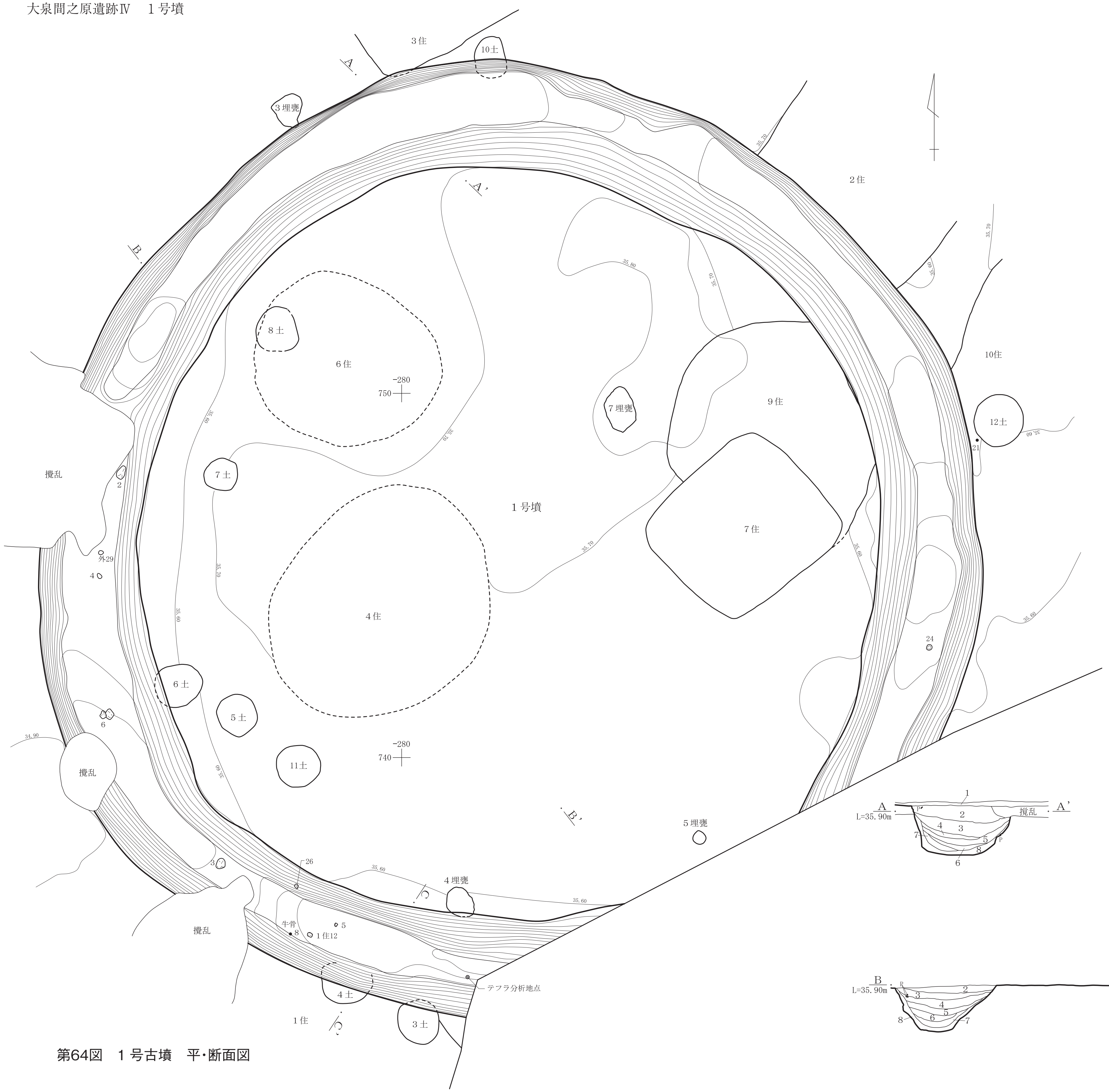


第62図　7号住居・炉　平・断面図

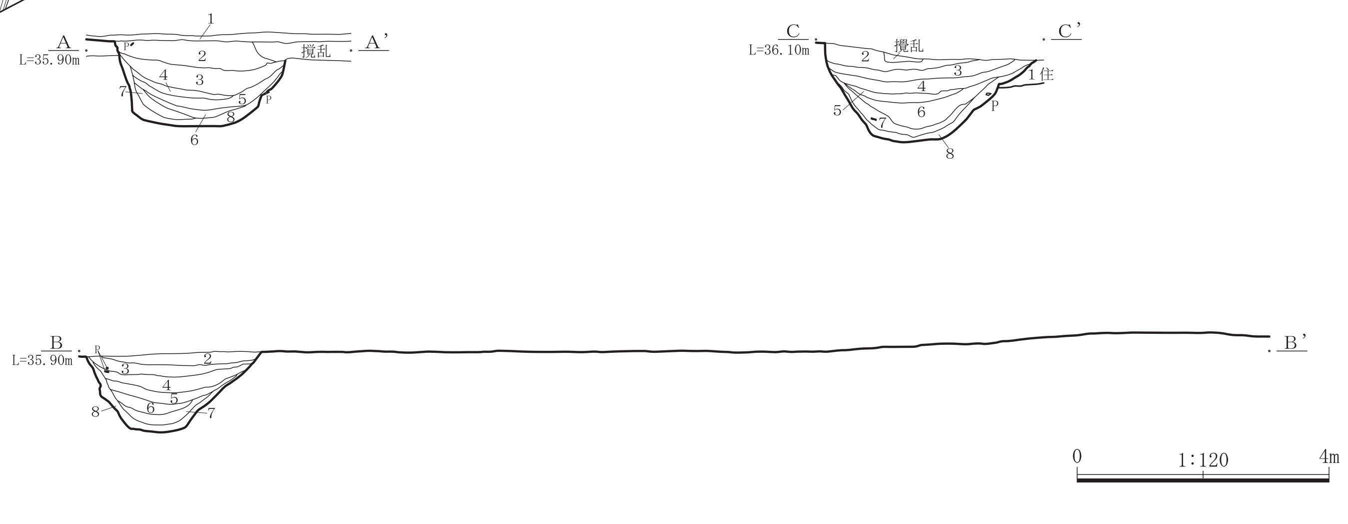
⑸12号住居　X29754 ～ 29760・Y37250 ～ 37256 に位置。北西半のほとんどを１号溝と攪乱によって欠く。また上層の攪乱により、生活床面を残していたカ所は北東端のごく一部に過ぎず、全景は、掘方調査によって確認している。北北西－南南東を長軸とした方形住居であったと推定される。その規模は、長軸長 5.7m・残存短軸長約 4.0m・残存壁高 0.1m を測る。土層図を作成しえた北壁下で壁溝を確認している。ピットを数カ所で検出しているが、柱穴と考え得るものはない。伴出遺物は無いが、土層・形状から、前期後半４世紀代の所産と考えられる。



第63図　12号住居　平・断面図



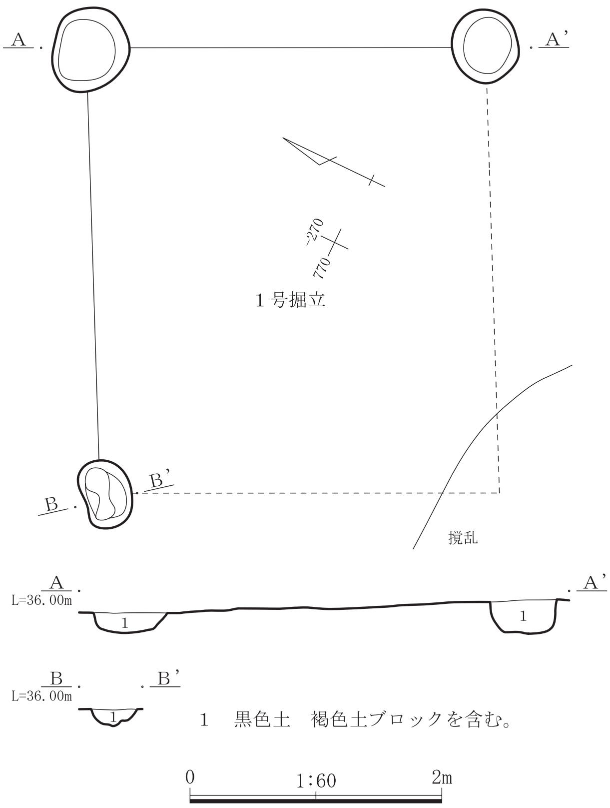
1　黒褐色土　現表土
2　黒色土　下半部に白色軽石（Hr−FA）を含む。
3　淡黒色土　上半部に白色軽石（Hr−FA）を含む。
4　暗黒褐色土
5　明黒褐色土
6　黒褐色土　ロームブロックを含む。
7　褐色土　ロームブロックを多量に含む。
8　黄褐色土　二次堆積ロームを主体とする。



第64図　１号古墳　平・断面図

掘立柱建物

⑴１号掘立柱建物　X29768～29773・Y37267～37273に位置。北東－南西方向を長軸とする。長軸長約3.5m、短軸長約3.2ｍを測る。４つの柱穴からなる１棟であるが、南西角の柱穴を攪乱によって欠く。伴出遺物は皆無であるが、柱穴の覆土の観察から、前期４世紀代の所産と推定される。



第65図　1号掘立柱建物　平・断面図

古　墳

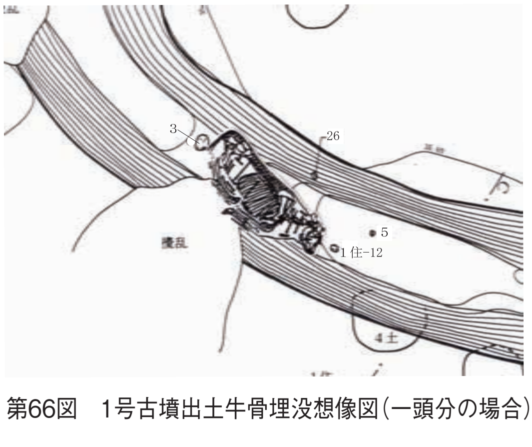
⑴１号古墳　X29732～29759・Y37264～37290に位置。南東端周溝部分が調査区外にかかるため、完全な全容把握には至っていないが、円墳としてよい。確認面における規模は、墳丘径20.0m・周溝外径26.0m、周溝幅6.0m・深さ1.3mを測る。

周溝は外部側傾斜角が55度と急傾斜であるのに比べ、墳丘側傾斜角は40度と緩やかであり、典型的な結界機能を示す。底面は概ね平坦であるが、北・西・南東に若干の高まりが認められ、掘削工程を考察する上で興味深い。遺物は、円筒埴輪・朝顔形埴輪・土師器等が周溝内から出土している。円筒埴輪は４個体出土しているが、何れも周溝南東部の底面上0.3m～0.4mの墳丘側に認められた。南東側墳丘盛土の崩落にともない、周溝に転落した様相を示すものであろう。この他、周溝覆土中から朝顔形埴輪の破片が出土している。埴輪の出土個体数から、密集列状の配置がなされていたとは考えにくい。

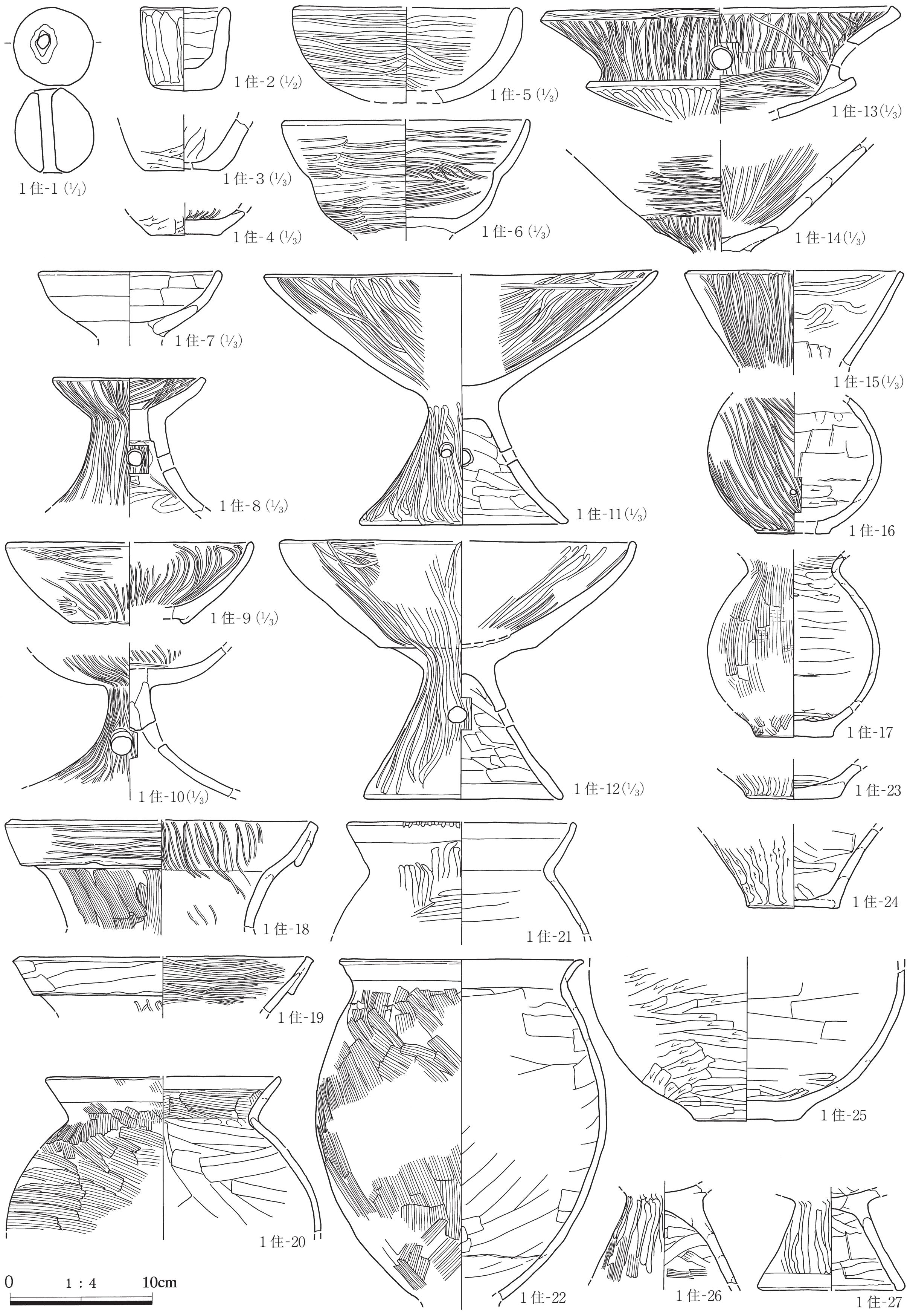
周溝内南東部から、牛の頭骨の一部が１点検出された。検出カ所の周溝埋没土には層序の乱れはなく、牛骨に伴う土坑等の掘り込みも確認されなかった。牛骨の出土位置は周溝底面からおよそ20㎝で、埴輪の転落埋没と相前後していたものと観察しえた。また、古代牛が現生種に比しかなり小型であったとの知見（松井章2005）によれば、周溝内に遺骸の全身が入っていた可能性も完全には否定できない。近接する周溝セクションベルトの土層観察では、牛骨や埴輪出土層を被覆し、底面から約50㎝に位置する上位の埋没土層に６世紀初頭降下の榛名山二ッ岳渋川テフラ（Hr-FA）が認められた。牛骨の出土層位はこれより下位であったことから、埴輪と牛骨の埋没はHr-FA降下を遡る５世紀中頃から後半と推定したい。なお､第４章第２節の放射性炭素（^{14}C）による年代測定では牛骨は７世紀後半の所産との測定値が示され､発掘時の所見と見解を異としている。

なお、昭和初期に実施・刊行された全県悉皆調査報告書（群馬県1938）には、本古墳に該当するものはなく､この調査以前に亡失していたと考えられる。

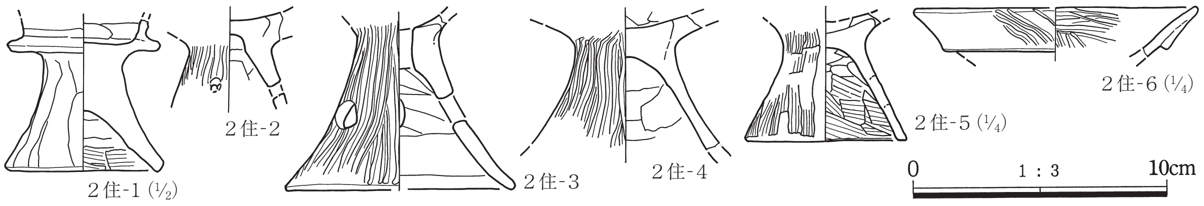
【参考文献】西本豊弘・松井 章1999『②考古学と動物学』同成社、群馬県1938『上毛古墳綜覧』 群馬県史蹟名勝天延記念物調査報告書第五輯。



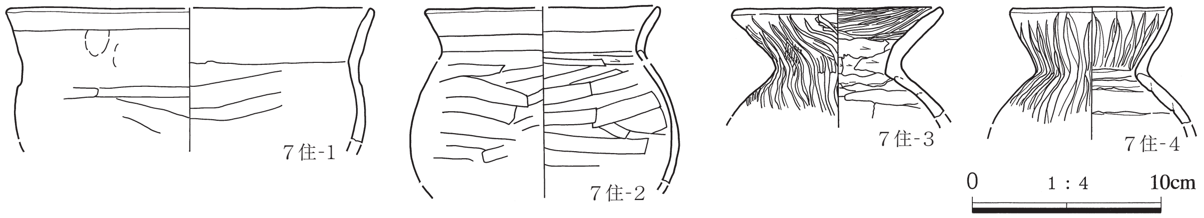
第66図　1号古墳出土牛骨埋没想像図（一頭分の場合）



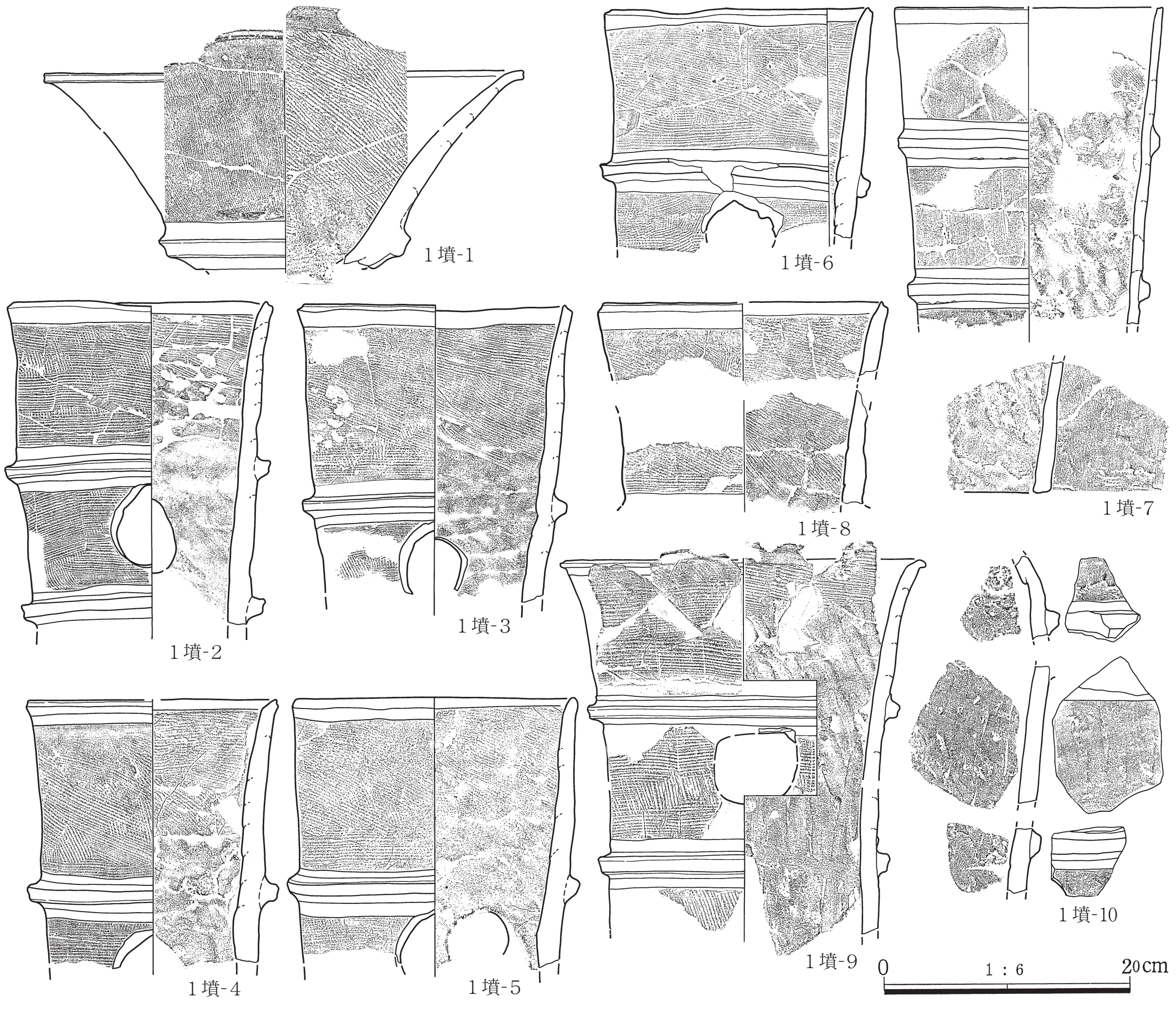
第67図　1号住居出土遺物



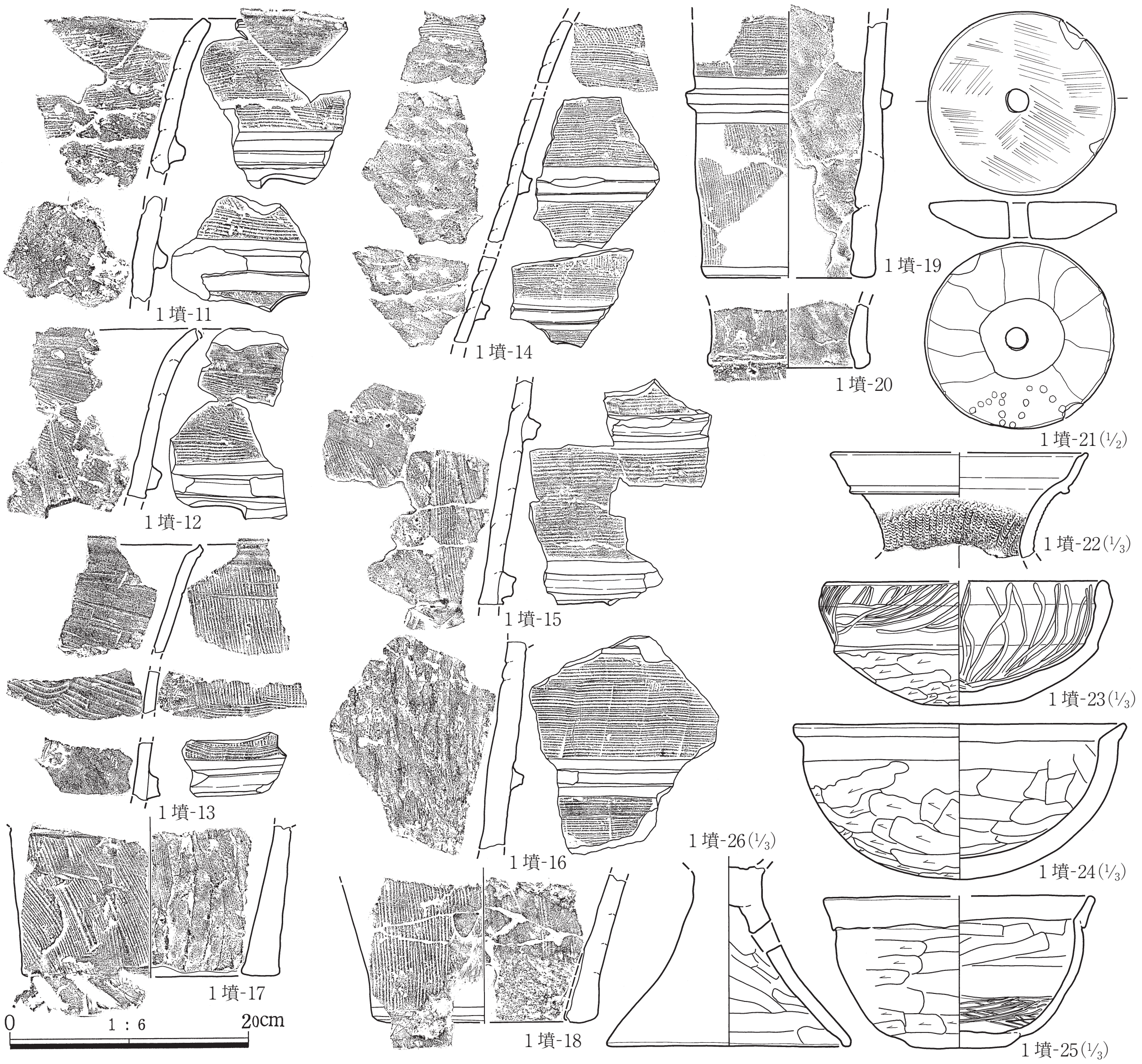
第68図　2号住居出土遺物



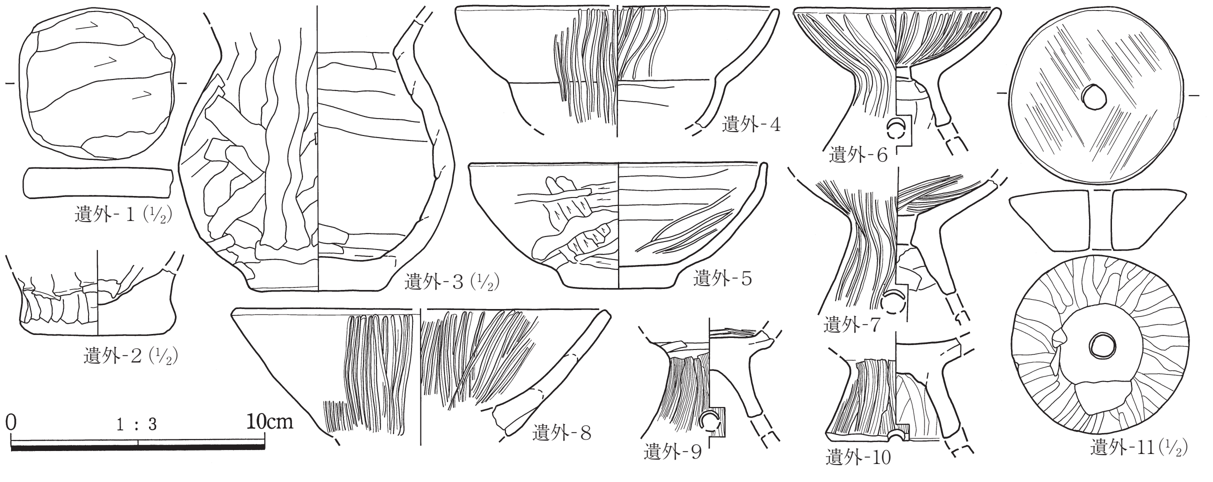
第69図　7号住居出土遺物



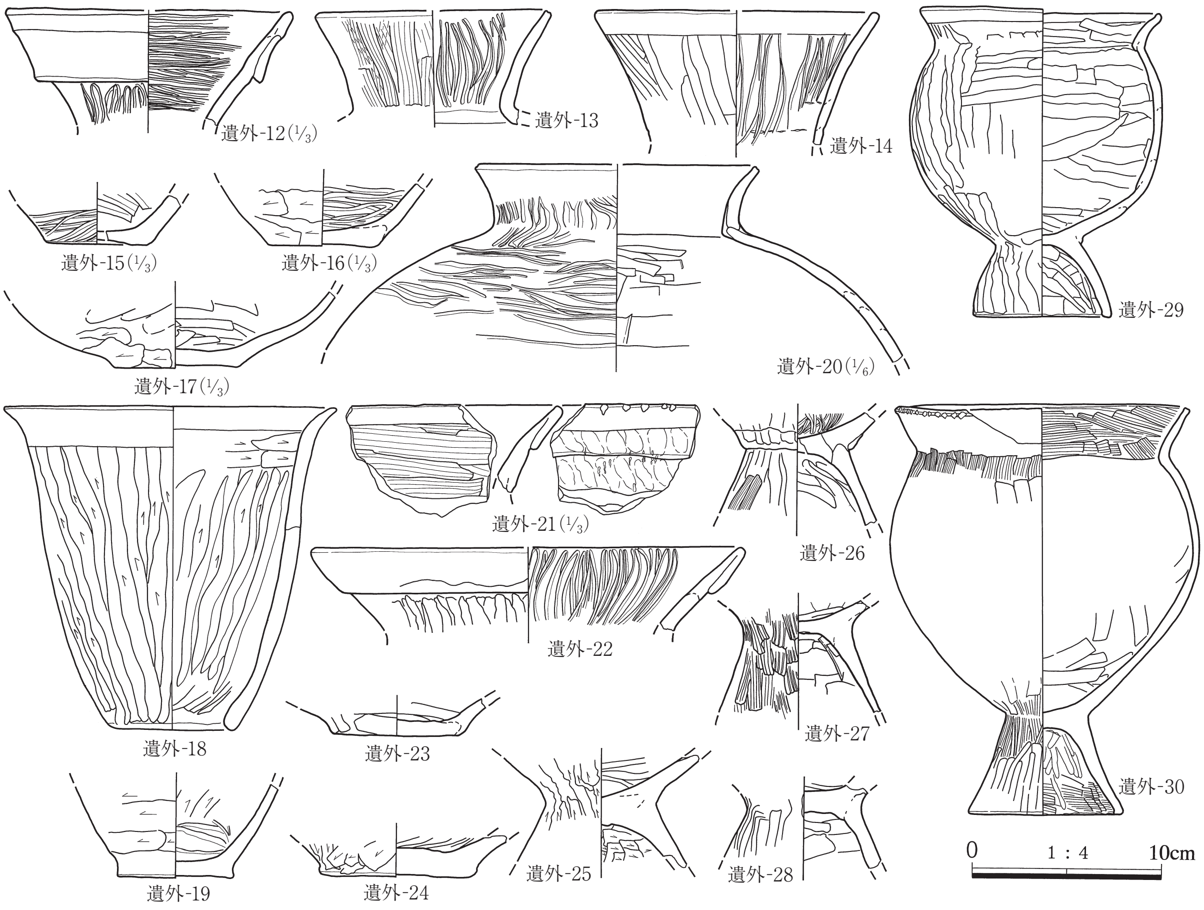
第70図　1号古墳出土遺物①



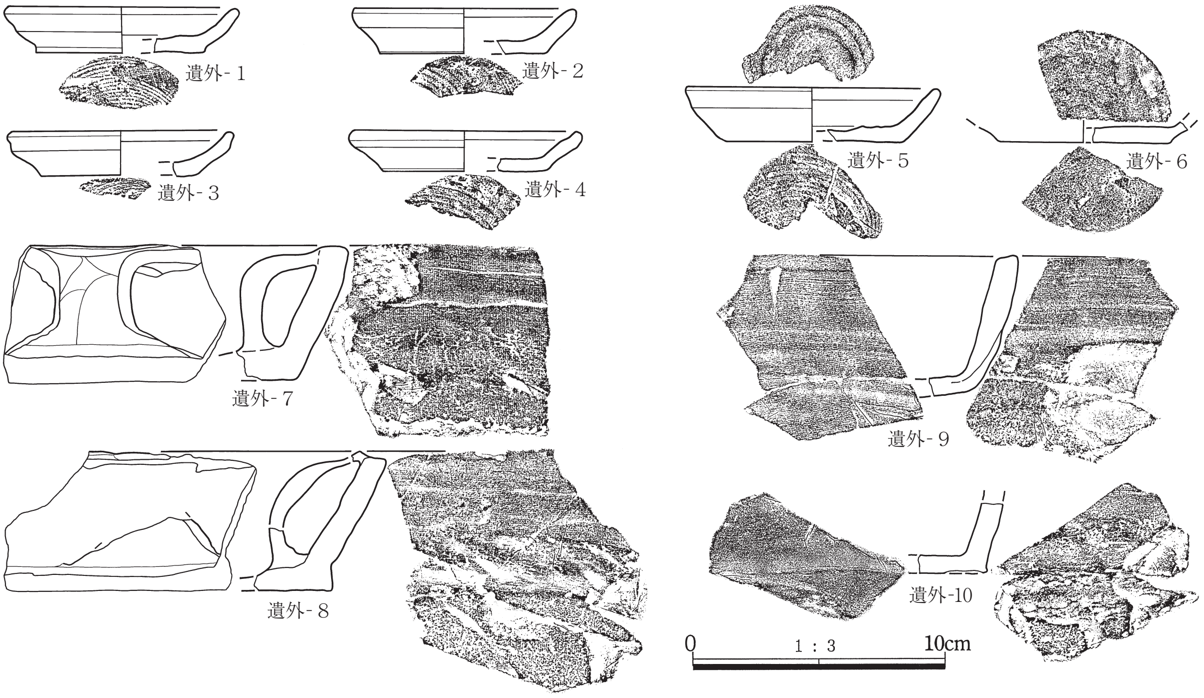
第71図　1号古墳出土遺物②



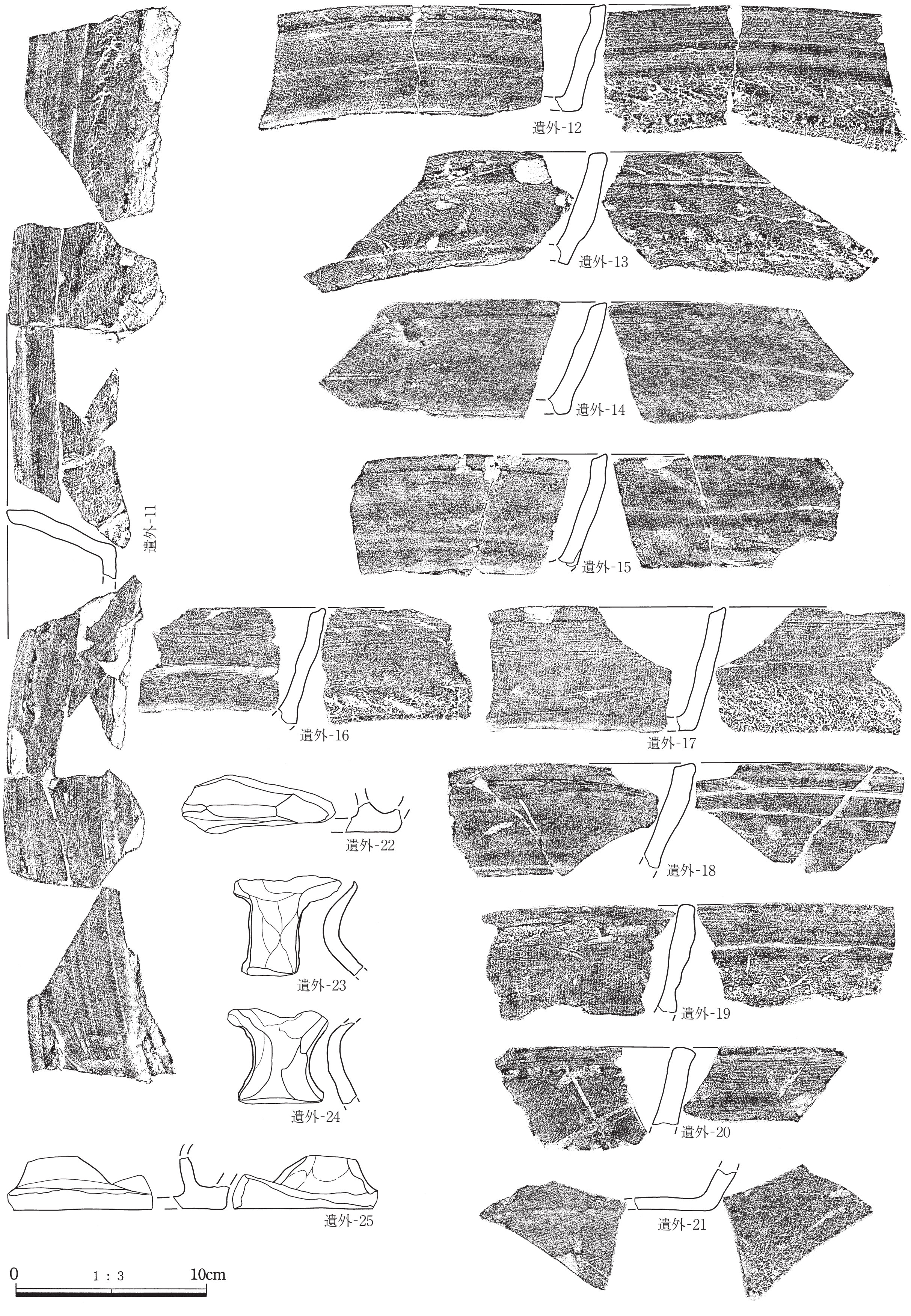
第72図　遺構外出土遺物⑪



第73図　遺構外出土遺物⑫



第74図　遺構外出土遺物⑬



第75図　遺構外出土遺物⑭

第４節　その他の遺構と遺物

前述の遺構及び遺物とは別に、後代の溝と遺物が検出されている。

遺　構

⑴**１号溝**　X29742 ～ 29763・Y37253 ～ 37261 に位置。調査区Ⅳの東部をほぼ南北に通じ、ともに調査区域外に至る。長さ 21.0m、確認面における幅は平均 1.0m・深さ 0.5m であるが、調査区界の土層からは幅 2.0m・深さ 1.0m を測る。底面は 0.5 ～ 0.6m で概ね平坦である。北から南方向へわずかに傾斜している。土層観察から、底面に泥化の痕跡はなく当初は通水していたとみられるが、順次埋没しながら維持され中位では泥化が認められ、最終的には洪水砂により埋没し放置されたとみられる。伴出遺物はないが、初期の埋没土中に少量ながら浅間Ａ軽石（As-A）が認められることから、近世・江戸時代後期に掘削され、その後自然埋没した用水路の一部と考えられる。

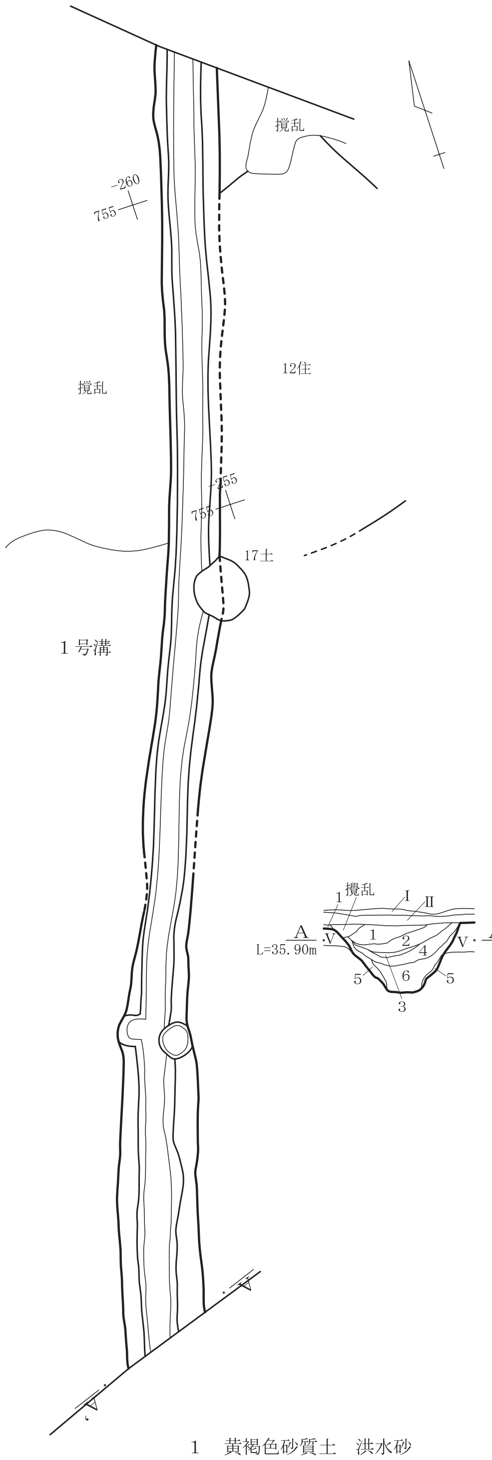
⑵**１号・２号ピット**　調査区Ⅲにおいて検出。１号は X29769・Y37154 に、２号は X29777・Y37153 に位置。ともに径 0.3m、深さ 0.5 mほどの円形である。形状・土層が共通している。柱・杭設置のための人為的なものと考えられるが、性格は不明である。

遺　物

⑴**土器**　調査区Ⅳの表土中から「かわらけ」が出土している。いずれも破片であるとともに単独の出土であり、関連する遺構は検出されていない。

⑵**瓦器**　調査区Ⅲの南西部、X29765 ～ 29766・Y37167 ～ 37168 に内耳付き焙烙片が集中して出土した。すべて破片であり、関連する遺構は確認されていない。破片を一括して廃棄したものとみられ、調査区外の近接地に焙烙の大量使用に関わる施設の存在が考えられる。

【参考文献】（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985『浜町屋敷内遺跡Ｃ地点』



1　黄褐色砂質土　洪水砂
2　暗褐色砂質土　洪水砂
3　黒褐色土
4　褐色土
5　黄褐色土　ロームブロックを含む。
6　暗褐色土　白色軽石(As-A)を含む。

0　1：120　4m

第76図　1号溝　平・断面図

第５表　古墳時代遺物観察表

１号住居　第 67 図　PL45　（坂口）

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	土製品　玉	完形・横 1.4・縦 1.5	白色粒・灰黄褐	全面 撫で。重 2.9 ｇ。	
2	土師器 ミニチュア	1/2・口 3.2・底 2.2・高 2.9	白・黒色粒・石英・浅黄橙	外面 撫で。 内面 横位撫で。	
3	土師器 ミニチュア	底部・底 4.0	白色粒・にぶい橙	外面 横位箆撫で。内面 斜縦位箆撫で。	
4	土師器 坩	底部・底 3.7 ～ 4.0	白色粒・にぶい黄橙	外面 体部～底部箆削り。一部黒斑。 内面 箆削り後斜縦位箆研磨。	
5	土師器 坏	口縁～体部破片・口(12.0)	白色粒・角閃石・にぶい黄橙	外面 口縁部～体部横位箆撫で後撫で。 内面 口縁部～体部横位箆撫で後撫で。	
6	土師器 坩	口縁～体部・口（12.6）	白・褐色粒・にぶい橙	外面 口縁部～体部横位箆撫で後撫で。 内面 口縁部～体部横位箆撫で後撫で。口縁部赤色塗彩。	
7	土師器 器台	器受部・口 9.6	黒・褐色粒・浅黄橙	外面 器受部横位箆撫で。 内面 器受部横位箆撫で。	
8	土師器 器台	口縁～脚部 3/4・口 8.0	白色軽石・角閃石・橙	外面 器受部～脚部縦位箆研磨。 内面 受部斜横位箆研磨、脚部箆撫で。4 個の円窓。	
9	土師器 高坏	坏部破片・口（13.0）	白・褐色粒・明赤褐	外面 口縁部横位箆研磨、体部斜縦位箆研磨。 内面 口縁～体部斜縦位箆研磨。内外面赤色塗彩。	
10	土師器 器台	口縁部・裾部欠損	白・褐色粒・石英・浅黄橙	外面 器受部～脚部縦位箆研磨。 内面 器受部縦位箆研磨、脚部撫で。3 個の円窓。	
11	土師器 高坏	口縁～裾部 3/4・口(20.5)・底 10.8・高 13.1	白色軽石・橙	外面 坏部～脚部縦位箆研磨。内面　坏部斜横位箆研磨、脚部横位箆撫で、裾部横撫で。4 個の円窓。外面・坏部内面赤色塗。	
12	土師器 高坏	口縁～裾部 1/2・口(18.6)・底 10.4・高 13.5	白・黒・褐色粒・橙	外面坏部～脚部縦位箆研磨。内面 坏部斜横位箆研磨、脚部横位箆撫で、裾部横撫で。3 個の円窓。外面・坏部内面赤色塗彩。	
13	土師器 高坏	坏部破片・口（18.0）	白・黒色粒・にぶい橙	外面 口縁部・体部縦位箆研磨、底部箆研磨。内面 口縁部～体部縦位箆研磨､底部横位箆研磨。体部に円窓。両面赤色塗彩。	
14	土師器 高坏	坏部破片	白・黒色粒・橙	外面 体部横位箆撫で、底部縦位箆撫で。 内面 体部斜縦位箆研磨。	
15	土師器 坩	口縁～頸部破片・口(11.6)	白・黒色粒・にぶい橙	外面 口縁～頸部縦位箆研磨。 内面 口縁～頸部横位箆撫で。外面赤色塗彩。	
16	土師器 小形壺	肩～底部・底 5.0	白色軽石・角閃石・にぶい黄橙	外面 斜縦位箆研磨。一部黒斑。 内面 横位箆撫で。胴部下位に 1 個の焼成前穿孔。	
17	土師器 小形壺	口縁下位～底部・底 5.4	白・褐色粒・橙	外面 口縁部～胴部横位刷毛目後縦位刷毛目。 内面 口縁部横位刷毛目、胴部横位箆撫で。	
18	土師器 壺	口縁～頸部破片・口(21.8)	白色軽石・黒色粒・橙	外面 口縁部横位箆研磨、頸部斜縦位刷毛目。 内面 口縁部～頸部斜縦位箆研磨。	
19	土師器 壺	口縁片・口（21.0）	黒・褐色粒・黄橙	外面 口縁部横位箆撫で、頸部縦位箆研磨。 内面 口縁部～頸部横位箆研磨。内面赤色塗彩。	
20	土師器 甕	口縁～胴部中位・口(16.8)	白色粒・橙	外面 口縁部斜縦位刷毛目後横撫で、胴部斜横位刷毛目。 内面 口縁部横位刷毛目後、上半横撫で、胴部斜横位箆撫で。	
21	土師器 甕	口縁～胴部上位・口(16.0)	白・黒色粒・にぶい黄橙	外面 口縁部上半横撫で、下半～胴部上位縦位箆研磨、中位横位撫で。口唇部に箆刻み。内面 口縁部～胴部横位箆撫で。	
22	土師器 甕	口縁～胴部下位1/2・口 17.2	白・黒色粒・橙	外面 口縁部横撫で、胴部斜縦位刷毛目。 内面 口縁部横撫で、胴部斜横位箆撫で。	
23	土師器 壺	底部・底 6.6	白・黒色粒・黄橙	外面 胴部下位縦位箆研磨。底部付近に黒斑。 内面 底部撫で。	
24	土師器 甕	胴部下位～底部・底 6.4	白・黒色粒・にぶい橙	外面 胴部縦位箆撫で、底面撫で。 内面 胴部横位箆撫で。	
25	土師器 壺	胴部中位～底部・底 7.5	白色粒・橙	外面 胴部斜横位箆撫で。 内面 胴部斜横位箆撫で。	
26	土師器 台付甕	台部破片	白・黒色粒・角閃石・にぶい橙	外面 台部縦位箆撫で。 内面 台部斜横位箆撫で。	
27	土師器 台付甕	台部破片・底 10.2	白色粒・にぶい黄橙	外面 台部縦位箆撫で、裾部横撫で。 内面 台部横位箆撫で、裾部横撫で。	

２号住居　第 68 図　PL45　（坂口）

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	土師器 ミニチュア	ほぼ完形・底 4.2	白・黒・褐色粒・橙	外面 坏部撫で、脚部縦位箆撫で。 内面 坏部撫で、脚部横位箆撫で。	
2	土師器 器台	脚部上半	白・黒色粒・橙	外面 脚部縦位箆研磨。 内面 脚部撫で。4 個の円窓。外面赤色塗彩。	
3	土師器 器台	台部・底 9.0	白・黒色粒・にぶい橙	外面 脚部縦位箆研磨。 内面 脚部横位箆撫で、裾部横撫で。5 個の円窓。	
4	土師器 器台	脚部上半	白・黒色粒・浅黄橙	外面 脚部縦位箆研磨。 内面 脚部横位箆撫で。	
5	土師器 台付甕	台部・底 8.6	白色軽石・にぶい橙	外面 台部縦位刷毛目。 内面 台部横位刷毛目。	
6	土師器 壺	口縁部破片（11.2）	白・黒・褐色粒・にぶい橙	外面 口縁部斜横位箆研磨。 内面 口縁部斜横位箆研磨。	

７号住居　第 69 図　PL45・46　（坂口）

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	土師器 坩	口縁～胴部上位・口(19.4)	白・黒色粒・土器細片・浅黄橙	外面 口縁部横撫で、胴部斜横位箆撫で。 内面 口縁部横撫で、胴部横位箆撫で。	

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
2	土師器 甕	口縁～胴部中位・口(12.4)	白・褐色粒・浅黄橙	外面 口縁部横撫で、胴部横位箆撫で。 内面 口縁部横撫で、胴部横位箆撫で。	
3	土師器 壺	口縁～胴部上位・口 11.2	白・黒色粒・橙	外面 口縁部～胴部斜縦位箆研磨。 内面 口縁部上半斜横位箆研磨、下半～胴部横位箆撫で。	
4	土師器 坩	口縁～胴部上位・口 8.6	白・黒色粒・長石・にぶい橙	外面 口縁部～胴部斜縦位箆研磨。 内面 口縁部縦位箆研磨、胴部撫で。接合痕顕著。	

１号古墳　第 70・71 図　PL46　（坂口）

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	円筒埴輪 (朝顔形)	口縁部破片・口(39.6)	白色粒・角閃石・長石・石英・橙	外面 縦ハケ。 内面 横・斜横ハケ。	
2	円筒埴輪	口縁～１凸帯・口 21.8	白色粒・角閃石・長石・石英・にぶい橙	外面 2･3 段縦ハケ後Ｂ種横ハケ。 内面 2 段撫で、3 段斜横ハケ。	
3	円筒埴輪	口縁～２段・口 22.0	白・黒色粒・浅黄橙	外面 2･3 段縦ハケ後Ｂ種横ハケ。内面 2 段撫で､3 段斜横ハケ。	
4	円筒埴輪	口縁～２段・口(20.0)	白・黒色粒・浅黄橙	外面 2･3 段縦ハケ後Ｂ種横ハケ。内面 2 段撫で､3 段斜横ハケ。	
5	円筒埴輪	口縁～２段・口 22.8	白･黒･褐色粒・灰白	外面 2･3 段縦ハケ後Ｂ種横ハケ。内面 2 段撫で､3 段斜横ハケ。	
6	円筒埴輪	口縁～２段・口 21.2	黒・褐色粒・にぶい黄橙	外面 2･3 段縦ハケ後Ｂ種横ハケ。 内面 2 段撫で、3 段斜横ハケ。	口縁部ヘラ記号
7	円筒埴輪	口縁～１凸帯・口(22.0)	黒色粒・石英・浅黄橙	外面 2･3 段縦ハケ。 内面 2 段撫で、3 段斜縦ハケ。	
8	円筒埴輪	口縁～３段・口(22.4)	白・黒色粒・浅黄橙	外面 3 段縦ハケ後Ｂ種横ハケ。内面 3 段斜横ハケ。	ヘラ記号
9	円筒埴輪	口縁～１凸帯・口(30.0)	白・黒・褐色粒・にぶい黄橙	外面 2･3 段縦ハケ後Ｂ種横ハケ。 内面 2 段撫で、3 段斜横ハケ。	
10	円筒埴輪	１凸帯～２凸帯	白・黒・褐色粒・にぶい橙	外面 箆撫で。 内面 箆撫で。	
11	円筒埴輪	口縁・凸帯部破片	白・黒色粒・橙	外面 2･3 段縦ハケ後Ｂ種横ハケ。内面 2 段撫で､3 段斜横ハケ。	
12	円筒埴輪	口縁･2 凸帯部破片	白・黒・褐色粒・にぶい黄橙	外面 縦ハケ後Ｂ種横ハケ。 内面 斜横ハケ。	
13	円筒埴輪	口縁～２凸帯部破片	白・黒・褐色粒・橙	外面 縦ハケ後Ｂ種横ハケ。内面　斜横ハケ。	
14	円筒埴輪	１凸帯～２凸帯部破片	石英・長石・浅黄橙	外面 2･3 段縦ハケ後Ｂ種横ハケ。内面 2 段撫で､3 段斜横ハケ。	
15	円筒埴輪	１凸帯～２凸帯部破片	白・黒・褐色粒・石英・浅黄橙	外面 2･3 段縦ハケ後Ｂ種横ハケ。 内面 2 段撫で、3 段斜横ハケ。	
16	円筒埴輪	１凸帯部破片	白・黒・褐色粒・にぶい橙	外面 縦ハケ後Ｂ種横ハケ。 内面 撫で。	
17	円筒埴輪	基部破片・底(22.0)	白・黒・褐色粒・橙	外面 縦ハケ。内面　縦箆撫で。	
18	円筒埴輪	基部破片・底(19.2)	白・黒・褐色粒・にぶい橙	外面 縦ハケ。 内面 縦箆撫で。	
19	円筒埴輪	基～２段破片・底(13.8)	白・黒色粒・長石・石英・浅黄橙	外面 1 段縦ハケ、2 段縦ハケ後Ｂ種横ハケ。 内面 1･2 段撫で。	
20	円筒埴輪	基部・底(13.6)	白・黒色粒・石英・浅黄橙	外面 縦ハケ。 内面 撫で。	
21	石製紡錘車	完形	蛇紋岩	縦 5.2　横 5.3　厚 1.0　重 41.9 ｇ。15 個の円形の刺突。	
22	須恵器 𤭯	口縁～頸部破片・ 口(10.8)	白色粒・外面灰、内面にぶい赤褐	外面 轆轤整形、頸部波状文。 内面 轆轤整形。口縁～頸部内面自然釉、白斑。	
23	土師器 坏	1/2･口(11.9)･高 5.2	白・黒色粒・橙	外面 口縁部斜横位箆研磨、体部～底部箆削り。 内面 口縁部～底部横位箆撫で後縦位箆研磨。	
24	土師器 坏	ほぼ完形・口 14.0･高 6.5	白・黒・褐色粒・石英・にぶい橙	外面 口縁部横撫で、体部～底部箆削り。 内面 口縁部横撫で、体部～底部箆撫で。	
25	土師器 鉢	1/3･口(11.4)･底 4.0･ 高 6.4	白・黒・褐色粒・浅黄橙	外面 口縁部横撫で、体部横位箆撫で、底部箆削り。 内面 口縁部横撫で、体部横位箆撫で、底部撫で。	
26	土師器 器台	脚部・底 10.2	白・黒・褐色粒・浅黄橙	外面 脚部縦位箆研磨。 内面 脚部斜横位箆撫で、裾部横撫で。3 個の円窓。	

遺 構 外　第 72・73 図　PL46・47　（坂口）

番号	器種	残存部位・法量（㎝）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
1	土製円盤	完形･縦 4.0･横 4.0･厚 0.8	白色粒・角閃石・にぶい橙	外面 箆削り。 内面 撫で。土師器甕胴部の転用？。	
2	土師器 ミニチュア	底部・底 4.0	白・褐色粒・角閃石・石英・にぶい橙	外面 縦位箆撫で。 内面 斜縦位箆撫で。	
3	土師器 ミニチュア	頸～底部・底 3.6	白・黒・褐色粒・にぶい赤褐	外面 斜縦位箆撫で。 内面 横位箆撫で。外面黒斑。	
4	土師器 坩	口縁～体部破片･口(12.7)	白・黒・褐色粒・にぶい橙	外面 口縁部～体部縦位箆研磨。 内面 口縁部縦位箆研磨、体部撫で。	
5	土師器 鉢	1/3･口 11.8･底 4.0･高 4.9	白・黒・褐色粒・橙	外面 口縁部～体部斜縦位刷毛目後斜横位箆撫で。 内面 口縁部～体部横位箆撫で。	
6	土師器 器台	器受部～脚部中位・口 8.2	白・黒・褐色粒・浅黄橙	外面 器受部～脚部斜縦位箆研磨。 内面 器受部斜縦位箆研磨、脚部箆撫で。5 個の円窓か。	
7	土師器 器台	器受部～脚部中位	白色軽石・長石・にぶい橙	外面 器受部～脚部斜縦位箆研磨。 内面 器受部斜横位箆研磨、脚部箆撫で。4 個の円窓。	
8	土師器 高坏	坏部破片・口(14.4)	白・黒・褐色粒・明赤褐	外面 坏部縦位箆研磨。 内面 坏部縦位箆研磨。	
9	土師器 器台	脚部	白・黒色粒・黄橙	外面 脚部縦位箆研磨。 内面 脚部撫で。4 個の円窓。	
10	土師器 器台	脚部上位	白・黒・褐色粒・橙	外面 脚部縦位刷毛目。 内面 脚部斜横位箆撫で後撫で。4 個の円窓。	
11	石製紡錘車	完形	蛇紋岩	縦 4.8　横 4.7　厚 1.6　重 47.8 ｇ。	

第５表　古墳時代遺物観察表

番号	器種	残存部位・法量（cm）	胎土・色調等	記　録　事　項	備考
12	土師器 壺	口縁～頸部破片･口(11.4)	白･黒･褐色粒･角閃石・にぶい橙	外面 口縁部横撫で、頸部縦位箆研磨。 内面 口縁部～頸部横位箆研磨。	
13	土師器 壺	口縁部破片・口(12.4)	白・黒色粒・浅黄橙	外面 口縁部縦位刷毛目。 内面 口縁部縦位箆研磨。	
14	土師器 壺	口縁部破片・口(15.0)	白･黒･褐色粒･にぶい黄橙	外面 口縁部上位横撫で、中・下位斜縦位箆撫で。 内面 口縁部上位横撫で、中・下位縦位箆研磨。	
15	土師器 鉢	底部破片・底 4.0	白･黒･褐色粒･にぶい黄褐	外面 横位箆研磨。 内面 斜横位刷毛目後撫で。	
16	土師器 小形壺	体部～底部・底 4.2	白･黒色粒･にぶい橙	外面 体部横位箆削り。 内面 体部横位箆研磨。	
17	土師器 小形壺	体部～底部・底 4.8	白･黒･褐色粒･にぶい黄橙	外面 胴部横位箆撫で、底部箆削り。 内面 胴部横位箆撫で。	
18	土師器 甑	1/4･口 17.6･底6.6･高 17.0	白･黒･褐色粒･にぶい黄橙	外面 口縁部横撫で、胴部縦位箆削り。 内面 口縁部横撫で、胴部斜縦位箆研磨。	
19	土師器 小形甕	胴部下位～底部・底 6.0	白･黒･褐色粒･浅黄橙	外面 胴部横位箆削り。 内面 胴部斜縦位箆撫で。	
20	土師器 壺	口縁～胴部上位･口(22.0)	白･黒･褐色粒･にぶい橙	外面 口縁部縦位箆研磨、胴部横位箆研磨。 内面 口縁部横撫で、胴部横位箆撫で。外面黒斑。	
21	土師器 壺	口縁部破片	白･黒色粒･にぶい橙	外面 口唇部箆刻み、口縁部指頭痕。輪積み痕顕著。 内面 口縁部横位刷毛目。外面赤色塗彩。	
22	土師器 壺	口縁片･口(22.4)	白･黒色粒･にぶい橙	外面 口縁部横撫で、頸部縦位箆研磨。 内面 口縁部～頸部縦位箆研磨。	
23	土師器 壺	底部破片・底 7.0	白色軽石･黒色粒･にぶい橙	外面 胴部箆撫で。 内面 胴部箆撫で。	
24	土師器 壺	底部破片・底 8.0	白･黒色粒･にぶい黄橙	外面 胴部斜横位箆撫で。 内面 胴部斜横位箆撫で。底部内面赤色塗彩。	
25	土師器 台付甕	胴部下位～台部上位	白･黒色粒･にぶい橙	外面 胴部～台部縦位箆撫で。内面　胴部斜横位箆撫で、台部横位箆撫で。胴部と台部の接合部に粘土紐。	
26	土師器 台付甕	胴部下位～台部中位	白・黒色粒・橙	外面 胴部～台部縦位箆撫で。 内面 胴部箆撫で、台部斜横位箆撫で。	
27	土師器 台付甕	台部中位	白･黒･褐色粒･にぶい橙	外面 台部縦位刷毛目。 内面 台部横位箆撫で。	
28	土師器 台付甕	台部中位	白･黒･褐色粒･にぶい橙	外面 台部縦位箆撫で。 内面 台部横位箆撫で。	
29	土師器 台付甕	ほぼ完形･口 12.6･底 7.2･高 16.0	白･黒色粒･にぶい橙	外面 口縁部横撫で、胴部～台部縦位箆撫で。内面 口縁部上位横撫で、中位～胴部横位箆撫で、台部斜横位箆撫で。	
30	土師器 台付甕	3/4･口(15.4)･底 8.1・高 21.5	白･黒色粒･石英･にぶい橙	外面 口唇部箆刻み、口縁部横撫で、胴部～台部箆撫で後、胴部上位・台部上半縦位刷毛目。 内面 口縁部～胴部横位箆撫で、台部横位刷毛目後箆撫で。	

第６表　中世遺物観察表

遺 構 外　第 74 ～ 75 図　PL47

番号	器種	残存部位・法量（cm）	胎土・色調	記　録　事　項	備考
1	かわらけ	1/8･口 9.4･底 6.6･高 1.8	良・にぶい橙	轆轤成形。回転糸切り。	
2	〃	1/6･口 8.8･底 6.6･高 1.8	〃・　〃	〃	
3	〃	1/6･口 8.8･底 6.0･高 1.7	白色粒・　〃	〃	
4	〃	1/4･口 9.2･底 6.0･高 1.6	良・　〃	〃	
5	〃	1/6･口 10･底 7.0･高 2.1	〃・　〃	〃	
6	〃	底片・底 6.8	〃・にぶい黄橙	轆轤成形。箆切り。	
7	焙烙	口縁～底片･高 5.3	〃・灰黄	内耳付き。内外横撫で。	
8	〃	〃　　　・高 5.4	〃・灰	〃	
9	〃	〃　　　・高 5.5	〃・灰黄褐	内外横撫で。	
10	〃	底片	〃・浅黄	〃	
11	〃	口縁～底片･高 5.5	〃・褐灰	〃	
12	〃	〃　　　・高 5.6	〃・灰黄褐	〃	
13	〃	〃　　　・高 5.9	〃・浅黄	〃	
14	〃	〃　　　・高 5.9	〃・褐灰	〃	
15	〃	〃　　　・高 5.9	〃・灰白	〃	
16	〃	〃　　　・高 6.0	〃・　〃	〃	
17	〃	〃　　　・高 6.4	〃・灰	〃	
18	〃	口縁片	〃・　〃	〃	
19	〃	〃	〃・浅黄	〃	
20	〃	〃	〃・灰	〃	
21	〃	底部片	〃・にぶい黄橙	〃	
22	〃	内耳片	〃・黄灰	箆削り後、撫で。	
23	〃	〃	〃・灰黄	〃	
24	〃	〃	〃・灰黄褐	〃	
25	〃	底片	〃・灰黄	内外撫で。	

第４章　自然科学分析

第１節　大泉町間之原遺跡Ⅳにおける土層とテフラ

早　田　　勉　　(株)火山灰考古学研究所）

１、はじめに

関東平野北西部に位置する大泉町とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、榛名や浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物（さいせつぶつ），いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、発掘調査の際に、層位や年代が不明な土層や遺構が検出された大泉町間之原遺跡Ⅳにおいても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、採取した試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層や遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、H-19・１号墳南東壁周堀セクションおよびローム層深掘セクションの２地点である。

２、土層の層序

⑴ H-19・１号墳南東壁周堀セクション

H-19・１号墳南東壁周堀セクションでは周堀の覆土を良く観察できた（図１）。覆土は、下位より褐色土粒子を含む灰褐色土（層厚18cm，８層）、暗灰褐色土（層厚31cm，７層）、白色軽石を含む黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚２cm，軽石の最大径３mm）、白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土（層厚９cm，以上６層）、白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土（層厚23cm，５層）、黒灰褐色土（層厚８cm）、黒みをおびた暗灰褐色土（層厚17cm，以上４層）、黒灰褐色土（層厚10cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚14cm，以上３層）、砂混じり灰褐色土（層厚26cm，２層）、盛土（層厚22cm，Ⅰ層）からなる。

⑵ローム層深掘セクション

ローム層深掘セクションでは､下位より褐色土(層厚10cm以上，Ⅹ層)、灰褐色土（層厚５cm，以上Ⅹ層)、暗灰褐色土（層厚20cm)、灰褐色土（層厚13cm，以上Ⅸ層)、黄色粗粒火山灰を少し含む灰色土（層厚11cm，Ⅷ層)、黄灰色土（層厚12cm)、黄白色粗粒火山灰混じりで灰色がかった黄色土（層厚５cm，以上Ⅶ層)、黄褐色土ブロック混じり黄灰色土（層厚７cm，Ⅵ層)、灰褐色土（層厚25cm)、灰色がかった暗褐色土（層厚11cm，以上Ⅴ層)、黒灰褐色土（層厚11cm，Ⅳ層)、白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色砂質土（層厚10cm，Ⅲ層)、暗灰褐色砂質土（層厚８cm，Ⅱ層)、盛土（層厚19cm，Ⅰ層）が認められる。

３、テフラ検出分析

⑴分析試料と分析方法

H-19・１号墳南東壁周堀セクションから基本的に厚さ５cmごとに設定採取された試料のうち、試料33､試料27､試料23の３点の試料について､テフラ検出分析を実施した。分析の手順は次の通りである。

①試料７gを秤量。

②超音波洗浄により泥分を除去。

③ 80℃で恒温乾燥。

④実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

⑵分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。試料33および試料27には、スポンジ状に良く発泡した灰白色の軽石型ガラスが少量含まれている。斑晶鉱物と

しては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。一方、試料23のテフラ層には、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径3.9mm）や、その細粒物である白色の軽石型ガラスが多く含まれている。それらの斑晶鉱物としては、角閃石や斜方輝石が認められる。

４、屈折率測定

⑴測定試料と測定方法

テフラ検出分析の対象となった試料のうち、H-19・１号墳南東壁周堀の試料23に含まれる軽石を手選後、軽く粉砕して、火山ガラスの屈折率（n）の測定を実施した。測定には、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製MAIOT）を使用した。

⑵測定結果

屈折率測定の結果を表２に示す。試料23に含まれる火山ガラス（30粒子）の屈折率（n）は、1.500-1.502である。

５、考　　察

H-19・１号墳南東壁周堀覆土断面で認められた、６層基底部のテフラ層（試料23）については、その層相や含まれるテフラ粒子の岩相、さらに火山ガラスの屈折率などから、６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，新井1979，坂口1986，早田1989，町田・新井1992）に同定される。同じようなテフラ粒子を含むテフラとしては、６世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP，新井1962，坂口1986，早田1989，町田・新井1992）があるが、その分布域や、下位の８層（試料33）や７層（試料27）中に榛名火山起源と思われるテフラ粒子が認められないことなどは、Hr-FAへの同定を支持するものと考えられる。

一方、８層（試料33）や７層（試料27）に含まれる灰白色の軽石型ガラスについては、その層位や岩相などから４世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間Ｃ軽石（As-C，荒牧1968，新井1979，友廣1988，若狭2000）に由来すると思われる。屈折率測定などによる同定精度の向上が図られると良いが、現段階においては、周堀内の堆積物の流失や除去が行われていない限り、H-19・１号墳の層位についてはAs-Cより上位で、Hr-FAより下位と考えられる。

なお、３層上部に含まれる砂については、その層位や粒度などから、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As-B，荒牧1968，新井1979）に同定される可能性が高い。

ローム層断面では、いわゆるAT下位の暗色帯（Ⅸ層）の下位の明色の土層（Ⅹ層）の最上部を見ることができたようである。今後のテフラに関する分析が期待されるが、Ⅷ層付近に、約2.4～2.5万年前[*1]に南九州地方の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT，町田・新井1976・2003，松本ほか1987，村山ほか1993，池田ほか1995）や、約2.0～2.5万年前[*1]に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group，　新井1962，町田・新井2003）のうちの浅間室田軽石（As-MP，森山1972，早田1990・1996など）の降灰層準のある可能性が高いように思われる。また、Ⅲ層中にAs-CやHr-FA、Ⅱ層中にAs-Bに由来する粒子が多く含まれていると思われる。

本遺跡とその周辺は、群馬県域の中では比較的ローム層の堆積が薄く、それでいて指標テフラの濃集が比較的良いようである。したがって、多くの層準から後期旧石器が検出され、その層位についても詳細に検討できる可能性が高い今後、As-BP Group中・上部、約1.7万年前[*1]と約1.6万年前[*1]に各々浅間火山から噴出したと考えられている大窪沢第１軽石（As-Ok1，中沢ほか1985，町田・新井1992，早田1996）や、浅間大窪沢第２軽石（As-Ok2，中沢ほか1985，町田・新井1992，早田1996）などの浅間大窪沢テフラ群（As-Ok Group）、約1.3～1.4万年前[*1]に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP，新井1971，町田・新井2003）、約1.1万年前[*1]に浅間火山から噴出した浅間総社軽石（As-Sj，早田1990・1996）などを含めた指標テフラの層位に関する資料の収集に期待が高まっている。

６、小　　結

大泉町間之原遺跡Ⅳにおいて、地質調査とテフラ検出分析さらに火山ガラスの屈折率測定を行った。その結果、H-19・１号墳南東壁周堀覆土断面で、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，６世紀初頭）を確認できた。また、その下位の土層中から、浅間Ｃ軽石（As-C，４世紀初頭）に由来する可能性の高い火山ガラスを検出した。その結果、H-19・１号墳の層位については、As-Cより上位でHr-FAより下位と推定される。

*1　放射性炭素（14C）年代．ATおよびAs-YPの暦年較正年代については、順に約2.6～2.9万年前、約1.5～1.65万年前と考えられている（町田・新井2003）

【文　　献】

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.
新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52.
荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.45，65p.
池田晃子・奥野　充・中村俊夫・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器^{14}C年代．第四紀研究，34，p.377-379.
町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－．科学，46，p.339-347.
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.
町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の^{14}C年代．第四紀研究，26，p.79-83.
森山昭雄（1972）榛名火山東・南麓の地形－とくに軽石流の地形について－．愛知教育大学地理学報告，36-37，p.107-116.
村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代．地質雑，99，p.787-798.
中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山，黒斑～前掛期のテフラ層序．第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69-70.
坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
早田　勉（1989）６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312.
早田　勉（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，1，p.37-129.
早田　勉（1995）テフラからみた浅間山の活動史．御代田町誌自然編，p.39-129.
早田　勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第１テフラより上位のテフラについて－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，７，p.256-267.
友廣哲也（1988）古式土師器出現期の様相と浅間山Ｃ軽石．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」，p.325-336.
若狭　徹（2000）群馬の弥生土器が終わるとき．かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く－古墳が成立する頃の土器の交流」，p.41-43.

表１　テフラ検出分析結果

セクション	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
H-19・１号墳南東壁周堀	23	++	白	3.9	+++	pm	白
	27	-	-	-	+	pm	灰白
	33	-	-	-	+	pm	灰白

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない．最大径の単位は，mm．bw：バブル型，pm：軽石型．

表２　屈折率測定結果

セクション	試料	火山ガラスの屈折率（n）	測定粒子数
H-19・１号墳南東壁周堀	23	1.500-1.502	30

測定は，温度変化型屈折率測定装置（MAIOT）による．

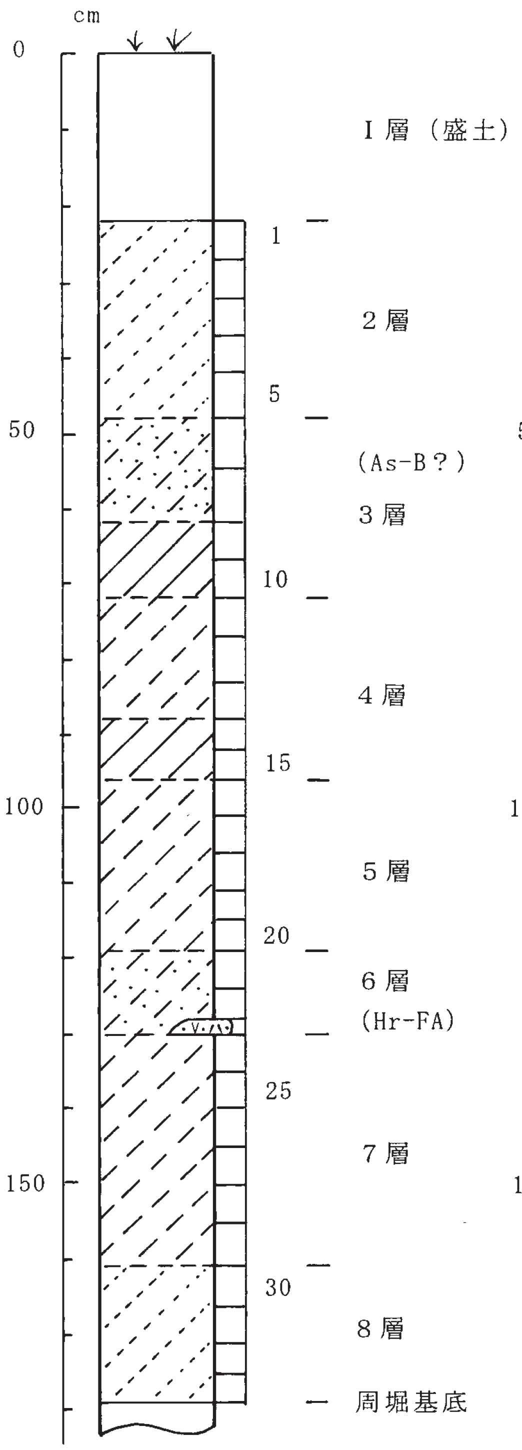


図１　H-19・１号墳南東壁周堀セクションの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号.

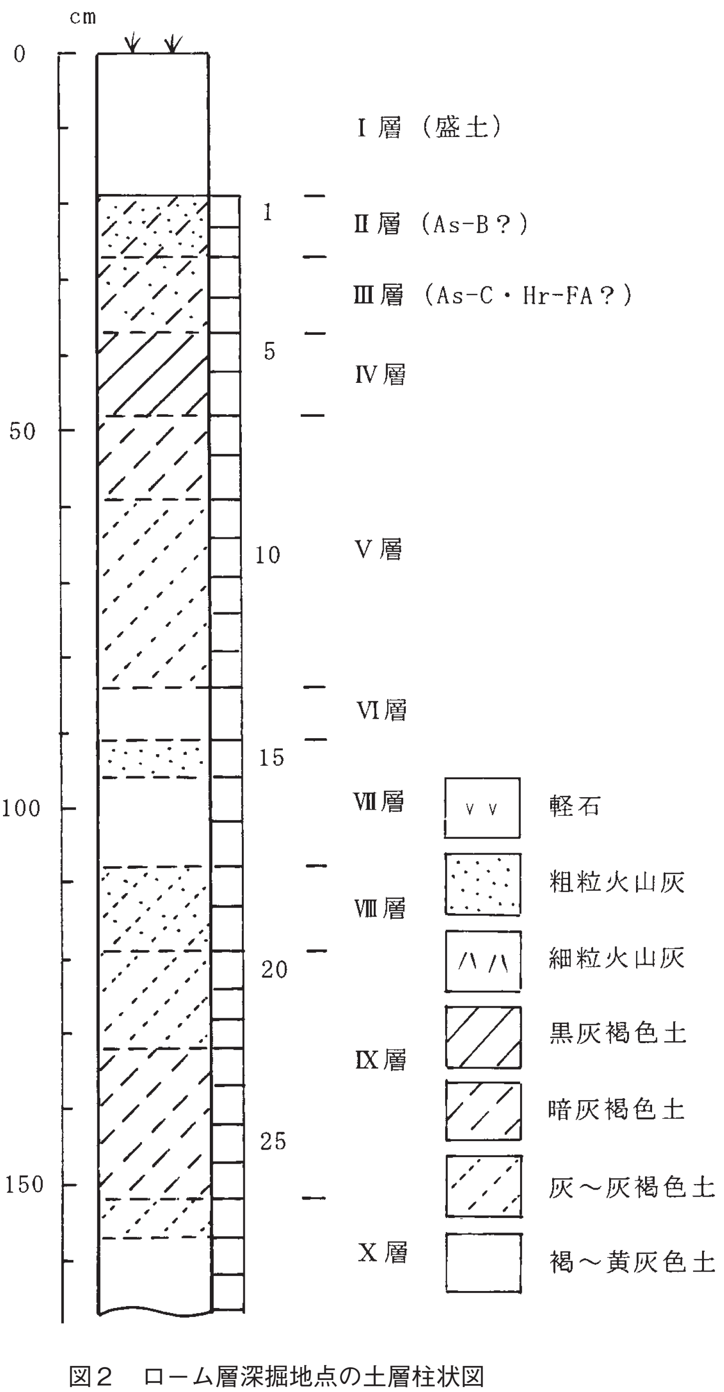


図２　ローム層深掘地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号.

第２節　大泉町間之原遺跡Ⅳにおける放射性炭素（^{14}C）年代測定

早　田　　勉　　（㈱火山灰考古学研究所）

１、試料と方法

試料 [*1]	種類	前処理・調整	測定法
^{14}C-1・2・3・12	牛歯	collagen extraction: with alkali	加速器質量分析（AMS）法

*1：前処理の段階で，試料に含まれるコラーゲンの量が少ないことが明らかになったため，複数のサンプルを合わせて測定対象とした。

２、測定結果

試料	^{14}C 年代（年 BP）	$\delta^{13}C$（‰）	補正 ^{14}C 年代（年 BP）	暦年代（西暦）	測定№（Beta-）
^{14}C-1・2・3・12	1100 ± 40	−13.9	1280 ± 40	２σ：AD 660 〜 810 １σ：AD 670 〜 770 交点：AD 690	232171

① ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}C/^{12}C$ 比から、単純に現在（AD1950 年）から何年前かを計算した値。^{14}C の半減期は、国際的慣例によりリビー（Libby）の 5,568 年を用いた。

② $\delta^{13}C$ 測定値

試料の測定 $^{14}C/^{12}C$ 比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

③補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}C$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、$^{14}C/^{12}C$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}C$ 値を −25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

④暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。使用したデータセットは，INTCAL04: Calibration Issue of Radiocarbon, 46（3）, 2004（海洋性試料については，Marine04）である。なお，較正曲線のスムース化には、下記の理論を用いた。

Talma, A.S. and Vogel, J.C.（1993）A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Radiocarbon, 35(2), p.317-322.

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68％確率）・２σ（95％確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-13.9:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-232171**

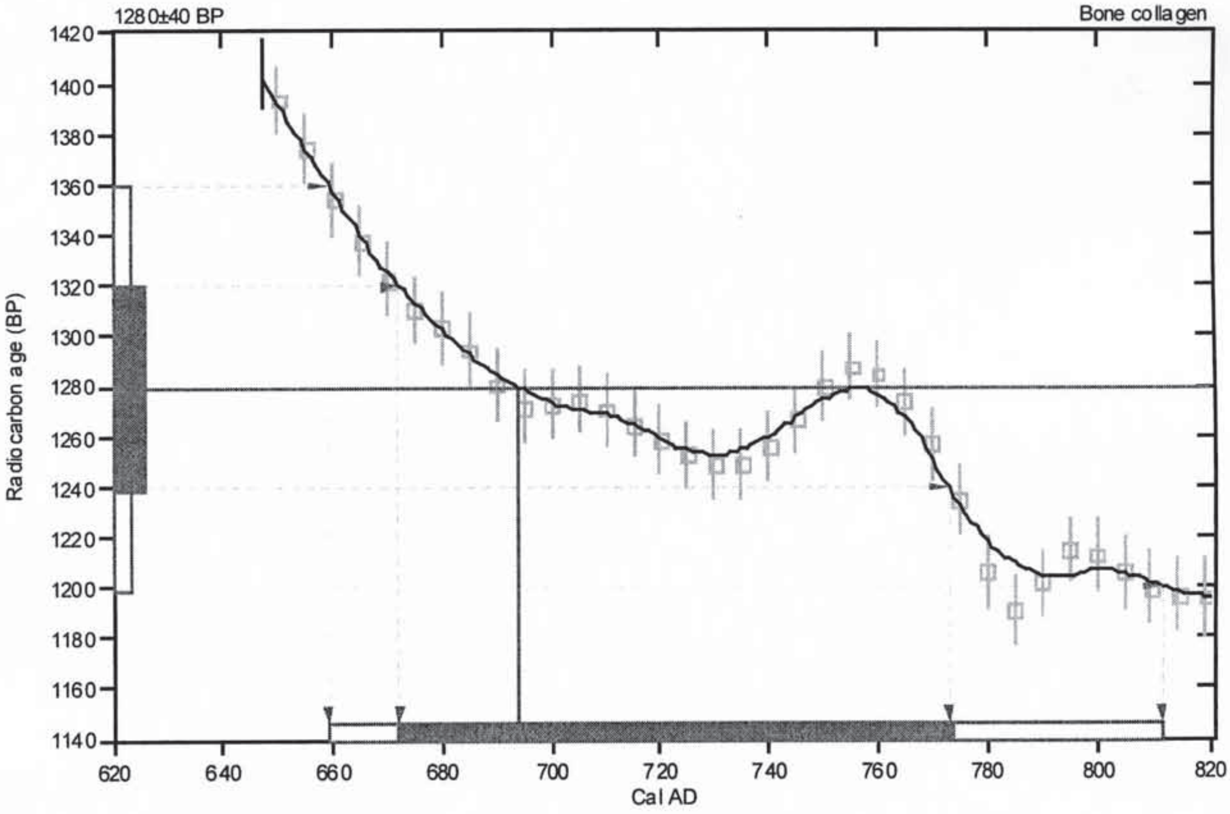
Conventional radiocarbon age: **1280±40 BP**

2 Sigma calibrated result: (95% probability) **Cal AD 660 to 810 (Cal BP 1290 to 1140)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 690 (Cal BP 1260)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal AD 670 to 770 (Cal BP 1280 to 1180)



References:

Database used
INTCAL04
Calibration Database
INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration
IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).
Mathematics
A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

第３節　大泉町間之原遺跡Ⅳ出土牛歯

楢　崎　修 一 郎

はじめに

大泉町間之原遺跡Ⅳは、群馬県邑楽郡大泉町北小泉に所在する。（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成 19（2007）年４月～同年５月及び 10 月に実施された。本遺跡の古墳時代中期の５世紀中頃に築造されたと推定される古墳１基の周堀の底部から、牛（ウシ）［*Bos taurus*］の牛歯及び牛骨が検出されたので以下に報告する。

牛歯の計測方法は、フォン・デン・ドリーシュ［von den DRIESCH］（1976）に従った。

１．牛歯の出土状況

牛歯は、幅約３m・深さ約1.2mの周堀南辺底面上約 20cm の位置から検出されている。調査担当者によれば、周堀の覆土中には、底面上約 50cm の位置に６世紀初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）が一次堆積し、古墳は明らかに Hr-FA 以前の所産であるという。調査所見では、牛歯は底面上約20cm の位置から出土し、その周囲に後世の掘り込みによる土層の乱れが認められないことから、Hr-FA より下位で古墳の築造時に近い年代と推定されている。但し、牛歯の部分にセクションベルトがなく、この上位で直接 Hr-FA が検出されてはいないという。

牛歯の出土状況から、牛の埋葬状態は左側を下にして顔面部を南側に向けた状態であると推定される。但し、四肢骨は検出されていない。埋葬時に、頭蓋骨のみであったかあるいは全身であったかは、判定できないが、頭蓋骨のみである可能性が高い。

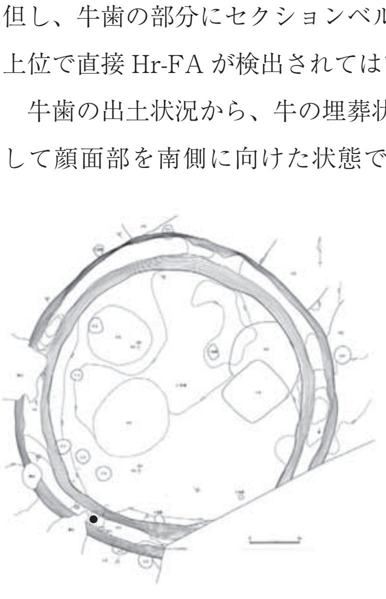


図１．牛歯出土位置図

２．牛歯の年代

牛歯の出土状況から、牛歯の年代は古墳築造時期と同じ５世紀中頃であると推定されている。近年の発掘調査では、牛の渡来時期は西日本で約５世紀後半から６世紀と考えられている。もし、本牛歯が５世紀中頃であるとすると、群馬県のみならず、国内でも最古級ということになる。ちなみに、馬は４世紀末～５世紀にかけて普及しており、群馬県においても、高崎市の剣崎長瀞西遺跡において５世紀後半の馬を埋葬した土坑墓が発見されている。

群馬県において、移動させやすい馬は西日本と約１世紀ずれて検出されているのに対し、移動させにくい牛が西日本よりも古く検出されているという状況を確認するために、牛歯の象牙質・歯根・下顎骨を AMS 年代測定に供した。その際、クロス･チェックするために、２箇所に年代測定の依頼をした。

その結果、火山灰考古学研究所では AD670 ～ 770（1 σ）、パレオ・ラボでは AD650 ～ 675（1 σ）となり、牛歯の年代は７世紀中頃で、古墳築造時期とは約 200 年の差があることが判明した。

但し、コラーゲンの残存量が少ないために年代が少し新しく出たという可能性も否定できず、現状では検出状況からは約５世紀中頃で、AMS 年代測定法では約７世紀中頃という両論併記に止めておく。

３．牛歯の出土部位

牛歯は、上下左右の小臼歯及び大臼歯が出土して

写真１．牛歯出土状況（東から撮影）

いる。牛の歯は馬と異なり、上顎の切歯は無い。今回、下顎の切歯は検出されなかった。ほとんどの歯は破損しているために、今回報告できる牛歯は、左右下顎骨の第３大臼歯のみである。

４．牛の個体数

出土歯には、重複部位が認められないため、個体数は１個体であると推定される。

５．牛の性別

牛の場合、角は雌雄（♀♂）のどちらにもあるため、性別推定の指標にはならない。今回、角及び角芯は検出されなかった。また、骨盤の形態で性別推定が可能であるが、今回、寛骨は検出されなかった。

したがって、性別は、不明である。

６．牛の死亡年齢

牛歯の永久歯の萌出年齢は、約5･6ヶ月～３年である。小臼歯及び大臼歯はすべて萌出しているので、牛の死亡年齢は約３歳以上であると推定される。

７．牛歯の計測値比較

下顎左右第３大臼歯の歯冠計測値の内、MD（近遠心径）とBL（頬舌径）は、左右共にMDは40mm・BLは15mmであった。

国内の古墳時代から平安時代までの牛歯の平均値は、MDが38.1mm・BLが16.9mmである（直良、1973）。同様に、群馬県内の古墳時代から平安時代までの牛歯の平均値は、小型の牛のMDが39.5mm・BLが14.3mm、中型の牛のMDが40.9mm・BLが13.2mmである（大江他、1990）。

この歯冠計測値の比較を見る限り、本牛歯は、どちらかと言えば小型の牛の計測値に近い。

これまで、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した発掘調査で、牛骨又は牛歯を検出した事例は21例あり、この内古墳時代は、三ツ寺Ⅰ遺跡・三ツ寺Ⅱ遺跡・上野国分僧寺尼寺中間地域・国分境遺跡・元総社寺田遺跡・田篠塚原遺跡・小八木志志貝戸遺跡の７遺跡がある（楢崎、2005）。

まとめ

大泉間之原遺跡の古墳の周堀から、約５世紀中頃あるいは約７世紀中頃の牛歯が出土した。牛は、約３歳以上の性別不明の個体であると推定された。

謝辞

本遺跡出土牛歯を記載する機会を与えていただき考古学的情報をいただいた、当事業団の唐澤至朗氏と坂口　一氏に感謝いたします。

引用文献（著者名のABC順）

von den Driesch, Angela　1976 *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites,* Peabody Museum, Harvard University

直良信夫　1973 『古代遺跡発掘の家畜遺体』、校倉書房

楢崎修一郎　2005　群馬県出土獣骨データベース：（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団編、「研究紀要」、23: 110-118、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

大江正直・木津博明・桜岡正信・友廣哲也　1990　「付章上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体」『上野国分僧寺・尼寺中間地域（４）』、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

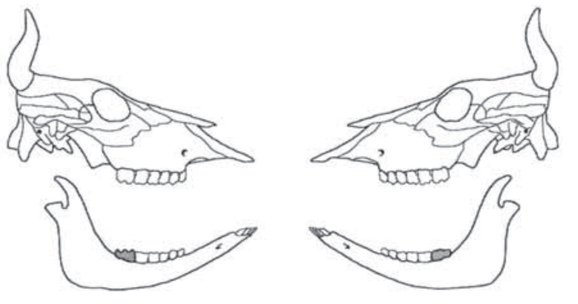


図２．牛歯出土部位図

写真２．左：下顎右第３大臼歯頬側面観
右：下顎左第３大臼歯頬側面観

第５章　まとめ　－検出遺構からみた大泉町間之原遺跡－

これまで４章にわたって今回の発掘調査の内容を記してきた。以下に既述をまとめて結びとする。

旧石器時代

Ⅲ区においては、54点（複数登録を含めると59点）の石片を検出した。東西7.0ｍ・南北5.0ｍの範囲に集中していたことにより、製作跡と判断したものである。また、Ⅳ区では６点の石片を検出している。出土は、Ⅴ層最下位からⅦ層にわたったが、Ⅴ層最下位から堆積の薄いⅥ層とⅦ層の上位に集中しており、Ⅵ層に浅間板鼻黄色軽石（As-YP・約1.3～1.4万年前降下）を、Ⅶ層に浅間大窪沢白色軽石（As-OK・約1.6～1.7万年前降下）の混入から、当地においては概ね１万数千年前の旧石器時代人の活動を知りえたのである。

縄文時代

発掘調査による遺構の検出は、竪穴住居９・土坑24・単独の埋甕７であった。

竪穴住居は、何れも縄文時代中期加曽利ＥⅡ～Ⅲ式期の所産であった。遺構を覆う表土が薄く床面が直接確認面に現れた住居もあり、また焼土を伴う土坑や単独の埋甕としたものも確認されたことから、他の亡失住居の存在を思わせる。

第４～６・８～11・13号の各住居は何れも、楕円形の平面プランを呈し、この時期の普遍性を示すものであったが、第14号住居の平面プランは実に特異なものであった。南西部が大きく内湾し、内湾する壁の中央下床面に、床中央に向かう溝が検出されている。出入り口に関わる設備痕と推定するが、この溝の方向が住居の主軸を示すものであろう。床中央部が撹乱により大きく損なわれていたことが惜しまれる。上屋構造を考察する上で重要である柱穴に相当するピットは、精査を経ても２カ所しか検出されず、今後も検討を要する課題となるであろう。類例については寡聞であり､識者からの教示を待ちたい。

土坑24基のうち10基がいわゆる所蔵穴と考えられる。25号土坑を除き袋状を呈する深いものであるが、特に16号土坑は確認面から2.45ｍにも達した。また１・２・６・10・12・23号の各土坑底面中央には、それぞれ小穴が設けられ梯子や天蓋等付属設備の構造を考える上で好例となろう。

また、４号住居の南西端の床下から、石核２個を伴う埋甕が検出されている。出入り口祭祀の事例となりうるものとして検討に供したい。

この他、採集された土器には、花積下層・有尾・称名寺・堀之内１・加曽利Ｂ式各期のものがあり、遺構の検出はなかったものの、前期から後期に至る縄文文化の展開をうかがうことができる。

古墳時代

竪穴住居５基は、ともに前期４世紀後半のものであった。この時期には間之原の地の台地上に集落形成され、そして谷地には水田など農地開発が及んでいたであろうことを想起させる。

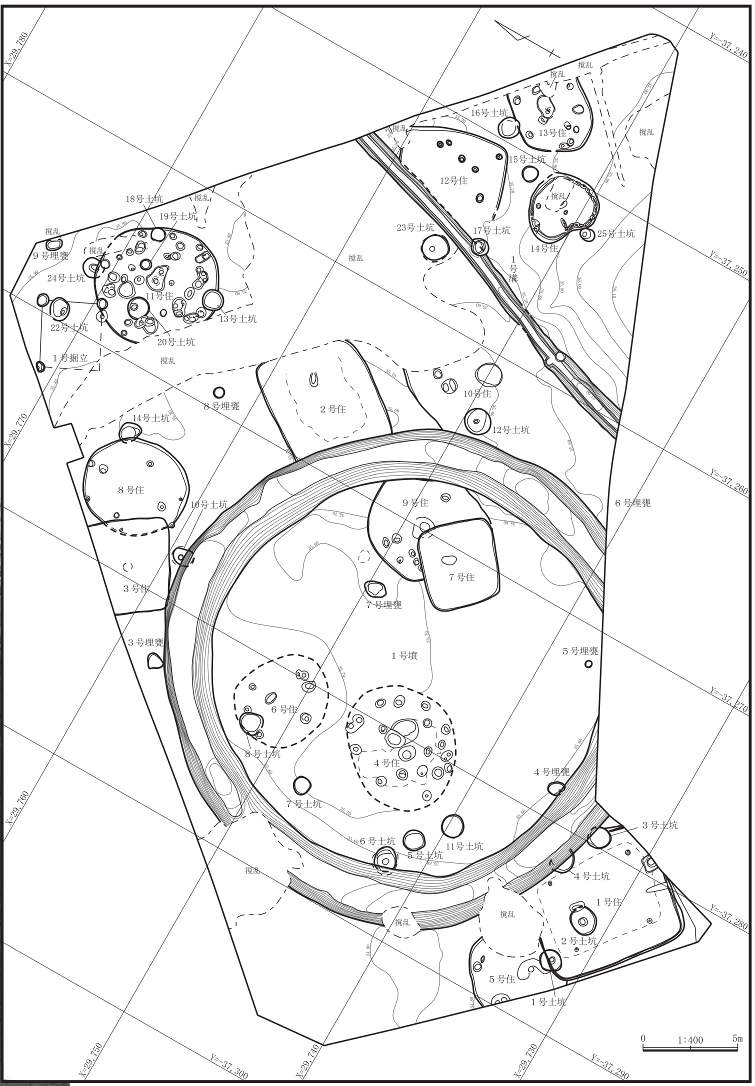
第１号古墳は径20m超の円墳であった。すでに墳丘・主体部は削平を受け失われていたが、周堀内からは、良好なＢ種横摑け痕を残す円筒埴輪が出土した。これにより、同古墳が５世紀中頃の築造であったことを知り得たのであるが、このことは、太田天神山古墳などを築造させた地域的な諸構造が、この間之原の地を含め広域に及んでいたことを再確認させるものとなろう。

第１号古墳周堀内の南西部から検出された牛骨については、５世紀中頃～後半とする考古学上の所見と、７世紀後半とするＣ14年代測定結果とに相違をみたのであるが、火山灰研究とともに歩んできた群馬県の遺跡調査史に照らして、現段階における最古の牛骨の可能性のある出土例としてこれを報じ、また、本例が一頭あるいは頭部のみの処置であったのか、埋葬・祭祀に拠るものなのか、投棄・自然死なのかは現状では全く不明と言わざるをえず、帰属年代と併せて今後の研究に委ねたい。

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	おおいずみまちあいのはらいせきさん・よん
書　名	大泉町間之原遺跡Ⅲ・Ⅳ
副　題	東毛幹線 (大泉工区) 街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	1
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	449
編著者名	唐澤至朗
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20081120
作成法人 ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住　所	群馬県渋川市北橘町下箱田 784 番地 2
遺跡名ふりがな	おおいずみまちあいのはらいせき
遺 跡 名	大泉町間之原遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおうらぐんおおいずみまちきたこいずみよんちょうめ
遺跡所在地	群馬県邑楽郡大泉町北小泉四丁目
市町村コード	105244
遺跡番号	103
北緯（日本測地系）	Ⅲ 36-16-03　Ⅳ 36-16-03
東経（日本測地系）	Ⅲ 139-25-09　Ⅳ 139-25-05
北緯（世界測地系）	Ⅲ 36-16-14.3586　Ⅳ 36-16-14.3587
東経（世界測地系）	Ⅲ 139-24-53.3940　Ⅳ 139-24-57.3937
調査期間	20060401 － 20060531. 20070402 － 20070531. 20071001 － 20071031
調査面積	2551
調査原因	道路
種　別	包蔵地・集落・古墳
主な時代	後期旧石器・縄文早期～後期・古墳前期～中期・中世・近世
遺跡概要	後期旧石器時代石器製作ユニット、縄文時代中期住居跡 9・土坑 24・埋甕 7、古墳時代前期住居跡 5・掘立柱建物 1、古墳時代中期古墳 1、近世溝 1。
特記事項	中期古墳には、Ｂ種横ハケ痕の残る円筒埴輪を伴う。
要　約	本遺跡は、大泉町北小泉から太田市龍舞にまたがる複合遺跡で、後期旧石器時代・縄文時代各期・古墳時代前期及び中期・奈良～近世に至る。今回の調査では、旧石器製作ユニット・縄文時代中期及び古墳時代前期住居跡・五世紀中頃の円墳などを検出した。

写　真　図　版



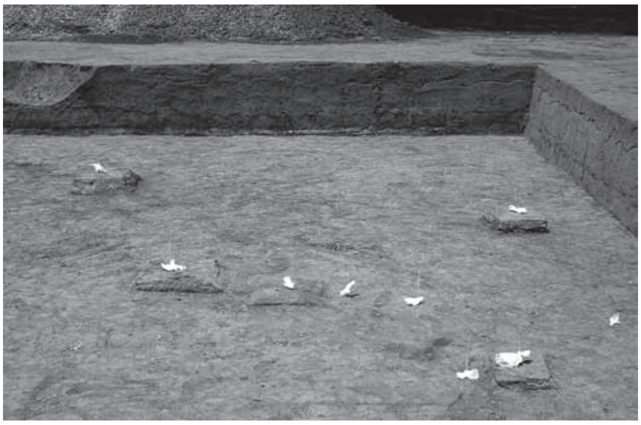
基本土層（解説は第２章）

Ⅲ区旧石器試掘坑の状況（南東から）

Ⅲ区試掘坑の北壁（整然とした層序・南から）

Ⅲ区旧石器拡張調査区（旧石器１面目・東から）

Ⅲ区旧石器遺物の出土状態①（１面目・石器製作跡・東から）


Ⅲ区旧石器遺物の出土状態②（２面目・東から）

Ⅲ区旧石器遺物の出土状態③（２面目・剥片）

Ⅲ区旧石器遺物の出土状態④（３面目）

Ⅲ区旧石器遺物の出土状態⑤（３面目）

Ⅳ区旧石器試掘坑の状況①（方形の小区画・南から）

Ⅳ区旧石器試掘坑の状況②（方形の小区画・北西から）

Ⅳ区８試掘坑の北壁（整然とした層序・南から）

Ⅳ区１試掘坑（南から）

Ⅳ区旧石器拡張調査区（２号住居床下・南東から）

Ⅳ区１試掘坑の旧石器遺物の出土状態（剥片・南から）

Ⅳ区旧石器拡張調査区旧石器遺物の出土状態①（剥片・南東から）

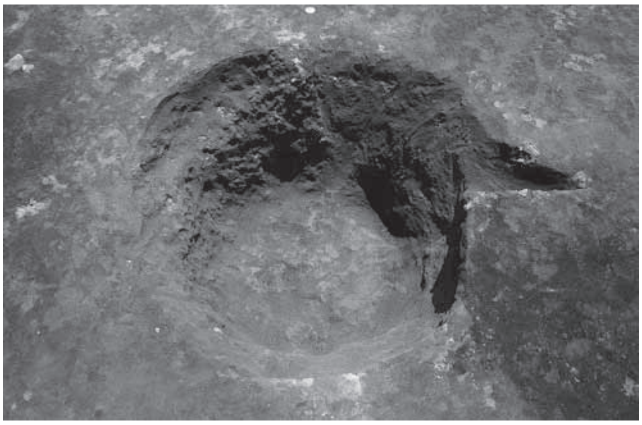
Ⅳ区旧石器拡張調査区旧石器遺物の出土状態②（剥片・南東から）

４号住居全景（床と柱穴等のみを検出・南から）

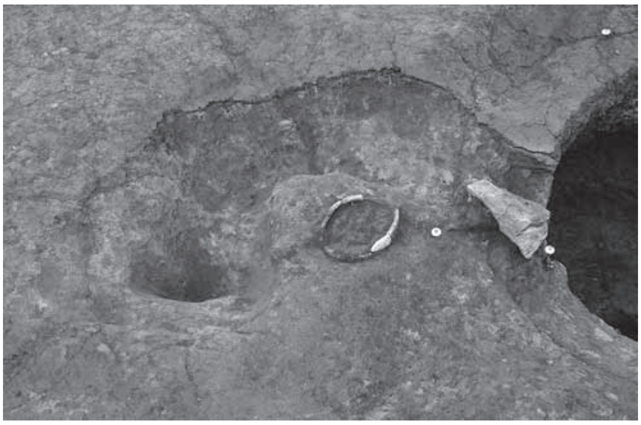
４号住居埋甕の土層（４・５・南から）

４号住居埋甕の全景（４・５・南東から）

４号住居埋甕（１・住居内南側にあり、石核が入っていた。南から）


４号住居炉の完掘全景（北から）

５号住居全景（左は１号住居、手前は攪乱。北東から）



５号住居炉全景（南西から）

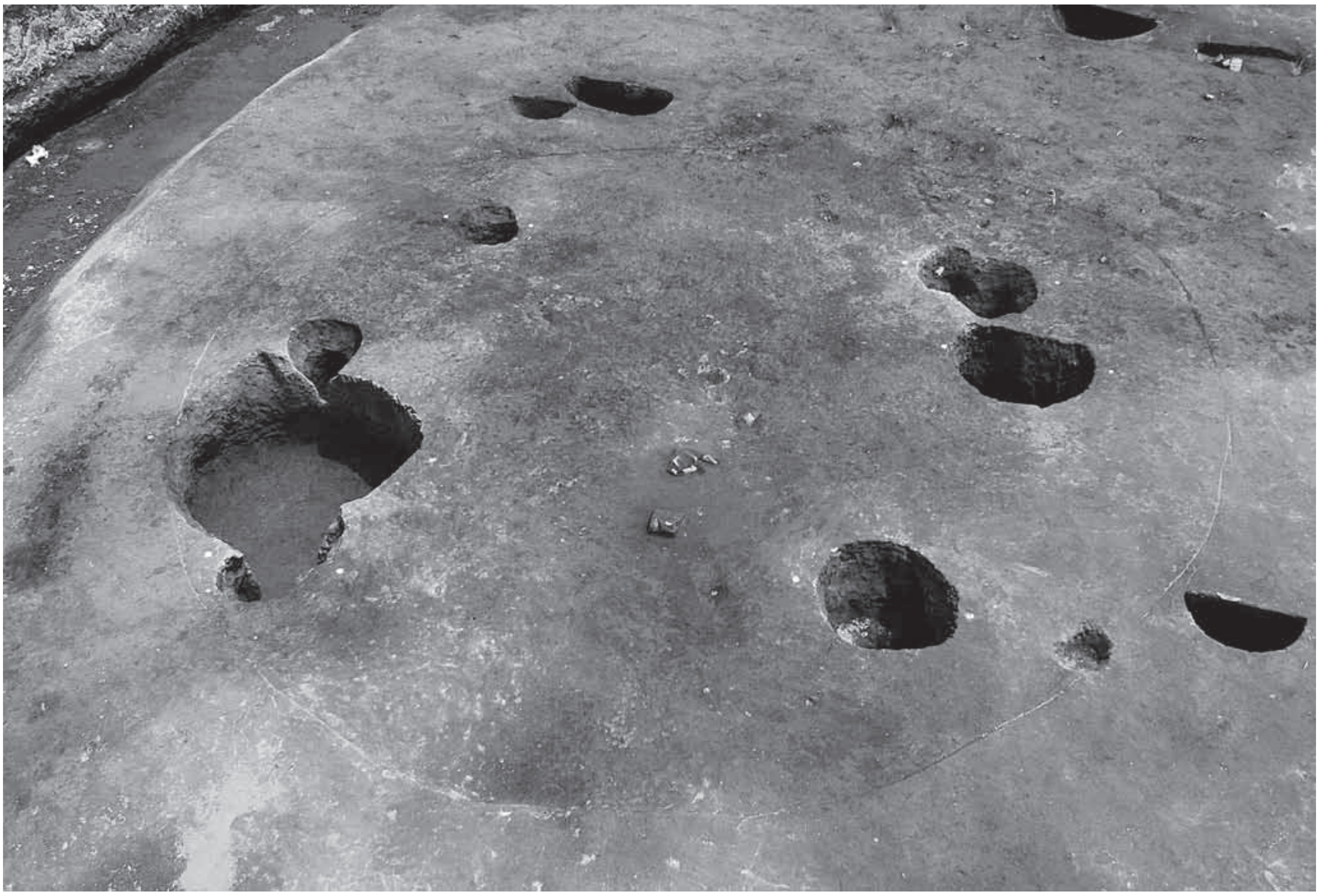
５号住居炉の土層（南西から）

５号住居炉の埋甕（２・南西から）

５号住居土層（北東から）

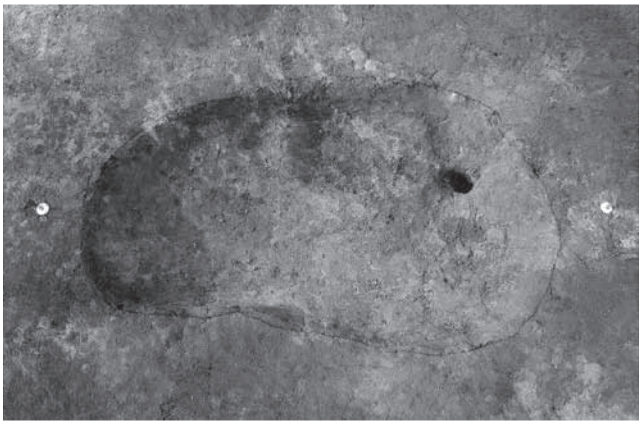
Ⅳ区南半部垂直写真（古墳基盤面に住居跡が黒く見える。）

Ⅳ区住居の調査状況（東から）



６号住居全景（ほぼ床面のみを検出。南西から）

６号住居炉の土層（南から）



６号住居炉全景（南から）

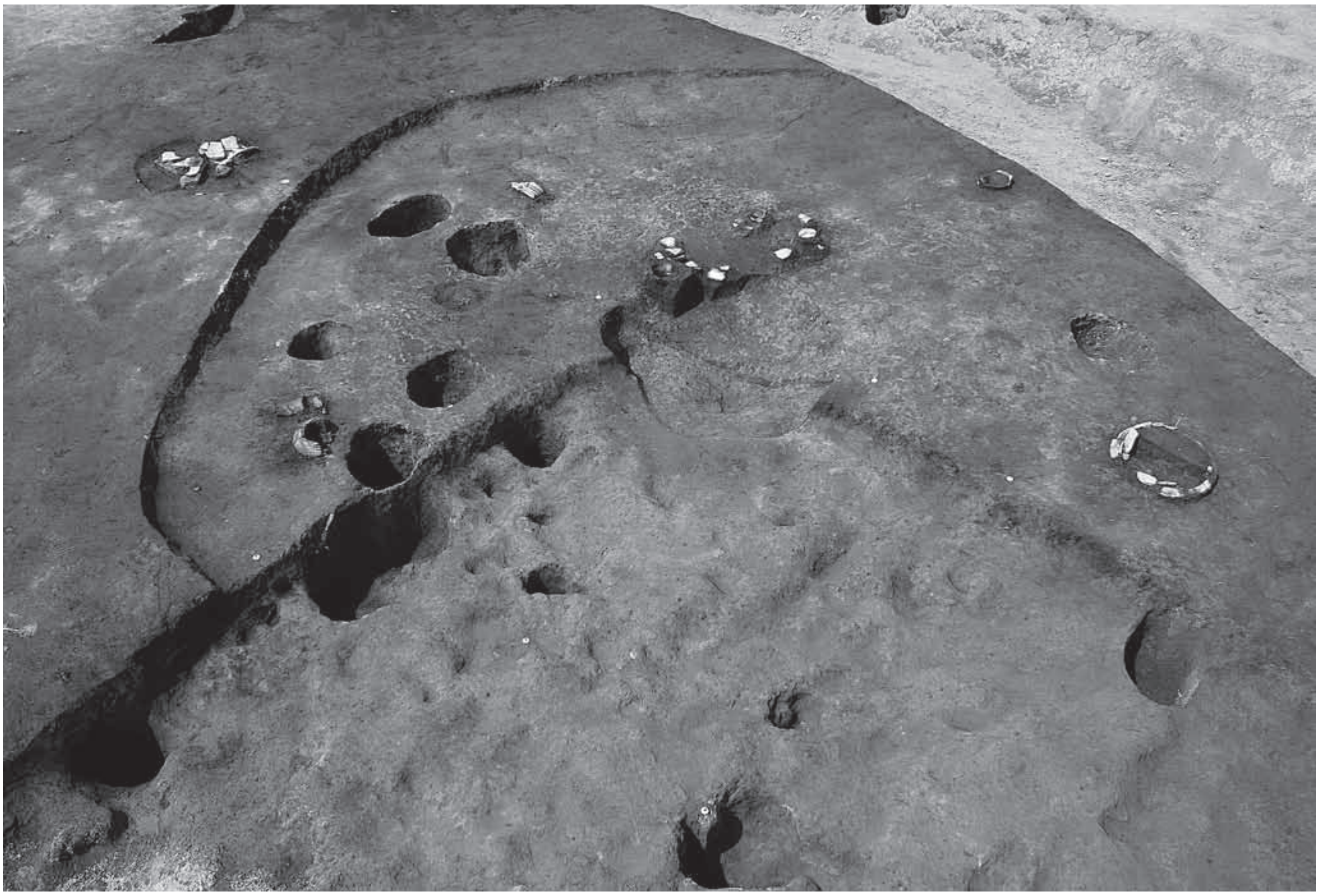
8号住居全景（南西から）

8号住居土層（南東から）

8号住居遺物出土状態①（南から）

8号住居遺物出土状態②（西から）

8号住居遺物出土状態③（北から）



９号住居全景（南から）

９号住居炉の土層（南西から）

９号住居埋甕（３・西から）

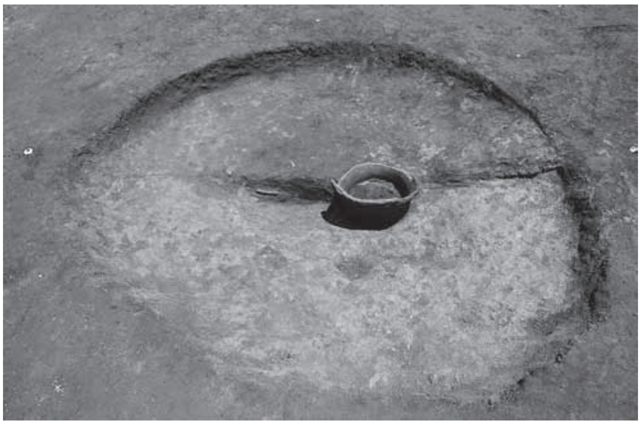
９号住居遺物出土状態①（５・深鉢覆位・西から）

９号住居遺物出土状態②（６・深鉢覆位・北から）

10 号住居全景（手前は 1 号古墳周溝、奥・左は攪乱。南西から）

10 号住居土層（南西から）

10 号住居遺物出土状態（西から）


10 号住居炉の土層（南西から）

10 号住居埋甕炉の土層（1・南西から）

11 号住居全景（東から）

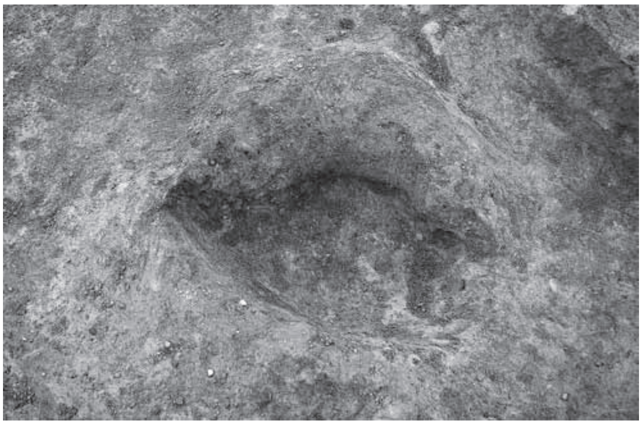
11 号住居土層（東から）

11 号住居調査状況（西から）

11 号住居埋甕炉土層（2・深鉢西・3・深鉢東・東から）

11 号住居炉体全景（南から）

11 号住居西炉体①（南から）


11 号住居東炉体②（南から）

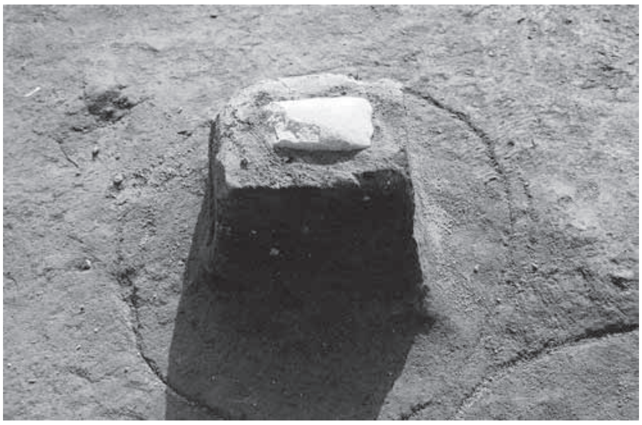
11 号住居埋甕①（1・深鉢・南西から）

11 号住居埋甕①内部（1・深鉢）

11 号住居遺物出土状態①（9・深鉢・北から）

11 号住居埋甕②（7・深鉢・南東から）

11 号住居遺物出土状態②（38・耳栓・東から）


11 号住居遺物出土状態③（45・磨製石斧・北東から）

13 号住居全景（南西から）

13 号住居土層（南西から）

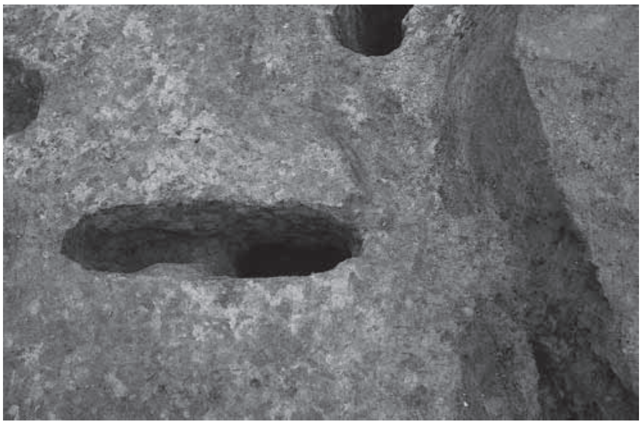
13 号住居埋甕炉（1・南西から）

13 号住居埋甕①（3・南東から）

13 号住居埋甕②（2・南西から）

14 号住居全景（南西壁が内湾。南西から）

14 号住居土層（中央部に大きな撹乱穴。北から）



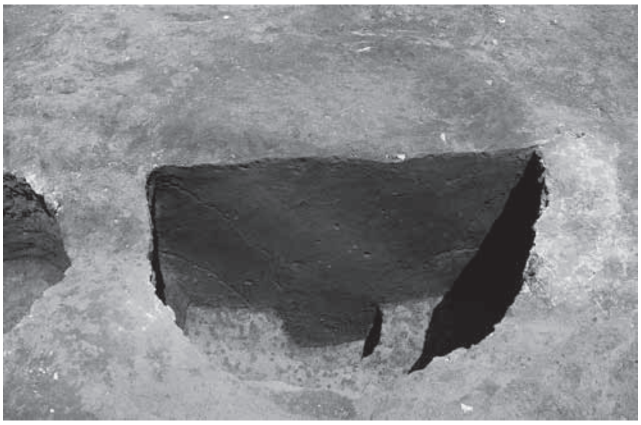
14 号住居床南西部溝（昇降設備痕か。北西から）

14 号住居遺物出土状態①（1・深鉢・南西から）

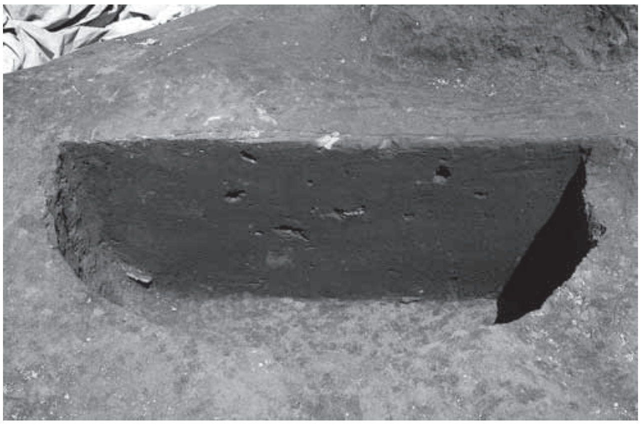
14 号住居遺物出土状態②（3・深鉢・南から）

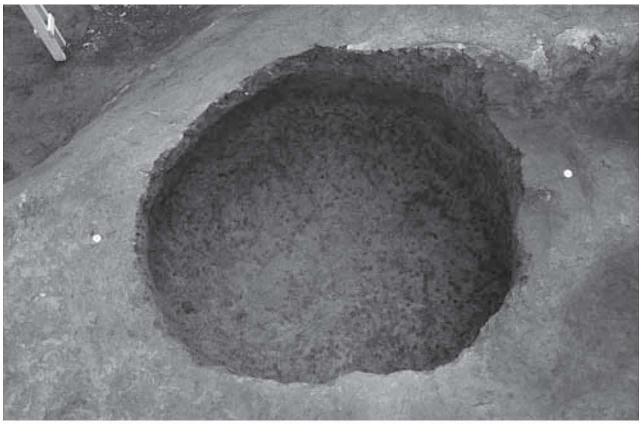
１号土坑土層（南西から）

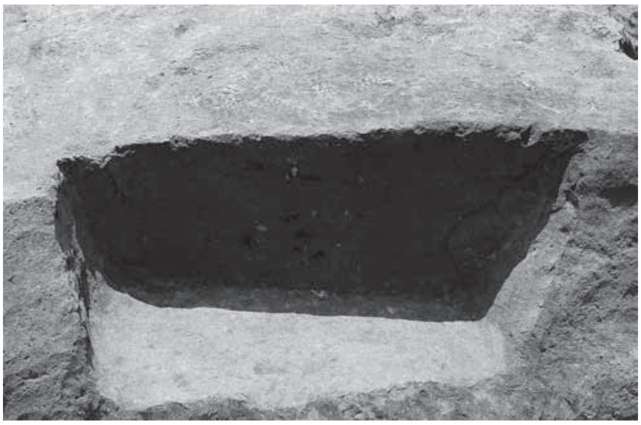
１号土坑全景（底面中央に小ピット。南西から）


２号土坑土層（南西から）

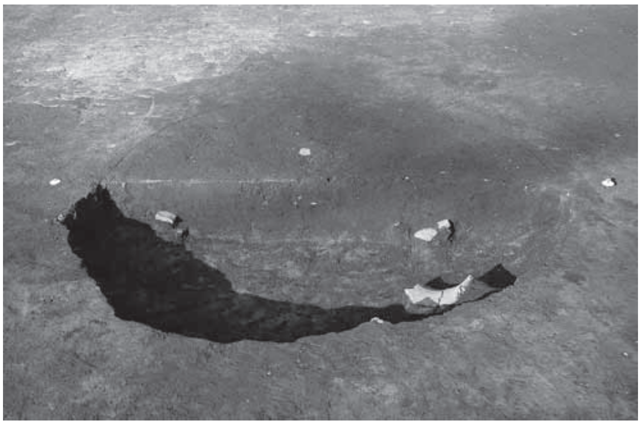
２号土坑全景（底面中央に小ピット。南西から）

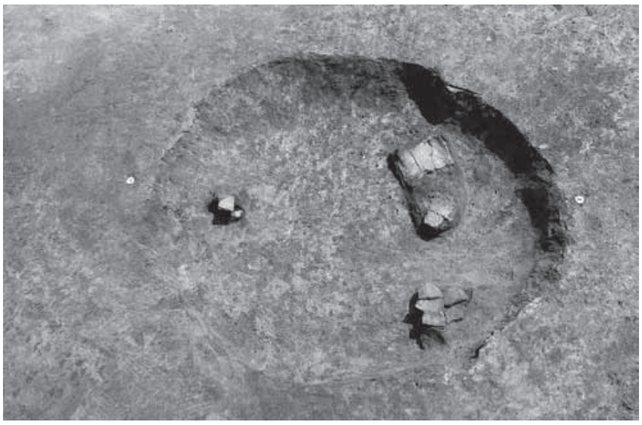

３号土坑土層（西から）

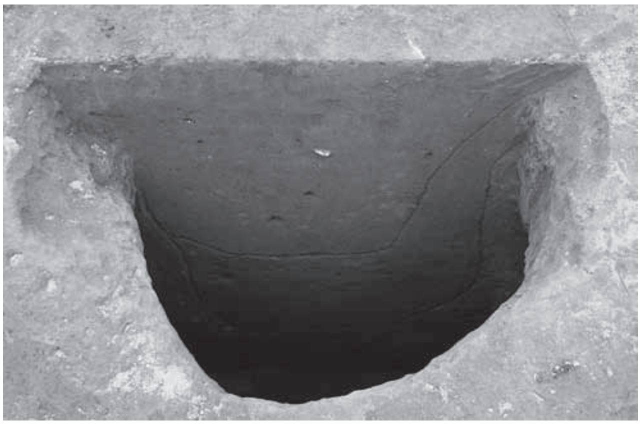

３号土坑全景（西から）


４号土坑土層（北東から）

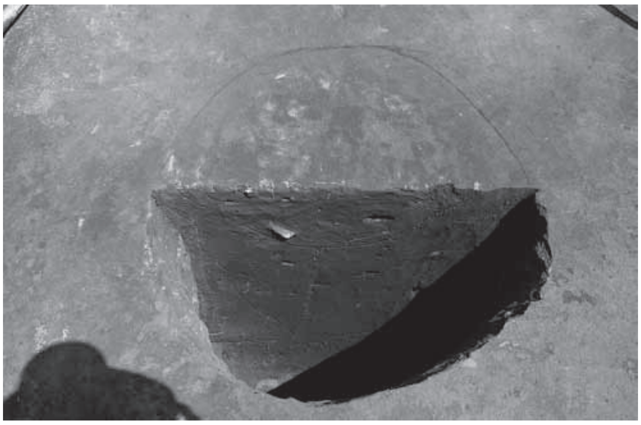
４号土坑全景（北東から）

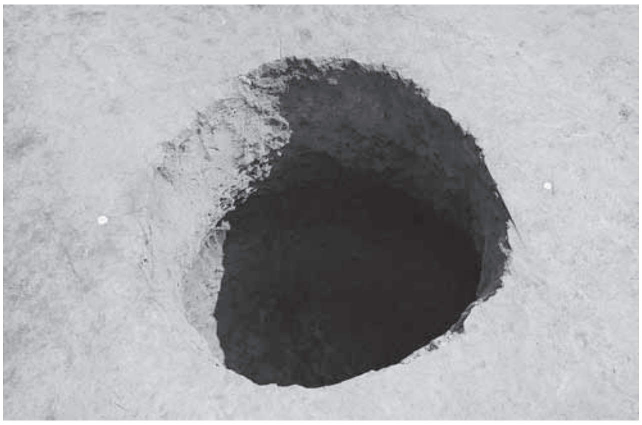

５号土坑土層（西から）

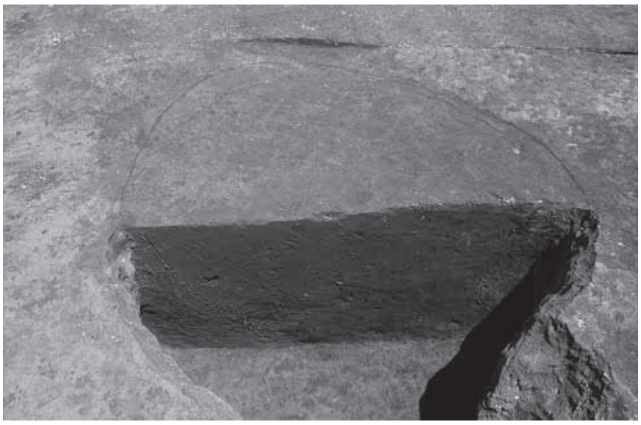

５号土坑全景（西から）


６号土坑土層（西から）

６号土坑全景（西から）


７号土坑土層（南西から）


７号土坑全景（南西から）


８号土坑土層（南西から）

８号土坑全景（南から）

10 号土坑土層（南から）

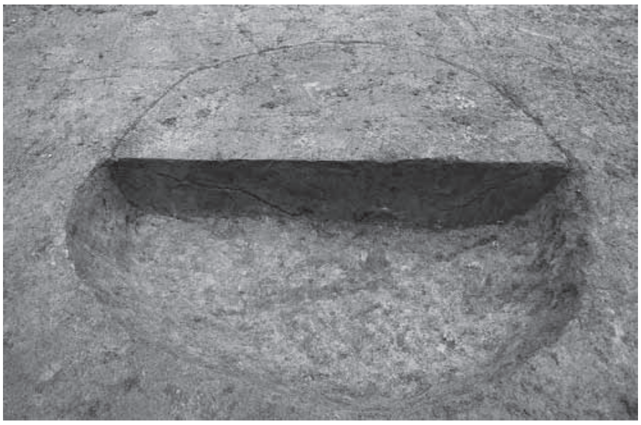
10 号土坑全景（南から）

11 号土坑土層（中央の中位に土器・2。南西から）

11 号土坑全景（2・南西から）

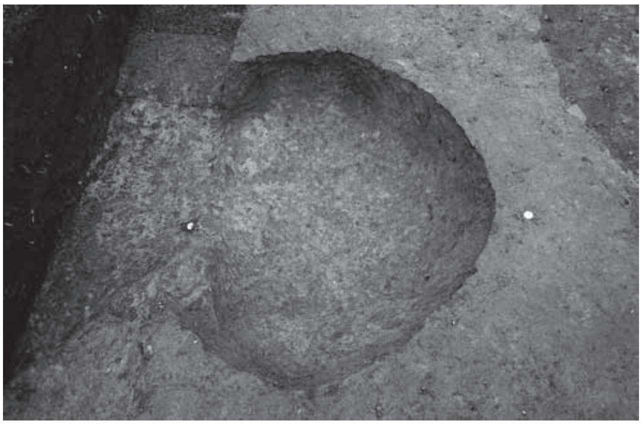
12 号土坑土層（西から）

12 号土坑全景（底面中央に小ピット。南西から）

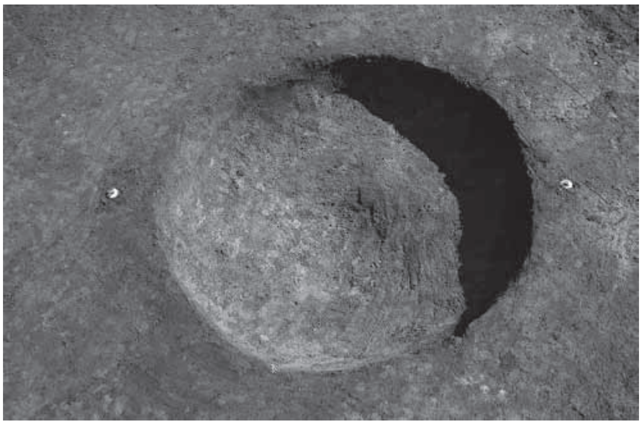

13 号土坑土層（南西から）

13 号土坑全景（南西から）

14 号土坑土層（南東から）

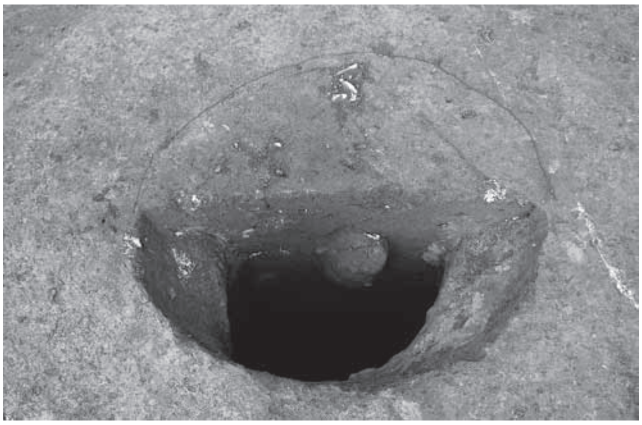

14 号土坑全景（南東から）

15 号土坑土層（南から）


15 号土坑全景（南から）

16 号土坑土層（深さ約 2.3 m。南西から）

15 号土坑遺物出土状態（1・2・南から）

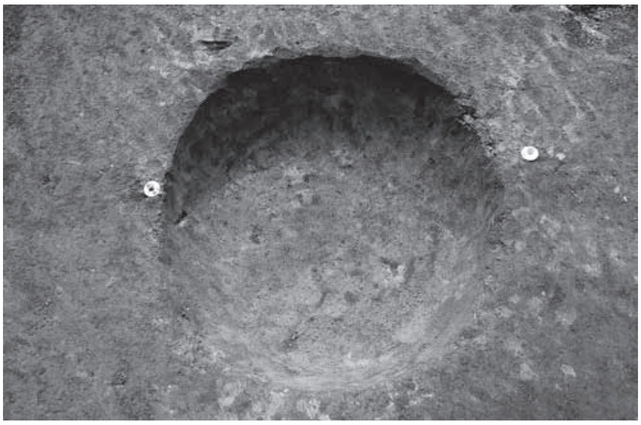

16 号土坑土層上位（漏斗状。南西から）

17 号土坑土層（北西から）

17 号土坑全景（北西から）

18 号土坑調査状況（北西から）

18 号土坑全景（北西から）


19 号土坑全景（北西から）

20 号土坑全景（北西から）

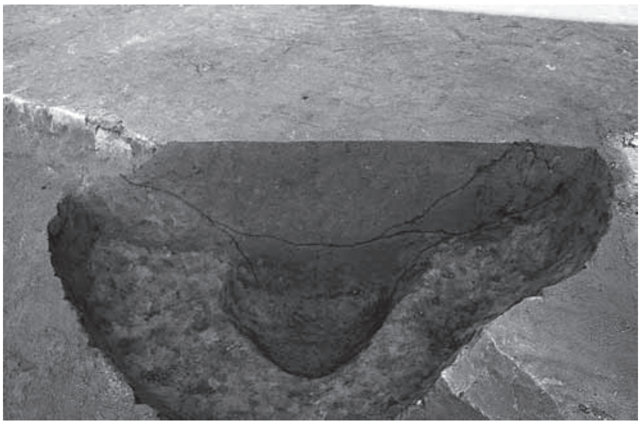
22 号土坑土層（東から）

22 号土坑全景（東から）

23 号土坑土層（フラスコ状、底面近くに黒色土。南から）

23 号土坑全景①（底面中央に小ピット。南から）

23 号土坑全景②（深さ約 1.7 m。東から）


24 号土坑土層（東から）

24 号土坑全景（東から）

25 号土坑全景（東から）

26 号土坑全景（北から）

3 号埋甕土層（1・南西から）

4 号埋甕土層（1・東から）

5 号埋甕全景（1・北西から）

6 号埋甕土層（1・北西から）

7 号埋甕全景（2・1・西から）

７号埋甕土層（２･１・南西から）

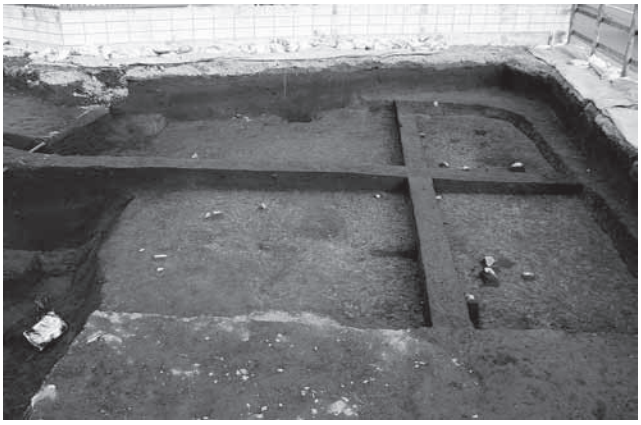
８号埋甕土層（南東から）

８号埋甕全景（１・南東から）

９号埋甕土層（１・南西から）

９号埋甕設置穴（南西から）

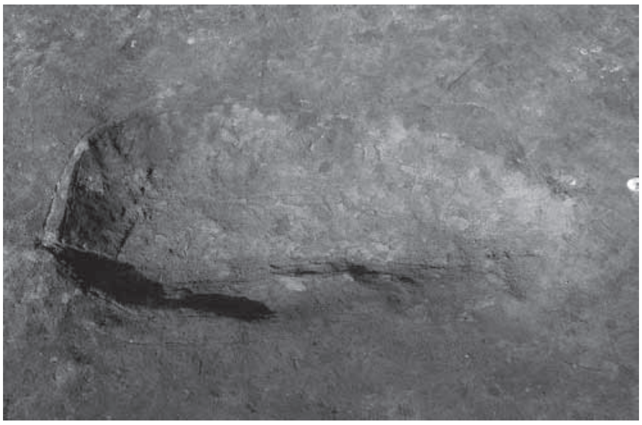
1 号住居全景（北西から）



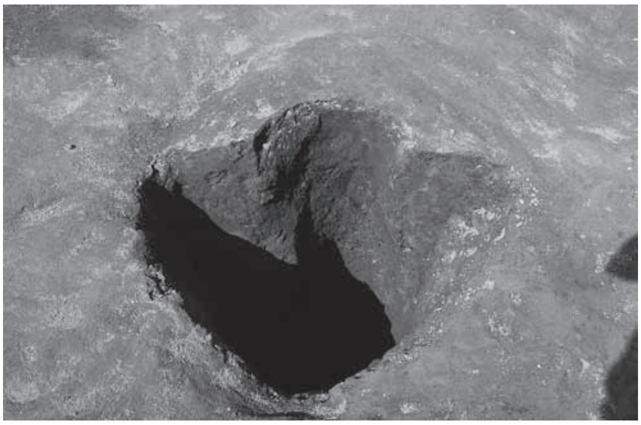
1 号住居土層（北西から）

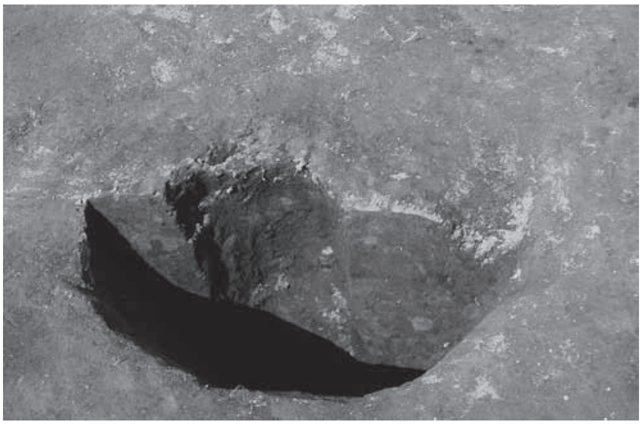
1 号住居掘方全景（北西から）

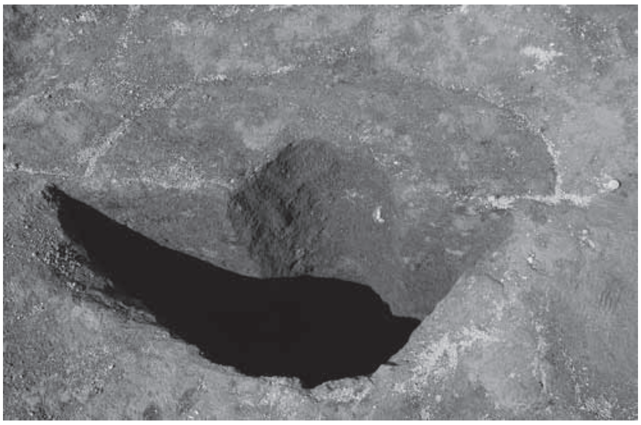
1 号住居炉土層（南西から）



1 号住居炉全景（南西から）


1 号住居柱穴 1 土層（南西から）


1 号住居柱穴 2 土層（南西から）


1 号住居柱穴 3 土層（南西から）

1 号住居柱穴 4 土層（南西から）

1 号住居貯蔵穴土層・全景（北西から）

1 号住居遺物出土状態①（11・器台）

1 号住居遺物出土状態②（22・甕）

1 号住居遺物出土状態③（1・土製品玉）

2 号住居北東部全景（北東から）

2 号住居北東部掘方全景（柱穴を検出。北東から）

2 号住居全景（南西から）

2 号住居掘方全景（南西から）

2 号住居遺物出土状態①（炭化材）

2 号住居遺物出土状態②（炭化材）

2 号住居炉土層（南西から）

2 号住居遺物出土状態③（5・3 器台）

3 号住居全景（南東から）

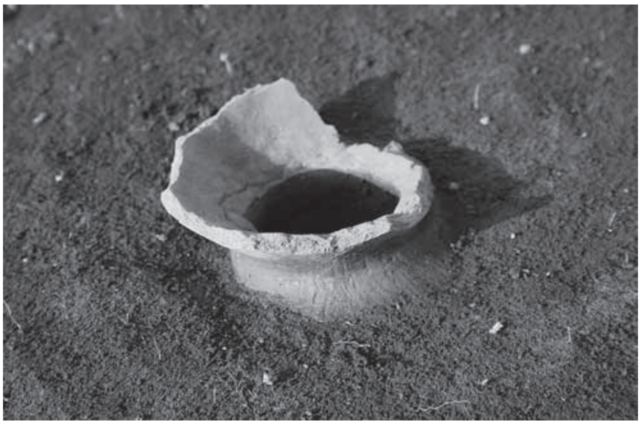
3 号住居炉土層（南東から）

3 号住居掘方全景（南東から）

12 号住居掘方土層（西から）

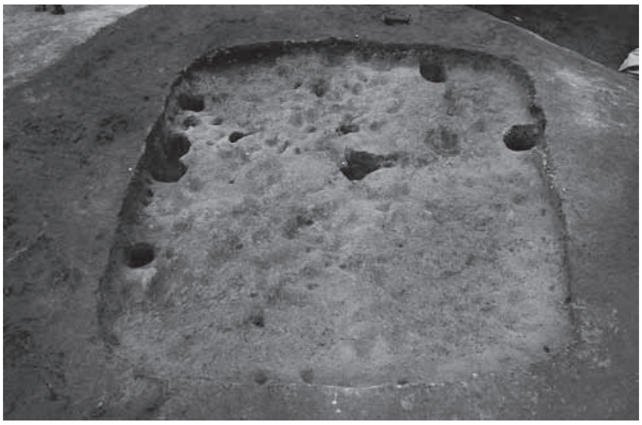
12 号住居掘方全景（西から）

7 号住居全景（南西から）


7 号住居遺物出土状態①（3・壺）

7 号住居遺物出土状態②（4・坩）

7 号住居炉全景（北東から）


7 号住居掘方全景（南西から）

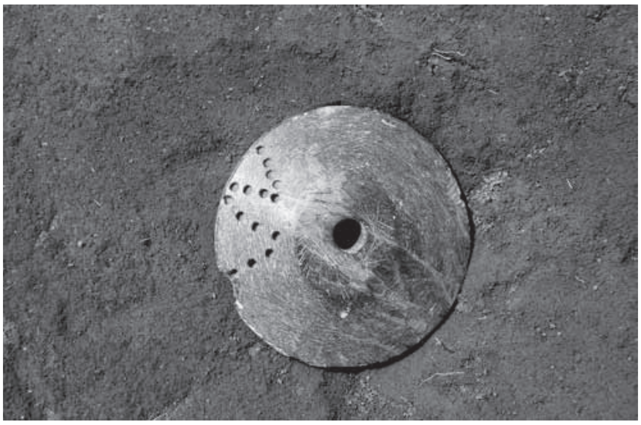
１号掘立柱建物全景（柱穴４は撹乱のため欠失。南西から）

１号掘立柱建物土層（南西から）

１号掘立柱建物柱穴１土層（南西から）

１号掘立柱建物柱穴２土層（南西から）

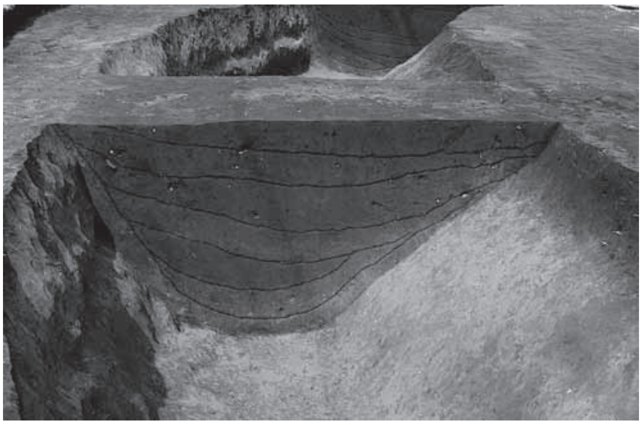
１号掘立柱建物柱穴３土層（南西から）


1 号古墳遺物出土状態①（21・石製紡錘車・周溝外）

1 号古墳遺物出土状態②（24・坏・周溝内）

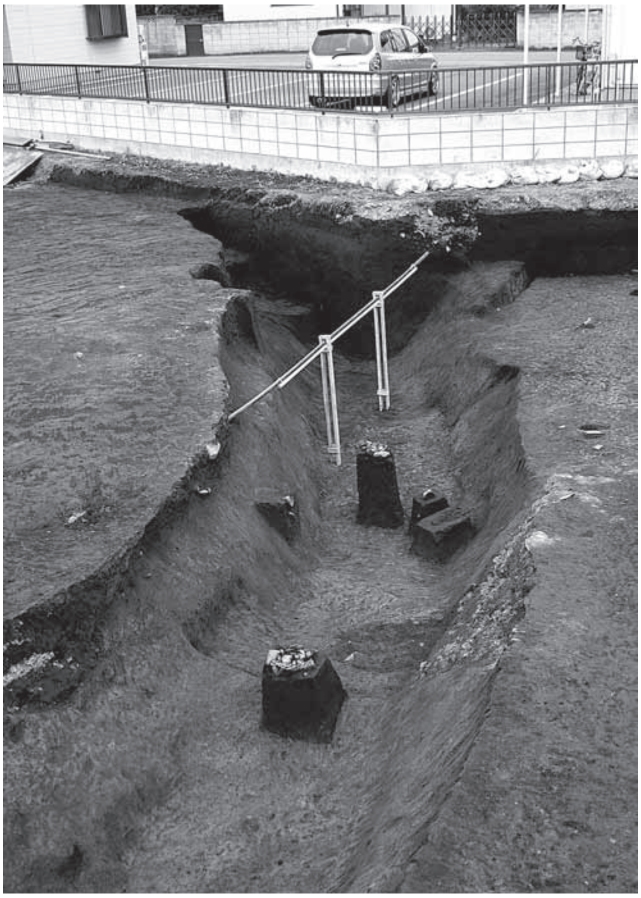
1 号古墳周溝東部（北から）

1 号古墳遺物出土状態③（3・円筒埴輪・周溝内）


1 号古墳周溝西部土層（南西から）

1 号古墳遺物出土状態④（2・円筒埴輪・周溝内）

1 号古墳遺物出土状態⑤（外 29・台付甕・周溝内）



1 号古墳周溝西部（北から）

1 号古墳遺物出土状態⑥（5・円筒埴輪・周溝内）

1 号古墳遺物出土状態⑦（26・器台・周溝内）

1 号古墳周溝北西部（北から）

1 号古墳遺物出土状態⑧（1 住 12・器台・周溝内）

1 号古墳遺物出土状態⑨（4・円筒埴輪・周溝内）

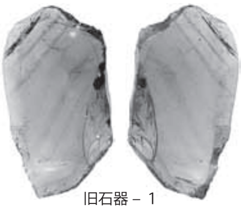
1 号古墳遺物出土状態⑩（牛下顎骨・周溝内）

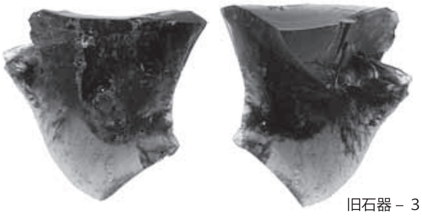
1 号古墳全景（垂直方向航空写真）

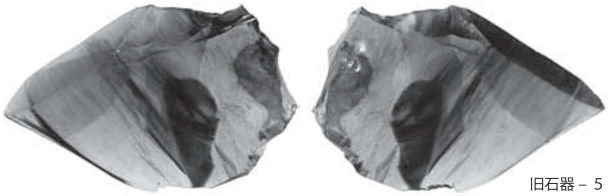
1 号溝北部全景（南から）

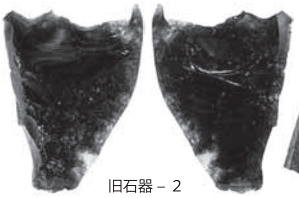
1 号溝南端土層（北から）

堆積土・内陸性古砂丘調査状況

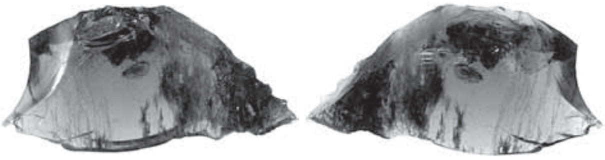

旧石器－1

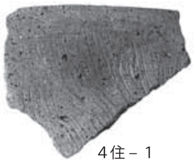

旧石器－3


旧石器－5


旧石器－2

旧石器－4


旧石器－6


4住－1

4住－2

4住－3

4住－5

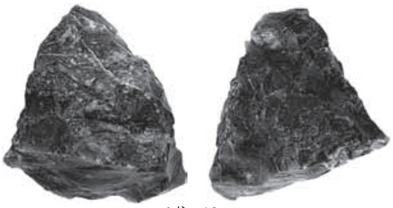
4住－6

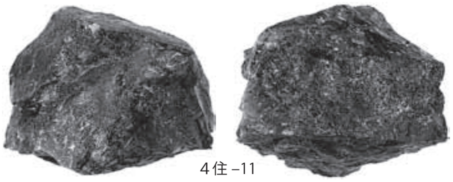
4住－4

4住－7

4住－8

4住－9


4住－10

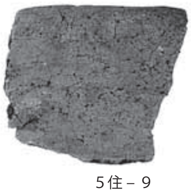

4住－11

5住－1

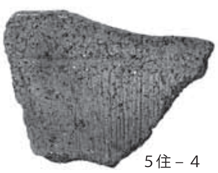
5住－2

5住－7

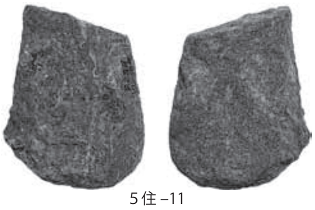
5住－8


5住－9

5住－3


5住－4

5住－10


5住－11

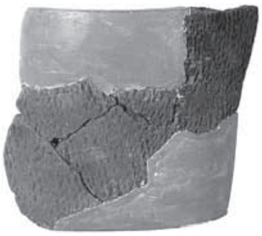
5住－5

5住－6

縄文時代遺物②

6住－1

6住－2


6住－3

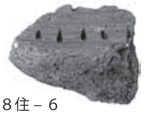
6住－4

8住－1

8住－7

8住－5

8住－2


8住－6

8住－4

8住－3

8住－13

8住－8

8住－9

8住－10

8住－11

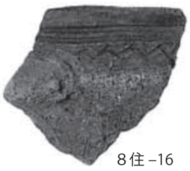
8住－12

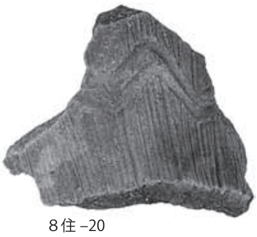
8住－14

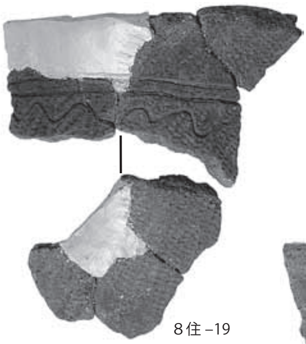
8住－18

8住－15

8住－17


8住－16


8住－20


8住－19

8住－24

8住－23

8住－21

8住－26

8住－27

8住－25

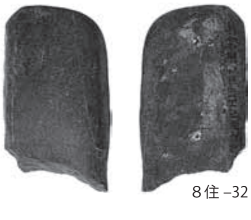
8住－29

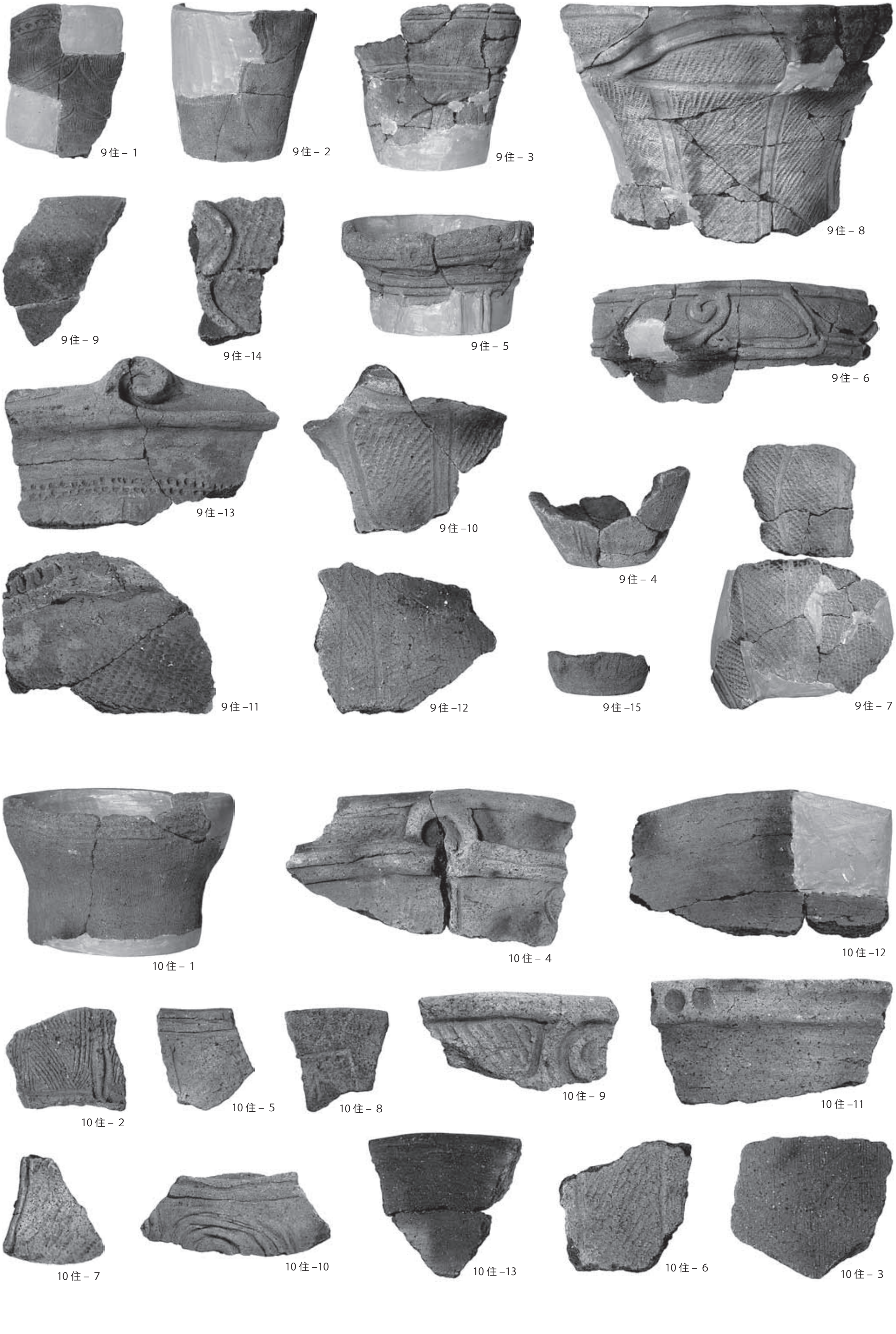
8住－22

8住－28

8住－30

8住－31


8住－32



9住－1 9住－2 9住－3 9住－8
9住－9 9住－14 9住－5 9住－6
9住－13 9住－10 9住－4
9住－11 9住－12 9住－15 9住－7
10住－1 10住－4 10住－12
10住－2 10住－5 10住－8 10住－9 10住－11
10住－7 10住－10 10住－13 10住－6 10住－3

縄文時代遺物④

10住－14

11住－1

11住－2

10住－15

10住－18

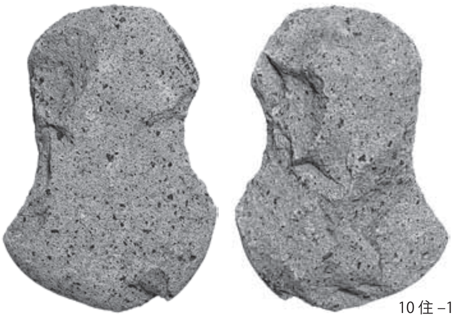
11住－3

11住－4

10住－16

11住－7

11住－8



10住－17

11住－9

11住－10

11住－5

11住－15

11住－6

11住－12

11住－13

11住－14

11住－11

11住－16

11住－17

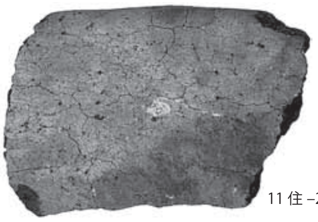
11住－21

11 住 −18

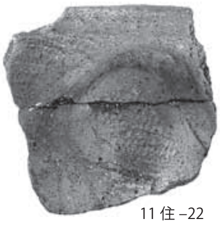
11 住 −20

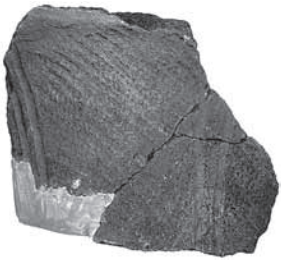
11 住 −23

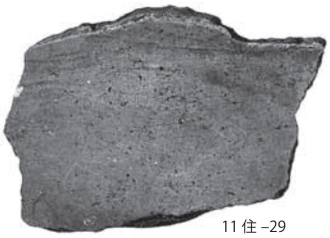
11 住 −19


11 住 −26

11 住 −43


11 住 −22

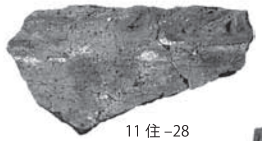

11 住 −24


11 住 −29

11 住 −44

11 住 −27

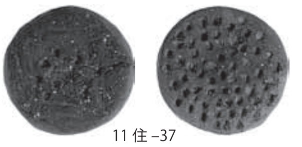
11 住 −25


11 住 −28

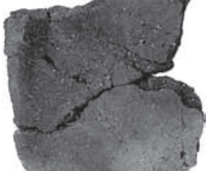
11 住 −45

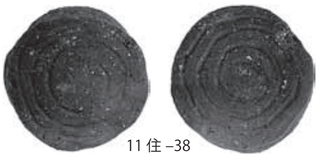
11 住 −30

11 住 −31


11 住 −37

11 住 −34

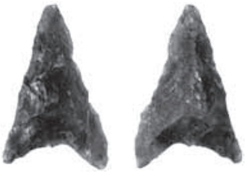

11 住 −36


11 住 −38

11 住 −35

11 住 −32

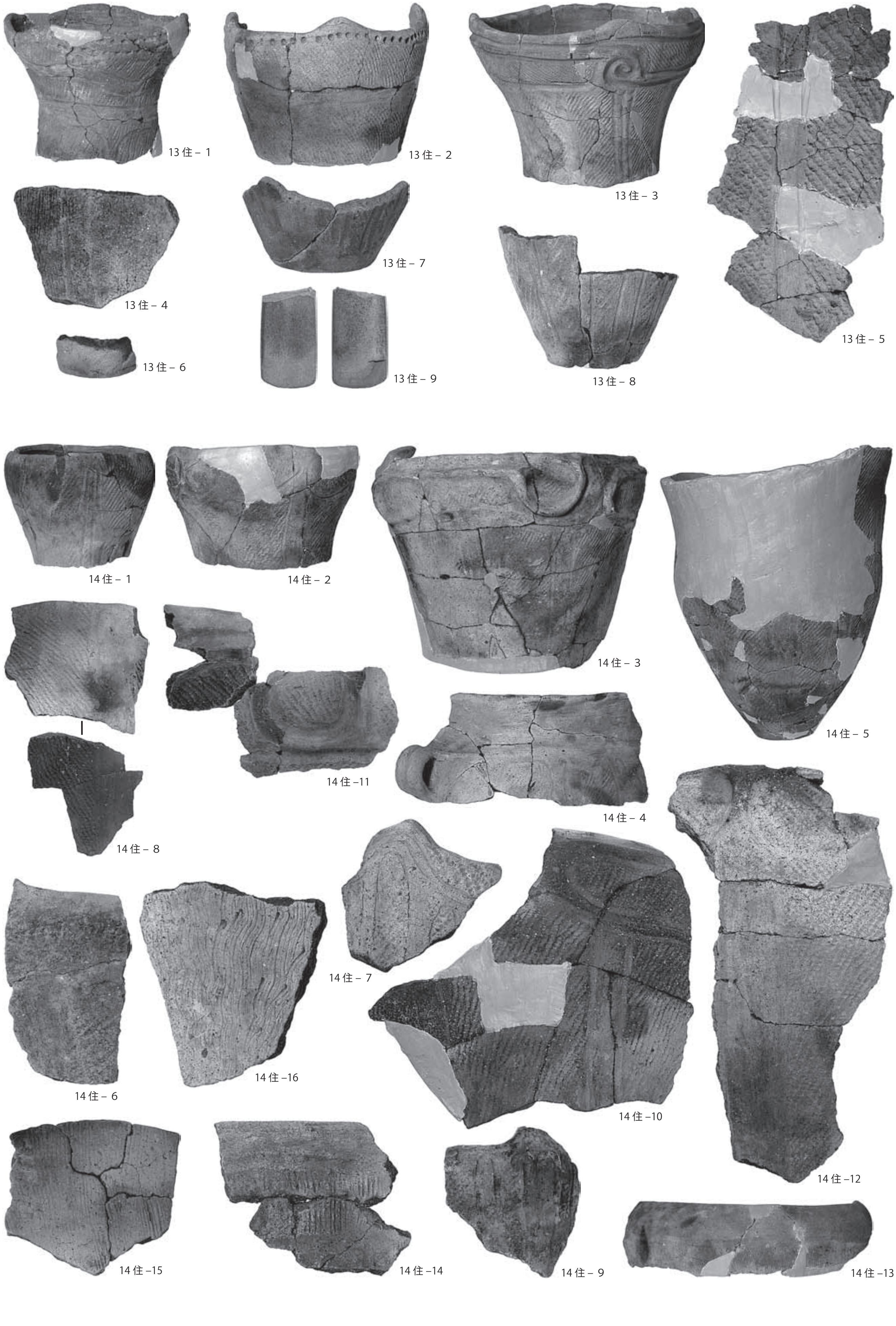
11 住 −33


11 住 −40

11 住 −39

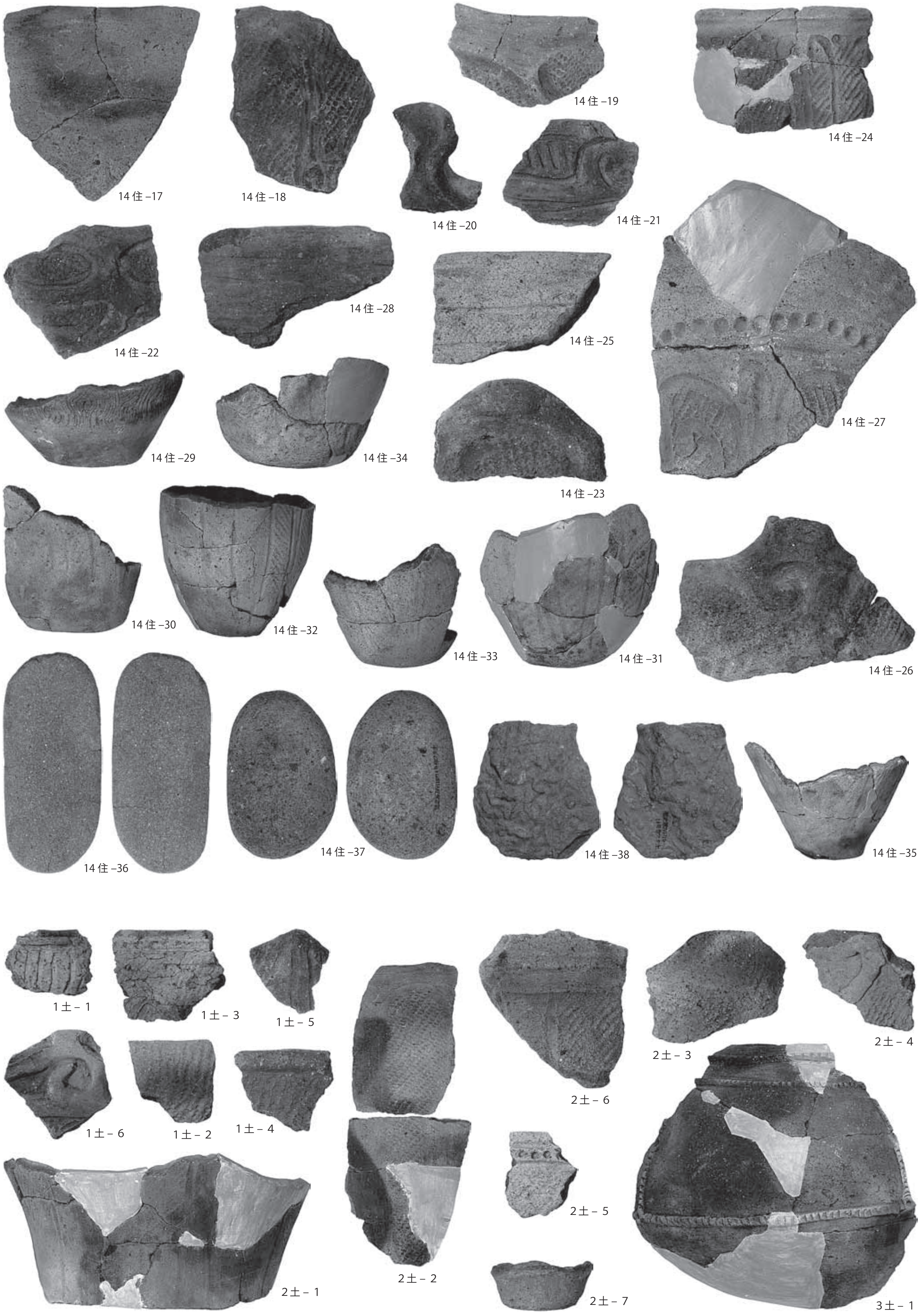
11 住 −41

11 住 −42



13住－1　13住－2　13住－3　13住－4　13住－5　13住－6　13住－7　13住－8　13住－9

14住－1　14住－2　14住－3　14住－4　14住－5　14住－6　14住－7　14住－8　14住－9　14住－10　14住－11　14住－12　14住－13　14住－14　14住－15　14住－16

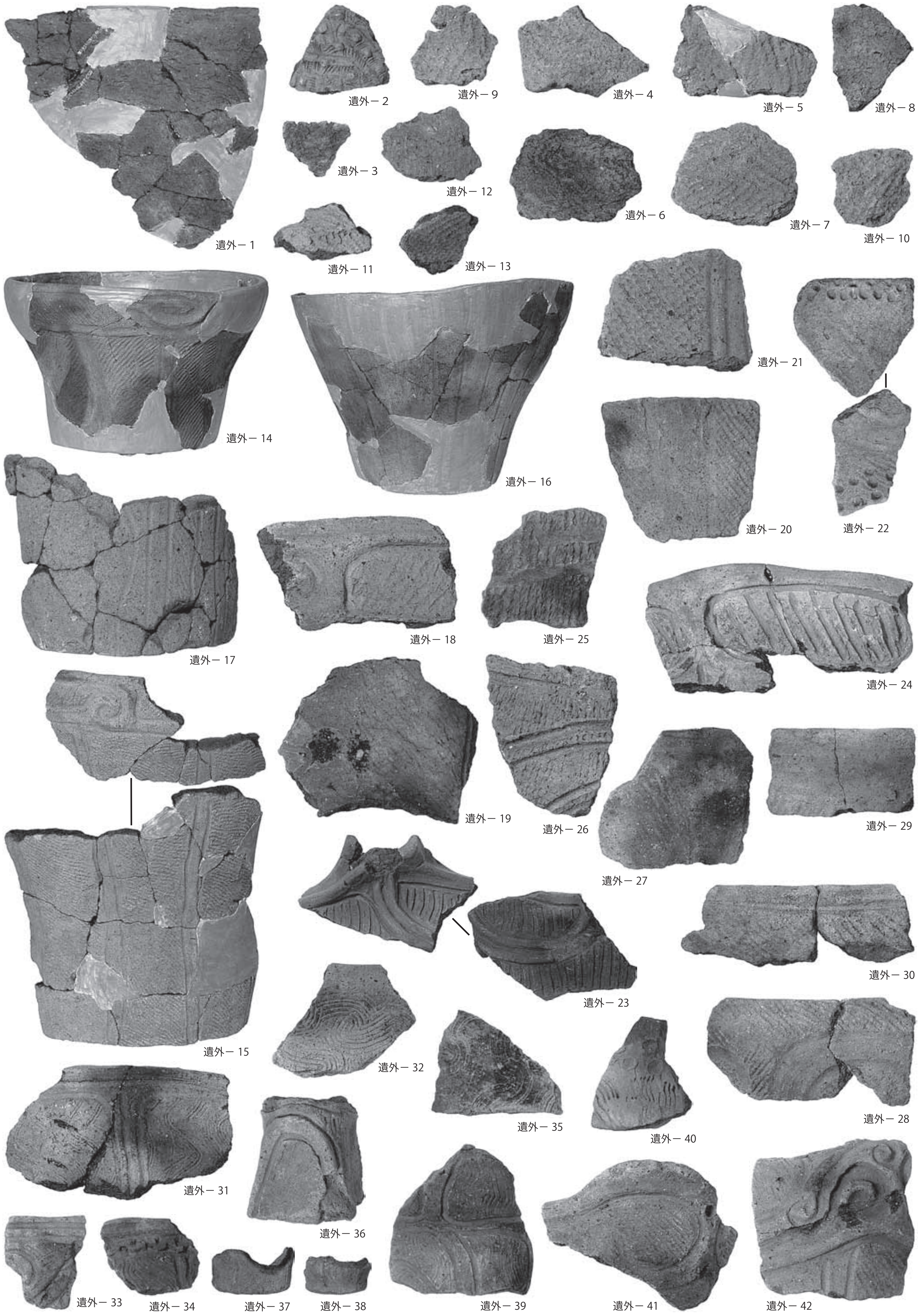

14住–17
14住–18
14住–19
14住–20
14住–21
14住–24
14住–22
14住–28
14住–25
14住–27
14住–29
14住–34
14住–23
14住–30
14住–32
14住–33
14住–31
14住–26
14住–36
14住–37
14住–38
14住–35
1土–1
1土–3
1土–5
2土–6
2土–3
2土–4
1土–6
1土–2
1土–4
2土–5
2土–1
2土–2
2土–7
3土–1

3土－2
3土－4
5土－1
6土－2
6土－3
6土－1
3土－3
3土－5
5土－2
7土－1
7土－2
7土－3
10土－1
4土－1
4土－2
5土－3
13土－1
12土－1
12土－2
10土－2
11土－1
11土－2
15土－2
15土－3
15土－1
14土－1
14土－2
16土－1
16土－2
16土－3
16土－4
16土－7
16土－8
16土－5
16土－6
16土－10
16土－9
16土－11

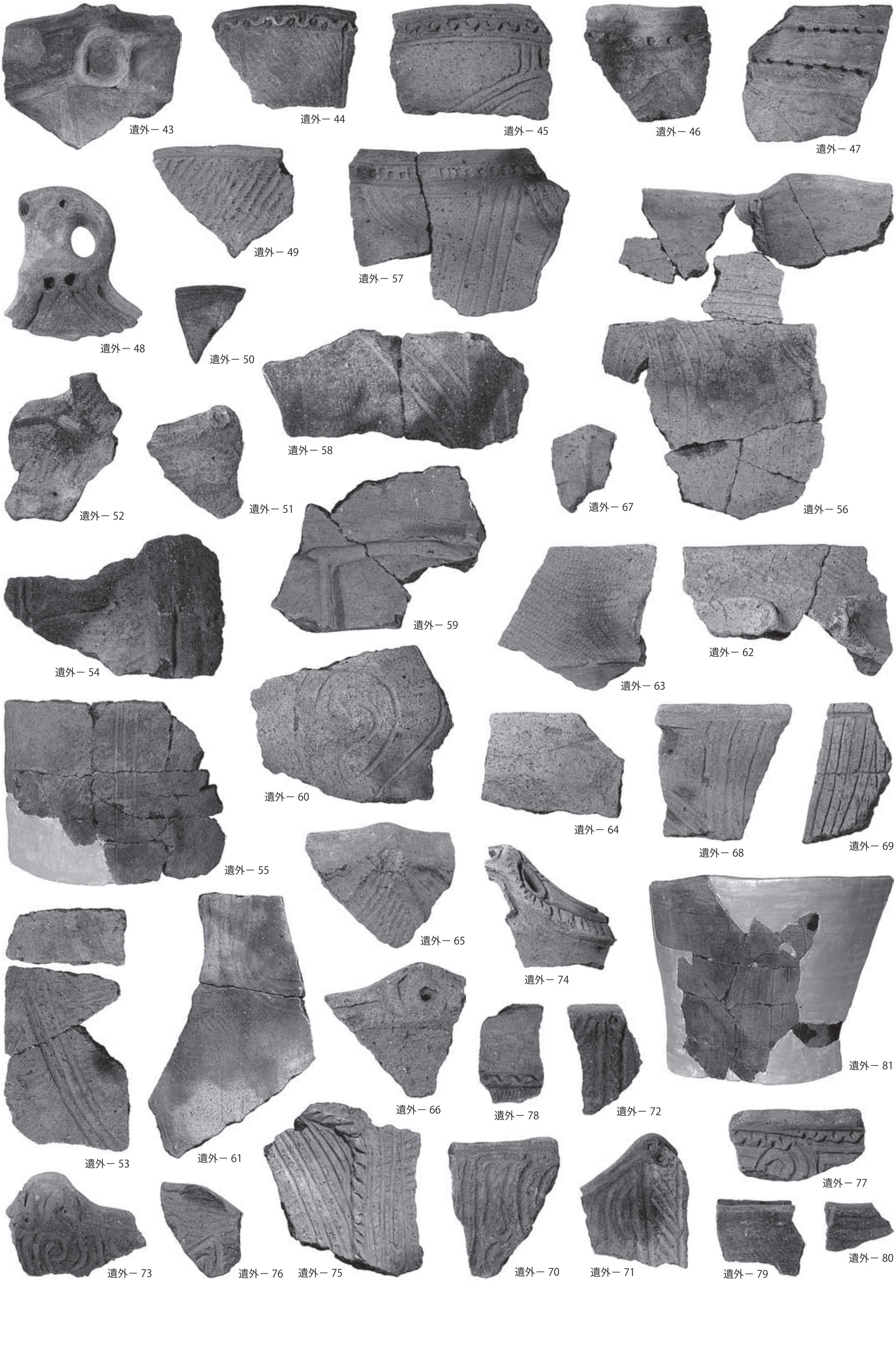
縄文時代遺物⑨

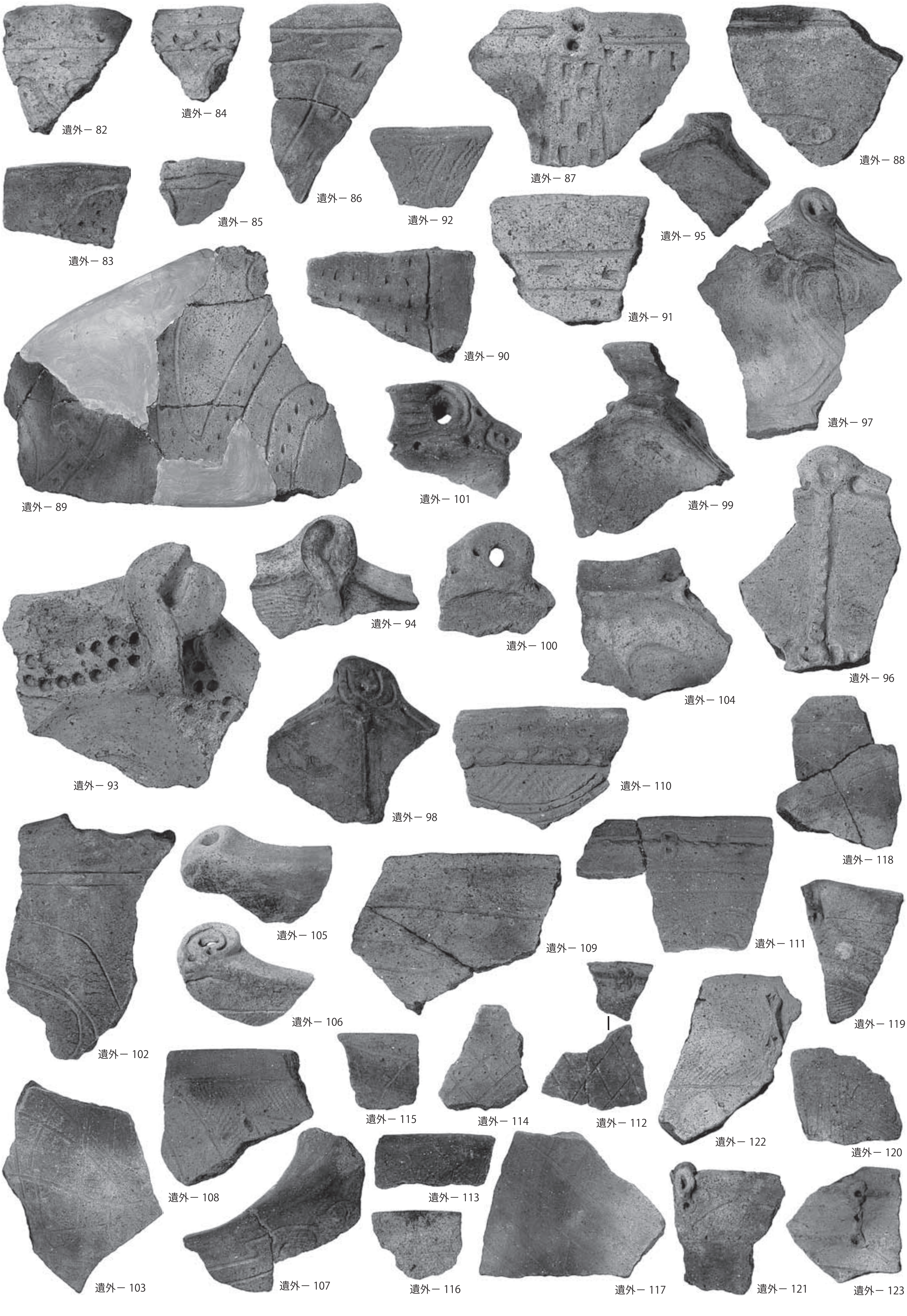
PL-39

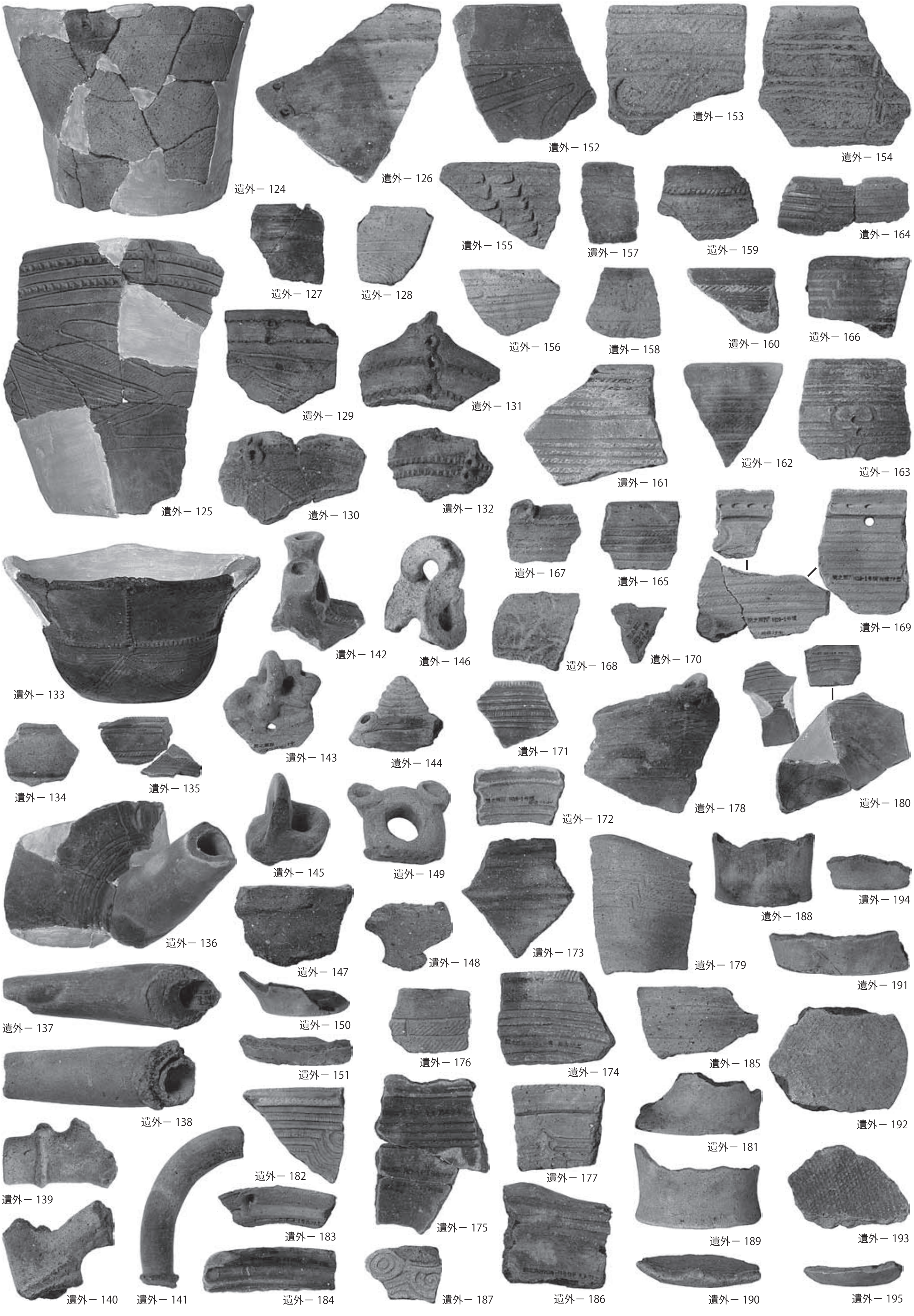
縄文時代遺物⑩



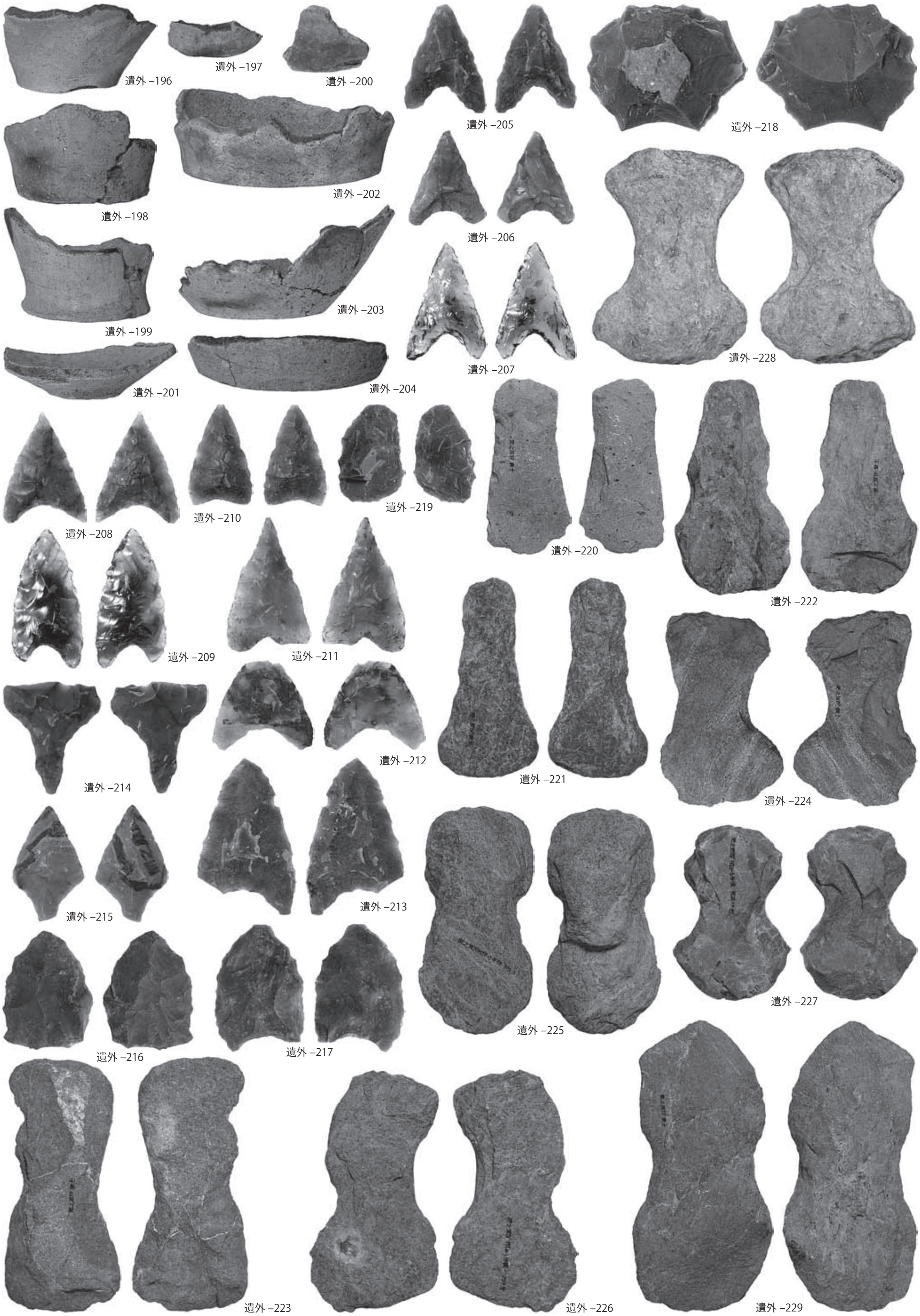
遺外－1
遺外－2
遺外－3
遺外－4
遺外－5
遺外－6
遺外－7
遺外－8
遺外－9
遺外－10
遺外－11
遺外－12
遺外－13
遺外－14
遺外－15
遺外－16
遺外－17
遺外－18
遺外－19
遺外－20
遺外－21
遺外－22
遺外－23
遺外－24
遺外－25
遺外－26
遺外－27
遺外－28
遺外－29
遺外－30
遺外－31
遺外－32
遺外－33
遺外－34
遺外－35
遺外－36
遺外－37
遺外－38
遺外－39
遺外－40
遺外－41
遺外－42


遺外－ 43
遺外－ 44
遺外－ 45
遺外－ 46
遺外－ 47
遺外－ 49
遺外－ 57
遺外－ 48
遺外－ 50
遺外－ 58
遺外－ 52
遺外－ 51
遺外－ 67
遺外－ 56
遺外－ 59
遺外－ 54
遺外－ 62
遺外－ 63
遺外－ 60
遺外－ 64
遺外－ 68
遺外－ 69
遺外－ 55
遺外－ 65
遺外－ 74
遺外－ 81
遺外－ 66
遺外－ 78
遺外－ 72
遺外－ 53
遺外－ 61
遺外－ 77
遺外－ 73
遺外－ 76
遺外－ 75
遺外－ 70
遺外－ 71
遺外－ 79
遺外－ 80

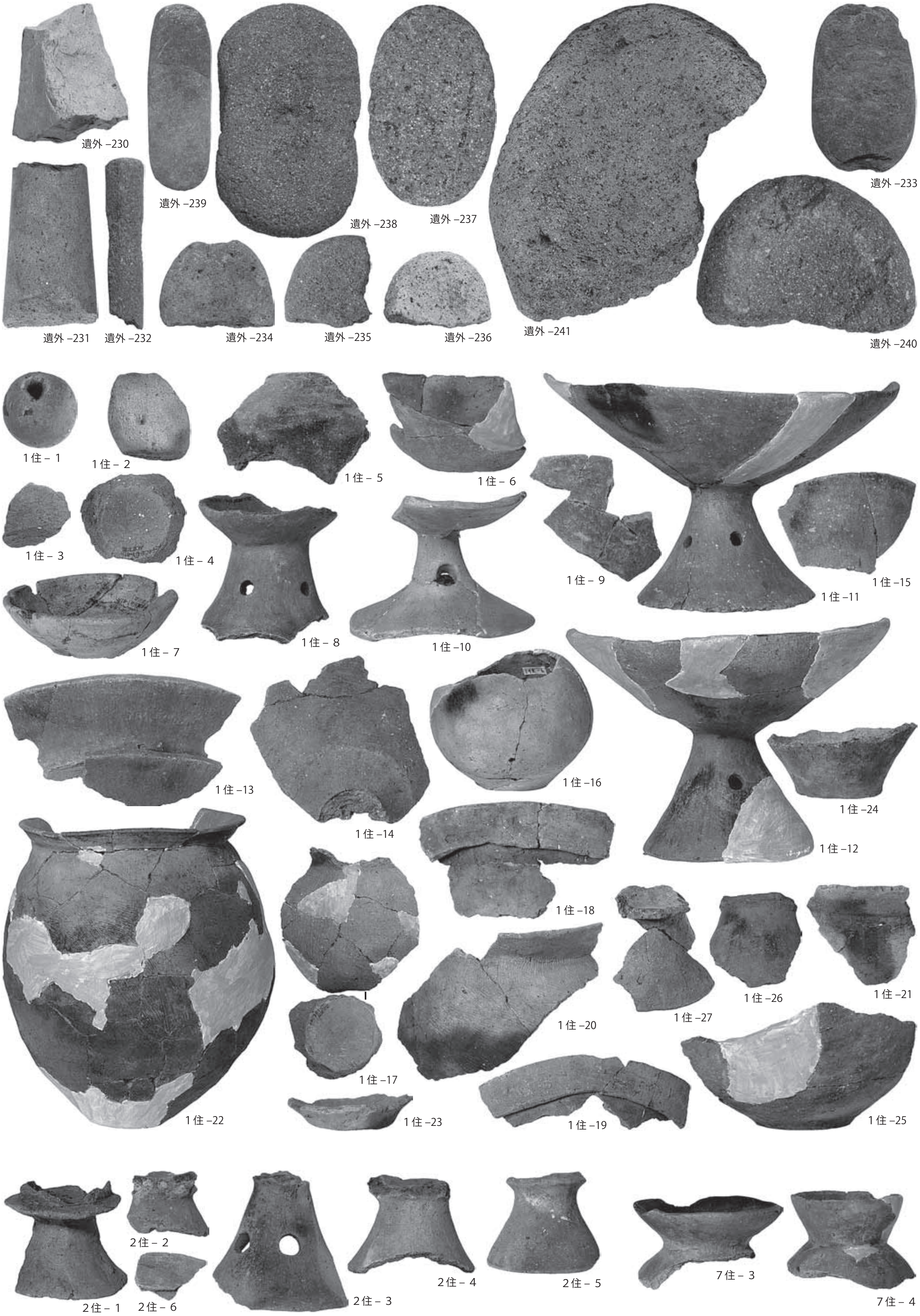

遺外－82
遺外－84
遺外－86
遺外－87
遺外－88
遺外－83
遺外－85
遺外－92
遺外－95
遺外－91
遺外－90
遺外－97
遺外－89
遺外－101
遺外－99
遺外－94
遺外－100
遺外－104
遺外－96
遺外－93
遺外－98
遺外－110
遺外－118
遺外－105
遺外－109
遺外－111
遺外－106
遺外－119
遺外－102
遺外－115
遺外－114
遺外－112
遺外－122
遺外－120
遺外－108
遺外－113
遺外－103
遺外－107
遺外－116
遺外－117
遺外－121
遺外－123



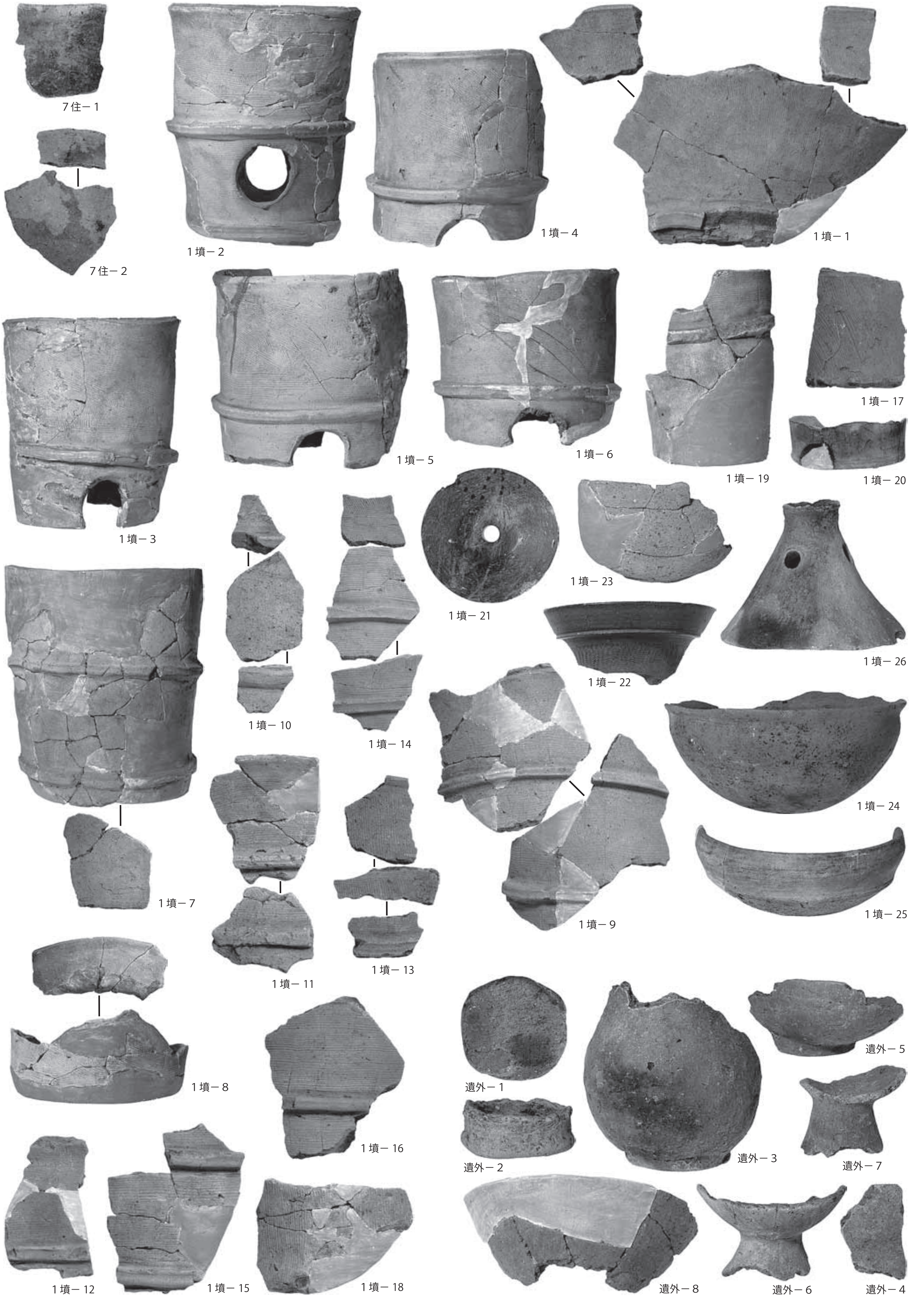
遺外－124 遺外－125 遺外－126 遺外－127 遺外－128 遺外－129 遺外－130 遺外－131 遺外－132 遺外－133 遺外－134 遺外－135 遺外－136 遺外－137 遺外－138 遺外－139 遺外－140 遺外－141 遺外－142 遺外－143 遺外－144 遺外－145 遺外－146 遺外－147 遺外－148 遺外－149 遺外－150 遺外－151 遺外－152 遺外－153 遺外－154 遺外－155 遺外－156 遺外－157 遺外－158 遺外－159 遺外－160 遺外－161 遺外－162 遺外－163 遺外－164 遺外－165 遺外－166 遺外－167 遺外－168 遺外－169 遺外－170 遺外－171 遺外－172 遺外－173 遺外－174 遺外－175 遺外－176 遺外－177 遺外－178 遺外－179 遺外－180 遺外－181 遺外－182 遺外－183 遺外－184 遺外－185 遺外－186 遺外－187 遺外－188 遺外－189 遺外－190 遺外－191 遺外－192 遺外－193 遺外－194 遺外－195

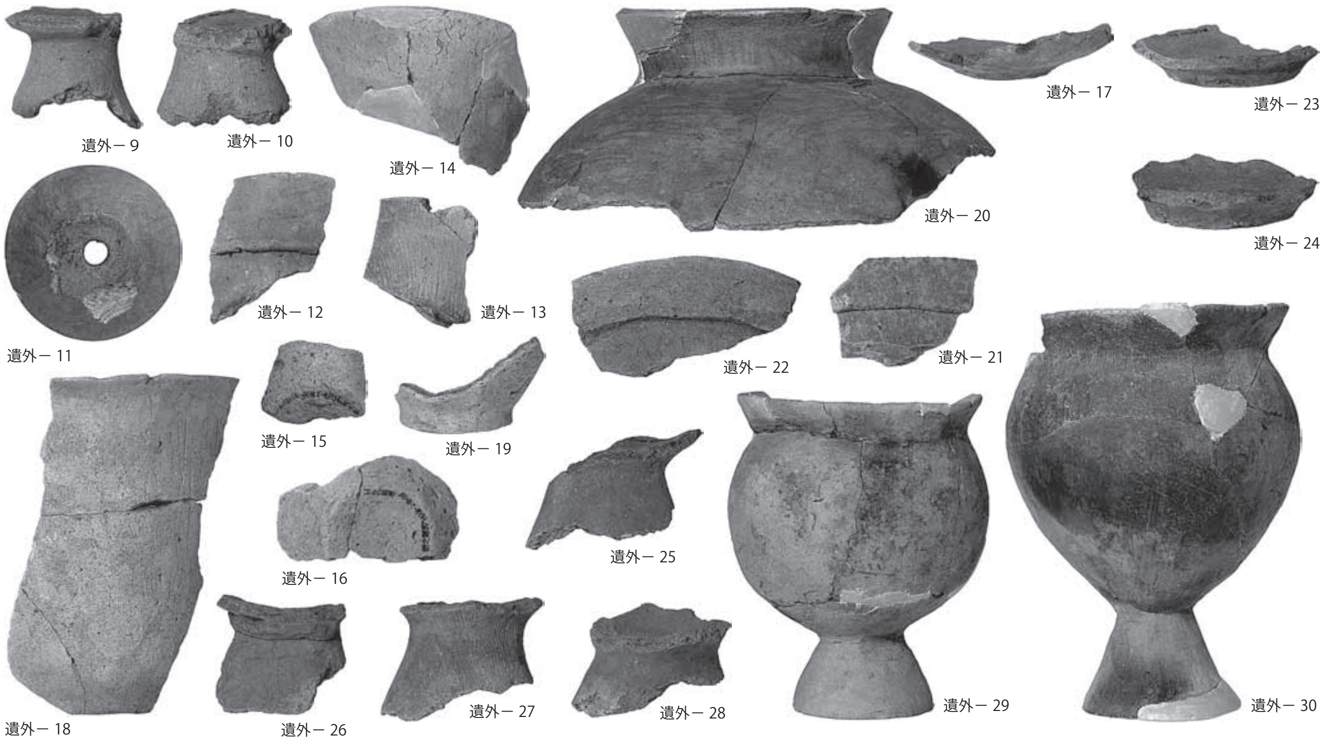


遺外 –196
遺外 –197
遺外 –200
遺外 –205
遺外 –218
遺外 –198
遺外 –202
遺外 –206
遺外 –199
遺外 –203
遺外 –207
遺外 –228
遺外 –201
遺外 –204
遺外 –208
遺外 –210
遺外 –219
遺外 –220
遺外 –222
遺外 –209
遺外 –211
遺外 –214
遺外 –212
遺外 –221
遺外 –224
遺外 –215
遺外 –213
遺外 –225
遺外 –227
遺外 –216
遺外 –217
遺外 –223
遺外 –226
遺外 –229

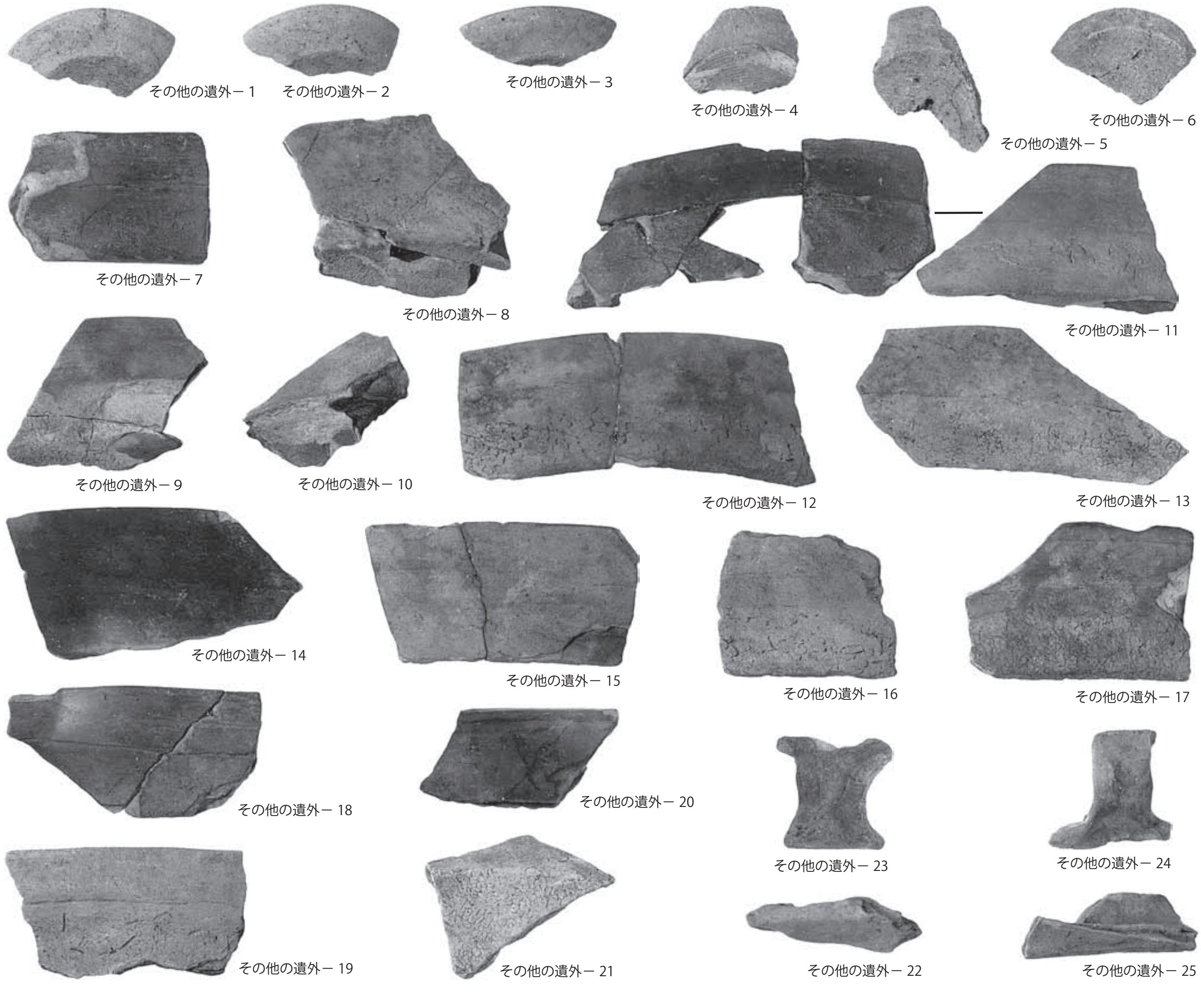

遺外 –230
遺外 –239
遺外 –238
遺外 –237
遺外 –233
遺外 –231
遺外 –232
遺外 –234
遺外 –235
遺外 –236
遺外 –241
遺外 –240
1住 – 1
1住 – 2
1住 – 5
1住 – 6
1住 – 3
1住 – 4
1住 – 9
1住 –15
1住 –11
1住 – 7
1住 – 8
1住 –10
1住 –13
1住 –14
1住 –16
1住 –24
1住 –12
1住 –18
1住 –26
1住 –21
1住 –27
1住 –20
1住 –17
1住 –22
1住 –23
1住 –19
1住 –25
2住 – 2
2住 – 1
2住 – 6
2住 – 3
2住 – 4
2住 – 5
7住 – 3
7住 – 4

古墳時代遺物②


7住－1
7住－2
1墳－2
1墳－4
1墳－1
1墳－3
1墳－5
1墳－6
1墳－19
1墳－17
1墳－20
1墳－23
1墳－21
1墳－26
1墳－22
1墳－10
1墳－14
1墳－24
1墳－7
1墳－9
1墳－25
1墳－11
1墳－13
1墳－8
遺外－1
遺外－5
1墳－16
遺外－2
遺外－3
遺外－7
1墳－12
1墳－15
1墳－18
遺外－8
遺外－6
遺外－4



遺外ー 9
遺外ー 10
遺外ー 14
遺外ー 20
遺外ー 17
遺外ー 23
遺外ー 24
遺外ー 11
遺外ー 12
遺外ー 13
遺外ー 22
遺外ー 21
遺外ー 15
遺外ー 19
遺外ー 16
遺外ー 25
遺外ー 18
遺外ー 26
遺外ー 27
遺外ー 28
遺外ー 29
遺外ー 30



その他の遺外ー 1
その他の遺外ー 2
その他の遺外ー 3
その他の遺外ー 4
その他の遺外ー 6
その他の遺外ー 5
その他の遺外ー 7
その他の遺外ー 8
その他の遺外ー 11
その他の遺外ー 9
その他の遺外ー 10
その他の遺外ー 12
その他の遺外ー 13
その他の遺外ー 14
その他の遺外ー 15
その他の遺外ー 16
その他の遺外ー 17
その他の遺外ー 18
その他の遺外ー 20
その他の遺外ー 23
その他の遺外ー 24
その他の遺外ー 19
その他の遺外ー 21
その他の遺外ー 22
その他の遺外ー 25

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 449 集

大泉町間之原遺跡Ⅲ・Ⅳ

東毛幹線（大泉工区）街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年11月20日　印刷

平成20年11月20日　発行

編集／発行　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒 377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田 784 番地 2

電話　0279（52）2511（代表）

ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／杉浦印刷株式会社